

武田信玄

風の巻

新田次郎



文春文庫

著者紹介

新田次郎(にった・じろう)

1912 (明治45) 年長野県生れ。本名藤原寛人。無線電信講習所(現在電気通信大学)卒業。56年「強力伝」にて第34回直木賞受賞。66年永年勤続した気象庁を退職。74年「武田信玄」などの作品により第8回吉川英治文学賞受賞。1980年2月没。

文 春 文 庫

武 田 信 玄 風の巻

新 田 次 郎



文 藝 春 秋

早春孤影

青梅の舞

陣中の恋歌

雨情無情

手扇

湖衣姫

味噌の味

滅亡の狼煙

合戦見分

戦国に涙なし

夫恋つまい歌

三女鼎立

長持唄

和の盾

262 242 222 204 186 168 149 130 113 93 71 47 24 6

鉄砲と微熱

生首三千

志磨の湯

柱石逝く

遅足行軍

塩尻峠の合戦

捕われ人の運命

叛く者

諫死

砥石くずれ

買った城

安曇部の後裔の最期

あとがき

501 482 464 445 427 408 391 373 355 337 318 299 279

武田信玄

風の巻

早春孤影

晴信は石水寺へ馬を走らせることが好きだった。ここは彼が生れたところであり、武田の館のある躑躅が崎から、馬を走らせるに丁度よい距離でもあった。

晴信は石和甚三郎と塩津与兵衛の二人を従えていた。石和甚三郎も塩津与兵衛も板垣信方の家来であったが、晴信が初陣の手柄を立てた海之口城攻略戦以来、晴信の傍に影のごとくつき添っていた。それは板垣信方の意志であり、信方の意向は二人を通じて晴信に伝えられ、晴信の動静もまた、二人を通じて信方に通じていた。だから、晴信は、ほとんど、父信虎や、信虎を中心としての世の動きから、隔絶されているように見えながら、実は、かなりよく、実情を把握していた。

「晴信になにが分る。あの臆病者めに」

晴信は栗毛の駒に身を伏せるようにうちまたがって走りながら、父信虎の声を背後に聞いたような気がした。

信虎の眼は赤く濁っていた。濁った眼で彼は長男の晴信を憎み、次男の信繁を盲愛していた。

晴信が十六歳の初陣に海之口城主平賀源心を奇計を以て討ち取ったが、城はそのままにして帰って来たことを、信虎はことあるたびに、晴信打擲ちようちやくの材料としていた。臆病者め、それほど命がもしければ、僧にでもなったらよからうというふうなことは、晴信の顔を見るたびにいった。いうだけではなく、既に元服して三年もたっている晴信を、軍議に参加させようとはしないのである。老臣たちが見かねて、口を出すと、赤く濁った眼は異常な輝きを見せ始めるのである。老臣たちはそれで沈黙した。それ以上いと信虎の眼は狂い出して、ついには無礼者と叫ぶ声も、うわずった怒号となって大刀に手をかける。信虎の狂刀のもとに憤死した家臣は四人や五人ではなかった。

甲斐かいの国人（地方の豪族）として、代々武田家に仕えていた前島繁勝が、今川義元に叛旗はんきをひるがえして、甲斐へ逃げこんで来た者たちをかくまったという理由で、一族ごとくを切腹させたのは四年前の天文五年のことであった。信虎に愛想をつかして、武田家の奉行衆がやようしゅうが出国したのもついこの間のことであった。

晴信は、父のことを考えながら馬を走らせていると、なにか、父の向けた刺客に追跡されているような気がして来るのである。

「晴信を殺せ、あの臆病者を殺せ」

父信虎がひとこと云えば、そのことは確実に遂行すいこうされるのである。それが、戦国のならいであり、そうしなければ、その命令に反した者が処刑されるのである。

（父の眼は濁り、父の頭は決して尋常ではない、しかし今は父が甲斐の国を治めているのであ

る)

だからといって、晴信は父の手にかかって、命を落したくはなかった。

(ではいったいどうしたらいいのか、父の元をはなれて、他国へ亡命するか、それとも、父を……)

晴信は、背筋^{せすじ}につめたいものを感じた。とんでもないことである。たとえ家臣たちがこぞって、父を討てと云っても、父を助けるのが子の義務である。

晴信は馬に鞭^{むち}をあてた。馬を走れるだけ走らせ、耳をかすめていく、つめたい風に、信虎の長男として生れた身の不遇を嘆きながら、板垣信方が

(晴信様、いましばらく、いましばらく、お待ち下さい)

といった言葉を思いうかべていた。

馬がなにかに驚いたように、突然歩調を乱し、あつという間に後足で立上った。

馬前に三十人あまりの男や女が土下座^{どげざ}していた。ほとんどが、はだしだった。やぶれた衣服をまとい、やせおとろえて、眼だけが光っていた。馬はいなないて停止した。

「何者だ、無礼であるぞ」

あとから追いついて来た石和甚三郎と塩津与兵衛が馬上で怒鳴ったが、道に坐った郷民^{ごうみん}は動かなかった。

「晴信様とお見かけして、お願い申しあげます」

人垣の中から老人が進み出ていった。

晴信は馬からおりた。

「いつて見るがいい」

晴信はそこに居並ぶ者たちが土色に近い顔をしてふるえているのを見て、彼等が死を覚悟でないかいいに來たのに違いないと思った。すぐ父信虎のことが頭に浮んだ。

「晴信様は京都より奥方様を迎えられ既にお子様を儲けられましたことゆえ、お察しいただけることと存じますが、もしかりに、鬼が出來して、奥方様のお腹を割いて胎児を取出そうとしたならば、晴信様はいかがなさいますか、おそらくその鬼を斬ってお捨てになるだろうと存じます。晴信様、その鬼がこの国の領主に移ったのでございます。御領主信虎様に鬼が乗り移ったため、信虎様は、生きた孕女の腹を割いて、胎児をあらためたのでございます。ひとりふたりではございません。すでに三人が鬼のために、胎児とともに命を落したのでございます」

老人は晴信の顔を見詰めて、まばたきひとつせずについてつづけた。

「われわれは領主様に年貢をおさめ、夫役にこたえ、戦場に出ては命をささげて参りましたが、罪もない領民をかようなむごい殺し方をなさるようでは、もはや、領主様のいうことを聞くわけには参りません。晴信様、お願いでございます、どうぞこの国から鬼を追い出して下さいませ。」

信虎様を追出すのではございません、信虎様に乗り移った鬼を追出すのでございます」

老人が上を額につけると、そこにいならぶ者たちはことごとくそれにならった。

晴信は答えに窮した。よし鬼を追出してやるとは云えなかった。鬼を追い出すより、鬼のようなことを父がやったことに居たたまれぬ恥かしさを覚えた。それが事実であれば鬼畜の行為であ

った。もはや狂人以外のなにものでもなかった。

その鬼畜の血を受けついだ自分が恥かしかった。

晴信は馬の轡くわを取って、ぐるりと一回転すると、ひらりと馬上の人となり、鞭を当てた。郷民たちの怨嗟えんさの声が天をおおう呪詛じゆそのように、地を這って、晴信のあとを追った。

晴信はどこをどう走ったのかおぼえてはいなかった。われにかえったとき、彼は躑躅つじが崎の館の前に来ていた。

晴信は乱れた呼吸を整えながら、数年前に彼のために建てられた新館しんやかたの前で馬をおりると、そこで、もう一度、さっき老人がいったあのおそるべきことを思い浮べた。

「恐ろしいことだ」

と晴信はつぶやいて、すぐ彼のあとを追って来る石和甚三郎と塩津与兵衛の方へ眼をやった。二人の家来も青ざめていた。なにか不始末でもしかしたかのように、晴信の足下に並んで膝ひざをつくと、首を垂れたまま、主人のことばを待っていた。

「知っていたのだな、ふたりとも」

ふたりは、低い、せつなそうな声を合わせて知っていましたとこたえた。

「なぜ話してくれなかったのだ」

ふたりは返事をしなかった。あのようなことは、たとえ事実であろうとも、御曹子おんざうしの耳には入れたくなかったのだという顔だった。

「信方も知っておろうな」

晴信は、その答えを、ふたりに求めるのではなく、板垣信方のみならず、このことは武田の諸將のことごとくが知り、甲斐の国中の人の口の端にのぼっているのではないかと思った。

「困ったことだ」

晴信ははっきりいった。父の鬼畜的行爲が国中に知れわたれば、人心は武田から離反する。父信虎は剣と馬によって甲斐の豪族を斬り従えて、やっと統一したのに、その頂点において、また昔のままの状態になることは無念でならなかった。困ったことだと、晴信が口に出したことは、晴信がやがて、父より受けつぐべき甲斐の領主としての発言であった。

ふたりは、晴信の口もとをじっと見詰めたまま黙っていた。

「困ったことだ、ほんとうに困ったことだ」

晴信はふたりにそのことばを残して館の中へ入っていった。おそらくこのことばが、ふたりによって信方に伝えられるだろうと思った。

「晴信様、御気づきなされましたか」

信方がそういつてにじりよって来る姿が見えるようだった。

（あいつはそのうちきつとこの俺に父にそむけというに違いない）

そう思うと晴信の気持はいよいよ暗くなるばかりだった。

晴信は正室の三条氏の居室の前で足をとめると、暮れたばかりの庭に眼をやっていた。桜が散ったばかりで、桜にかわって庭を飾る花はなく、なにかものさびしく陰鬱だった。まだいっせい

に芽吹くには早いけれど、ここ十日ほど立てば、萌黄色もえぎいろに塗りこめられるであろう庭の植込みは、黒々と翳かげを飲んで、なにものが、そのあたりに、じっとひそんでいるように暗かった。

晴信は、暗い庭は、そのまま彼自身の心の暗さを示しているように考えた。石水寺への途中で会った人たちの顔とことばが、いまもって彼の頭からは去らないのである。

静かに部屋の中から戸の開ひらかれる音がした。

晴信は庭の方から正室三条氏の居室の方へ眼をやった。部屋の中は庭よりも暗かったが、その中で、端座している三条氏の顔だけが白く浮き出して見えた。

「暗いな」

と晴信がいった。そろそろ、あかりをつけてもいいではないかといおうとしたのであるが、三条氏はそれには気づかぬふりをして

「暗いのは、あなた様の顔色でございます。どうなさいました。ひどく心配そうなご様子でございます」

心配そうな御様子と口ではいいながら、三条氏の顔にはいっこう、心配そうな表情の動きはなく、いつもと同じように、身ゆるぎもせず、きちんと坐ったままで真直まっすぐな視線を晴信に向けていた。

「いやな目にあつた」

と晴信はひとこといった。

「いやな目？ いやなことなら、わたしにとっては毎日毎日いやなことつづきでございます。こ

こにはなにひとつとして楽しいといふことはございません」

京都に比較すると、こんな片田舎は、問題にすべくもなく単調であり、呼吸も止るほどにつまらないのだとは云わず、そういう忿懣をすべて、つめたい顔の中におしかくして、抽象的にしか表現しない、京都の公卿の娘の三条氏は、晴信が、夫としてのくつろぎを取戻して、彼女の近くにまで膝をすすめたときも

「そのいやな目にあつたお話をしていただけませんか」
といつた。

「話さないほうがいいだろう。話せば、誰でもいやな気持ちになる話だから」

晴信はさりとやりすごしながら、なにかほかのこの場に適當な話題を探し出そうとした。

侍女のおこが燭台に火をつけたので部屋は急に明るくなった。

「いやな気持ちになつてもかまいませんぬ、ぜひともそのお話をうかがわせていただきたいと思ひます」

三条氏の細い眼の奥で鋭く光っているものが見えた。

「では話そう」

晴信は、彼の前に、彼よりも偉そうな顔をして坐っている三条氏には、なにか一目置いていた。三条左大臣公頼の娘という格の高さで、天下つて来たときからそうであつた。三年前の晴信が十六歳の時今川氏親がこの婚姻を取り持つて、わざわざ京都から正室として迎えた三条氏は晴信より三つ年上の十九歳だった。京都の公卿の出だから、さぞかし、色白で面長で、小柄で可愛いあ

どけない顔をした女だろうと想像していた晴信は、色だけは白いが、それ以外は、すべて彼の想像とは似ても似つかない、大きな顔で、大きな図体で、細いきつい眼をした、義理にも器量がいとはいえない三条氏を見たとき、晴信は政略結婚のむなしさを身にしみて感じたのである。

「実はきょう、馬を走らせていると、突然郷民たちが地面にひざまずいて行先をはばんだ……」
晴信は三条氏の膝のあたりを見ながら話した。

「まあ、無礼な、斬り捨てられましたか」

いや、といって晴信は、三条氏がいとも無造作に斬り捨てたかといったのに驚いて眼を上げた。三条氏はごく自然な顔をしていた。晴信は驚いた眼でゆっくりまばたきしながら、おそらく、この公卿の娘は、人を斬ることがいかに悲惨なものだか知らないから、そんなことをいうのだからうと思った。

「郷民たちは父上のことで訴願したのだ」

そう前置きして、晴信は父信虎の行状について話したけれど、信虎が孕女の腹を割いて胎児をあらためたという段になると、さすがにむごすぎるので言葉がとどえた。

「何人の女の腹をさかれたのですか」

しかし、三条氏はその話に少しも動ぜずにいった。

「三人と聞いた」

「たった三人だけですか、でも館様は奇妙なことをやられたものよ」

そして三条氏は、彼女のかたわらにひかえている、侍女のおここの方へ眼をやった。おここは、

晴信がその話を始めたときから、おそろしさのためにふるえつづけていた。ふるえおののく、おここの方を三条氏はちらりと見て、口元に薄笑いを洩らしながら

「おここにはこの話がこわいのですか」といった。

晴信は、三条氏の口元に浮んだ笑いから、彼女の底知れない冷酷さを見て取ったような気がした。冷酷なのか、感情が凍結しているのか、どこをつづいても、三条氏には女らしいあたたか味は見出されなかった。

「それだけでございますか」

三条氏は話の先を催促した。

「それだけだ」

「おおおつまらないこと」

三条氏は、その話だけがつまらないのではなく、その話を持ちこんだ夫までがつまらない人間であるかのように云つてのけると、ぷいと横を向いた。

「つまらないか、この話が——」

晴信は立上った。なにか、反射的に三条氏の傍をはなれざるを得ない気持だった。そうしないと、その場のつめたい沈んだ空気の中で窒息してしまふそうだった。

「おやもうおかえりなされますか。では、おここに送らせましょう」

三条氏はひややかにいった。そこにとどまれとはいわなかった、わたしがいやなら、どこへで

もいつて寝るがいいと、突きはなした恰好でさらにひとこといった。

「よい夢をごらんあそばせ」

晴信は三条氏の声をうしろに聞いて廊下に出た。彼のあとを、あかりを持ってついて来るおここの足音がこきぎみに聞えた。晴信が居室に入ると、おここのは持って来た火を、彼の部屋の燭台に移した。おここの手元が未だにふるえていた。

「あの話がこわかったのか」

晴信がそう問いかけると、おここのは素直にはいと答えて、姿勢を正すと、叱られた者のように深く頭をさげた。

おここの項の白さと、軽々と片手にでも持ち上りそうな、小さな身体が晴信の眼を惹いた。

（誰かに似ているな）

と思った。そしてすぐ、彼は、彼が十三歳の時、父信虎に無理矢理におしつけられた政略結婚の相手の上杉朝興の娘、於満津を思い出した。於満津は一つ年上の十四であった。結婚は政略以外には行われないう世の中に生れ出たふたりであった。みじめな結婚だった。於満津はよく泣く女だった。上杉家から従いて来た侍女に、結婚とはこうするものであると教えられて、晴信と同じ褥に入ると、きつと泣いた。その泣き虫の於満津も、晴信と同じ衾に三つきも寝ると、泣かずには晴信の胸の中に顔を埋めるようになった。そして、於満津は妊娠したが、その胎児を生むことができず、胎児もろとも死んだのである。

晴信はその於満津をふびんに思っていた。そして、於満津が死んでから、五年もたつたいまに

なつて、その於満津のおもかげに似た女を求めている自分を発見してあわてた。

おここは燭台に火を点ずると晴信の前を去ろうとした。

「おここ、いまもこわいようだったら、こわくないようにしてやろう」

晴信はそういつて、手を延して、おここの手を引いた。熱ぼい手であった。しきりに身をもだえながらも、声もあげられず、ずるずると晴信の膝に抱きよせられていったおここは小さな声でお許し下さいといった。

その声が、於満津のささやきとよく似ていた。於満津は、抱擁ほうようの間中、よくそのことばを口にした。お許し下さい、お許し下さいといいながら、ついに、許されずに死んでいったのである。子供をみごもる能力があつても、女としての悦びよろこはついに与えられずに死んでいった。それを知つたとしても、やはり、そのときは於満津はお許し下さいと身体を固くするというだろうと晴信は思つた。於満津はつつしみ深い、ひかえ目な女だつた。

「いや許さない、おここはいつまでもそばに置くのだ」

晴信は腕に力をこめた。於満津を抱きしめた時は十三であつたが今は十九歳の盛りであつた。京都から、三条氏の侍女としてついて来たおここは十七歳であつた。

翌朝晴信は三条氏にいった。

「おここを側女そばめにしたい」

晴信は、それまで一度も云つたことのない、半ば命令的な口調でいった。

「そのようなことはわざわざ、私にことわるには及びません」

三条氏は青白く引きしまった顔でいった。細い眼の中に赤い炎が燃えていた。晴信は、三条氏の顔を見おろしながら、つめたい三条氏の肌と、火のように熱いおここの体温との差に、二様の女を見詰めていた。

信虎は歌会の席に晴信の姿が見えないことで、ひどくつむじを曲げていた。

「晴信はなぜ来ないのだ。わざわざ京都から北川基房殿をおまねきしての歌会に、たった一度出ただけで、その後はとんと顔を見せないのはなぜだ」

信虎は板垣信方にいった。

「晴信様は、このごろ御病氣の様子にて……」

信方はごまかしようがないから、病氣だと逃げた。

「嘘をつけ、晴信は、きのうも栗毛を乗り廻していたそうではないか。それとも病氣というのは、女狂いの病氣をさすのか」

信虎は、京都より招いた北川基房を始めとして、主なる家臣がいならば前でそんないい方をした。信方は自分が叱られているように恐縮して頭をさげながら、信虎が晴信のことを女狂いといったのは、おここのことを耳にしたからだろうと思った。晴信が、おここの一室を与え、ここにしげしげ通うようになったことを知っているのは晴信の館の者と信方ぐらいのものである。館の女たちは口がかたいから、主君の閨房のことを外へ洩らすようなことはない。信虎の耳におここのことが入った経路は、おそらく三条氏からであろう。三条氏を晴信の正室として迎えたのは信

虎であり、三条氏は、夫の晴信より、舅しゅうとの信虎を権力ある庇護者ひごしゃと見ていた。だから、晴信がおここに手を出したことは、早速信虎に報告したに違いなかった。

「近ごろの晴信の行動を見ると、まるで、ばかかあほうだな」

信虎は続けて晴信の悪口をいった。

「この前の歌会であいつの作った歌といったら、まるでなっていない。少し信繁でも見習うといいのだが、あいつは、努力するということを知らないのだ。一度歌会に出てうまくいかなんたらもう二度と出ようとしないう腑甲斐ふがひない奴だ。それに今から、女にうつつをぬかすようでは」

信虎はそこまでいったが、板垣信方が上げた意味ありげな眼に、やっと、この席に客人在ることに気がついたのか

「まあいい、今日はいいが、明日の歌会に出なかつたらこの父が許さないぞと晴信に云ってまいれ。いますぐ行っているのだ」

信方は承知いたしましたと信虎の許を辞すと、その足で晴信の新館しんやかたへいった。

「お館様のお使いで参りました」

信方は多くの人に聞えるようにいった。晴信は書見中しよけんであった。

「歌会へ出ないというので父が怒っているのだらう」

晴信は笑っていた。笑うと、晴信の顔にはまだ幼な顔が見えるほど若々しく輝いていた。

「ちゃんと知っていて出席なさらないのでは、はたが迷惑いたします。晴信様は歌がほんとうにお嫌いなのですか」

「いや、歌が嫌いなのではない、歌は好きだ。今読んでいる本も歌の本だ。歌は好きだが、京都から来られた御人おひとが嫌いなのだ。父は何かというと京都の人を呼びたがる。去年も冷泉れいぜい為和殿ためかずを京都から迎えて歌会をやった。父は相手が京都の人だとすると、人間が一段、上等にできているとも思っているらしい。ばかばかしいってない、全く同じ人間だ。いかにも、今当家へ来ている北川基房という御人は歌がうまい、それは歌を食い物にして、諸国諸侯を渡り歩いているからだ。歌だけならいいが、あの連中と来たら歌を売物にしながら、諸国の情勢さむかひを探り歩いて、都合のいい方へ売り渡すのだ、油断すずみも隙すきもない奴等だ」

晴信はけろりとした顔でいった。とても十九歳の青年には云えそうもない言葉を平気でいっている晴信を見ながら板垣信方は、この晴信の洞察力にたのもしさを感じた。

「でも明日の歌会には出ていただかないと、拙者がこまります」

信方がいった。

「分った。しかし歌会に出て、父に、信繁の歌はうまい、同じ兄弟でも晴信の歌は歌ではない鵜うの寝言みたようなものだ、怒鳴られるのはつらい。怒鳴られても、ばかになっているのは尚更なおさらつらいことだ、だから歌会には出たくないのだ」

晴信は机からはなれて背延びをしながらいった。

「いましばらくの、御忍従をお願い申し上げます。いましばらくは、表面に出るようなことはなるべくおさけになるように……晴信様の才分については家臣一同が認めています。お館様もそれを知りながら、なんとかして、晴信様をしりぞけ、信繁様をお世継よつぎにしようと思っておられるの

です。つまり、晴信様の落度を探しておられるのです。きっかけを待っているのですから、今のところは、ごくひかえ目になされていることが肝要かと存じます。いまは、ただのんびりとお過し下さればよいのです。にわかばかの真似まねをしたり、妙に変わったことをすれば、かえってそれが狂言と見られますから御用心のほどを。ましてや、女狂いなどあそばされると……」

そこまで信方というと晴信はきつとなつて

「女狂いとはなんだ。それがおここのことをいうのだったら許しはせんぞ。この晴信はおここの好きなのだ。今まで知ったどの女よりも好きなのだ、父が京都から呼びよせた、あの高慢ちきな女よりも百倍も好きなのだ。好きだから可愛がるのがなぜ悪い」

晴信は顔を紅潮させながら、おここの可愛いと何度もいった。信方はいままで晴信がそれほど興奮した顔を見たことがなかった。気の毒な主君だと思った。十三歳で、無理矢理一つ年上の夫人を迎えさせられ、彼女が死ぬと、十六でまた三つも年上の女をあてがわれた晴信が、男としての眼を覚したのは当然であり喜んでやるべきだと思った。

「でも、あまり、おここの殿のところへばかり通うのはよろしくありません」

たまには三条氏の閨むねをも見舞つてやれとはさすがに云えなかった。ふたりの間にしばらく沈黙がつづいてから、晴信の方から口を開いた。

「石水寺へ行く途中で、郷民の訴えに会った」

「石和甚三郎に聞きました」

「あのようなことを父がなされたことが、他国へどのように伝わっているか」

晴信は声を落していった。

「お館様の乱行は、近隣ごとくへ伝えられております。この乱世ですから、他国からこの甲斐へ足を運んで来る者はことごとく他国の間者かんじゃと見るべきでしょう。僧衣の間者、物売りの間者、あまたの間者が、甲斐の国は危いという報告を持って帰るでしょう」

「よくないな」

と晴信はいった。

「よくありません。甲斐一国だけは、どうにかおさめても、他国からの侵入があれば、それに内応する者がでるでしょう。だから、その前になんとかしなければなりません」

なんとかするということは信虎を政権の座から、どのようにして、ひきおろすかということだった。

「北条氏綱はどうだ」
ほうじょうじつな

「相変らず甲斐侵略の野望を捨ててはおりません」

「今川は」

「駿河へは晴信様の姉君様がおこしになっておられますから、今のところは静観というよりも、するが憂慮といったところでしよう。そのうち、今川家から、なにぶんの連絡があるだろうと思っております。今川義元殿にして見れば、できることなら甲斐は静かであって欲しい。甲斐が弱くなれば、北条が強くなり、駿河の背後をおびやかすということになります。京をねらっている今川殿とすれば、いかなる手段を取ってもこの際甲斐の安定が必要なのです」

晴信はいくどがうなずいてから更に

「信濃はどうだ、特に諏訪は」

「もっとも手ごわいのは諏訪です。諏訪家は神氏かみうじの出という家柄と肥沃ひよくな土地を持っています。諏訪を平定しないかぎり、信濃進出はできません。しかしそれは将来のこと、今のところは、進出よりも、諏訪家をなんとかして味方につけておかねば、信濃よりの侵略を受けることになります。今のお館様はその危険な状態がお分りにならないのです」

信方は溜息なみいきをついた。

「なにか案があるか」

「たったひとつだけあります。妹君の禰々ねね様を諏訪頼重よりしげへおやりになることです」

「禰々ねねをか、禰々ねねはまだ十二だ……」

晴信は彼のところに十四で嫁いで来て毎晩泣いていた上杉朝興の娘於満津を思い出していた。

「来年になれば十三になります。やはり、お家のためにそうしなければならぬでしょう」

信方は少しも動ぜずにいった。

「そのことを誰が父にいうのだ」

「それをいうのは信繁様にかぎります。信繁様にそう云わせるのは晴信様以外にはございませぬ。信繁様は、たいへんな晴信様思いですから、晴信様がたのむと云えば、きっとそのとおりのことをお館様に進言しんげんなさるものと存じます」

晴信は返事をしなかった。

「そのことはなるべく早く、信繁様のお耳へお伝え下さらないと困ることになります」
 そういつても晴信は知らんふりをしていた。

「何をお考えになつてゐるのです、晴信様」

と信方が膝を寄せると晴信は

「おここのことを考えてゐるのだ、これからおここのところへいこうと思つてゐる」

「なにをお云いなされます、この真昼間に」

信方があきれた顔をする

「そうだ、その顔がいい。そのとおりの顔をして父上に、晴信は昼間から、おここと同衾どうきんしてゐたと報告するがいい」

そして晴信は信方をそこに置いて、ほんとうに、おここの部屋へ恋いがれた女を訪問するかのやうに、上気した顔で入つていったまゝいつまで待つても出ては来なかつた。

青梅の舞

晴信はおここの溺愛できあいした。たとえ昼間でも、おこことともに衾ふすまに入つてゐることはそうめずらしくなかつた。晴信にとって、おここはそれほどすばらしい女だつた。おここと一とき過せば、

ふたりの愛情は、それだけ深まっていた。おこは静かに燃えていき、やがて、ほんとうに燃え出すと声を上げて晴信の名を呼んで、彼にしがみついて泣いた。そしてそのあとも静かに長く燃えつづけて、容易に晴信を放そうとはしなかった。三条氏が義務的に、晴信の前に身体を投げ出して、彼が、彼女の身体をどう扱うかを瞬きまたたをせずじつと見詰めているのとは比較にならないほど違っていた。三条氏はその行為を子供を生む前提としての作業と心得ているようであった。それを嫌悪けんおしているふうもなく、喜んでいふふうもなかった。きわめて形式的な営みとして、晴信のおわるのを待っているようであった。

晴信はおここの炎の中に身を置きながら、その炎の温度が度を重ねるにつれて異常に高まっていくのを感じていた。晴信はこのことについて女の情愛の度はそのまま体温の高さに比例して表われるものと思っていた。おここの体温は、彼女のもとを去ってもしばらくは残っていた。晴信はそのねばりつくようにはなれない感覚を愛した。

晴信の欲求は熾烈しれつだった。三日、三晩、おここのそばから離れないことさえあった。そんな日がつづいたあと、きつと晴信は、なにか、そうした彼の生活にいたたまれなくなったように、栗毛の駒にうちまたがると、行方を定めず鞭をくれて、遠駆けに出かけるのである。石和甚三郎と塩津与兵衛は、この気儘きままな主人のあとを追うことでせいっぱいだった。晴信は半日も、ときによろと丸一日も馬を乗り廻して帰館すると、あたかもその遠乗りの疲労が慾情をそそのかしたかのように、服装もあらためず、おここのところへいって彼女を抱いた。

石水寺の要害へ馬を馳せて、僧を呼んで、詩の会を催すこともあった。その会をそのまま館ま

で持ちこんで、二晩もつづけることがあった。

「どう見ても、普通とは見受けられません」

石和甚三郎が板垣信方に晴信の行状を逐一報告した。

「おそらく、お館様（信虎）の耳にも入っているでしょう、困ったことだ」

信方は、思案顔に首をかしげたけれど、とり立てて晴信のところへ諫言（かんげん）にいくような様子は見せず、石和甚三郎に、なにごとによらず報告するように命じていた。

その朝、晴信は夜明けとともに庭におり立って、石和甚三郎と塩津与兵衛を呼んだ。晴信はいつになく、よく澄んだ眼をしていた。熟睡した眼であり、時折、彼の見せる、思索（しきう）的な眼でもあった。石和甚三郎は、晴信がこういう眼をするときは、なにかしら、突飛（とっぴ）なことをしでかすときであることを知っていた。

晴信は笛吹川の上流へ向って馬を馳せていった。路上はまだ露に濡れているので、三騎が走り去っても、そのあとに土ぼこりがあがるようなことはなかった。やがて彼の駒は笛吹川沿いの平野を走り過ぎて、雁坂峠（かりさか）への秩父往還（ちちぶおうかん）へ乗りこんだ。そこからは馬の速度が落ちた。勾配（こうばい）が急になり、道がせまくなり、溪谷状になって来た地形の底に笛吹川が音を立てて流れていた。そこは甲府盆地の末端にあり、そこからは限りなく山が続いていた。

晴信は川に沿ってかなりかけ登ったところで、馬を止めた。荒れている馬の呼吸をととのえるためだった。晴信は馬からおりると路傍の石に腰をおろして、岩を噛んで流れる笛吹川を眺めていた。二人の家来も、その近くにひかえて、晴信と同じように川の流れに眺めいていた。

馬蹄の音を聞いて、振りかえったのは、晴信だった。

馬に乗った若者が川下の方から駈け上って来て晴信のうしろを通っていった。早駈けというほどではなかったが、かなりの速さだった。晴信が気がついてふりかえったから、石和甚三郎も塩津与兵衛もふりかえった。

三人は、その馬上の若者が、当然そこにいる晴信に、一礼して通り過ぎるだろうと思っていた。たとえ、晴信の顔を見知ってはいないにしても、その服装を見れば、身分のある者と分るのだから、馬からおりて挨拶するのが当り前と考えられた。ところが、若者は知らん顔をしていた。知らん顔というよりも無視の態度が歴然としていた。

若者の姿が木かげにかくれて見えなくなるとすぐ晴信がいった。

「あの若者のあとを追うのだ」

晴信は、その若者が晴信を無視したことで腹を立てたのではなく、その若者の乗っている馬に眼をつけたのである。その馬は農耕用の駄馬ではなく、合戦用の騎馬として養い育てられたことははっきりしていた。その青毛の駒は晴信の乗馬の栗毛よりも、はるかに勝れて見えた。晴信はそういう馬を育てている者が誰だかを知りたかったのである。

石和甚三郎は若者のあとを追いつながら、若者の非礼を怒っていた。晴信も、そのことで、あの若者のあとを追えといったのだろうと考えていた。塩津与兵衛は、若者の顔をよく見ていた。不敵な面魂つらだまをしていた。一見この附近の住民に見えるけれど百姓らしくなかった。身に寸鉄は帯びてはいないけれど、持たせれば、かなりの使い手になれるような体格だった。晴信が追えといっ

たのはあのような男が、なぜこのあたりをうろついているかを確かめるためだと思われた。この道は雁坂峠を越えて秩父へ通ずる道であるから、ひょっとすると、あの若者は敵国の間者かも知れない。

石和甚三郎は馬上に身を伏せるようにして、若者のあとを追った。少しおくれて、晴信がつづき、晴信のあとを警護するように塩津与兵衛が走っていった。

晴信主従は、馬に自信があった。馬もいいし、乗り手もよかったから、若者に追いつくことはわけもないことだと思っていた。実際若者の走り方はもたついて見え、若者との間隔はつめられていった。ところが、若者の姿が曲り角や、木かげに入って見えなくなつて、再び姿を現わしたときには若者との間隔はいつの間にか開いていた。つまり若者は、見えないところでは馬をとばし、見えるところではわざとゆっくりと馬を走らせているのである。

急に明るくなった。道が溪谷を出たのである。はっとするような、なごやかなひろがり、明るさの中に、馬のいななきや、雞の声や犬の声がした。畑が川をはさんで両側にひろがり、やや山へよつたところに村落があった。

晴信主従の前を走っていた若者の姿は、どこへひそんだか見えなかった。

晴信はそう遠くないところに高さ六尺あまりの土塁を二丁四方ほどの広さにめぐらした居屋敷いやしきを見た。馬上から見る居屋敷はよくととのつて見えたが、居屋敷とそれを取りまいて点在する人家はみすばらしく、その附近一帯の農地もやせていた。畑には人の影がなかった。

「誰の居屋敷か」

晴信は石和甚三郎に聞いた。

「はっ、ただいま取調べてまいります」

そういう石和甚三郎をおさえて、晴信は乗馬の鼻先を居屋敷の方へ向けた。塩津与兵衛が、先導となって、一足先に、居屋敷へ晴信のことを告げた。

幾人かの人がころがり出るように門の外へ出て来て晴信を迎えた。

「倉科三郎左衛門にござります」

長老が晴信を迎えていった。

「この庄の名子、小者の総数は」

晴信は三郎左衛門にたずねた。たずねながら、自分自身が領主の子を意識していることをいささか面映ゆく思った。

「四十三名にござります」

倉科三郎左衛門の額に刀疵があった。それに気がついて聞くと三郎左衛門は

「信繩様、信虎様、二代に仕えて、各地で戦いましたる疵でございます」

そして三郎左衛門は、彼の脇にひかえている、若者をさして

「孫の源九郎と重兵衛の兄弟にござります」

といった。

源九郎だと紹介された若者は途中で晴信の一行を追い抜いた若者だった。

晴信は大きくうなずいた。三郎左衛門と名乗る郷武士はなにかの理由があつて、源九郎を使つて、晴信をそこまで誘いこんだのだと思つた。危害感はなかったが、いくばくかの不安感はあるた。

「源九郎というのか、案内して貰つてありがたかつた。なかなかの馬の達人であるようだが、すでに合戦に出たことはあるのか」

晴信は倉科源九郎にいった。

その質問に対して、源九郎は、どう答えていいか困つたように眼を三郎左衛門の方へやった。

「まだ合戦には出ておりませぬ。合戦に出ても、役に立つほどの腕になっておりませぬので、出さないでお願いします」

三郎左衛門がかわつてこたえた。その答えかたに晴信は不審を抱いた。源九郎にしてもその弟の重兵衛にしても、立派な武士だった。眼の据えかたも、ただの地侍じやうらいの眼ではなかった。かなりの武技を持った者と見られるにもかかわらず、合戦に出たことがないというのは、三郎左衛門が出そうとしないのではないかと思つた。

「さつき馬のいななきが聞えたが、馬は……」

「戦さのお役に立つ馬は五頭ございます」

三郎左衛門は素直に答えた。

「五頭の馬が……」

晴信は、この郷武士の居屋敷だけで、途中で見かけたほどの逸物が五頭もいることに驚くこと

もに、その資源発見を喜んだ。

「源九郎の馬術は来る途中で見たが、重兵衛の馬術は見ない。源九郎にしても、重兵衛にしても、馬術もさることながら槍もやるだろう。できたら、この郷のものの馬術が見たいものだ」

槍でしたらと三郎左衛門はしばらく考えるふうだったが、やがて決心したように

「倉科の党の槍をごらんに入れましょう。もし、お目に止ったら、晴信様の旗本にお加え下さいますように、お願い申し上げます。晴信様ならば、喜んでこの二人の孫を差出しますが、今の領主様の信虎様のもとで、この二人を死なせることはおことわりいたします」

「なぜ父の許ではいやなのだ。父は甲斐の国の領主だ。領主のことを聞かねば、どうなるかは分っているであろう」

「分っています。分っていますが、信虎様ならばいやでございます」

老人はきっぱり云った。領主のことを聞かないということを、晴信の前で宣言したことは、よほどの決心でないとできないことだった。もし晴信がそのとおりのことを帰って父信虎に報告したとすれば、その日のうちに、倉科の党は皆ごろしにされるであろう。晴信はこの老武士にこのようなことを云わせた裏になにかがあるに違いないと思った。おそらく、この倉科の庄ばかりではなく、この附近の小族の多くが、三郎左衛門と同じような気持を持っており、或は、それらの代表として、倉科三郎左衛門はものを云っているのではないかと思った。

「そのときが来れば、源九郎、重兵衛の両名は余の旗本に加えてつかわそう」

晴信はときが来ればと、上手にその場をごまかしながら、この居屋敷の土塁の中に入ってから、

なんとなく周囲がもの騒がしいのを気にしていた。武具に身をかためた者たちが上畧の内側にひそんでいるような無気味さが、居屋敷全体に充満していた。

源九郎と同じような、みすばらしいなりをした若者が走って来て、用意ができましたと三郎左衛門につげた。

「されば晴信様、どうぞ馬場の方へ」

「馬場？」

晴信はそんなものがあつたのかと妙な顔をした。この居屋敷を一望したところでは、それらしいものはなかった。あるとすれば、村のはずれか、農地をはずれたところであろうと思った。その想像は当つた。倉科三郎左衛門が、晴信の馬の轡くわを取って案内していったのは、居屋敷を出た背後の山だった。一本道を真直ぐに登り切つて、丘のいただきに立つと、眼の前に草山が二つあつた。二つの山が沢を挟んで向き合っており、沢には小川が流れていた。

全山浅みどりに染っており、どこかで、やぶうぐいすが啼ないていた。

晴信がその地形を見て取つたところを見計つて、倉科三郎左衛門が、右手に持っていた、アジサイの枝を高くかかげると、それを合図に、どこにひそんでいたのか、二十騎ばかりの一隊が、それぞれ草山の頂上に姿を現わした。

「右の山に二十騎をひきいているのが兄の源九郎、左の山に二十騎をひきいているのが弟の重兵衛にございます」

三郎左衛門がそう説明した。右の山の二十騎も、左の山の二十騎も、槍こそ持つてはいるが武

具はつけておらず野良着のままであった。二つの山の頂上の隊は、微動だにしなかった。馬も人も、その山のいただきに化石となって止ったように静かだった。

三郎左衛門が高くかかっていたアジサイの枝がふりおろされた。紫の花がこぼれた。それを合図に、二隊は、いっせいに、丘を駆けくだり始めた。おそろしいばかりのいきおいだった。二十騎は一団となって、丘をかけおり、沢の中央を流れている小川を跳び越えたあたりですれ違ふと一気に丘をかけ登っていった。二十騎が一騎に見えるほどよく訓練されていた。二団は、それぞれがさっきまで相手がいた丘のいただきに集合すると、今度は、向きを変えて、晴信主従のいる丘へ向って山腹を横切つて来る。

見事なものだと晴信は心で讃めた。こんなすばらしい集団馬術が甲斐にあったのかと自分の眼を疑うほどだった。騎馬集団の動きを遠く眺めているうちに、感嘆の氣持でいっぱいだった晴信も、その二つの騎馬集団が方向を変えてからは心の中に動揺が起った。草原を横切つて、一気に晴信の方へ突き進んで来る左右二隊は、なにかの意図を持っているように思われた。二隊が接近すればするほど晴信は恐怖を覚えるのであった。

左側から来る源九郎も、右側から来る重兵衛も、共に長槍を小脇にかかえこみ、眼は晴信の方へ向けられていた。

両隊が、まさしく、晴信主従を、挟撃する体勢で攻めよせて来るのを見ると、晴信はあわてた。
(計られたか)

と思った。そう思っても、どうすることもできなかった。逃げてでも逃げおおせる相手ではなか

った。騎馬の術においては、彼等は晴信主従を圧倒していた。

二隊はいよいよ晴信のそばに近づいた。両隊合わせて、四十騎が、四百騎にも、四千騎にも見えた。蹄の音が雷のように聞えた。

倉科三郎左衛門がアジサイの枝をまたふった。晴信主従を眼ざして突撃して来た騎馬隊は、晴信の眼の前二十間あまりのところでもた向きをかえた。と同時に、騎馬の若者たちは槍をかまえた。空気を切り裂くような気合があちこちで起った。二隊は一瞬かけ違った。かけちがう時に、槍の穂先から発する光が交錯した。二隊は真槍をふりかざしながら、草原にさし枝してある青梅を狙って突進した。槍の穂先で青梅をひとつ、突き取ると、そのまま数間駆け過ぎたところで、すぐ馬をかえして、また新しい梅の実を狙って突いた。

一本の梅のさし枝の廻りを二騎が交互に廻った。全速力で馬を駆けさせながら、突き出す槍先に小さな青梅がひとつずつ突き取られていく妙技もすばらしかったが、真槍を持って入り乱れながら、互に傷つけ合うことのないのもまた見事なものだった。

青梅が全部突き取られた頃を見計って三郎左衛門がまたアジサイの枝をふった。

「青梅の舞いにございます」

三郎左衛門が晴信の前に手をついていった。四十騎は晴信の前に整列した。

「見事なものである。これぞ、わが甲斐のほまれである」

晴信は非凡な馬術を見せてくれた若者たちにそういいながら、さっきの心の動揺が顔に出てはいないかとそればかりを気にしていた。

「お気に召しましたでしようか」

倉科三郎左衛門は勝ちほこった顔でいった。倉科の党の馬術が、晴信の度胆どげんを抜いたことを見抜いての上で

「これより、倉科の党が晴信様のお供をつかまづります。ぜひ、お逢いになっていただきたい人たちがございます」

といった。人たちというと、それは複数であった。四十騎の馬術に驚いている自分の前に、倉科三郎左衛門は、今度はいかなる人間たちを見せようとするのであろうか、晴信の不安は去らなかった。

「お会いたただけるでしょうか」

三郎左衛門は口ではそのように丁寧な言葉を使っているけれど、眼には、晴信がいやだといつても、そこへ連れていくぞという気がまえを見せていた。さっきの四十騎が晴信主従の周囲をかこんでいた。晴信は、倉科の党の手中にある自分を思った。石和甚三郎も塩津与兵衛も真青な顔をしていた。特に塩津与兵衛の方は、今にも刀に手でもかけそうなけわしい顔をしていた。

「郷に入つては郷に従えということばがあるだろう」

晴信は、石和と塩津の顔を交互に見ながらいった。それが倉科三郎左衛門への回答でもあった。

晴信主従を中にしての騎馬の一隊は、笛吹川の源流へ向つてさらに登つていった。

「あそこでございます」

倉科三郎左衛門は川の方を指^さしていった。川のすぐ近くのやや小高いところに、数軒の家が立ち並び、その周囲に上屋がぎずかれてあった。その辺の土豪の居屋敷のようでもあったが、居屋敷にしては、いささか狭すぎた。家の中から数条の湯けむりが立昇っていた。

「川浦の郷にござります」

三郎左衛門はそういつて先に立った。刺戟性の湯の臭^{にお}いがした。ここは合戦で負傷した将兵が疵^{きず}を癒やす湯であり、ここ三十年ぐらいの間、いつもこの湯は疵を負った将兵でいっぱいでしたと説明した。

「晴信様が御見廻りに来られたぞ」

倉科三郎左衛門が触^ふれて通ると湯治客は廊下に出て来て、晴信を迎えた。陰湿な宿だった。こんなところに滞在していたら、治る疵も悪くなりはいないかと思われるような薄暗い部屋に、負傷兵がうごめいていた。

「われわれは、武田家のために戦って参りました。多くの人が死に、多くの人が傷つきましたが、黙って戦ってまいりました。しかしその結果、われわれはなにを得たでしょうか。田畑は荒れ、人馬はきずつき、いよいよわれらは貧窮に迫いつめられるばかりです。信虎様は甲斐を統一せられ、京都から位を贈られたと聞きましたが、われわれに、なにを賜^{たまわ}ったでしょうか。重税につぐ重税、夫役^{ぶやく}につぐ夫役、そして合戦です。その上信虎様の最近のなされようは……」

晴信の耳元でひとりごとのようにしゃべっていた倉科三郎左衛門がそこで言葉を切った。廊下が明るい方に廻って、川の見える広間に出たのである。快方に向いた将兵たちが軽く武技を練る

道場でもあるかのように、だだっぴろい板の間いっぱいに人が並んでいた。

晴信は上座に坐った。いやおうなしに坐らされたといった恰好だった。

「おなつかしゅうございます」

晴信が坐ると、彼の前に手をついてそう云った鬚びんの白い武士がいた。その鬚の白さと、顔の皺で晴信はその男を思い出した。

「おお、今井兵部ひょうぶ」

晴信が思わず声を上げた。晴信の幼少のころ、彼に乗馬術を教えてくれた今井兵部は天文五年、信虎が前島一門を切腹させたその処断に憤慨して国外へ去った奉行の一人だった。

「よく無事でいてくれた」

晴信は今井兵部の手を取って云った。そのことばで、今井兵部は涙をはらはらとこぼした。今井兵部の次に鎌田十郎左衛門、その次に三枝半兵衛みえくさとつぎつぎと晴信の顔見知りのもと奉行衆がそこへ来て挨拶した。

「しばらくお目にかからぬ間に、晴信様にはお見事に御成人なされ、なによりもうれしく……」

今井兵部が他の奉行衆を代表してそこまで云ったが、それ以上は言葉がつまって云えなかった。もと奉行衆たちは、五年間の逃避生活にもかかわらず、今尚不屈の闘志を顔に現わし、揃そろってよく輝く眼を晴信に向けていた。

「晴信様、お願いがございます」

今井兵部が、晴信の前ににじりよるようにしていった。云うだろう、云いだすだろうと思つて

いたことが、とうとう、眼の前のもと奉行衆の口によって云われるのだなと晴信は思った。晴信は覚悟をした。どうせ一度は誰かに云われるだろうと思っていたが、このようなやり方で、無理強いされるのはいやだなと思った。晴信は瞑目した。眼をつぶると川の音がよく聞えた。晴信が眼を開くのを待つように、そこに居並ぶ人たちは呼吸をつめた。

晴信が眼を開くと、そこに今井兵部の眼が待っていた。

「つべこべ申し上げなくても、聡明な晴信様にはお分りいただけるかと存じます」

今井兵部はそこで大きく息を吸いこんでから

「晴信様、ただいまここにおいて信虎殿追放の旗を挙げさせられませ。晴信様が旗を挙げたとなれば国中の者は晴信様にお味方申し上げること間違いございません」

「父に謀叛せよというのか」

「そうしなければ甲斐の国は亡びます。他国に蹂躪され、塗炭の苦しみを受けることになるのです。今です、いまが好機です、いま晴信様がここで兵を挙げれば、この谷だけでもお味方に加わるものは、五百騎はあるでしょう。一挙に古府中のお館眼ざして進撃すれば、躑躅が崎のお館にも、内応する者がおります故、一兩日を出でずして、晴信様の御時世になること、間違いのないことでございます」

晴信はまた眼をつぶった。さっき、倉科の庄で見た四十騎の突撃ぶりを持ってすれば、父の館へ突入することはそうむずかしいとは思われなかった。だが、晴信は父を討ちたくはなかった。子が親を討つという非道なことはしたくなかった。眼をつぶって考えていると、その板の間に並

んで、晴信に謀叛をすすめている、もとの奉行衆や、国人（土豪）たちの顔がよく見えた。この板の間に、三十数人はいるなと思った。三十数人の人たちが、ほとんど呼吸をつめるようにして晴信の言葉を待っているのだ。よし父に叛^{そむ}こうと云えば、その場で内乱は始まるのだ、しかし、もし晴信がいやだと首をふれば、どういうことになるのだろうか。晴信がいやだと云えば、その瞬間にそこに居並ぶ者たちは、国に仇なす反逆者となるのである。そうなった場合の彼等は晴信をこのまま古府中へかえすであろうか、もしかすると、晴信をこのままに閉じこめて置いて、晴信謀叛と国中に触れまわるかも知れない。晴信はそれをおそれていた。父信虎が国中の反感を買っていることは疑いなき事実であるが、その父との、政權交替はよほど慎重にしないと、他国のあなどりを受け、それをきっかけに侵略を受けることになるのだ。

晴信の心悸^{しんき}はおどりと、呼吸は自分でも分るように乱れていた。自分の呼吸の乱れを通じて、板の間に坐っている者たちの呼吸を窺^{うかが}うと、彼等もやはり乱れていた。乱れをおさえようと、わざとゆっくり呼吸をととのえている者もいた。乱れ方が晴信のそれと周期を合わせているものもあった。

（彼等も、不安なのだ）

晴信はややゆとりができた。彼等も晴信が旗を挙げたら必ず成功するという確信はないのだ、その不安が、彼等の呼吸を乱しているのだ。晴信は彼自身の呼吸の乱れと彼に謀叛をすすめる者たちの呼吸の乱れとを、じっと、うかがいながら、ふと、彼のごく近くに一人だけ、平常の呼吸^{いき}使いをつづけている者のあることを知った。

（倉科三郎左衛門か、石和甚三郎かそれとも塩津与兵衛か）
そう思って、ひとりずつの呼吸に耳をかたむけていくと、三人とも、やはり、かなり激しい乱れ方をしていた。

（倉科でも、石和でも塩津でもないとする誰であろうか）

晴信の側近にひかえているのは、その三人であった。

晴信はそつと見た。見知らぬ男が、塩津与兵衛のうしろにひかえていた。

「そちは倉科の庄のものか」

晴信はきつとなつていった。男の顔に動揺が起きた。その男の視線が横に走つたと見る間に、二間ほど飛んで窓に飛びついていった。だが、その男の身体が窓にかかったとき、塩津与兵衛の手が、男の足をおさえていた。

騒然となった。もと奉行衆の国人たちの集っている中へ、堂々と間者が入りこんでいたことに一同は色を失った。

「誰にたのまれたのだ、名を云え」

塩津与兵衛は手早く男を縛ると晴信の前へ引きずつて来ていった。

「おそらく口を割るまい、無駄なことだ、斬るしかない。しかし、この間者は殺すにはおしい人物だ。おそらく倉科三郎左衛門の従者のようによそおつて従つて来たのだろう。三郎左衛門にして見れば、この湯の郷の者だと思つたのだろうし、湯の郷の人たちは三郎左衛門の従者だと思つたのだろう。人の出入りの間隙を衝いたうまい行動だ」

晴信に斬るにはおしいと云われた男は、あきらめ切った顔で晴信を見詰めていた。

「余は帰館するぞ」

突然晴信が云い放った。

「父信虎に反旗をかかげろとすすめるほどの重大な会議に間者が入りこんでいるようではそこもとらの計画の底は知れている。策は密なるを要すると、余に教えてくれたのは、今井兵部ではなかったか、その兵部が謀叛をすすめる会場に間者が入りこんでいるようではこの屋敷の周囲にはこれに数倍する間者がひそんでいると見なければなるまい。そこもとらの計画は既にここにおいて破れている。ここでも、余が、父に反旗をひるがえすと宣言したとすれば、この谷に、馬が集まる前に古府中から押し出して来る軍隊でこの谷は埋まってしまうだろう。そして余が負ければ武田はほんとうに亡びるのだ」

声がなかった。晴信に圧倒されたかたちだった。

「これ間者」

と晴信はいくらか声をおとしていった。

「殺すのは惜しい人物だから許してつかわす。顔つきから見ると、どうやら相模か駿河あたりから来たものと思われるが、帰って晴信は父に反旗をひるがえすほどのばか者ではないといってくれ、縁があつたらまた会おう」

晴信は不服そうな顔をしている塩津与兵衛にその男の縄を解いて放してやるようにいいつけてから、ゆっくり立上った。

(そうだ、ずっと前、板垣信方が平賀源心の間者大月平左衛門を捕えて恩をきせて逃がしてやり、結局は味方につけて、平賀源心討ち取りを成功に導いたことがあった)

それを真似ているのだと誰かに云われそうだった。

(だがやはり、この場合は間者を殺すのは無意味だ)

晴信は塩津与兵衛に縄を解かれて、去っていく、間者を見ながら、いつかその男が晴信の家来になるような気がしてならなかった。

(いちいち間者を殺していたらきりが無い、それよりも、殺すべき間者を生かして使う方法を考えたほうがいい)

そのころから晴信の頭の中に、間者に対する策が、形づくられつつあった。

川浦の郷を出るとき晴信は送りに出て来たと奉行衆たちにいついつまでも自愛するように云い残して馬上の人となった。間者の潜入とそれを晴信が発見したことで、もと奉行衆も国人たちも色を失っていて、それ以上晴信に謀叛をすすめる者はいなかった。晴信は来たときと同じ道を倉科三郎左衛門を従えて、かけ下っていった。倉科の庄の近くに来たとき三郎左衛門は彼の乗っている青毛の馬を晴信に献上したいといった。晴信は快くそれを受けて、その返礼として彼が着ている陣羽織と、石和甚三郎が用意していた十両の金を三郎左衛門に渡した。

晴信が躑躅が崎の館に帰ったのは日が落ちる頃だった。館の門を通ると晴信は彼の館の方へはいかず、その足で弟の信繁の館へ馬を馳せていって、弟の信繁に倉科の庄から貰い受けて来た青

毛の駒を見せていった。

「いい馬だろう、信繁の乗馬に進ぜようか」

すばらしい毛並の馬だった。折からの落日に、濡れたように輝いていた。ほんとうにいい馬だと、信繁は館の中を乗り廻して見てからいった。

「いい馬だろう。馬に乗ったついでに板垣信方にそれを見せて来てはくれまいか」

晴信は大きな声でそう云ってから、そばに近づいて、小さな声で、実は火急の用事で、信方とお前に話したいことがあるのだといった。

信繁は晴信の顔の中に心配ごとがあるのを見つけたようだった。おそらく兄の困っているのは、きょうの遠出の途中に起きたことで父信虎とも関係のあることだろうと思った。兄思いの信繁の顔に不安なかげが走った。板垣信方は信繁とつれ立って間もなくやって来ると、晴信の顔を見て、御無事でしたかといった。

信方もまた、晴信の帰還の時間がおそいので心配していたのである。

「いやなことが起ってしまった」

と晴信はその日のできごとをかいつまんで話すと

「もと奉行衆に国人の一部が交って、晴信に反旗をひるがえすようにすすめたということが父の耳に入るのは、間もないことと思う。そうなったら父はおそらく笛吹川の上流に兵を出すと同時にこの晴信を……」

晴信は憂鬱な顔をしながらいった。

「そんなことになったら大変です、甲斐に内乱が起きれば他国からそれに乗じて攻めて来るでしょうし、そしてもし父が兄者に……」

信繁はおそろしいものを見たように身をふるわせていた。

「いつかはそういうことが起ると思っていました、もと奉行衆がそのような非常手段にうったえようとは思っていませんでした。やむを得ない、こうならばお館様の眼を一時、よそへ向けるより仕方がございません。よそへ向けておいて今川様には信虎様御引き受けについてもう少し、念の入った交渉をいたさねばならないと存じます」

信方がいった。

「よそへ眼をそらすとは？」

晴信の問いに信方は

「信濃の小県の海野棟綱が、近ごろ盛んに動いています。去年、襦々様が諏訪家へお興入れになって以来、なんとなく海野はあせっているようですから、この際小県にことを起して信虎様を出陣させるしか策はございません」

信方はそうはいうもののあまり自信がありそうではなかった。

「しかし、それより早く今日のことが父の耳に聞えたら」

晴信がいった。

「そのことです。いずれお館様のお耳に入るとするならば、今夜のうちに、申し上げた方がいいかと存じます。晴信様はお館様の前へは出ずに、この信方と信繁様が一緒に参って、上手にとり

なします、お館様はお怒りになって今夜のうちにでも雁坂峠へ向けて兵を出すというでしょう、それは私が止めます。そんなことをしていれば、信濃の方から尻をつかれます。お館様が、晴信様をお疑いになるようでしたら、そして、また晴信様を討てと云い出すようなことがあったとしたら、私がその討手を引き受け、晴信様と一緒に古府中を去ります」

信方は決心を色に出していった。

「信繁様はこの話の途中で、山奥で反旗をひるがえそうとしているもと奉行衆や一部の国人たちの平定は、信繁におまかせ下さいと云えば、お館様は、国内の方は信繁様におまかせになり晴信様を従えて兵を小県へ向けられるでしょう」

なるほど、と晴信は信方の提案にうなずいた。

「しかし、そのあとは」

小県の戦いは武田の勝利に終るだろう、そのあと、父はこの晴信をどう扱うのだろうか、倉科の党や、もと奉行衆と一緒にたてたという口実を設けて、殺されるかも知れない。晴信は背筋につめたいものを感じた。

「そのときは、そのとき考えることにいたしましょう。どうせ、どんづまりまでいかねば、始末のつかない問題です」

板垣信方の眼が異常な光を放った。

その夜、信方は間者を信濃の小県に向けて走らせた。晴信がもと奉行衆と国人たちに推されて、父信虎に反旗をひるがえしたという噂をばらまくためであった。

信方の放った間者の噂によって、小県が動き出したという情報は間もなく信虎のところにもたらされた。

信虎はもと奉行衆と国人たちが、晴信を立てて、反乱を起そうとして晴信に拒否されたことを信方に聞くと、まず第一に晴信のことを嘲笑した。だいたい、あのなまけ者の、女好きの、馬気狂いが、笛吹川の上流あたりまで、のそのそでかけていくから、そういうことになったのだ。しかも、臆病者の晴信だからそのことを直接父に云えないのだ。信虎は晴信を廃嫡はいちやくして信繁に跡目をつがせる好材料の出現を喜んだ。小県の海野棟綱が三千の兵を、動かしつつあるという報が入ったのは、その三日後だった。小県が動けば佐久が動く、すると信濃は全体的に動くことになる。去年、彌々をやって盟約した諏訪頼重も信用はならなかった。

信虎は合戦が好きだった。血首を前にして酒盃をあげることがなによりも好きだった。信虎は小県への出兵を決意した。

信虎は板垣信方の思惑どおり、信繁をあとに残して、晴信を従えて出陣することに決めた。晴信が不甲斐のない戦いぶりを見せたら、思い切って、国外へ追放してやろうとも考えていた。追放するとすれば、今川義元のところがいい。信虎は貴公子然とした顔の今川義元を頭に思い浮べながら、今川義元あてに手紙を書いた。ふらち者の長男晴信を追放するからよろしくたのむという手紙だった。時折筆を休めると頭の中の今川義元がにやりと笑った。信虎の頭の中で今川義元はへんな笑い方をしてからそっぽを向いた。

信虎は手紙を書き終ると頭をふって、今川義元の不遜ふそんな影を追払ってから、出陣の法螺ほらを吹く

ように部下に命じた。

天文十年（一五四一）五月、雨のそば降る日であった。

陣中の恋歌

今川義元は二通の手紙を前に置いてしばらく考えてから、信虎の手紙と晴信の手紙とをそれぞれの重さでも計るように両手に持って見た。

晴信の手紙の方がはるかに軽かった。義元ははてなという顔をした。別に両者の手紙の目方によって心を決めるつもりはなく、なんとなくそうしたまでのことだったが、手紙の目方に格段の差があることは、解^げせないことだった。義元はもう一度信虎の手紙から読みかえた。

（嫡子晴信は臆病者で、女のこと以外にはなにごとくも熱意を示さないおろか者である。武技にかけても、詩歌にかけても、はるかに弟の信繁の方が勝れているから、信繁を武田の跡目にしたい。ついては晴信の処置であるが、武田の家臣中には、晴信に好意を持っている者も若干あるから、跡目がすっかり決るまでの間、晴信を今川家にあずかって欲しい。そのうち、晴信には折を見て適当な領地を与えたいと思っている。尚、晴信出向の時期については、今度の信州小^{ちいさな}県の出兵の終りごろと考えているが御承知いただきたい）

書いてあることはそれだけであるが、むやみやたらと、晴信の悪口が連ねてあって、不愉快な手紙である。内容そのものが面白くないということもあるが、文面に現われている信虎の、おしつけがましい態度が義元には特に気に入らなかった。武田信虎は甲斐の領主である。甲斐のことはどう決めようがおれの勝手であるが、一応知らせるだけは知らせておく、あとはおれのいうとおり晴信を預ってくれればいいのだというりきみ方が感ぜられる。義元が今川家を継ぐについては信虎の力があつたことは事実であり、現に義元のところに信虎の長女が嫁して来ている。義元にとって信虎はいわば舅しゅうとであり、晴信は義弟である。

(それにしても、この書き方はかなり一方的だ。人の迷惑なんてことはいっこうに気にしていない)

義元は信虎の手紙を元どおりにして、今度は晴信の手紙を読み直した。

(かねて、父の所業についてはお聞き及びのことと存じますが、このごろ特に、常識では考えられぬようなふるまいが多くなり、国をあげて心痛いたしております。もともと父はこのような人ではなかったのですが、数年前後頭部に疔ちようを患って以来、激昂して目にあまるふるまいをしますのでがしばしばありました。このまま放って置いたら、大事にいたるやと思ひまして、板垣信方、その他の宿老と相談したところ、甲斐のごとき辺境には良医がない故、一応、名医良医の多数おられる貴地へ父の身を移して療養することがなによりという結論になりました。

右のような次第故、しばらく父の身をお預かりいただきたく願ひいたします。父の療養費として取り敢えず甲州金にて千両を差上げたいと存じます。なお、父の貴地出向は、今回の小県出

兵の帰途ということにいたしたいと存じますがいかがでしょうか。はなはだごめいわくなことをお願いして申訳ございませんが、同盟国のよしみを以て、なにとぞお聞きとどけ下さるよう田家一同心をそろえてお願い申し上げます)

義元は手紙から眼をはなした。

晴信の手紙の方はよくまとまっていた。無駄なことは書かず、きめるところはぴしりと決めた。信虎は病氣ということにして、追放したい。それは武田家の宿老も承知の上のことである。迷惑料として甲州金で千両を支払いたいとまで書いて来ている。知りたいことはだいたいそこに書いてある。冗長じようちやうきわまる信虎の手紙に比較してはるかに充実感がある。

「あの晴信が……」

義元はまだ元服していない前の晴信に一度会ったことがあった。女の子のように色の白い、こどもだった。眼が丸く、潤うるんでいて、見るからに、弱そうなこどもだった。義元は晴信より三つ年上だった。晴信に対して持っている女みたいな男の子という三つ年上の少年の印象は、いまだに義元を支配していた。

「あの晴信が信虎を追出そうというのか」

義元は笑った。晴信のやることが小憎らしいことに思われた。父の信虎が平定した甲斐の地を、父を追出して手に入れようなどとは不孝者めと心の中でいうものの、それでは、このまま放っておくかということになるとそれも考えものだった。信虎の失政の悉ことごとくは義元の耳に入っていた。(ほっておけば甲斐は亡ほろびる)

それが義元には不安だった。甲斐が亡びると、そこへ、北条か信濃衆の手が延び、ひいては義元の領土がおびやかされることになる。

それでは、信虎を引き受けて、晴信をして甲斐をおさめさせた方がいいかという確信を持ってない。晴信は未知数である。ただひとつ、晴信の背後に板垣信方がついていることだけは見逃せなかった。

「信方が晴信のあとおしをしているということは充分考えねばならないことだ」

義元はそこでまた考えこんだ。

雨季のせいかわ外は暗く、ひとりで坐っている義元の居間は夜のように暗かった。

侍臣の高間五郎兵衛が入口で手をつかえて

「山本勘助が参っております」

といった。義元はうなずくと、すぐ縁側に出た。小雨に濡れて山本勘助が土の上に膝をついていた。

「甲州の動きはどうだ」

義元は縁側をおりて庭に出ると、庭石に腰をおろしていった。

「信虎様に対する反感は頂点に達しております」

勘助は信虎の非人間的な所業を挙げ、甲斐の国の人たちの怨嗟えんさの声を列挙した。

「信虎に対する家臣たちの動きは」

「それでございます」

勘助はにじり寄るようにして、彼の隠密行動おんみつについて話しだした。

「天文五年にたもとを連ねて信虎様のところから国外へ去った奉行衆たちが、笛吹川の上流川浦の郷に集っているのを探知して、その会合の場へもぐり込みました」

「なに、もと奉行衆が笛吹川の上流に集った、すると、いよいよ甲斐に内乱が起るのか」

義元はびっくりした顔でいった。

「私もそう思いました。もと奉行衆、今井兵部、鎌田十郎左衛門、三枝半兵衛、それに倉科の党の倉科三郎左衛門父子などが集っているとこへ、晴信様が現われたときには、これはいよいよ武田に内乱が起ると思いました」

「なに晴信が、その先を申せ」

義元は身を乗り出した。

「それが妙なことになりました」

山本勘助は晴信に問者だと見破られて、捕えられたが、許されたことや、晴信がもと奉行衆の反乱には参加しなかった話をした。

「晴信はおかしなことをする男だ。別にそちに裏切りをすすめたわけでもないのだな」

「殺すにはおしい奴だから許してやる、駿河か相模の間者だろうが、帰ったら晴信は父に謀叛するような愚かな者ではないと伝えてくれとだけ申されました」

晴信が相手を駿河か相模の間者だと見抜いてそういう処置を取ったとすれば、その間者をしのびこませた今川か北条に対して、余裕のあるところを見せようとしたのかもしれない。どうだ、

この勝負はこっちのものだぞと、せせら笑ったことにもなるのだ。そして父に謀叛むはんするような愚か者ではないぞと口で云って置きながら堂々と信虎追放について密書をよこしているのだ。

「晴信め」

と義元はにくしくしげにいつてから、また考えこんだ。

雨は止んだが、雲の厚さはかえって増していくようだった。やがて本降りになりそうな空模様である。

「これからどうする……」

義元がいった。間者としての役目が果せず、捕えられたら自分で死ぬか、相手に殺されるのが当り前なのだが、死ぬ理由さえ見出すこともできずおめおめと帰らざるを得なかった勘助に、これからどうすると聞いたことの裏をかえせば、どう処分してやろうかということにもなる。

「おひまをいただきたいと思います」

「うむ——」

間者の任務を全うしなかったからといって、死を与えるほどの理由もない、やはり彼のいうとおり今川家から追出すしか手はないだろうと考えたが、それもおいしいような気がする。山本勘助は義元が善徳寺にあずけられて、禅僧としての修行中の時から知っていた。天文五年四月、兄の氏輝が死去してそのあとを義元が継いで以来、間者用員として拔群の成績を上げていた。目から鼻に抜けるような男だった。謀報ちようほう関係以外の仕事をさせても立派に役に立つ男だった。特技を持って諸国を歩いている流れ者が多い戦国時代だから、これほどの男ならどこへ行っても食うに困

ることはない。

（放すにはおしい）

義元は考えた。放すにはおしいが、このまま今川に止っておれというのも、なにか恰好がつかないように思われる。晴信に駿河か相模の間者と見破られた山本勘助をこのままとどめておくことは、晴信に頭を下げっぱなしということになる。

「ひまをくれというのか、もっともないいぶんだ。そうしてやりたいが、それですべてうまくいくかな」

義元はそれを口の中でつぶやくようにいった。どこかで晴信の笑い声が聞えるような気がした。乾燥した笑い声である。けらけらと聞えるその声は義元の智恵の限界を嘲笑しているようにも聞えるのである。

義元は眼を見開いた。そのとき義元の心はきまっていた。

「勘助、そちは、余の手紙を持って晴信のところへ行け。その手紙の末尾に、そちを晴信に推薦すると書いておく」

「拙者を晴信様に」

山本勘助は懷疑的な視線を義元に投げた。

「そうだ、表面上は武田家の家来になるが、武田の情報は人を介して逐次（しゆじ）こちらへ知らせてよこすのだ、わかったな。そちの妻子はいままでどおりこっちであずかっておく。今度は晴信にしてやられるようなへまをするでないぞ」

義元は勘助を庭に待たせておいて部屋に帰ると机に向って筆を取った。

あらゆる情況判断の結果は、晴信を甲斐の領主にした方がよさそうだった。信虎という厄介者をかかえこむのは少々うるさいが、甲金千両はばかにならない金である。晴信には心は許せない。父信虎を追放したあと、今度は駿河に兵を出すかもしれない。しかし、それも今直ぐということはないだろう。たとえ、晴信がそうしたとしても、そのときはその時のこと。

義元は信虎をお引き受け申すと簡単に書いたあと、過日、笛吹川の上流でお目こぼしにあずかった、当家人者用員山本勘助の儀、その日以来当方にては不用となったので、もしおさしつかえなければ、御引受け願いたいと書き添えた。

「勘助、この役目はつらいだろうがぬかりなくやってくれ。そちが武田の陣内にいる間は、余は枕を高くして眠れるぞ。おそらく、五年もすれば甲斐はこの今川の領地になるだろう。その時は充分な恩賞を与える」

山本勘助はよく光る眼で義元の顔をじっと見詰めながら、承知いたしましたと答えた。つかえている両手がふるえているのは、その任務の複雑性と重要性についての感動であった。

山本勘助は義元の晴信あての返事をふところにする、その夜のうちに雨の中を甲斐に向って出発した。

その夜、もうひとりの使者が義元から信虎のところへ送られた。使者の手紙には、晴信様の儀、いつでもお引き受け申す、その日を御通知いただければ、晴信様お迎えの人数をさし向けますと書いてあった。

諏訪の要衝^{ようしゅう}上原城は諏訪湖を望む丘の上にあった。丘というよりも山を背にした、やはり一つの小さい山のいただきに築いた城であった。城への登り口に木戸があつてそこを数人の兵士が守っていた。

天文十年五月八日、古府中から雨の中をひたばしりに駆けて来た二騎が木戸の前で止った。信虎の書状を持った使者であつた。

諏訪頼重は使者を休養させて置いて、いそいで書状の封を切った。想像したとおり、小県への出兵の慫慂^{しりようよう}であつた。

(近頃、小県の海野棟綱は上杉憲政^{のりまさ}の力を借りてしきりに動き、佐久郡をしばしば侵略している。放^{ほう}つて置けば佐久往還が危うくなる。小県の動きは直接諏訪にも関係あることであるから、共同の敵として一挙に殲滅^{せんめつ}する必要があると思う。先陣の晴信の軍は十日の朝、甲州と諏訪との国境に到着するから、そこで諏訪軍と合体して大門峠^{だもん}を越えて小県領へ攻めこみたい。その手筈で準備を願いたい)

諏訪頼重は信虎の手紙を一読すると、ふんと鼻の先でせせら笑つた。鼻梁^{びりやう}のはばがせまく高くとがった鼻だつた。その鼻によく合つたように頼重の顔は面長で口はきりりとしまつていた。好男子であつた。名族を継ぐ城主にふさわしい立派な容貌^{ようぼう}だつたが、そのせまくて高い鼻にかかる、せせら笑いは、いささか自信過剰に見えないでもなかつた。

「小県を攻めるから兵を出せとはいつたいなにごとだ。小県に兵を出したのはこっちが先だ。現

に去年もわが軍は独力で大門峠をこえて小県に攻めこみ、七月には長窪ながくぼの城を攻略している。いわば、小県は、諏訪の領土のようなものだ。それなのに、武田が共同して小県に兵を出そうということは、こっちで取ったものを横取りしようとする魂胆だと思われる。信虎がこれほど図々しい奴だとは思わなかった。図々しさを越して、これでは痴呆ちほうとしか思えない。」

諏訪頼重は千野伊豆入道をかえり見ていった。

「さようには存じます、が、武田家より彌々ねね御料人をお迎えしてからは、諏訪と武田とは親類でございますゆえ、共同出兵をおことわりになるわけにもいきますまい。信虎様には御指示のとおり出兵いたしますと返事を書いて出兵するのです。武田の先陣晴信様と国境で落ち合うのが十日となっておりますから、その日には約束どおり、そこまで兵をすすめ、晴信様に到着前に、小県の敵軍の様子がおかしいから、待ち切れずにひと足先きに進発いたしますと晴信様にことわってさっさと大門峠を越えて、長窪城へ入り、長窪城の兵と共に一挙に芦田の城へ出撃いたすのが良策と存じます。あとのことは、拙者におまかせ下さい。彌津元直を招きこんで、小県の諸城と連絡し、このたびのいくさを諏訪にとってもっとも有利なような結末にいたしたいと思ひます。」

伊豆入道はそれだけではないのにか、頼重の耳元に口を寄せて、ひそひそと策略を洩らした。

諏訪へやった使者が韮崎にらさきに出陣している信虎の元へ帰ったのとはば同じころ、今川義元の使者が信虎の陣所をおとずれて、義元の書状を渡した。

「諏訪殿も今川殿もよい賀殿むかひよ。」

信虎はそばにいた甘利虎泰にいった。あまり、どらやす虎泰は、そのことばをどう解していいやら、ただ無意味な同調を示すように、頭を何度かさげてから、信虎の機嫌がいうちに、その場を離れて、板垣信方のところへ行って、そのことを話した。

「諏訪殿も、今川殿もよい賀殿か、なるほど……」

信方はなんどかつぶやいてから、虎泰に、書状の内容をどう思うかと聞いた。

「諏訪殿は小泉出陣を承知したということでしょうが、今川殿の書状の内容は分りかねます。ひよっとすると、お館様は晴信様を……」

そういいかけて虎泰はやめた。

「そう思うか、拙者もそう思う。お館様は今川殿に晴信様追放を依頼なされた御様子が見える。それを今川殿が承知なされたとなると、ことは面倒になる。問題は今川殿が晴信様の依頼にどのような返事をよこすかということだ」

信方は、そこからそう遠くない寺に仮の陣をかまえている晴信の方へ心配そうな眼を投げた。雨は、やすみなく降りつづいていた。

若い僧が晴信の陣屋の前に立ったのはその日の夕暮れ近くだった。京都の三条家からの使いだといった。僧は晴信の前に坐った。

「おお貴僧は」

晴信は僧の顔をひと目見たとき、その男が、笛吹川の上流の川浦の郷でつかまえて放してやった間者であることを知ったが、たいした驚き方もせず、まるで旧知に会ったような顔で、遠いと

ころを御苦労であつたとねぎらつてから、周囲の者を遠ざけた。

山本勘助は今川義元の書状を晴信の前に置いた。晴信は、すぐその書状には手をかけず、しばらく書状と勘助の顔とを見くらべていた。勘助の眼は動かなかった。勘助は晴信の射るような眼ざしに応えていた。晴信の眼の力に負けたら、その時が身の破滅だと思つていた。晴信の眼はどんなぐりのような眼をしていた。瞳孔は茶褐色をしていて、長いことまばたきをしないと、なにやら魔性の眼と対決しているように薄気味悪かった。その薄気味悪さが、或る種の殺気となつて山本勘助の全身にかぶさつて来ると、勘助はそれを肩でこらえて、なにくそと力みかえした。晴信の眼が大きくひとつまばたいた。彼の眼から殺気は去り、あらゆる叡智がその眼の隅々に輝き出していた。晴信の眼が上下に動いた。勘助にとって、全身を撫でられるような気持だった。その一瞥によつて、あらゆることが晴信によつて見破られてしまったように思われた。

「名はなんという」

「山本勘助」

晴信は大きくうなずいて今川義元の書状を開いて読んだ。巻紙を解いていく音が雨の音に混つて聞えていた。

「余につかえるつもりがあるか」

突然の晴信の声が百雷が落ちるように響いた。

「はい、山本勘助生命のかぎり」

勘助は答えた。答えてしまつてから、それは本気でいったのだと思つた。今川義元の命を受け

て、正門から入りこんだ間者であるということが、瞬間だったが、彼の頭から消え去って、晴信につかえようと思つたのは、晴信の眼と、あの声に圧倒されたのだと思つた。

生命あるかぎりと思つて、晴信の前に平伏した勘助が、再び顔を上げたときには、今川義元の間者山本勘助にもどつていた。勘助の表情にかくすことのできない混乱のあとと、そのすぐあとを襲つた苦悶の翳かげがあつた。いくぶん青ざめた顔で勘助は

「いかなることでも、どうぞこの勘助にお申しつけ下さい」といつた。

「そう功をいそぐことはあるまい、しばらく下つて休むがいい。用事があれば呼びにやる」

晴信の眼は笑つていた。勘助は敗北を意識した。ひよつとすると、既に、晴信の眼力によつて今川義元の間者だということが見破られたのかも知れないと思つた。

山本勘助は晴信のもとをさがつて、彼に与えられた納屋の隅で眠つた。苦しい夢の連続が明けた朝、山本勘助は晴信に呼ばれた。

「諏訪のことを知っているか」

晴信は張りのある声でいつた。

「いささか存じております」

「それならば、いまずぐ諏訪へとんで、諏訪頼重殿の動向を調べろ。こまかい報告はいらぬ、じっくりと諏訪殿を監視して、いくさがひとときまりついたところで報しやうらせにまいれ」

その日は雨が上つていた。一刻後には、木こりの風をした山本勘助は諏訪と甲州との国境のあ

たりを歩いていた。

晴信の軍が五月十日の昼ごろ上^{つた}葛木まで来ると、そこに諏訪頼重の弟の頼高が人数五十名ほどを従えて出迎えていた。晴信と頼高とは前年の彌^{つり}々御料^{ようりん}人の諏訪家興^き入れの折会っていたから、それほどかたくりしい挨拶もなく床几に腰をおろして向い合った。

「頼重殿の軍はどこまで来ておらるるか」

晴信はすっとぼけて聞いた。

晴信の軍と諏訪の軍とは合体して大門峠を越えるという約束なのに、晴信を出迎えると見せかけて、突然大門口へ進軍していった頼重の奇怪な軍行動は逐一間者たちによって晴信のところまで報告されていた。

「晴信様をお迎えして御一緒に大門峠を越えようと思っておりましたところ、今朝ほど早く長窪城より急使が参りました。長窪城内に敵と内応する者が出たのでございます」

頼高は、気の弱そうな男だった。鼻柱の強い兄の頼重にくらべると、どことなく見おとりのする男で、それだけのことをいうにもなんとなくおどおどしていた。

「それで、頼重殿は急遽^{きゅうきょ}大門峠に向ったと云われるのですな。戦いの間のこと、いかにも臨機応変の処置と感服いたします。そういうことはよくあることだから、当方とても別に気にはいたしません」

晴信は口でそういいながら、内心では諏訪頼重のやり方をひどく警戒していた。

（あの頼重という男はどうも虫が好かない。なにかというと神氏出の名家を鼻にかける。諏訪を

取りまくいずれの領主に対しても、常に一段と高いところから見下げようとするのだ。あの男の腹の中には、成り上り者の土豪たちめという心がある。だから、妹の禰々々の輿入れに際しても、あのような不当な化粧料を要求して来たのだ」

晴信は頼高から眼をはなして附近の景色に眼をやった。山峽を切り開いた沢にそって水田が光っていた。よく肥えた黒土のにおいが新緑の風に乗ってにおって来る。

（このあたりはもともとは甲斐のものだった）

晴信は田から森、森から山へかけての八ヶ岳の広い山麓に眼をやりながら、妹の禰々々の化粧料として諏訪家へやった、甲六川と立場川との間の境方十八ヶ村を思った。晴信が床几をかまえている上蔦木もその十八ヶ村の一つであった。

「禰々は元気か」

晴信はふと妹の禰々のことを頼高に聞いた。元氣か元氣でないかは分っているが、禰々は元氣かと聞いた晴信の心の奥には、禰々に対する不憫ふひんが芽生えつつあった。協定を無視して、先に大門峠を越えた頼重は許してはおけないと思った瞬間、晴信は、寡婦かふとなった禰々を思ったのである。あの無口で、身体が弱く、器量もあまりよくない妹の禰々が、涙も見せず、頼重の墓標に向って立っている姿が見えるようだった。

「さてそれでは、われわれも頼重殿におくれを取らないように急ぐことにしよう」

晴信は進軍の下知をしてから、諏訪頼高に、このことを後から来る父信虎にも伝えるようにといった。

天文十年五月十一日晴信は大門峠を越えた。道の両側にある山梨の木が白い花を咲かせていた。晴信はそこで小休止した。いかにも甘いにおいだと思った。甘いには甘いがなにかものさびしい花のにおいだった。そこから見ると、山が白くなるほど咲いていた。晴信は山梨の花のにおいから、おここの肌を思った。そうだ、おここの肌のおいはこの山梨の花のにおいのように、甘くてそしてものさびしい。

晴信は路傍の山梨の木の肌にさわって見た。ひややかな感触だった。おここの肌のおいは消え、そのひややかさは、三条氏を思い出させた。出陣の前夜、晴信は三条氏の寢所をおとずれた。「明朝御出陣ですか」

と三条氏はいった。こんどの小峠のいくさはすぐ終る。せいぜい長くてもふたつきとはかからなだらうと晴信がいうと

「ふたつきですか、それは長うございます。わたしに取ってはちつとも長くはございませんが、おここに取っては長いふたつきだと存じますゆえ、おここのところで今宵は充分に過ぎられたらいかがでしょうか」

三条氏は大きな顔いっぱいに、嫉妬をむき出しにしていた。

「おここのところへ行こうがいくまいがひとのさしずは受けぬ」

晴信は受けごたえした。そのときはもう、三条氏と闇を共にする気はなくなっていた。

「それはそうでございましょう、武田家の跡取りとなられるお方ですから、どんな女のところへいってお泊りになろうと、それは私の知ったことではございません」

「どんな女……おこはちゃんとした側室である。素姓も知れている女ではないか」

晴信は三条氏といひ合いをしながら、三条氏に対して年齢の差を意識した。三つ年上の女はそれだけ、なにかにつけて利巧であり、このまま云い合いをしていたら、ひょっとすると、こつちが負かされるかも知れないと思った。

「おこはちゃんとした女でした。以前はそうでしたが、いまはそうではございません」

「なにっ」

晴信は声を上げた。

「あの女は病身でございます。明らかに、^{ろうがひ}労咳を患っていると思われます。あの女の白いすきとおるような顔、その顔が昼を過ぎる頃から、桜色にそまり、ときにはうつろな咳をいたします」

三条氏の言葉は刃^{やいば}となって晴信を刺した。そう云われれば、そういうふしがないでもなかった。「おここのが労咳だから近づくなどというのか、それならそれで、もっと素直になぜそう云わないのだ。おここのには長いふたつきだから、おここのところへ行ってやれと云っておいて、すぐおここのは労咳だと中傷する。とても教養がある女のことばとは信じられない」

晴信がそういうと三条氏の顔が、みにくくゆがんだ。教養がある女と知っているのに、教養がないと、一つの実証をつきつけて云われたのが彼女の心を衝いたのである。ゆがんだ顔の中で眼が憎悪^{そうお}で光って揺れた。三条氏は両手を膝のあたりで組み合わせてふるえていた。ふるえ方がおかしいからよく見ると、両手に握っていた布切れがねじ切られていた。

大門峠は峠らしからぬ峠であった。だらだら登りつめて、だらだらと下っていく峠だった。峠

をくだれば、すぐそこが長窪の城だった。

長窪の城はもともと諏訪頼重の手によって攻略された城であるから、そこに一足先に頼重が入っていても別状はなかった。問題はそれからの頼重の動きであった。

大門峠で得た情報によると、頼重は軍を芦田城に向けているとのことであった。そこまで諏訪の軍が進めば、海野平野は諏訪軍によって平定されたも同然である。甲斐からわざわざ出兵して来ることもしなかったのである。

晴信の軍は大門峠を下った。長い山道をおりて海野平野に出ると、なにか眼の前が明るくなったように感じられた。

そこには血のにおいはなかった。すべてが平和そうであった。百姓は平然とした顔で田畑で働いていた。

八方に間者を出して探って見ると、海野勢は諏訪頼重との一戦に敗れて芦田城へ引いていったということだった。

「海野棟綱がそう簡単に軍を引いたとはどうしても思えぬが、なにか計りごとでもあったのではないか」

晴信は甘利虎泰に聞いて見た。

「おそらくそうだと思いますが、いまのところ、皆目見当が付きません。ただ諏訪殿の進出があまりに急なことが気になります。たった千やそこの軍勢であのように奥深くつき進んで、敵の反撃をくらったらひとたまりもありません。わが方としては至急諏訪殿に追従するしかないと思

います」

晴信は大きくうなずいた。

晴信の軍が芦田城に近づいたときは諏訪軍と海野軍とが激しい攻防戦をくりかえしていた。山を背にした芦田城は、どこか諏訪の上原城に似ていた。なかなかの要害で、簡単には落ちそうもなかった。晴信は数騎を伴って、諏訪頼重の陣中を訪れた。頼重は松の大樹の下を本陣として、その周囲に幔幕をめぐらして床几に腰をおろしていた。

「数々のお手柄、祝着至極に存じます」

と晴信は下手に出た。外交辞令のつもりだった。

「なんのこれしきのこと。もう一日もあれば、この城を攻め落してごらんに入れますから、どうぞ、ごゆっくり御休息をいただきたい」

と、ぬけぬけといい切る頼重の顔を晴信は、黙って見詰めていた。家柄だけを自意識の中に持つ、この貴公子にやり切れないほど腹が立った。そのうちに海野軍の反撃にあって手痛い眼に合うだろうと思った。

（だいたい頼重という男は礼儀をわきまえない男だ、上座に坐って、平気な顔でいる。妹の禰々を娶った以上、たとえ年齢が上でも、頼重は晴信の義弟に当る。形式的でもいいから一応、上座をすすめるのが当り前である）

晴信は頼重の陣を出てから、芦田の城を見上げた。さっきまで、人の叫び声や、矢羽の唸る音が聞えていたが急に静かになった。城壁を歩いている足輕の姿がよく見えた。

晴信は陣に戻ると、部下たちに、必ず海野軍の反撃があるから気を許さないようにと云いつけた。

晴信の陣にはおそくまで篝火^{かがり}が燃えていた。翌朝早く関^{とく}の声を聞いて晴信は眼を覚した。敵襲かと思つたが、そうではなく、それは諏訪軍が挙げた勝鬨であつた。夜暗に乗じて、海野軍は城を捨てて裏山へ逃げ去つたのであつた。

手応えのない戦いが続いた。小県には、小さな砦^{とりで}や城がたくさんあつた。どの城も攻めてもたいては抵抗らしい抵抗も見せなかつた。自然に空気が抜けるように、城兵たちがいつの間にか姿を消しているようないくさが多かつた。そのような海野軍の退却は無意味であつた。だいたい敵の大將の海野棟綱がどこにいるかも分らないいくさというのも妙であつた。

天文十年五月十三日尾野山城、十四日に海野城、十五日には禰津城の禰津元直^{ねづ}が和を求めて来た。その翌日には矢沢城が降伏を願い出て来た。

海野棟綱が上野^{こうぜ}の上杉憲政に援助を求めるために早々と逃げ出していることも、そのころになつてやつと分つた。

小県遠征は、武田、諏訪、村上三氏の同盟軍と海野、上杉連合軍との決戦となることが予想されていたにかかわらず、海野、上杉が抵抗らしい抵抗を見せずに引いていったことは、晴信に取って納得がいけないことだったが、兎に角小県は平定され、戦争のにおいは去つた。

よく晴れた日の午後戦勝祝いが禰津氏の館で行われた。

そのもよおしの中で禰津元直の三女里美の小鼓は武将たちの眼をひいた。まだ子供子供した娘

だったが愛嬌があった。居ならば武將たちの前でそうかたくもならず、春のあけぼののような微笑をたたえながら小鼓を打つ様子は可憐でもあった。小鼓の会が終つて宴席に移ろうとしたとき諏訪頼重は退出しようとする里美にそのまま止るようにいった。

「里美をここに残すのでございますか」

元直はやや気色きしよくばんだ顔でいった。娘を酒席に出せなどと無法なことではないかという顔であった。少なくとも、自ら和を申し出て、恭順を示した禰津家に要求されるべきものとは思われなかった。

「余がここにとどまれといったら、とどまっておればいいのだ。いったい禰津家と諏訪家とはどのような関係にあるのか知っているのか」

頼重はいった。もともと禰津家は諏訪家の支流に当る家柄である。本家の頼重が云ったのになぜうんといわぬかというおしつけがましさが言外にあふれていた。

「まだ里美は子供故」

元直はこまり果てていた。

「頼重殿、里美どのをここに置かれては困りますな。実は別席においてこれから里美どのを混まえて歌会を催すことになっております」

晴信が口を出した。禰津元直が歌道に通じていると聞いていたから、その子の里美が歌を知らないことはあるまいと思いついた助け舟だった。

「ほう、晴信殿は歌をやられるのか。甲斐の武士は馬に乗ることと槍をふり廻すこと以外は知

らないと聞いておりましたが……まあいい、里美どののことにについてはいずれ出直してまいる」
 頼重は不快さを丸出しにしていった。歌の会などというのはでたらめに決っているけれど、晴信が、里美を張って出た以上、ここで強引に酒席に止めるのは考えものだった。頼重は憤然として席を立ち、つづいて晴信が席を立った。

禰津元直は二人の主要客が席を立ったので、あわててあとを追った。そんなことがあったので、酒宴が始まってもしばらくは沈んでいたが

「晴信はいくつになっても、場所がらをわきまえぬおろか者で困る」

信虎のどら声が響くようになると、あとはもうなにごともしなかつたように盃が交わされていった。

席を立った諏訪頼重のあとを追ってくどくどと詫びごとを云って引きかえして来た禰津元直は館の前でばったり晴信にあった。晴信は明るい微笑を浮かべながら

「この辺の二毛作はもうすっかり板についているようですね」

と彼の足元から展開されている麦畑をさしていった。

「おほめにあずかって有難うございます。このごろやっと二毛作も落ちついた収穫を得られるようになりました」

晴信はそういう禰津元直のおだやかな顔を見ながら、この男は決して兵馬を好む男ではないと思つた。

「諏訪家とのこと、いろいろたいへんですな」

と声をかけると、元直は、なんともなんとも頭を下げて

「なにぶんにも諏訪様は主筋故に……」

と泣くような声を出すのである。小豪族の哀れさであった。その夜晴信の陣所に山本勘助がひよっこり現われた。

「諏訪家についての調べが終わりました」

勘助がいった。

「諏訪頼重の家老千野伊豆入道はこのところ禰津元直と同道して小県の各地の豪族の間を歩き来しておりました。これを見ますと今回の海野一族が戦わずして後退したのは、諏訪と海野との間の密約にもとづくものではないかと存じます。諏訪頼重は、禰津元直を手先にして動いたものと思われます。おそらく海野の一族は今回は黙って引いていって、そのうち村上、武田、諏訪の軍が引き揚げたあとにまたおしかえして来るという計りごとのように思われます」

勘助は結論から先にいって、採り得た証拠をつぎつぎ晴信の前に出した。

「そんなことだろうと思っていた。おそらくその密約の中に芦田城一つぐらいの割愛^{かつあい}が入っているのだろう」

晴信はなんどかうなずいてから

「御苦勞ついでに駿河へすぐ飛んで貰いたい。今川義元どのに、今度のいくさのことをこまかく報告したあとで、お迎えの人数は百人ぐらいにしていたきたいと伝えて貰いたい」

「なんのお迎えの人数ですか」

「そう云えば分る」

晴信はむずかしい顔をしていった。山本勘助が出て行つたあとで晴信は、燭台のもつで、しきりに歌を作っていた。半刻ほども立ってやつと一首の歌が出来上るとそれをいいいに清書してから、大月平左衛門を呼んだ。

「今宵口この手紙を小者に持たせて瀬津元直の三女里美どののところにどけさせるから、そちは里美どのの部屋へ忍んでいて、里美どのがどのような顔をしてこれを読むかよくよく見とどけて知らせてくれ」

「里美さまのところへ」

大月平左衛門はびっくりしたような顔をした。

「なにも驚くことはない。そちの腕なら、いかなる堅固な館へでも忍び入ることができるであらう。いいか静かに見てまいるのだぞ。決しておどかさようなことをしてはならない。里美どのの大事なおひとだからな」

大事な女と云ってから晴信は心の中で笑つた。そう大事な女だ。おここの次に大事な女になるかも知れない女なのだ。晴信は里美のために作つた歌を口ずさんで見た。

もののふの心にふかくしのびいる

つづみの音のぬしそこひしき

それは決して上手とは云えない恋歌であった。口に出して歌うと、頼重の顔が浮び出て来る。頼重のあの高い鼻が、里美と晴信を見くらべながらせせら笑っているのである。

雨情無情

晴信は紙の上に絵図らしからぬ絵図を書いていた。諏訪の湖があり、湖の東に諏訪頼重と書き、諏訪湖の北に金刺^{かなさしたかた}亮存と書いてある。諏訪湖のずっと北には小笠原氏と書いてあり、諏訪湖の南には高遠頼継^{たかとうよりつぐ}と書いてある。晴信は諏訪を中心としての勢力図を書いたのである。諏訪頼重の祖父、頼満によって統一された諏訪の中にも、諏訪氏に反感を抱く金刺一族が下諏訪に現存し、小笠原氏と高遠氏が南北より諏訪を狙っていた。

晴信は、その絵図らしからぬ絵図を書き終ると、その余白に人名を書きその上に印をつけた。

×諏訪頼重

△諏訪頼高

×千野伊豆入道

△高遠頼継

○禰宜満清^{ねぎ}

○金刺堯存

×は武田にとつて無い方がいい相手、つまり殺す必要のある相手である。○は味方に加えることのできる男、寝がえりを打つ可能性のある男である。△は条件次第でどうにでもなる男と見たのである。金刺氏は代々諏訪神社下社の大祝をおほはより継ぐ家柄で、諏訪神社上社の諏訪氏と争っていたが諏訪頼満によって、強引に、上社の諏訪氏に隸属れいぞくさせられたのだから、いつでも反旗をひるがえず可能性はあった。満清は諏訪神社上社の禰宜であり、諏訪家の一族であるが、頼重に反感を持っており、既に武田に内応の意を通じて来ている。高遠頼継と、頼重の弟頼高は条件次第で、いつでも武田側に立つ男であった。高遠頼継は諏訪家の出であるから、諏訪の惣領家を取りたいという野心は充分だった。

晴信は書き終るとその紙を細く折って、その先を燭台の火にさし出した。紙の火が燭台の火よりも赤い色をして燃えていくのを見詰めながら晴信はきびしい顔でなにか考えていた。やがて火が、晴信の指のあたりまで来ると、晴信は火を吹いて消した。

部屋の外で人の声がした。侍臣が来て、大月平左衛門が来たことを告げた。

「ここへ通すがいい」

晴信はそういって、彼の指先にまだ残っていた紙片を燭台の火に投ずると、やっとわれに帰ったような顔をして平左衛門を迎えた。

「見とどけて参りました」

と平左衛門がいった。

「そうか、里美どのは余の和歌をどんな顔をして読んだか、そしてなんと批評したかいいて見るがいい」

晴信は、自分の方から平左衛門の方へ膝をすすめていった。

「真面目な顔をして読みました」

平左衛門はぼつりといった。

「当り前だ、書状は、姿勢を正して読むのが礼儀である。だが、その顔つきの中には、表情があらう。喜びとか期待とかなかそういったものが、おのずから見えるものだ。そのことを余は聞いているのだ」

晴信は平左衛門の眼を見ながらいった。

「里美様は読み終るとともに笑いを浮べました」

「笑いか、なるほど、うれしそうな笑いであつたらうな」

「いいえ、さような笑い顔とは見受けられませんでした。拙者には、むしろ、冷笑のように見受けられました」

「なに里美どのが余の歌を読んで冷笑を浮べたと申すのか」

平左衛門はそれには答えずうなずいただけだった。晴信の顔にちょっとした混乱の翳^{かげ}が走ったが、すぐさりげなくやり過して

「里美どのがなにかいったか」

「いえ、なにか云おうとしているところへ、侍女が第二の手紙を持って参りましたのでそれを開

きました。それは諏訪頼重様からの書状と見受けました」

頼重と聞いて晴信は、きつと身がまえるようになっていった。

「遠慮はいらぬ、見たとおりのことをそのままいうがいい」

平左衛門は、晴信が、このことについて、強い関心を持っており、晴信の眼の威光のもとには、嘘は許されない状態だったから、幅広い溝を一条飛び越えるつもりでいった。

「里美様は、晴信様の書状と頼重様の書状とを前に置いて声を上げて歌を読みくらべられました。

もののふの心にふかくしのびいる

つづみの音のぬしぞこひしき

いまはただかすめても取らん

山里に美しく咲ける白ゆりの花

里美様は二つの歌を二、三度読みくらべられてから歌は諏訪殿の方が数段上だと申されました。かすめても取らんというところに、男の力づよさが感ぜられると申され、晴信様の歌については、古い歌だと申されておりました」

平左衛門は言葉を切った。晴信の心の動揺が色になって出て来たからである。晴信の顔は、熱でも出たように上気していた。

「こういう歌は平安朝のころの歌で、いまのような荒々しい世の中には通用しない古い歌ではあるけれど、晴信様が一所懸命、ない智恵を絞ってお作りになったところは、なんとなくほのぼのとしたあたたか味が感ぜられる。諏訪殿の歌は、お上手だし、いまの時世にあった歌だし、女の心をゆすぶる歌だけれど、なにかその先が見えているようでこわい歌だと申されておりました」

平左衛門はそこで口を閉じた。

「余の歌を、ない智恵を絞って作った歌だと批評したところを見ると、里美どのはなかなかの才女だな」

晴信は平左衛門の報告にひどく心を打たれたようであった。

「それから、里美どのはなにをなされた」

「さらさらと一筆ずつ、返歌を書かれました。歌の内容は拝見いたすわけには参りませんでした。返書をしたためられて侍女を呼びに立ったおりを見はからって、抜け出てここに参ったのでございます」

信虎は寺の本堂を仮の陣屋としていた。そこで、朝からひっきりなしに訪れる近隣の土豪たちに会っていた。土豪たちは、それぞれ何等かの献上物を携えて来ていた。酒類、雞、米、毛皮、布などをさし出して、恭順を誓い、信虎から、領地安堵あんどの証を貰って引きさがっていった。

信虎はひどく機嫌がよかった。ほとんど戦いらしい戦いもせず、海野氏の領地が武田の手に落ちたのは、武田の武威のしからしむるところだと思っていた。この勢いでいけば信濃全土を掌握しやうあく

するものわけはないと考えていた。

昼過ぎたころになると土豪の訪問はいくらか少なくなり、やや疲労の色を見せた信虎は脇息にもたれかかりながら、戦さは済み、土豪たちの進物も山とつまれたが、なにかものたりないもののあることを感じていた。女である。禰津元直の酒宴には、美女が揃っていた。丸顔で、色が白く、きめのこまかい女が諏訪から佐久、小県にかけて多かった。

(その中で、特にすぐれたのは、禰津元直の女の里美だった)

信虎は微笑を湛えながら小鼓を打っていた里美の姿と諏訪頼重と晴信との妙なつのつき合いのあったことを思い出していた。

(なんとかして、あの里美という女が欲しい、ああいう美女を頼重や晴信などに与えるのはもったいない)

そんなことを考えている矢先に当の里美の父の禰津元直の来訪を受けた信虎は、まるで彼の心を見すかされたようにひどくあわてて、そのへんを、やたらに片づけさせたりして、妙に、とってつけたような笑顔を浮べて元直を迎えた。

「ちと困ったことができました」

と元直がいった。ほんとうに困り果てたという顔だった。

「困ったことがあったらなんなりとも云って見るがいいぞ」

信虎は腹に一物持っているから、たいがいのことなら聞いてやろうというふうな顔でいた。

「その困ったことは、実は娘のことでございます。娘の里美のことについて、内々に相談申上げ

たき儀がございました」

元直はことばの末を濁した。人払いをして欲しいという意思表示だった。

「里美のところに、晴信様と頼重様のおふた方様から、ほとんど同時に恋歌がとどけられて参りました」

なにつ、と信虎は思わず声を出したほどその報告は信虎にとって意外であった。信虎の頭にいままで描きつつあった里美を現に頼重と晴信が横からとび出して奪い取ろうとしているのである。「里美は、それとなく、お心に添いがたきむねの返歌を一首ずつ、したためましたのですが、本日、突然、諏訪様のお使いがお見えなされて、歌会を催したいから、諏訪様の陣所に参れとおおせ、いかが、お答え申そうかと迷っておりましたところが、今度は晴信様が……」

それも歌の会か、と信虎は身体をのり出して聞いた。

「晴信様のお迎えは歌会ではございません。率直に里美を欲しいという御要望でございました」
「あの晴信めが」

信虎は自分の顔が赤くなつていくのが眼に見えるようであった。不埒な奴だと思った。躑躅が崎の館では、愛妾のおこと日が高くなるまで寝ていたり、馬を乗りだすと鉄砲玉のように遠方へ行ってしまったたり、ろくなことをしていない晴信が、女にだけは眼がないのが信虎には腹立たしいことだった。しかも、晴信の眼をつけた女が里美だということが、信虎のいかりに油をそそいだ。

「ろくないくさもできない臆病者の癖にして」

信虎は口の中でつぶやいてから

「それで、どうしたいというのか」

叱りつけるような口調で聞いた。

「諏訪様と晴信様のおふた方から里美を欲しいと仰せられれば、拙者としては里美に自害をすめるより方法はございません。それは親としてまことに不憫至極なことでもありますので、御館様になにぶんのおとりなしをお願いにまいりました」

元直は低く頭をさげていった。

「それは困ったことになったな。それではその里美を余が預かるということにいたそうか」

預かると信虎がいったとき元直の眼には更に困惑の色がよぎった。預かるというのは、人質のことであつた。降伏したからには人質を取られるのはやむを得ないことだとしても、こういう場合に、それではおれが預かると信虎がいい放ったところに問題があるような気がした。信虎の悪評は小県まで知れわたっていた。特に信虎が、たいした理由がないのにやたらに人を殺す趣味を持っていて、侍女や側女で、信虎になぶり殺しにあつた者は数知れないなどという噂を聞いている元直に取っては、預かるということばだけで、里美を信虎にわたすのは、おそろしいような気がした。正式な人質としての待遇を受けるなら、ある程度の我慢もできようが、単なるなぐさみ者とされては娘が可哀そうだった。

「どうした元直、余が里美を預かるのが不服だというのか」

そう云われると、元直はもはや返すことばもなかった。

彌津元直が信虎のもとを引きさがって間もなく、板垣信方が信虎のところへ来ていった。

「お館様、上野の上杉憲政の動きがおかしいという情報が入りました。それに村上の軍の動きにも不審な点があります。ここ数日中に、村上の軍はことごとく小県を立去り、依田のあたりに集結いたしました」

信方の報告に信虎は、やはり、歴戦の武将らしく、すぐ絵図を開かせ、眼を当てた。

「それをそちはどう見るか」

信虎の顔にはおおいがたい動揺がうかんでいた。しいて落ちつきを見せようとするために、信方の意見から先に聞くあたりも、いつもの信虎とは違っていた。これまでの戦いの経路からなにか裏にかくされたもののあることを察知したらしかった。

「戦わずして逃げた海野棟綱もおかしいし、一里先を進軍して行った諏訪頼重の態度もおかしいと存じます。特にへんなのは村上勢の行動です。村上軍は、海野討伐について、しきりに催促して置きながら、積極的態度は取ろうとせず、いたずらに大軍を集めて来たにすぎません。これを案ずると……」

わかった、と信虎はいった。

「上杉、村上が両側から攻めて来たところで諏訪が敵に内応し、退路を断つという策戦か」
信虎はつめたくいった。

「御明察のとおりと存じます。こうなれば一刻も早く、この地を引上げるのが良策かと考えます」

信方の進言に對して

「逃げるのか」

と信虎は不満の色を見せたが

「ここは敵中でございます」

といった信方のことばに信虎もしぶしぶと承知せざるを得なかった。

「わかった。それでは明朝、陣を払って、甲斐へ帰ることにしよう。そのように布令^{ふれい}て廻るがいい、それから禰津元直にも、その旨伝えて用意するように申しつけておけ」

「元直に、用意せよと申しますと……」

信方はへんな顔をした。

「元直の娘を預かつて帰るのだ」

信方はしばらく信虎の顔を見ていたが、やや氣色ばんだ顔で

「それは今度の場合、少々物騒な預かり物となりましょう。里美どのに心を寄せている諏訪殿も、そのなされ方を快く思われないだろうし、晴信様も同じでしょう。この際、すみやかに引上げるためには、そういう厄介者は置いていかれて、改めて迎えをよこした方がよいと存じます。……それに、里美どのについてはもう一つの見方がございます」

信方は一段と声を落して

「里美どのを中にして、諏訪様と晴信様、つまり甲・諏両軍を不和にしておいて、そこへ、村上・上杉、海野の連合軍が攻めよせてくるということも考えられます。いずれにしても、ここに長

居は禁物です」

板垣信方は外に眼をやった。糠雨ぬかが降っていた。

「梅雨はもうとくに過ぎたころなのに、まだ降っております。この長雨も、遠征軍に取っては不利でございます」

そういつて、板垣信方は信虎の前を辞した。

信虎は小県撤退に当って、先陣を晴信の軍、その次に諏訪頼重の軍をあて、信虎の本隊がそのあとに続いた。小県撤退に当って、甲軍は佐久往還を通して引き上げるつもりであったが、もしそうした場合、大門峠を越えて諏訪へ帰る頼重の軍が、先廻りして、佐久往還を封鎖するという策戦を取るかも知れないと思ったからである。諏訪軍を猜疑さいぎしている甲軍は、晴信の先陣と信虎の本陣の間に諏訪軍をはさむようにして引揚げを開始したのである。時に天文十年六月十三日であつた。

雨は蕭条しょうじょうと降っていた。

長窪まで送って来た瀬津元直ほか小県の豪士たちは信虎に向って、近いうち必ず古府中へ御機嫌伺いに参上いたしますといった。

「いや、それには及ばぬ。こちらから近いうち、槍と刀を持ってお見舞い申そう。海野、上杉、村上のたぐいが来たらそう申し伝えるがいい」

信虎は強がりをいった。新しい領土は血を流して取るのが常道であるのに、こんどのように大

軍を率いて出征し、戦さらしい戦さをせず、退却するということは異例であつた。そこに居並んでいる、小県の上豪たちの首を提^{ひさ}げて帰りたい気持をおさえながら、なんとなく、悠然と、さも甲信に並ぶことなき勇将のような顔をして別れの挨拶を受けている自分がばかしくなつた。

(どうも、おれはいつものおれと違う)

信虎は馬に乗ってから、そんなことを考えていた。いつもの信虎なら、小県の諸城、諸砦^{しよきい}の城主の首を五つや六つは斬つたはずだ。恭順を示して来ようが、降伏して来ようが、武田に刃向つたという理由で、必ず誰かを犠牲にしたはずだった。今度はそれをしなかつた。なんとなく、うまく丸めこまれて、うまいものを食べ、うまい酒を飲み、土豪たちの献物を受けて、悦に入っているうちに、退陣ということになったのだ。

(禰津の娘ひとりぐらい連れて来てもよかった)

信虎はそれを考えると腹が立つた。せめて里美でも連れて来たら、この戦いの意味は、少なくとも信虎の心の中では立つのだ。それにふさわしい美女だった。その里美の人質についても、信方の進言を受け入れねばならなかつた自分——ふと信虎は、板垣信方、甘利虎泰、荻原昌勝などの諸将が、今度の出征においては、なにかいつもと違っているように思えてならなかつた。

(信方のあのようなものいい方も腑^ふに落ちない)

たかが人質ひとりのことで、あのように激しい口調で諫言^{かんげん}した信方は、主君信虎のために身を以て諫言したつもりなのであろうか。いままで、女のことで信虎に諫言して斬られた将、士、卒は数多い。女のことで信虎に諫言してはならないということに宿老たちの間では申し合わされて

いると、信虎は聞いていた。

(その申し合わせを犯して、信方は、里美のことを諫言した)

命をおしまない、甲斐武士の誉か、それとも——そこまで考えて、信虎ははっとした。信方の諫言が諫言でなくて、反抗であったとしたらどういふことになるのだ、諸将が、いままでのように信虎の眼を恐れなくなったとすれば、その原因はどこにあるのだ。

信虎は天文五年の晴信の初陣のときのことを思い出した。寒い、暮れもおしせまったころ、甲軍は佐久の海之口城を攻めあぐみ、あとに晴信の軍を残して結局囲みを解いて引き揚げたことがあった。その時、信虎が^{にらみ}まで引き揚げて来たとき、晴信が奇策を用いて、敵将平賀源心を討ち取ったという報告がもたらされた。それを聞いて、諸将が口をそろえて、晴信の功名手柄をほめたたえ、武田家のあとつぎとして御立派であるといった。それを口にした諸将のことごとくは晴信が武田家の跡を継ぐことを期待している顔だった。

信虎は嫌な気がした。まさか諸将の心が信虎を去って晴信に行ってしまったとは考えられないが、そうなっても不自然でない年頃に晴信がなっていることと、女と馬の好きな晴信が意外に家臣の間に評判がいいことも気になることだった。信虎は、愛妾の今井氏が^{ねや}閨の中でふと口にしたひとことを思い出した。

「晴信様の馬を走らせる凜凜しいお姿は、なにか女の心をそそるものがございます」

女の心をそそると今井氏がいったことがなにに通ずるか、女道楽をきわめた信虎はよく分っていた。その夜の閨房で、信虎ははげしく今井氏を攻め立てた。攻めても攻めても今井氏はなかな

か落ちようとせず、闇夜に眼だけを光らせていた。信虎は、晴信の若さを嫉妬し、そして、自身自身の肥満した肉体とたるんだ皮膚を思い見たのである。

愛妾の今井氏までが晴信を讃めるのだから、他の家臣の眼に晴信が、悪く映る筈はない。

(ばかな、女と馬のことしか分らないような、おろか者の臆病者が)

信虎は、いつも晴信に対してつかうことばを頭に思いうかべながら、しかし、家中の気持が、そうになっていくとすればできるだけ早く、晴信を駿河に追放して、あとは晴信の弟の信繁にゆずるべきだと思った。

(今川殿からはそろそろ連絡があってもよきそうなものだ)

信虎は雨に煙る山々を見上げた。

大門峠の山梨の花は散っていた。来たときよりは更に濃くなった緑の中に雨が降りつづいていた。

晴信の軍はそこで小休止した。雨の中を峠をのぼって来る旅人風の男が、晴信の手の者にとがめられたがすぐ話がついたらしく、二、三人の武士にまもられて晴信のところへ来た。

晴信は山梨の木の下で山本勘助を迎えた。雨の音と、ときおり馬の嘶いみなきが聞えるほどの静けさだった。

「今川どのはお迎えの儀について、なんと申された」

晴信はそのことが気がかりだった。

「お迎えの儀承知いたしました。家臣の高間五郎兵衛に兵百人をつけてお迎えにさしむけます。このようなおことばでございました」

「それだけか」

それだけでございますと山本勘助は頭を下げた。晴信の眼は、その頭をさげたままの勘助にそそがれていた。山本勘助という男は平凡な顔をした男だ。勘助がいないとき、彼の顔を思い出そうとしても、すぐには思い出せない、特徴のない顔だった。眼も特に大きいとか細いというのではない。鼻も高からず低からず、口にも耳にも、別にこれといって特徴がない。云わば平凡すぎる場所に特徴があるという男だった。

間者として上の部に属する顔だった。相手に印象を残すような顔では間者はつとまらない、こういう顔の男こそ、間者として一流の人物になれるのかも知れないと、晴信は、思っていた。平凡な顔であるが、山本勘助の眼つきはさすがに鋭かった。そして、相手の心を読むために、しっかりと相手の眼から眼をそらさないと、山本勘助の特徴の一つであった。晴信は山本勘助の頭を上げるのを待った。それだけかと聞かれて、それだけですとこたえて急に頭をさげたのを晴信は不審に思ったからであった。

（勘助はなにかかくしているな）

それは晴信の直感であった。勘助は顔を上げた。上げればそこに晴信の眼があることを知っていたが、いつまでも頭を下げっぱなしというわけにはいかなかった。

「御苦労だったな、ゆっくり休むがいい」

晴信の顔に微笑が浮んでいるのを見て、山本勘助は、おそらく晴信は勘助の心の中まで読み取ってしまったに違いないと思った。

山本勘助は苦しい気持ちでそこを立った。彼を動かす源泉は今川義元であり、表面上の主君は晴信である。武田に仕えていながら、武田の情報而今川に通報するのが山本勘助の任務ではあるが、晴信の前で、知っていることをかくしているのはつらかった。

（晴信はなかなかの男だな）

今川義元は、山本勘助からの情報を聞き終ると、唸^{うな}るようにいった。諏訪頼重の策略をいち早く見て取ってしまった、当面の敵として海野氏よりも、諏訪氏攻略を計画しているらしい晴信の胸中を察すると、今川義元は不安をおぼえた。

（武田の家臣に人望があり、智勇とも信虎よりすぐれているとすれば、やがては、駿河をおびやかすものは晴信ではなからうか）

義元はそう思った。先々そうなるならば、むしろ、晴信を駿河に虜^{とりこ}にして置き、晴信の弟の信繁に武田を継がせた方が駿河にとっては安心である。信虎をこのままにして置くのは問題だが、いずれ近いうちに信虎は自滅するだろう。今川義元は、さらにくわしく、晴信について聞いてから

（よし、晴信のところへ行って迎えを百人さし向けるというがいい）

といった。山本勘助は、その義元の顔つきで、義元がなにをたくらんでいるかが、ほぼ読めたのである。

晴信は家来の主だった者を呼び集めていった。

「これから峠をおりて、諏訪の領地へ入り、更に甲州の領内へ入る、道中、けっして油断をしてはならぬ。この土地の者でないものは、誰でもかまわぬから、ひとつらえて余の前へつれてまいれ」

そして晴信は物見の兵を増し、遠くまで放って、進路について警戒を嚴重にした。

大門峠をおりて、諏訪の領地に踏みこんで間もなく、民家の陰にひそんでいたという、百姓ふうの男がとらえられて来た。諏訪の者だということで、その村の者と話をさせると、諏訪弁ではなく、駿河のなまりがあった。晴信の兵たちが寄ってたかつて、調べようとすると、男は信虎様あての書状を持っているといった。男は晴信の前に連れて来られた。

その書状は今川義元から信虎あてのものであった。韮崎のあたりにて、晴信様をお待ち申すゆえ、手違いのないように願いたい。武田の兵十人にて、晴信様をかこむようにして、当方の使者、高間五郎兵衛の陣中へお引きわたし願いたい、駿河までの道中は、当方にて責任を持つから、御安心なされたい。

尚、晴信様御謀叛ほんの心あるゆえ、夢々油断されるなど書き添えてあった。

晴信は書状を読み終ると、大きな声で、塩津与兵衛を呼んだ。

板垣信方は塩津与兵衛の馬が、水けむりをあげて駆けて来て、信方のそばに止ったとき、これはなにかたいへんなことが起るなと思った。信方は塩津与兵衛の顔を見てから、うしろの方をふりかえった。信虎の本陣はずっとうしろだった。

塩津与兵衛は馬からおりずに馬首を信方の馬と並べてから板垣信方に、今川義元から信虎に当たつた書状をさし出した。

板垣信方はさほど驚いた顔を見せずに書状を読み終ると、晴信からの伝言を期待するような眼を塩津与兵衛に向けた。

「やむを得ないことになった。いささか、手荒なことになるかもしれぬ、高間五郎兵衛が承知しなければ斬るつもりだと申されました」

板垣信方は大きくうなずいて

「委細承知つかまつりました。御心配なされませぬよう」

と答えた。

諏訪頼重は矢崎あたりで、武田の一行を見送つた。行軍の中ほどにいた諏訪軍が去ると、甲軍は、隊伍を建て直して甲斐の国へ向つていった。

「ほんとうは、このあたりで頼重殿を痛い目に合わせてやりたいところだが」

晴信は遠く去っていく、諏訪大明神の旗を眺めながらつぶやいた。

「どうも武田の動きがなんとおかしくはないか」

諏訪へ足に向けてから、すぐ頼重が、千野伊豆入道にいった。

「拙者もさように考えております。行軍中に、先隊と本隊の間を何度も早馬が走りました。もしの場合の心懸けはいたしておりましたが、どうやら、もしものことは、わが軍とは関係のないことのように思われます。物見の報告によりますと、諏訪へ入って間もなく、乱破らっぱが捕えられ

たそうですが、そのときから、武田の内部が騒々しくなったようでございます」

千野入道は頼軍の傍に馬をよせて

「一応軍はこの辺に止めて、様子を見るのがよいかと存じます」

千野入道は甲軍の様子を探るために物見を放って後を追わせた。

晴信は高間五郎兵衛の率いる兵が韭崎まで来ていることを聞くと、手勢ごとくを率いて、これに向って、高間五郎兵衛とその兵を包囲した。

晴信の前に引き出された高間五郎兵衛はいささか勝手が違ったなという顔で、晴信の顔を見上げながら

「お迎えに参りました」

と今川義元の言葉をつたえた。

「信虎殿をお迎えに参りましたとなぜ云わないのだ。もう一度云い直すがいい」

晴信は刀に手を掛けていった。だが高間五郎兵衛はそうは云わなかった。彼は晴信の顔を睨みつけて

「晴信様をお迎えに参りました」

とはっきりいった。

「立派だぞ、高間五郎兵衛。だが、余は駿河に迎えられていくわけにはいかぬ」

晴信は高間五郎兵衛に切腹を命じた。

「なにやら前方に悶着が起ったようでございます」

板垣信方が信虎にいった。

「なにやらとはなんだ、見て来てからはっきり申すがいい」

信虎は不安な顔でいった。板垣信方は近くの小高い丘の上にかけて上っていったが、すぐ帰って来て

「晴信様の軍がこぜり合いを起したようでございます。とにかく、あの丘へ」

信方は信虎を丘の上へ誘った。そう遠くないところで、晴信の軍が、少数の軍を包囲していた。おおあの軍は今川殿の軍ではないか、今川殿の軍が晴信を迎えにやって来たのだ。早く、味方の軍勢を引きあげさせろ。そして晴信を、今川殿の使者にわたすのだ」

信虎は板垣信方に絶叫するように命令した。

「心得ました」

信方は信虎と部下十名ほどをそこに残して丘を下った。信方が丘を下ろうとすると丘の周囲を武田の足軽が囲み出した。本陣が丘の上と決ったから、その本陣を警護する兵たちだと信虎は思っていたが、その足軽たちの槍が丘の上に向けられたとき、信虎は足がふるえるほど驚いた。

「なにを血迷ったのだ」

信虎は槍を小脇にかかえこんで、丘をかけおりていった。するとどうだろう。足軽共の槍は一斉にそっちの方へ向って並べ立てられたのである。槍襖やりぶすまは二重、三重になっていた。とても信虎ひとりで突き破られるものではなかった。

「血迷うな、余は武田信虎ぞ」

叫んでも、兵たちの槍は動かなかった。槍だけでなく、信虎に向けられている兵たちの眼に殺気さえ感じられるのである。

「板垣信方はどこへ行った、甘利虎泰はどこにいる……」

信虎は武田累代（ろいだい）の諸將たちの名を叫んだがひとりとして答える者はなかった。

「お館様、しばらくの堪忍（かんにん）を……」

ふりかえると側近の古川小平太が立っていた。

「どうしろというのだ」

信虎はかみつくようにいった。

「しばらく駿河へ御避難するのが上策かと存じます。われわれ十人が、今川様のお迎え衆と共々にお供をつかまつります」

古川小平太が大地に手をつかえていった。

「小平太、お前はこのことを知っておったのか」

信虎は最後の望みをかけて、古川小平太の答えを求めた。

「知っておりました。こうする以外に武田の安泰を計る道はございませんでした」

（側近の古川小平太までが）

信虎の身体から力が一度に抜けていった。血と汗で平定し統一した甲斐の土地で、その甲斐の者のすべてに見捨てられた自分の姿があまりにも、みじめであった。信虎は、もう一度丘の上に

馬を進めた。丘の下の様相は一変していた。丘を包囲している人垣の一部が開いており、そこは丘の下にいる今川の迎え衆の輪の導入口となっていた。武田の軍勢は、いつのまにか軍陣を整え、それぞれの陣に、旗幟きしが立てられ、幾つか重なり合った奥の、信虎のいる丘とはほぼ対照的な高地に、武田菱の旗が一段あざやかにひるがえっていた。そこが晴信の本陣であることは間違いなかった。

信虎は武田の陣を、望して、見事だと思った。知らない間に、この謀略を用意した晴信も、見事に武田の元首信虎を裏切った宿将たちの一糸乱れぬ協力も見事だと思った。信虎の顔に一陣の風雨が当たった。雨は、信虎の頬を伝わり、涙のようににはらはらと地に落ちた。

信虎の馬首が丘の下に向った。太鼓が鳴った。出陣の太鼓であった。父信虎を送るために晴信が打たせた出陣の太鼓の音も、信虎には皮肉以外のなものにも聞えなかった。信虎は、おそらく二度と、この武田の軍鼓は聞くことはあるまいと思った。

信虎を守る十人の武田の家臣と、その周囲を守る百人の今川勢の兵たちと、その前後をそれぞれ、二百人ずつの武田の軍が警護しながら、信虎の軍は静かに移動していった。

晴信は父信虎の姿が見えなくなるまで、高地に立って見送っていた。戦国に生れた者の悲哀がしみじみと身にしみた。父を追わねば、自分が殺されるから、そうするしかなかったのだ。だからといって実父を追放したという罪の意識は容易に消えるものではなかった。

板垣信方がそばに来て、晴信になにか云おうとした。この際いかなる忠言も、なぐさめの言葉も通用しないのだと、睨みつけようとすると、板垣信方は意外のことを云ったのである。

「物見の報告によりますと、諏訪殿の軍は、諏訪の上原城へ引きかえすと見せかけて急遽兵を甲州街道に向け直して、攻めて来る模様でございます。この際は一刻も早く古府中へ帰ることが肝要にございます」

晴信はそういう板垣信方を冷酷な戦争主義者だとは思いたくなかったが、父信虎を追放した今、すぐ次の戦争のことを考えねばならない世の中に生れたことを、決して幸福だとは思っていなかった。

晴信は眼頭めがしらを曇らせている露をぬぐった。

此年六月十四日武田大夫様（晴信）親ノ信虎ヲ駿河へ押シ越シ申候。余リニ悪行ヲ成サレ候間、カヨウニメサレ候。サルホドニ地下、侍、出家、男女共ニ喜ビ満足候コト限リナシ。（妙法寺記）

手扇

晴信は古府中へ向って馬を走らせていた。

心の痛みを負った凱旋がいせんだった。たとえ、父信虎を追放する理由があったにしても、他人は晴信を、親不孝と見るであろう。晴信は生涯そのことで責められるだろう自分自身のことを考えると、

決してはれやかな気持にはなれなかった。

晴信の傍には板垣信方がつきそっていた。ひとことも云わなかったが、信方も晴信の胸中をよく知っていた。躑躅が崎の見えるところまで来て、信方が始めて口を開いた。

「諏訪殿に対してはどのような策を取りましょうか」

信方は甲斐の新領主となった晴信に対してはじめての伺いを立てた。

「信方がいいと思うようにするがいい」

晴信は憮然としていった。

「諏訪殿が小笠原長時殿を誘って攻めよせて参ったならばいかがいたしましょうか」

しかし晴信は返事をしなかった。しばらく、戦争に関係なく、静かにしていたという気持だった。晴信は、信方をさけるように馬を進めた。このごろ、眼に見えてにぎやかになった古府中の街路で住民たちが、さっそうと疾走していく、晴信の姿を見送っていた。走ると、雨が顔をうつ、えりもとから、身体の奥深くまでつめたい水がしみとおっていく。それがいまの晴信にはむしろころよかった。街道を真直ぐ走って、馬首を躑躅が崎の方向に立て直したとき晴信は、雨に煙る躑躅が崎にいつもと違うものを感じた。躑躅が崎は、いつになく生氣を失い、なにか物憂く沈んで見えた。

晴信は愛馬に鞭を当てた。躑躅が崎に近よれば近よるほど、晴信の新館を取りまくあたりが気になって来る。暗さよりもむなしさに通ずるなにかが、彼の館を中心として瀾漫しつつあった。

父信虎の追放とは関係のないことだった。父信虎を追放した罪の意識がさせる暗さではなく、晴

信自身に襲^おしよせて来る、ぬぐうことのできないほど、暗い不安が晴信の氣をせかせていたのである。

（なにか不幸なことが館に起きた）

晴信はそうはつきり感じた。どうにもこうにも取りかえしのできないほど不幸なことが突如として、彼の館の内部に起ったのである。それが、妖氣^{ようき}となつて躑躅^{ししつ}が崎の丘の上にただよっているのではないだろうか。

晴信は正室の三条氏が生んだ次男の信親のことを思った。信親は生れながらにして、光明にめぐまれなかった。病弱で、乳を求めて泣く声もかばそかった。晴信は、その子のために、強い名をつけてやろうと思つてゐた。名前を変えてやったら、丈夫になるという保証はないけれど、そうでもしてやらねば、晴信の父としての氣がおさまらなかつた。彼はこのふびんな子のために海野二郎という名を用意して凱旋して来たのである。小県出兵で得た海野平野の名を次男信親に与えようと考えたのである。

（もしや信親が……）

まさかと晴信は否定した。それは弱い子を持つ親の杞憂^{きゆう}というものだとつよく否定すると、今度は更に大きな不安が内部から持上つて来るのである。なにかあるのだ、なにかとんでもない不幸が彼を待っているのだ。館に近づけば近づくほど、その不安は急激に膨脹^{ぼうちよう}していった。

「おここ、おここは無事だろうか」

突然、晴信は馬上で叫んだ。不幸なことはおここの身边に起ったのではなからうか。小県遠征

にでかける前夜に、三条氏がおここのが労咳（肺結核）だといったことを晴信は思い出したのである。おここのは労咳だから、おここに近づくなどはいわずに、おここのが労咳だということを知らないのかと、意地悪く当って来た三条氏の眼の中に隠^かされていた殺気のようなものを、晴信は思い出していたのである。

（もしか、おここに、なにかあったならば）

あったならばではなく、あったとしたか、考えられないように晴信の気持はみだれかかっていた。胸のうちが早鐘のように鳴った。晴信は、このような気持をいままで一度も味わったことはなかった。晴信はおここのを恋うた。

晴信は新館の前で馬からおりと、迎えに出た侍に

「おここのはいるか」

と聞いた。新領主となって帰還した晴信が最初にいったことばがそれであった。侍は答えずに奥に眼をやった。その眼は奥におここのがいるから安心しろという目付ではなく、奥になにかあったことを示す、無言の回答だった。

晴信は館に上ると、そこでもおここのの名を何度か呼んだが答えはなかった。いつもならおここのは誰よりも先に迎えに出て来るのに、おここのの姿は見えず、おここにつかえていた老女が、おここの部屋の廊下にふるえながら這^はいつくばっていた。

「おここのはどこへ行った」

老女はいっそうはげしく身をふるわせたが返事はなかった。晴信はその足で三条氏の部屋へ入

つていった。

青い顔をして入って来た晴信を三条氏はいささかの動揺もなく迎えて

「甲斐の国の新領主になられた晴信様とも思われぬ、かるがるしいおふるまい、つつしまれては
いかがかと存じます」

と味も素気も無いいい方をした。

「余計なことはいうな、おこをどこへやったと聞いているのだ」

「おこは、労咳ゆえ、笛吹川の上流の湯の郷へ湯治にやりました」

「いつやったのだ。さようなことを余にだまって、なぜ勝手にしたのだ」

晴信の声はふるえていた。晴信が興奮すればするほど、三条氏は落ちつき払って

「わたしは武田家の御世継晴信殿の正室でございます。奥のことはどのようなことでも、正室の
わたしが整える義務があり、そうしなければならぬのだと、わたしの父、左大臣三条公頼に教
えられております。わたしは父の教えのとおりにやったのでございます。もしわたしのやった
京都風の作法が、この甲斐の国では通用しないことならば、いたし方はございません、いかなる
お叱りでもお受けいたします」

三条氏は、自信ありげにいった。左大臣三条公頼の娘であることをなにかにつけて鼻にかけた
がる、三条氏の平べったくて、大きな傲慢な顔を眺めながら、晴信は、よりにもよって、こんな
いやな女をつれて来た父信虎のみえすいた京都への野心を憎み、この女を正室として立てていか
ねばならない未来への憂鬱を噛みこころしながら、外へ出ていった。

晴信はすぐ馬に乗った。

「晴信様、どちらへいかれますか」

板垣信方が馬の轡くわを押えていった。

「笛吹川の上流川浦の湯の郷へ、おここを見舞いにいつて来る」

「おこ様のお見舞いに？」

信方は不審な顔をしたが、すぐ

「おこ様のお見舞いも結構ですが、その前にまず御旗、楯たて無（武田家累代の重宝）に對して、武田家を相続なされることを報告された上、家来どもにおことばを賜りたく存じております」

板垣信方は、是が非でも、晴信を馬からひきおろして、いままで信虎が坐っていた、甲斐の領主の座へつけようとした。

「信方、それこそ形式というものだ。形式は形式としてやればいい、それほどいそぐことはあるまい。今の晴信には、形式を踏むことよりもおここのことの方が心配なのだ」

晴信は丘をかけおりと、馬首を東に立て直して、笛吹川の上流に向った。二騎がそのあとを追ひ、更に、十騎あまりがそれに追従した。

板垣信方はその晴信の行方を期待といささかの不安を混えた眼で見送りながら

「お館様は若い、そしてなにごとにも積極的だ」

信方は新領主を蔭で讃めてから、留守役の家来たちを集めてその後の国内の様子や国外の情報を聞き、甲諏国境から、つぎつぎと帰ってくる間者からは諏訪軍の動きを聴取した。

諏訪頼重は上原城へ引きあげると見せかけて、途中から、武田軍のあとを追うようにして、甲諏国境まで兵を進めて来たが、そこで、兵を休ませて形勢を觀望しているふうだった。

武田信虎が晴信によって駿河へ追放されたことは、諏訪軍の放った間者によって、いち早く察知されていた。諏訪頼重は、甲斐の政変を重視した。彼は即刻、この新しい情報を隣国の小笠原長時に送り、甲斐のごたごたに乗じて一挙に甲斐を占領することもそれほどむずかしいことではないだろうとつけ加えた。

笛吹川は梅雨のための増水で、一段とはげしい音を立てて流れていた。晴信主従の騎馬のひずめの音も川の音に消されていた。乾^{かわ}けばほこり、雨が降れば水たまりとなる秩父往還^{ちちかん}も、長雨のためか、通行人はほとんどなかった。晴信主従の乗馬があげる飛沫^{ひまつ}が、道の両側に咲いている紫陽花^{じやうが}の葉にかかると、紫陽花はかすかに身をふるわせた。街道が笛吹川から遠のくと藪鶯^{やぶよういす}の声がした。その声も長雨に気おちしたように弱々しく、二、三度鳴くと、すぐ枝をかえて、どこかへ飛び去っていった。

晴信は、愛馬に休養を与えなかった。愛馬の歩調がおそくなると、遠慮なく鞭を立てた。つね日ごろ馬をかわいがる晴信とは違っていた。晴信のあとに、石和甚三郎と塩津与兵衛がつき添っていた。いかなることがあっても主君晴信のもとをはなれてはならないと信方から云われていたが、今度ばかりは、晴信との間に差ができていくのを齒がゆく思っていた。

晴信と家来たちのグループとの差が一丁になりやがて二丁に開いていった。

晴信の頭に馬はなかった。そんなつかい方をしたら、馬を乗りつぶすことになるなどということとは考えていなかった。ただ一刻も早く湯の郷へついておここの顔を見たいということだけが彼を占領していた。おここのことが断片的に晴信の頭の中を通りすぎていった。おここの笑い顔、おここの怒ったように見せる顔、恥らしいの顔、欲求するときの顔、それを満足したあとの放心したような顔が突然ひきしまつて

「晴信様、わたしはそう長くは生きられません」

といったことが思い出される。

「なぜだか分りませんが、長く生きられないことは確かです。それは私にしか分らないことです、なにかの折ふとそんなふうに思うのです」

いつも笑ったり、ふざけたり、甘えたりばかりしているおここが、そんなことをいうと、晴信には別人のように見えた。

「なにかの折というのは——」

晴信は不安な眼をしてたずねた。

「晴信様の御寵愛ごちようあいをお受けしたあとなどによくそういうことがございます。きっと、おここは、晴信様に捨てられたら生きていけないから、そんなことを考えるのかも知れません。だから晴信様はいつまでもおここを……」

その云い廻しかたは、おここが、よく聞ねで使う手であったが、真剣な顔でそんなことをいうおここの顔を見て、晴信は、女というものは、男にはわからない色々なことを考えるものだと思っ

た。そのときおこが云った長く生きられないという予言が、もし当たっていたらどうしようと晴信は思った。

「人間がそう簡単に死ぬことはない」

晴信は雨に向っていった。

（だがもし正室の三条氏が……）

晴信の持っているたづながゆるんだ。ばかなど、彼は自分のあさましい想像の火を消した。いくら三条氏が正室の地位に居ようと、側室を殺す権利はない。そんなことをすれば、自分自身の墓穴を掘るようになることぐらい知らない筈はない。

（それなら、なぜ、おこを湯の郷へやった）

嫌いな女を遠ざけるためだけなのか、遠ざけたところで、晴信のことだから、湯の郷へおこを求めにいくだろう。それなら、かくしたことはない。

悪い予想はかぎりなく悪い方へ発展していき、やがて、おこがもう二度と会えないかたちになっていたならばと考えると、晴信の心はいよいよ苦しくなり、いよいよはげしく馬に鞭打った。おここについての最悪の想像をこえと、突然、山百合の花を腕いっぱい抱いたおここの姿が眼の前に浮び上って来る。おここは山百合の花を投げすてて晴信のところへかけよって、よく来て下さいましたという。すぐ湯に入るなら、その用意をいたさせましょう。おここが、晴信様の戦陣の垢^{あか}おとししてしんぜましょうという。しかしそのような想像は、それ以上には発展しなかった。想像の途中で、とぎれ、おここの桜色の肌はみるみるうちに青白く変り、豊かな表情が凍^{こら}

り、そこに死骸しかいとなったおここの顔が残るのである。

「おここ、おここ生きていてくれ」

晴信は、鞭をふりながら絶叫した。

湯の郷はひっそりとしていた。湯の煙が真直ぐ立上っているのは、風がないからであつた。雨は小ぶりになっていた。

「誰かおるか」

晴信は馬からおりると玄関に向つて怒鳴つた。宿の者が走り出て来て、そこに晴信の姿をみとめると、すぐ奥へ走りこんでいった。

湯の郷を預かつている山県孫左衛門が走り出て来て両手をつかえた。孫左衛門は、以前に、晴信が倉科の庄の者たちをつれてここに来たとき晴信と会っていた。

「おここはいかがいたしたか」

晴信は真正面から聞いた。

「おここ様といわれますと」

「余の館におつたおここが、この湯の郷に湯治に来ている筈だ」

孫左衛門ははつとしたような顔をした。

「もしかしたらあのお方様がおここ様で——」

孫左衛門の顔に翳かげが走った。

「知っておるのか」

「おこ様かどうかは分りませぬが、丁度ひとつきあまり前のこと、古府中から女物の駕籠^{かご}が二挺参りました。ついて来た侍がこの中に御病人の御女中がいる、丁寧^{ていねい}に扱^{あつか}ってくれと申されるので、一同で出迎えましたが、二人の御女中ともに口も利けぬほどの重態で、部屋に床を取って休んだときにはもうこと切れておりました。一人は十八、九の美しい御女中、一人は四十ぐらいの……」

孫左衛門はことばを切つて晴信の顔色をうかがった。

「先を云え」

「そのときになつて気がつきましたが、そのお二人の御女中は、どうやら毒を飲んだらしい氣配がございました。いや氣配ではございませぬ、毒を飲んで死んだのに間違ひありません。早速つき添いの侍とかごを探したが、いずれとも、行方しれず、お女中の名前もどこからお越しになつたのかも分らぬゆえ、どうしたらよいか途方にくれておりましたが、お持物の中に晴信様の署名された手扇がございましたので、躑躅^{つむづく}が崎のお館の御女中様たちかと思ひまして、当湯の郷の墓地にあつくほうむつたうえ、躑躅^{つむづく}が崎の方へは早速このことをおとどけに及びました」

孫左衛門は落ちついていた。

「お若いお女中様には顎のあたりに小さいほくろが二つほど並んでおりました。お年を召した御女中様はこれといつて特徴はございませんが、色が黒く……」

もう分つたと晴信がいった。若い方がおここ、年とつたのが、おここに仕えていた、土地の女でますに違いなかった。

「その女たちはひとことも、口を利く力はなくなっていたのか」

晴信の声は潤うるんでいた。おさえようとしても悲しさはこみあげて来る。おここが死んだ、あの
おここが殺されたのだと思うと、胸が引きさかれるような思いだった。

おくれてかけつけた石和甚三郎と塩津与兵衛も若い主君の胸中を察して、うなだれたままだっ
た。

「その墓地に案内してくれ」

晴信はようやくいった。涙を流すまいとこらえていても、やはり涙は晴信の頬を伝わった。晴
信は馬には乗らず、雨の中をとぼとぼと坂道を登っていった。三歩歩めば一步は滑るような小道
だった。

二つの土饅頭どまんじゅうが並べてあり、そこに卒塔婆そとばと、土器かわらけと花が供えられていた。土器の中には雨水
がいっぱいたまっていた。供えた山百合の花は枯れていた。

晴信は、孫左衛門に、こちらが若い御女中の墓だと教えられて、その墓の前に膝まずいた。妙
法薄光信女という戒名が書いてあった。晴信はおこの墓に合掌した。小県出征によって得たい
かなるものより、おここを失った打撃の方が大きかった。献身的であったおこの愛は、まだま
だ掘りつくせないほど深かった。

晴信は日暮れとともにまた降り出した雨に濡れたまま、おこの墓の前に膝まずいて動こうと
しなかった。山県孫左衛門が気をきかして、床几を持って来ると、晴信はそれには腰かけたけれ
ど、衰みはけっして着ようとはしなかった。

晴信の悲しみをつつむように、石和甚三郎と塩津与兵衛が両側に立っていた。人の命を軽視して、まるで、大根でも切るように殺していた信虎の血を受けた晴信が、愛妾おここにそそぐ涙は、この甲斐の若き領主が、人間を愛し、人間の生命を大事にする証拠だと二人の従者は考えていた。それにしても、甲斐の領主となったその日に、最愛なる者の墓の前で雨に濡れてぬかずく晴信の胸中を察すると、石和甚三郎も、塩津与兵衛も正室三条氏に対するいかりがこみ上げて来るのである。

晴信はおここの墓の前で夜を徹した。

朝になって雨は上り、深い霧となった。

晴信は全身、びしょぬれになって、墓場をおりた。山県孫左衛門が湯に入るようにすすめたが、晴信は首をふった。

朝になると、晴信が湯の郷に來ていることを聞きつけて、倉科くらしなの庄の者どもが挨拶に來た。倉科三郎左衛門は孫の源九郎、重兵衛の兄弟をつれて來て

「小県の戦勝祝着に存じます……」

と祝いのことばを述べた。山県孫左衛門が眼くばせをしたが、間に合わなかった。晴信は倉科の党の挨拶をひとりひとり受けて、三郎左衛門には相変らず、達者のようだなとか、源九郎と重兵衛には、この前の馬術は面白かったぞなどと、言葉をかけてやっていた。晴信の心は一夜にして、驚くほどの落ちつきを見せていた。おここへの追慕の情は奥ふかく飲みこんで、もはや、表面上、憂いうれの翳は消えたようにさえ見受けられるのであった。

朝食が終ったころ、古府中からの走り馬が板垣信方の伝言をもたらした。

「諏訪殿と小笠原殿の連合軍が、国境を越えて、甲斐の国へ侵入いたしました。総数およそ三千あまり、一挙に韭崎を狙って攻めよせて来る気配であります。板垣信方様ほか諸将は既に進発なされました。お館様も一刻も早く、御帰館下さいますように、とのことであります」

伝令者の大室太郎兵衛は馬に乗っていたときの身体の上下運動がまだおさまらないのか、言上する言葉がおどるように高くなるかと思うと、つまずくように、つかえた。間違わずにすみやかに、言葉を伝えようとする気持が彼をそうさせたのだ。

「はやく御帰館下さるようという言葉はおそらく信方が間違えていったのだろう。信方め、よほどあわてたと見える。そこところは、はやく韭崎に駆けつけろというべきである」

晴信はひとりごとのように云ってから一段と声を高めて

「晴信は、晴信の旗本と倉科の党の精鋭百騎をつれて、敵の陣中深く突込んで、諏訪殿と小笠原殿の首を頂戴いたすつもりだから、下手ないくさをせず待っていると信方に伝えてくれ」

大室太郎兵衛は晴信の一言をびっくりしたような顔で聞いた。晴信が本気でいっているかどうかを確かめているようだった。

大室太郎兵衛の馬が走り去ると同時に、晴信は床几から立上って倉科三郎左衛門にいった。

「聞いておったとおりだ。孫の源九郎と重兵衛の二人はこの晴信があずかる」

「倉科党に取ってはありがたきしあわせにございますが、この倉科三郎左衛門はいかがいたしましたしょうか」

「三郎左衛門は倉科の庄の馬をまもっておってくれ、三郎左衛門を必要とするときには迎えをよこす」

しかし三郎左衛門は不平面ふへいづらをしたまま、うんとは云わなかった。

山県孫左衛門が、寺におさめてあった若い方のお女中様の遺品だといって、手扇を持って来て晴信に渡した。晴信は、なつかしそうに、その扇を開いた。風林火山の四字と、晴信の署名があった。以前おこが扇子になにか書いてくれと晴信にいったことがあった。よし歌を書いてやろうと晴信がいうと、おこは歌よりも、風林火山の四文字を書いてくれと所望した。特に理由はなかった。おこは晴信が風林火山の四文字を好きなことをよく知っていたのである。

晴信の眼がその四文字に吸い寄せられた。

「そうだ風のごとく敵を襲おそうのだ」

晴信は馬にまたがっていった。それは亡きおこの啓示だと思った。おこが生きていたらこの場合、やはりこの扇子を晴信にさし出して、一刻も早く、葦崎へ向うようにいうだろうと思った。一刻もはやくと口でいいながら、晴信に別れの抱擁と唇を求めるのを忘れない女だった。おこは才氣にたけ、女としてたけていたのだった。

「風のごとく敵をおそうのだ」

その声を残して、晴信は、朝霧の中を、笛吹川溪谷を一気に駆けおりていった。

晴信の馬のあとから馬が続いた。騎馬武者の列は笛吹川にからむように長く延びていた。やが

てその列は甲府盆地に出ると縮まり、躑躅が崎の館の前に来たときは一団となっていた。晴信の一隊を眼がけて走り馬がやって来た。伝騎の武者は馬からころがり落ちるようにして晴信の馬前に手をつかえていった。

「諏訪殿、小笠原殿の連合軍三千は国境を越え、長坂へ侵入いたし、民家に火をかけております。敵の連合軍を迎えました鎌田五郎殿の隊と飯富兵部殿の隊とは、敵の兵力にはかなわず、鎌田五郎殿は箕輪へ引いて陣をかまえ、飯富兵部殿は柳沢の高地に引いております。板垣信方様の本隊は牧原、和田、打越の線に陣をかまえて敵を食いとめるための準備をしております」

伝騎の武士は一気にいった。

「よし分った。すぐ帰って、板垣信方というがよい。近辺の百姓二千人を集めて、それぞれ十人に一本ずつむしろ旗を立てさせ、ふところには小石を用意して、信濃往還の祖母石、穴山のあたりに集めて置くように、その百姓どもが集まるまでは、なんとかして敵を寄せつけないように、策略せよと伝えてくれ。余は、百姓どもが集まるまでには、そこへ到着するだろう」

晴信は伝騎にそう命ずると、家来の石和甚三郎に、半時あまり眠るから誰が来ても起してはならないといって、草叢くさむらの中に横になった。すぐ軽いいびきが聞えた。石和甚三郎と塩津与兵衛は、倉科の党の侍たちにしばらく馬を休ませるように命じた。

躑躅が崎の館がすぐ眼の前にありながら、そこへはいかず路傍で仮眠を取る晴信の顔は疲れて見えた。

晴信は小半時も眠ると、躑躅が崎からとどけられた握飯を立ったまま、頬張って、すぐ馬上の

人となった。晴信の一行が韮崎まで来ると、走り馬が二騎前後してやって来た。一騎は、むしろ旗を持った百姓が続々集結中であることを伝え、一騎は、敵軍が、鎌田五郎の陣と飯富兵部の陣にそれぞれ、見合うだけの部隊を残して、本隊は信濃往還を一気に韮崎へ攻めて来る気配を示していることを報じた。

「信方にいうがよい、余がつくまで、いかなることがあっても敵を持ちこたえろと」

走り馬は去った。

日が高くなったころ、晴信の軍勢は板垣信方の本陣についた。その途中の信濃往還にはむしろばた、立てた、百姓どもが群をなしていた。

「あれほどの人数の百姓どもを集めて、なにをなされるおつもりですか」

信方は晴信の顔を見ると、まず主君の心の中をなだ訊した。

「百姓どもを信濃往還を両側から見おろせるところに配置してから、信方の本隊は信濃往還を引き下るのだ。その本隊を追って来る敵に対して、百姓どもは石を投げるのだ。敵は百姓と石つぶてをあなどって、攻めよせて来るに違いない。そこで百姓は、両側の山手に引くのだ」

「そこを、両側の山にかくれていた、わが隊が挾撃するのですか」

信方がいった。

「いや、そう考えるのは凡将だ。百姓が引きにかかる敵は、信方がいま云ったとおりの伏兵を警戒して容易には進んで来まい。つまりここで足ぶみをする事になる。そこは両側に山がせまっている狭路だ。ききようろ。いわば甲斐の国の咽喉にも相当するところだ。ここを敵が通れば韮崎も落ち、

やがては古府中も危うくなる。敵は通りたところであり、味方は通したくないところだ。この地点まで敵を引きよせたとところで余は倉科の党の百騎を率いて一気に敵を突き破る。信方はそのあとを押せばよい。逃げ出した敵は、鎌田五郎と飯富兵部が拾うだろう」

晴信の策戦計画はそのまま実施に移されていった。敵前に出た百姓部隊は、よく石を投げて、敵に怪我を負わせた。怪我よりも、敵を怒らせた方が効果的だった。危険が迫ると百姓部隊は石を投げながら引いていった。そのあとを、諏訪と小笠原の連合軍が物見を前方に出して、伏兵を警戒しながら、牧原に突入した。

敵軍の主力が牧原を通過したのを丘の上から見て取った晴信は、倉科の党の百騎に向っていった。

「余は倉科の党のお家芸青梅の舞をふたたび見せて貰いたい。敵は諏訪と小笠原の連合軍である。人数は多くとも連携は取れていない。一気に敵の鼻面をつぶすのだ。策略もかけ引きもない。敵の鼻面、鼻面を狙って突き伏せるのだ。敵中深く突入せずともよい」

晴信が槍をかかえて走り出すと、そのあとを倉科党の百騎が一同となって追った。一隊は、信濃往還を一気に駆けぬけると丘のいただきを眼がけて馬を進めた。丘に立つと和田、牧原の村がよく見えた。晴信はそこで突撃の姿勢を取った。

諏訪と小笠原の連合軍は、逃げていく百姓部隊の間から、百騎あまりが突然出現したのにやや驚いたようであったが、その百騎が丘の上に勢揃いして動かないのを見ると、その背後に、なにか計略があるのではないかと思つたらしく、兵をとどめて丘を見上げていた。

「風のごとく敵を襲うのだ、風のごとく……」

晴信は、おここのかたみの手扇を頭上で振りながら絶叫すると、馬首を丘の下に向けてかけおりていった。

おここのが、晴信の武者ぶりを見ていてくれるだろうと思った。おここのは死んでも、おここの残した手扇が、いま武田の兵を指揮しているのだ。晴信はおここの死の悲しみを、戦いにすりかえていた。おここのを忘れることは戦いをするものであり、戦いをすることは勝つことなのだ。

晴信の右となりみぎのとなりに倉科源九郎が来て並んだが、すぐ晴信を追いこして前へ出ていった。左となりひだりに怒ったような顔をした倉科重兵衛の顔が見えた。重兵衛も前に出た。ほとんど百騎は、動く槍の壁のように展開して敵の中に突込んでいった。

晴信は敵兵の驚愕きやうがくする顔を見た。晴信の槍がその敵をついた。それからもうなにがなんだかわらなかった。晴信は敵中深く突き入るなどいっていながら敵中深く突き入っていた。敵は意外にもろかった。晴信を先頭とする倉科党の槍に鼻面をたたかれると小笠原隊はふみこたえることもなく崩れた。小笠原にして見れば、諏訪にたのまれた仕事であった。いわばうけ負う仕事のうちなものだったから、晴信の決死の突込みに、鼻面をたたかれると、たいした責任も感じないように兵を引いた。同じ鼻面をたたかれた諏訪軍が容易に引こうとせず、一方の小笠原隊が引こうとするのだから、敵の陣中に、混乱がおきた。

板垣信方の本隊が関せきの声をあげて攻めて来ると、もはや諏訪、小笠原隊は戦意を失っていた。短時間で勝負は決した。晴信は、風に追われるように引いていく敵軍の向うに、敵軍が放った火

が燃えているのを、遠くのことのように眺めていた。

「お館様、お見事にございました」

板垣信方がいった。

「さすがに武田家を相続されたお館様……」

甘利虎泰が涙を流していった。

だが、それらの家臣のことばは晴信の耳には入っていなかった。晴信はむなしい空の下に孤独を感じていた。他人には分ることではなかった。

塩津与兵衛が晴信の血に染った槍を受け取った。石和甚三郎は、ふところに、抱いていた晒さらしの布を顔の汗を拭うようにとさし出した。

晴信は無心に汗を拭った。額の汗を拭ぬぐい去ると、身体の汗が気になるが、鎧よろいの下したの汗は拭うことはできなかった。

「ひとまず御帰館なさいますか」

信方がいった。

「帰る」

晴信はひとこといった。風がつめたく感じられた。曇ってこそおれ夏であるのに、風がつめたく感じられるのは、熱でも出たような感覚だった。夕べ一晩中おここの墓の前で、雨に打たれていたから風邪を引いたかも知れないと思った。そして、晴信は彼の体熱とおここの高い体温とを思い合わせた。おここの肌の熱かったのは労咳のための発熱であつたろうか。たとえそうだった

としても、そのおここの体温をもう一度たしかめたかった。

二十一歳の甲斐の新領主武田晴信はおここの手扇を馬上でにぎりしめていた。

註 飯富兵部か飢富兵部か

おぶという姓の源流を調べると、多氏のことで、後世訛なまって飢富氏おぶとなったものである。多氏は皇別氏中の第一の古族で、分派は非常に多い。飢富おぶは和名抄わみょうしょうにも出て来る姓で、甲斐の飢富氏については『姓氏家系大辞典』によると、『多臣おほの後裔なり。飯富兵部少輔虎昌の家は此の氏を冒おかせし也。今南巨摩郡に飯富邑あり、こは此の氏によりて生じたる地名なるを、後世飢を飯に誤り、更にイヒトミと読みしに外ならず』とある。

『東鑑』にも外戚飢富氏から分れた飯富源太宗季の名が出ており、その子の源内長能は逸見光長の猶子ゆうしとなり、甲州に采邑さいいを賜ったというから、武田信玄以前に飯富と書いて、おぶと読んでいたことが窺われる。

湖衣姫

馬上の晴信の顔は、苦痛に満ちていた。侍臣たちは疲労が苦痛となって晴信の顔に出たのだと

思った。父信虎の追放、愛妾おこの死、そして長坂の戦い、どれもこれも晴信にとって重大事件であつた。その二日間のできごとが晴信を疲労に追いやったのだと思つた。

雨はやんだが、雲はまだ厚く、いつ晴れるやら分らなかつた。

晴信は^{いらさき}葦崎で小休止して、鎧^{よろい}を取つて身体^{からだ}の汗をふきとり、なにか乾^{かわ}いたものを着たかつたが、陣中における総大将がそのようなことはできなかった。

晴信は床几に泰然^{たいぜん}として坐つた。その坐り方も板垣信方がそうしなければならないと、日ごろからうるさくいうので、そうしたまでのことであつて、晴信の本意ではなかつた。

「お館様^{やかた}、おひき合わせいたしたい者がございます」

信方がいった。お館様と呼ぶのに一段と声を張り上げているのは、信虎の追放、晴信の新領主という舞台裏の工作の主役をつとめた彼が、自分自身に呼びかける凱歌^{がいか}でもあつた。

「もと奉行衆の今井兵部、鎌田十郎左衛門、三枝半兵衛、日向^{ひなた}三郎四郎の四名にございます」

晴信はうなずいた。その四名にあつたのは、ついさきごろだつた。湯の郷へ馬を飛ばしたとき、晴信に^{きよへい}挙兵をすすめたのも、この四人だつた。

四人は晴信の前に手をつくつと、年長者の日向三郎四郎が晴信が新領主になり、しかもその翌日に、諏訪、小笠原の両軍をうち破つたことについて、祝辞を述べた。

「これら四名の者、晴信様が甲斐の領主になられますについての陰^{かげ}の功績は格別でございましたゆえ、なにとぞ、お召しもどしくだされ、適当な役におつけ下さるようお願い申上げまする」

信方が口添^{くもぞ}えをした。

晴信は黙^{だま}っていた。四名の顔を交互に見くらべながら、長いこと考えていた。信方が一步^{ひき}膝を

すすめた。元奉行職にいた四人に見合うような適当な役がすぐ思い浮ばないのは無理ないことであるから、そのところは、この信方におまかせ下さいといおうとしたとき、晴信の口が開いた。

「四人の者どもが甲斐を離れたのはいつだったかな」

四人に云ったのではなく信方に聞いたのである。

「たしか天文五年と心得ておりまするが」

「するともう五年になる」

晴信は静かにいった。奉行職を棄^すてて、他国に走ったのには、それだけの理由があった。あのころの父信虎のやり方だったら、誰だって甲斐を逃げだしたくなるだろう。だが彼等は奉行職であつた。甲斐の国の政治の要^{よう}枢^{しう}の地位にいた者たちであつた。信虎を捨てて他国へ走ったことは、甲斐を捨てて他国へ出奔^{しゅっぺん}したことに間違ひはないのだ。もし、ほんとうに国を愛するならば、たとえ、父信虎の刃^{やいば}を受けようと、とどまるべきではなかったろうか。晴信はそのところを考へていた。

「五年間、甲斐を離れていたということになるのか」

「いえ、甲斐を離れたと申しましたが、つねに甲斐の国人たちとは連絡を取り……」

信方が助言^{すけごん}を始めた。

「いや分っている、分っているが、まがりなりにも、国を捨てた奉行を、父がいなくなつたからといって、余がすぐ召しもどして重要な役にすえるということを、他の者たちはいかように見る

かな」

晴信の眼がきらりと光ったが、すぐまたものとのおだやかな眼にかえった。それからまた、晴信は考えこんでしまったのである。

四人の元奉行たちは言葉がなかった。板垣信方にも、晴信のいうことは当を得ていたからことばの返しもうなかった。それに晴信の云い方はひどく落ちついてた。甲斐に政変が起ると同時にかけつけた元奉行たちに、よく来たと暖かいことばをかけてやるでもないし、一度国を見捨てておいて、なんでおめおめと帰って来たかと叱るのでもなかった。

(他の者たちはいかように見るかな)

といったのは、ふと心に浮んだ不安をそのままつぶやいたようでもあった。晴信の言葉は静かだったが、眼ははっきりと、その先を洞察していた。疲れた眼ではなく活気に溢れていた。ただ信方は、晴信の眼がいくらか潤んで見える原因が風邪による発熱にあるのだとはまだ気がついていなかった。

「そちたちに頼みたいことがある」

晴信はぼつりとひとこといった。

「日本はいま群雄割拠かつぎよの時代ではあるがこの時世がこのまま永続するものとは思われない。誰かが日本を統一しなければ民百姓は安心して生業せいぎやうにつくことはできない。強い者が弱い者を征服し、その強い者をさらに強いものが征服するのだ。弱い者は亡び、強い者は生きのこるのがこの戦国だ。ところで、その戦国の時代に一番必要なものはなんであろうか」

晴信の眼は四人の元奉行たちの顔をひとりずつ撫でていった。

「金も必要だ。新しい武器も欲しい。産業も興さねばならぬ、治水もやりたい。甲斐の民が安らかに生きて行くための法度はふども要る。そちたちは、他国を歩いて、これらのことを調べて、その智識を土産に帰参して貰いたい」

この中のどれでもいいから、土産として充分なものを持って帰って来てくれと晴信は云った。

「そちたちは、ひとたびは甲斐を去った。外観的には甲斐の人ではなくなっているから、他国に歩くのもかえって易いこと、路銀ろぎんについては、信方のところへ、遠慮なく申出るがよい。そちたちが、この甲斐の国を愛し、余をその領主として立ててくれるつもりがあるなら、この仕事を成功させて貰いたい。これは戦争で手柄てがらを立てるより、はるかにむずかしいことであり、その結果は甲斐の国の存立ぞんりつにも直接関係する。そしてこの仕事は、あくまでも余の蔭かげの力となる気でやって貰わないとできる仕事ではない。そうだ、乱破らんぱ、間者かんじゃが必要なら、それも配属させよう」

晴信の言葉は熱をおびていった。

晴信は自分のことばに酔っていく気持だった。かねがね思っていたことを、元奉行衆たちのまえでぶちまけながら、常になく、昂たかぶっていこうとする自分をおさえつけていた。いつもと違うのは、熱があるからだ、夕べ、おここの墓の前でひとばん中、雨に濡ぬれていて、風邪をひいたかなのだと、理窟りくつをつけていながらも、四人の元奉行衆にいつていることが、なにか、正常でない身体がなせるわざのような気がしてならなかった。

「ありがたきしあわせ——」

日向三郎四郎が四人を代表して、晴信の命令を受領した。四人の眼には感激の涙があった。「では身体からだを大事にしてな、いい土産を待っているぞ」

晴信は、晴信の前から去っていく、元奉行衆たちに声をかけてやった。四人の武士たちが、晴信の前を去ったあとで、晴信は自らの額ひたいに手を当てた。火のように熱かった。

躑躅つじが崎の館に帰っても、晴信にはしなければならぬ仕事がいくつか残っていた。さし当てる問題は、父信虎が残していった、妻とも側女そばめともつかない多くの女たちの始末であった。

「もし、父信虎のあとを追って駿河えんりよへ行きたいものがあれば今川義元殿に連絡を取った上で、人をつけて送りとどけてやるから遠慮なく申出るがよい。このまま、館やかたに残っていたいものはそのように計ってやる。家元いえもとへ帰りたい者があれば、即刻、家元へ送りとどけてつかわそう」

信虎がかかえこんだ女たちのほとんどは、その美貌を望まれて、無理矢理むりやりにつれて来られた女たちであった。駿河に行こうと申し出た女はひとりもいなかった。晴信は母大井氏おおい（信虎の正室）にも駿河へ行くかどうかを聞いた。

「今から、駿河へ行つてなにとする」

信虎は正室大井氏にも見はなされていたのである。

信虎のなぐさみものとしての生活を強いられていた女は総数三十六名いた。女たちは異口同音いくどうおんに家元親元へ帰りたいといった。晴信は、それらの女たちに、充分な金子きんすを与え、人をつけて、それぞれ送るかえしてやった。

躑躅が崎の館は騒然としていた。信虎のかこつていた女たちが出ていくための喜びの声ばかりではなく、引いては解放の恩恵が与えられるであろうと、予期していた人質たちの声が館のすみずみに満ちあふれていた。

躑躅が崎の館は東西百五十五間、南北百六間、土堤の高さ一丈の丘の四囲を濠がめぐらしてあった。館は三つの郭に分れていた。

北の郭は、人質の居所として与えられ、それぞれ一室を当てがわれ、身分の高い人質は、召使いなど伴つて住んでいた。

信虎は勝利の代償として人質をつれて来ることが好きであつた。信虎にかぎらず、当時は、人質を取つて、相手を牽制する以外に方法がなかったのかもしれないが、徹底して、人間不信をしておしていた信虎は、他国の人質だけでなく、甲斐の国人からも人質を取っていた。部将の中では自ら人質として、わが子を差し出している者もあつた。

「国内の人質はすべていいねいに送りかえすようにいたせ。強いて人質を提供しようとする者があつても、甲斐の国の者であるならば、その人質を受け取るわけにはいかない」

晴信は板垣信方に命じた。

「甲斐の国の人質については、それでよろしいとして、他国の人質はいかがいたしまする」

信方は、晴信の性急なやり方にやや不安を抱いて云つた。

「他国からの人質については、余がいちいち取調べ、必要のない人質なら送るかえすこととするか、もしその人質が、人質としての価値にふさわしくなければ、相手に談じこんで人質にふさわ

しい者と交換して貰うことにしよう」

晴信は厳然としていった。信方はほつとした。晴信は思いつきで、人質を解放しようとしていいのではないことが了解できると、ふところから、書いた紙を出して晴信の前に黙って置いた。

紙片には他国の人質の一覧表があった。

「諏訪頼重よりしげ殿息女湖衣姫」

晴信はその第一行目に眼をとめた。

「これは？」

晴信は諏訪頼重の息女、湖衣姫という名も知らないし、その姫が躑躅が崎の北の郭に人質として送られて来ていることも知らなかった。

「諏訪頼重殿へは、武田家より禰々ねね様が正室としてお輿入れになっております。信虎様はその代りとして、湖衣姫を求められたのでございます」

「人質として姫を取ったのか」

「いえ客人としてでございます。頼重殿には男子がございませんので、側室小見氏の生んだ湖衣姫を客人として求められたのでございます」

客人も人質も同じことだ。男の子がないからといって、姫を人質に取るとは、あまりにもひどすぎると晴信は思った。頼重が裏切ったら、姫を斬るつもりだったのだろうか。信虎は娘の禰々を頼重の正妻として領地をつけて嫁しづけても、まだ頼重を信用しなかったのであろうか。

（だが、その点、父信虎は先見の明があったというものだ。諏訪頼重は、見事に武田を裏切って、

小笠原長時と共謀して長坂まで攻めこんで来たではないか）

だからといって、晴信は客人の湖衣姫を斬るつもりはなかった。そんなことをすれば、あの頼重が彌々に対してなにをするか分ったものではない。晴信は、十三歳になったばかりで政略結婚の犠牲にされた、妹のことを考えた。

「湖衣姫に会いたい」

と晴信が突然いい出した。

「お会いになるのは、かまいませんが、会って、いかがなされます」

信方の顔に不安の色が浮んだ。信方は、晴信が、小県出征中に彌津元直の娘の里美に恋歌を送ったことを知っていた。若くて、勇ましくて、女に惚れっぽい年ごろの晴信にあの湖衣姫を見せたら、ただではすまないと思った。湖衣姫は名家の姫らしく、気品と美とを兼ね備えていた。信虎が湖衣姫を客人として貰いうけた下心には、やはり湖衣姫に対する執着があった。だが、禿鷹のような信虎であっても、この名家の宝玉をたわむれに傷つけることはできなかった。諏訪家は神氏の出である。古来神氏出の武士として、一般武士より高いところにいた家柄である。その名家の血筋を引く湖衣姫が美貌であるということが信方に取っては、心配ごとであった。信方が、湖衣姫について晴信の耳にひとことも入れてなかったのは、もしかということが起きないためであった。湖衣姫を中にして、晴信と信虎の争いでも始まったら、眼も当てられないと思ったからであった。

もしかということはいまはもう起らないが、晴信が湖衣姫に眼をつける可能性はかなり強かつ

た。

(それに晴信は愛妾おここを失くしている)

信方は首を傾げた。

「湖衣姫に会ってはならぬと申すのか」

「さようのは申しませんが、湖衣姫は名家の息女ゆえ、なにかと見識が高く……」

信方は予防線を張った。

「名家の出を誇り、見識が自分の背丈の五倍も十倍もある女は、すぐ近くにいます。その女より湖衣姫は見識とやらが高いのか」

その女と晴信が云ったのは、正妻の三条氏のことをいっていることが、すぐ信方には分った。まずいことになったなと思った。こうなれば、湖衣姫に会わすより仕様がなし。

(しかし、会えば、ただでは済まぬ)

信方はそう思った。

「信方、余は諏訪頼重の息女、湖衣姫にだけ会うために北の郭へ行くのではない、北の郭にいる、人質たちの顔を一応知って置きたい。その待遇ぶりもとくと見分して置きたいからである」

北の郭の人質がどうなっているかを見てしまえば、躑躅が崎の館の中で、気がかりになるものはもうないのである。

(人質について、さしずをしてから、ぐっすり眠りたい)

晴信は熱が身体中にまわっていきつつあるのを知っていた。まもなく、動けなくなるかも知れ

ない、頭が割れるように痛かった。

（寝ればいいではないか、むりして風邪をこじらせたらよくない、人質のことなど、病気が直ってからでいいではないか）

晴信の心の中でそういう声が聞えた。だが、晴信の中には寝てはいられないという別の声が、彼を追いついていた。人質の処分だけはきちんとつけないと、区切りがつかない、彼は、いくらかも知れる足を踏みしめて立上った。

「北の郭へ案内してくれ」

晴信の顔は熱のため上気じょうきしていた。明らかに晴信の顔が尋常じんじょうではないのを信方は、晴信の若さによるものだと考えていた。湖衣姫という絶世の美人の臭においを、晴信は獵犬のように嗅かぎつけて、上気したのかも知れないと思った。新領主の実感と戦勝の昂奮きようふんが今ごろになって、晴信を上気させたのかも知れない。信方の解釈によると、晴信の上気はすべて、彼の若さによるものだった。北の郭は暮色につつまれていた。郭をかこむ松林の枝の上で尾を立てた栗鼠りすが、下を通っていく新領主をおどけた顔で見おろしていた。

諏訪頼重の息女湖衣姫は北の郭でも、もっとも日当りのいい居所を与えられ、五人の侍女たちと住んでいた。

新しく甲斐の当主となった晴信が直接、湖衣姫を見舞いに来たと聞いて、侍女たちは、ひどくあわてた。

「御対面ごたいめんの用意をつかまづりますゆえ、しばらく御待ち下さいませ」

侍女頭がしらは晴信の前で頭を床板にこすりつけんばかりにしていた。

「かまわぬ、そのままでよい」

「いえ、殿方とのがた様はそのままでも、姫様には姫様としての、たしなみがございます。まして姫

様は諏訪家の御息女様、作法によって御目通りいたしませぬと、わたしたちの落度になりまする」

侍女頭は叫ぶような声をあげた。晴信は、どうしようかというふうな顔を信方に向けた。侍女頭が作法とかなんとかいうのは、やはり、諏訪家を鼻にかけているのだなと思った。腹が立つことだが、相手は女ばかり、無理におし通るような野蛮なこともできなかった。

晴信は信方とともに隣室に坐った。侍女までがあんな調子だから、湖衣姫もまた、家柄を鼻にかけて、つんとすましているような女ではないかと思った。

「人質にも格があるか」

晴信は信方にあてつけたようなもののいい方をした。

「人質と申ししても、湖衣姫の場合は、爾々御料人のかわりにお越し願っている客人でござい
ますから」

「いい廻し方は違ってもやはり人質だろう。それにしても人質というものの扱いは面倒なものだな。これから、戦さのあるたびに、武田は勝つだろう、そして、その度ごとに人質をつれて来るとすれば、このせまい館は人質でいっぱいになるぞ。信濃だけで、いまだ余に従わない武将が幾人いるだろうか。大ものだけ数えても、二十人や三十人はいる。次に駿河、越後、と領地を

拡大していけばいいだろうなる。躑躅が崎ぐらの館を一年に一つぐらい建て増さないと間に合わない。面倒なことだな」

面倒なことだといって晴信は首をたれた。人質そのものの扱いが面倒だというふうにも、そうして領地を拡大していくことそのものが面倒だというふうにも取れた。それにしても、晴信が、冗談にことよせて、信濃、駿河、越後に対する征服意欲を信方の前で洩らしてくれたことは、信方に取ってうれしいことであつた。

信方は、たのもしいかぎりの若い領主に、信方自身のいまの気持をどうつたえようかと考えていた。

日暮れに近くなつたせい、その部屋は暗かつた。晴信と信方の会話が切れると夜のように静かである。

「お館様、やはり当面の敵は信濃、信濃の次は駿河でございますな。甲斐、信濃、駿河の三国を持てば、京都をめざすことも、それほどむずかしいことではございますまい」

信方は彼の胸中を晴信の耳もとで披瀝ひれきした。晴信はうんと、うなずいたように見えた。が、言葉は発しなかった。坐つたまま、いねむりでもはじめたような恰好かつこうだつた。

（こんなところで居眠りなどんでもない）

信方は晴信の手を取つた、焼けるようなあつきである。いそいで、額に手をやるとたいへんな熱だつた。

「お館様、お館様……」

声をかけると晴信は、うなずく。うなずきながら、身体の安定がくずれていつて、いまにも倒れそうになるのである。

「お館様、信方の肩におつかまり下さい。御寝所に帰ってすぐ手当をしなればいけませぬ」

信方は晴信を抱きかかえるようにして、北の郭を出た。

晴信の発熱は突然ではなかった。長坂の戦いの時から発熱していたのである。押さえに押さええて来た熱が、湖衣姫を待つために小康した折、彼をおし倒したのであった。

晴信の側近石和甚三郎と塩津与兵衛は、その熱の原因は、晴信がおここの墓の前で一夜雨にうたれつづけていて風邪を引いたことにあるのだと信方に報告した。

「なぜ、お館様にそのようなことをさせたのだ」

信方は二人を叱りつけて置きながら、若き領主が、いかに情深いかを知った。人情に厚いことは、一国の領主として必須の条件ではあるが、晴信がもし、情に流されるならば、それは武田の将来にとって憂うべきことだと思った。熱にうかされて、なんともわけのわからないことをいっづづけている晴信の顔を見ながら、信方はその枕元にひとばん坐りつづけていた。

晴信の容態は、六日ばかりたつて危機を脱したかに見えた。熱は一時よりはずつと引いて来たが、或るていどさがると、それからは容易にさがらなかった。医者は食欲がでないことが一番いけないのだから、なんでもいいから、好きなものを食べさせるようにと云うのだが、晴信はなにを持っていつてもちよつと口をつけただけで、すぐ箸を置いた。

熱がさがって来ても、咳がおさまらなかった。せきこむようなはげしいものではないが、咳を

するときは苦しうだった。

十日たつて、さらに熱はさがり、咳の出方も少なくなつて来たが、起きあがるほどにはなつていなかった。問題は食欲だった。

そのころ三条氏が侍女をひきつれて、はじめて晴信の見舞いにやつて来た。

「快方に向かわせられ、お喜び申し上げます」

三条氏は型どおりの挨拶をしただけだった。

晴信の枕もとに近よつて、彼に手をかけようなどとはしなかった。晴信は眼で三条氏に礼をいつてから、子供たちは元氣かどうか聞いた。

「こどもたちは捨てて置いても、大きくなるものでございます」

三条氏はこともなげにいった。晴信は、安心したように、なんだか、うなずいて、そして、いつになく苦しうな咳をした。

「おここの労咳ろうがいが乗り移ったものではございませぬか」

三条氏は、咳に苦しむ、晴信を見ながら、そういった。

「労咳ならばたいへんです。京からいい医者を迎えねばなりませんまい、こんな草深いところの医者には当てにはなりませんから、いますぐにでも使を京へやるがよい」

三条氏は、枕元に坐っている甘利虎泰あまざりにいつてから、お大事になさいませといつて引き揚げていった。

晴信の顔には動きはなかった。三条氏のいつたことなど、いささかも氣にかけないふうであつ

だが、三条氏が帰るとすぐ、三条氏が坐っていた敷物を取りかたづけするように眼でさしずした。晴信の容態は悪い方へ安定したようだった。熱は懸留したままさがらず、食欲不振のままだった。いい方へ向くのか、悪い方へ向くのか、誰も予測がつかなかった。

晴信が発病してから二十日^{はつか}たった。晴信発病の噂が隣国に伝わっていった。甲斐をうかがう積極的動きはなかったが、晴信の病気を打診するように、隣国から見舞いの使者があつたりした。

そのころ湖衣姫が、晴信を見舞いたいと、板垣信方に申し入れて来た。人質の見舞いを受けるということは異例でありどうしたらいいかと即答ができずに困っていると、使いに来た侍女頭^{がしら}が「お館様は湖衣姫様をお見舞いに来られ、姫様のお支度中に病に倒れましたので、姫様はいたく、そのことを心にかけておられます。それに、お館様が食欲がないとのことについても、姫様はいたくご心配、お手ずから料理されたものなど、持参したいと申しておられます」

そうだ、気分転換ということもあると信方は考えた。もともと、晴信は湖衣姫を見たいといっていたのだから、その姫が手作りの料理を持って見舞いにいったら、気がかわって食欲がでるかも知れない。

「だが、そういうことは諏訪家の作法にあるのか」

信方は、侍女頭^{やゆ}に擲^な論するようだった。

「ございません。姫様が御肉親以外の殿方の病床をお見舞いなされることからして、例のないことでございますが、姫様がたつての御望みゆえ、私たちもよんどころなく承知いたしましたまでのことでございます」

信方は侍女頭の言を、そのまま晴信につたえた。

「湖衣姫殿の御見舞いをおうけなさいますか、お受けなさるならば、その準備をしないといけません、なにしろ、相手は、家柄をすぐ口にする諏訪家のご息女のことですから、堅苦しいと云えば堅苦しいお見舞いになるかも知れません」

信方は半分逃げ腰でいった。

「諏訪家とはついこの間、槍を交えたがまだ国交は断絶してはいない。湖衣姫はやはり当家の客人である、丁重に扱うがよいぞ」

そして晴信は、久しぶりで、髭を剃らせたり髪に櫛を入れさせたりした。

「湖衣姫がお越しになるとなったら急に元氣になられましたな」

信方は晴信に冗談をいった。なにか、湖衣姫と、晴信との面会がきっかけとなって、晴信の容態がいい方へ転化するのではないかというような気がした。はやく病床から起き上って貰わないと困る問題が山積していた。

第一は諏訪家の動きであつた。諏訪頼重は小県に相変らず執着を持っている。晴信が病氣となり、武田の中心がぐらつき出したら、諏訪はすぐにでも小県から佐久に出兵するだろう。それから駿河の今川義元の動きは更に微妙であつた。今川義元が信虎を楯にして、甲斐に攻めて来るということも考えられる。北条の動きも油断はならなかつた。館に忍びこもうとした北条の間者が捕えられたのはつい二、三日前であつた。

板垣信方は、床の上に起き上って、湖衣姫を迎えようとしている晴信に眼をやった。晴信は瘦

せた。顔も青くなった。が、いままでに見たことのない、研ぎすまされた鏡のような美しさがあつた。理知を標榜する広い額と、決断と愛情に輝く澄んだ眼が、諏訪家の息女湖衣姫の来るのを待っていた。

「湖衣姫様ご入来」
じゅらい

廊下で叫ぶ声が聞えた。

味噌の味

晴信は期待の眼を上げたままで、湖衣姫の入来を待っていた。少なくとも二、三人の侍女にかしずかれて、ひとりで歩くのも大儀なくらい、楚楚そそとした、おもむきをこらして、はじめて会う男性への羞恥をつつみかくし、ほとんどかかえこまれるようにして、晴信の前に坐るだろう湖衣姫を想像していた。神氏かみうじの家柄をほこる諏訪家の長女（母は小笠原家の家臣小見（麻績）氏）だ、そのくらいのことは当り前だと思った。ほんとうは人質なのだが名義は客人だから、格式だけは高いところにとまって、ひとことふたことおざなりに、病氣見舞を口にするのがせいっぱいだろうと思っていた。

それでもいい、とにかく湖衣姫という女をはやく見たいものだ。晴信は思った。あの高慢ちき

な諏訪頼重を父に持ったのだから、やはり、父頼重のような鼻梁びりょうがせまくてつんと高い鼻の女かも知れない。

襖ふすまが開いた。

案内に立っている晴信の侍女が、客人を部屋の中へ導いた。侍女と、客人との間にしばらくのためらいの時間が経過したあと、明るい光りが、入口いっぱいにひろがり、そこにひと叢むらの、つじの花がにわかに咲いたように、あでやかな花模様の小袖を着た女性が現われた。花鳥模様の花染はなぞめ小袖を着た女はややうつむき加減になって晴信の前の敷物に坐ると

「諏訪頼重の娘湖衣にございます」

と挨拶した。声はふるえきみで小さかったが、しっかりとしていた。そして、ふたたび顔を上げて、病氣見舞の口上を述べはじめたときには、彼女はもう落ちつきを取りもどしていた。

晴信の湖衣姫に関する期待はそのときすべてかわされていた。湖衣姫は深窓育ちの娘らしい弱弱しさも、人質としての暗さも、そして、いちばん警戒していた諏訪氏の息女を鼻にかけているふうもなかった。湖衣姫の鼻は頼重のように高くもなかった。さりとて低くもなかった。頼重に似て大きな眼であったが頼重のように鋭くはなかった。湖衣姫は静かな雰囲気包まれた女だった。派手な美しい小袖を着ているにもかかわらず、彼女に浮薄ふはくなものを呼びおこさせるようなことはなかった。湖衣姫のもつ気品が花鳥模様の小袖を圧倒しているようであった。

はなやかな色彩につつまれながら、しつとりと静かにものをいう湖衣姫を見ながら晴信は（これこそ、良家の女というものであらう）

と思った。

「お食事がすすまぬと聞きましたので、諏訪から、鯉こいと大田螺たにしと、味噌みしょうを取りよせました。きつとお口に合うだろうと思います。たくさん召し上って一日も早く御快癒なされることを心から望んでおりまする」

湖衣はそういった。侍女に教えられたとおりにいつているものとは思われなかった。かといつてでまかせでもないし、至極自然しごくにすらすると、湖衣姫の口から、そのことばが出て来ると、晴信も思わずつりこまれて

「諏訪の味噌はうまいと聞いていたが、どうして作るのか、湖衣姫殿は知っておられるか」と聞いた。

「よく存じませんが、母から聞いたところによりますと、大豆だいずと麦こむぎと麴こうじが原料でそれに塩を加えて作るのか」

湖衣姫はそう答えてから、ちょっと間を置いて

「でも、わたしはまだ作るところを見たことはございません」

といった。その湖衣姫のことわりようが面白かったので晴信は声を上げて笑った。発熱して床に伏してから初めての笑いであった。

「姫は味噌の汁が大好きですか」

「大好きでございます。味噌の汁に諏訪湖の大田螺の味はまたかくべつでございます」
「それにしよう」

と晴信がいった。姫にいったのではなく、侍臣たちにいったのである。

板垣信方がこのことばを聞きとがめると

「味醬の大田螺汁をいそいで作ってまいれ、食べたい」

晴信の声は明るく張りがあった。

晴信は眼に見えて快復していった。医者が食欲さえ出れば大丈夫だといったように、晴信の顔にいくらか丸味が出て来たようであった。

「諏訪湖の大田螺の味醬汁の効力はたいしたものですね」

信方がいった。

「もつとも、それをお見舞に持って来られた美しいお方のききめの方がつよかったかも知れませんが」

信方はそんな冗談をいってから

「お館様、今朝諏訪頼重殿から、お見舞の大田螺と鯉と味醬が届けられました」

「なに、頼重殿から」

晴信は妙な顔をした。父信虎を駿河に追ったその日に、国境を越えて攻めこんで来た頼重が、まだ、一年とはたっていないのに、よくもいけ図々しく見舞品なぞとどけて来たものだと思った。

「おそらく、湖衣姫様の御見舞のことを聞かれたうえでの処置だと存じますが……」

いかがいたしましょうかという信方の顔には、ここで見舞品をつつかえして、ことを荒立てたくはないという気が動いていた。晴信の身体はまだ本復してほんぐくいないのである。

「受取っておけ、返礼の手紙はそちが書け、余が病気ゆえかわってお礼の言上をしたためると、ことわって書けがいい。それから、その手紙の前後に、おなじ諏訪の味噌と大田螺であるが、湖衣姫よりとどけられた方が、うまかったと、この晴信が申しておると書き添えておけ、前は どうでもいいが、あとのほうをつけ加えることを忘れるな」

晴信は諏訪頼重を許してはいなかった。やむにやまれない処置とはいえ、父信虎を駿河に追放したということは、晴信にとって、終生の悲しみであった。諏訪頼重は、晴信の心の間隙に矢を射掛けて来たのである。許すべからざる男である。

「乱破を放って、諏訪の様子は細大もらさず調べて置くように、それから、高遠頼継と小笠原長時から眼を放すな」

小笠原長時の名を口にしてから晴信は、この男も許すべからざる男だと思った。

晴信の病状はまだ直ったとはいえなかった。咳がときどき出るし、午後おそくなつて、きまつたように熱が出て顔がほてった。

晴信が床を払って起きるといふと医者ヒキの立木仙元は首を横にふつて、咳と熱がおさまらないうちに起き上ると、病は前よりも悪くなるのだといった。

「病はしばらく潜ひそんでいるのでございます。お館様の身体の中に潜んでゆつくりとその機を待っているでございます」

立木仙元はこれと同一ようなことをなんどかいった。

「薬でその病の根を殺すことはできないのか」

そういう晴信に

「いかなる病氣も藥によつて、根だやしできるものではございません、病に勝つものは藥ではなくて、人間の身体でございます。身体が丈夫にさえなれば、病氣は頭をもたげてはまいりません」

仙元は自信ありげだった。

「なるほど、すると、病というものは、誰の身体のなかにもあつて、機を見て、勢力を張ると申すのか。面白い見方だな、その説は一国にあてはめても、通用するぞ。国の力がおとろえると、外敵より、まず内敵がおこる。それと、そちの病の原理とが同じわけだ」

晴信は、立木仙元のいったことを噛^かみしめながら、それにしても、このままでは退屈だと思つた。早いところ床払いをしたかった。床払いをして、第一番目にしたいことは馬に乗ることだった。馬に乗つて思う存分、駆けめぐりたいことと、第二には、湖衣姫のいる北の郭を訪れて、諏訪の味噌と大田螺の礼をいいたい。馬に乗るより、湖衣姫訪問の方を先にしてもと思うこともあった。

暑さが、そろそろ峠を越えたころ、晴信は仙元に床を払いたいといった。床を払つて館の中を歩き廻るぐらいのことはかまわないだろうといった。

仙元は、しばらく晴信の顔を見ていたが

「歩くのはかまいませんが、疲れない程度になさいます。だが、馬は絶対にいけません」
ときびしい顔でいった。

晴信は日を決めて床上げをした。

三条氏が祝いのことばを述べに来た。

「この前、参りましたときよりは見違えるほど元氣そうになりました。北の郭からの味噌と大田螺が栄養になったのでございましょう」

諏訪の味噌と大田螺といわずに北の郭からの味噌と大田螺といったあたりに、三条氏の皮肉と嫉妬がかくされていた。

床上げの祝いに来たにしては気取った服装だった。唐衣からぎぬに裳もを長くひいて現われた三条氏は、座についたときから、なにかいいかげだった。そういう服装は、いまは公家くげだけしか使ってはいない。いわば時代おくれの着物をわざと着て来たのは、おそらく、湖衣姫が花鳥模様の小袖を着て来たということに対する反発でもあらうかと思われた。

「床上げなされても、しばらくは、あまり遠くにはお出かけにならない方がよいかと存じます」
三条氏はあたり前のことをいった。

「立木仙元もそう申していた。しばらくは館の中を歩きまわって、足をしっかりさせようと思っておる」

「それは、よろしゅうございます、ぜひそうなさいませ。けれど、北の郭へは、足をお運びになりませぬように、北の郭は人質の住いでございます。甲斐の領主が、人質のところに通ったなどという噂が出るとこまります」

三条氏は針を含んだいい方をした。人質というのは、湖衣姫を指しているのは明らかだった。

「だが、人質のところへ通うと云った」
晴信は色をなした。

「通うとは申してはおりませぬ、そのような噂がでるとこまりますゆえ、いまから御注意あそばすようにと申しあげているのでございます」

三条氏は、恰幅のいい身体を敷物いっぱい据えていた。まとまりのない、ひらたくて大きな顔が、唐衣の中から首を出しているのは、滑稽だった。裳もその場に不相応だった。女性の着物も男性の着物も実用むきにかわりつつあって、小袖は、いまや一般的な着物になっていた。晴信は、姉が今川義元に嫁した折、駿河に行ったことがあった。なにかというかと京都を真似たがる駿河の今川家でも、女性は大袖を用いていた。唐衣はまさに時代おくれである。

「なぜ、そうじろじろとごらんになれます。この唐衣が珍しいのでございますか。それとも、こういう格式ばった着物はいやだから、花鳥まがいの小袖でも着て、町家の女のように、じゃらじゃらと現われよと仰せられたいのでしょうか」

予期したように三条氏は晴信に絡んで来た。湖衣姫の着て来た花鳥模様の花染小袖のことを花鳥まがいといったのは、おそらく、三条氏の侍女によってあの折のことがことこまかに三条氏の耳に入っている証拠だった。

「湖衣姫が見舞いの折に着て参った花鳥模様の花染小袖は美しかった。あの着物はじゃらじゃらとは見えない。風情があつてよい」

「下賤な者に似合う風情でございましょう。館様は、下賤な女どもに執着なさるお方ですから、

そういう者の着る物にも眼がくらむのでしょ

う」
三条氏は憎々しげにいった。

「湖衣姫が下賤な者だというのか、少々言葉をひかえたらどうか、湖衣姫は神氏の出だ」

「出が神氏であっても、心が下賤なら、下賤な着物が似合うのでございましょう。そういう者にお近づきになるのは、しかとおとめ申し上げます」

ですぎたことをいう女だと晴信は思った。湖衣姫と近づきになろうと、まだ心に決めてもない先に、湖衣姫に近づくなと、先を制するのは、嫉妬深い女性の本能的警戒心だとしても、度を過ぎていて不愉快だった。

「こんご、二度と北の郭へ足を運ぶようなことがあってはなりません。諏訪家の息女は父の諏訪頼重に似て奸智かんちにたけていると聞いております」

晴信が黙っていると、三条氏は、いくらでも湖衣姫の悪口を持ち出すつもりだった。奸智にたけているという表現は、およそ、湖衣姫に当てはまるべきことばではなかった。

「湖衣姫のことについて、よしあしの別なくとやかく申すことは許さぬ、二度とそのようなことは申すな」

晴信は感情をおさえていった。

「いえ、申します。私にはそういう権利がございません。私は左大臣三条公頼の娘でございませう。勅許ちよつぎょを得て、武田家へ嫁して参まゐったものでございます。このような奥むきのことは正室である私の意見が当然とおってもよいものと思ひます」

あわれな女だと晴信は思った。勅許を得て武田へ嫁して来たことと、晴信の私行^{しこう}に口を出すこととはなんの関係もないことなのだ。この女の頭には、三条公頼の娘という以外になにもものもないのである。

「館様はおここのことを覚えておられるでしょう。おここがどうなったかを知っておられたら、もすこし、女のことについてはおつつしみ遊ばすように」

廻りくどい脅迫^{きようはく}だった。湖衣姫に近づきたければ近づいて見ろ、湖衣姫はおここと同じ運命をたどるであろうといういましめだった。

「おここのを殺して、そこもとはいったいなにを得たというのか、それを考えてものをいえないような年齢でもあるまい。もし、嫉妬の鬼となって北の郭の湖衣姫に触れて見ろ、余は、そこもとを必ず斬る」

斬るという言葉をはっきり晴信は口にした。正室であろうが、公家の娘であろうが、意にそむけば斬るぞと宣言したのである。三条氏の顔は蒼白になった。

三条氏が座を立てていったあとも晴信は、そこに坐っていた。どこかに微熱を感じた。斬るなどといったのは病の癒えてない証拠かも知れないと思った。そして、斬るというすさまじい言葉を吐かせる原因を作った湖衣姫を思った。恋しいとか逢いたいとかいう気はなかった。しかし、その湖衣姫と晴信とはなにか離れられない運命に置かれてるように思われてならなかった。

その年は梅雨が長く、夏が短く、あつという間に秋が来た。凶作だった。稲は実らず青立ちの

まま、秋風に鳴っている田圃もあった。

「思ったより凶作にございます」

板垣信方は晴信の前で、そのように報告した。晴信の顔が曇った。去年の天文九年もけっして上作ではなかったのに、また今年も凶作ということになれば、百姓どもはさぞかし困難しているだろう。食を求めて他の領内へ落ちていく者がなければいいがと思った。

「領民の動揺はないか」

「それはございます。今年の冬が越せるかどうかが問題でしょう。どうかしてこの冬を乗り越えて春になれば、山菜を食べても、秋までは生きていけるでしょう。しかし来年もまた今年のようにだったらたいへんなことになります」

信方はさらに

「凶作は山間部が多いようです。南部より北部、同じ南部でも、山間部は米の収穫は皆無です」

「助けてやる手はないか」

「それぞれの国人が貯えを放出するとしても、それにはかぎりがあります。各地の名主や寄親がそれぞれの居屋敷の寄子、名子、小者などの面倒を見てやっているのですが、なにぶんにも今年の凶作は……」

凶作ってんばりの説明をしてから

「だが、お館様、それほど深刻にお考えになることはございません。わが甲斐の国は、信州や越後にくらべて、米の産出量は比較にならないほど少のうございますが、大麦、小麦その他雑穀類

は他国に勝っております。米は取れるときには多量に取れますけれど天候に支配され勝で、取れないとなると一粒も取れないことがあります。だが、雑穀は、収穫量こそ少ないけれど、天候にはかなり強いものもあります。だから凶作といつても、米作を主体とする国ほどその打撃は深刻ではありません」

しかし、晴信はその説明だけでは納得いかないような顔をして

「米が取れないような年なら雑穀も取れないだろう」

晴信はそういった。

「ひらたくいえばそうなりますが、雑穀には全滅ということがございません。それに……」

といいかけて信方は、たいへんなことを忘れていたように

「米食よりも雑穀食に馴らされている甲斐では、米が取れなくとも雑穀さえあれば、どうにか生きていきます。つまり、粗食に耐えられる準備ができておりますから、凶作が来てもそう簡単にはへこたれるものではありません」

信方の話のはじめと終りのつじつまが、さっぱり合わないのを、どうやらそれで合わせたつもりだったが、英明な晴信につつまれたらどうしようかと考えていた。

「要するに、信方のいいたいことは、今年は凶作であるが、甲斐にはまだ余力があるといいたいのだろう」

「さようでございます」

「諏訪はどうだ」

そこまではまだ調査がとどいていなかった。

「駿河はどうだ、そして佐久と小県はどうだ」

そのように立てつづけに天候と作柄のことを問いつめられると信方はいよいよ答えに窮した。

「諏訪は甲斐よりもひどい凶作だ。諏訪は米にたよっているから痛手がもつと大きいようだ。佐久と小県は二毛作がかなりの成功をおさめて、貯えがあるから、民百姓もそれほど騒いではない。駿河は凶作ではないが良作ではなさそうだ」

晴信は信方に教えてやるようにいった。

「お館様はいつそれを」

「今朝がた、小県から大月平左衛門が、そして、駿河から山本勘助が、同時に立帰って来た」

晴信は信方の顔を見て笑った。

信方は頭を下げた。この若い領主にためされているようだなと思いつながらも、晴信の頭の回転のよさをたのもしく思っていた。

「信方、外を歩きながら話そうか」

晴信は立上った。躑躅が崎の館のまわりを紅葉が色どっていた。下草もすっかり色がかわって、まもなく訪れる冬を待っていた。

「見事な紅葉ではないか。これだけ見事な紅葉が見られるのに、凶作とは、なにか、人間の智恵が足りないように思えてならない」

晴信はひとりごとのようにつぶやいたあとで

「小県の紅葉も綺麗だそうだ」

と妙なことをいった。

「そんなことまで、大月平左衛門が報告して来たのですか」

信方は怪訝な顔をしていった。

「いや、里美殿の歌に紅葉が美しいと書いてあった」

「な、なんでございます。里美様——福津家の息女里美様から手紙が参ったのでございますか」

信方はいささかあきれた。夏から秋にかけて病の床に倒れ、いまやっと歩けるようになったばかりなのに、もう里美との文通を始めるとは、とんでもない女好きの領主だと思った。

「そうだ、大月平左衛門がその手紙を余のもとへ持って参ったのだ」

「お館様がさし上げたから返事を下さったのでしよう」

「それはそうだ」

晴信はよく澄んだ青空に向って声を上げて笑ってから

「その歌を読んでやろうか」

「けっこうでございます。拙者は、他人の恋歌などに興味はございません」

信方はわざとすねたような顔をして、晴信が、大月平左衛門を恋文の使者として小県に向けた背後にはなにかかくされているものがあるなと思った。

「諏訪頼重がちょっかいを出した」

晴信がいった。

「ちよっかいと申しますと」

「頼重が里美どのに恋歌を送った」

それを聞いた信方はあやうくふき出しそうになるのをこらえて

「いよいよ、頼重殿と里美様を張合うことになりますか」

「張合えばこっちが勝だ」

「お館様にはずいぶん自信のほどが……」

「里美どのからの歌を見れば、余の方に分があることははっきりしている」

「それなら、なにも頼重どののことを気になさらくともよいではございませんか」

「頼重は、短兵急たんぺいきゅうな男だ。恋歌だけではらちが明かないと見て、正式に禰津元直に、里美をよこ

せと使者を立てた」

「それは」

信方には初耳だったし、ことがことだけに、それまでのように冗談半分では聞いておれなくなつた。信方の顔がひきしまった。

「禰津元直は、里美どのの病の床に伏しているからと理由をつけてことわった。ここまで話せばあとは分るだろう」

晴信はそこで話をうち切った。

「諏訪殿が小県出兵をなされるというのでしょうか」

「そうだ。頼重はすでにその準備にかかっているし、禰津の方では、さっそく上野の上杉憲政に

援助を乞うている」

信方は大きくうなずいた。晴信が、大月平左衛門を恋文の使者にたてて、これだけのことを調べさせたことに舌を巻いた。

「すると間もなく諏訪殿は……」

「そうだ。頼重は、自分の野心など棚に上げて、小県の禰津元直が、今年の春の約束をたがえて、にわかにな城をかため、上野の上杉の軍をひき入れているからおくれを取らぬように、甲諏連合して小県を攻めようとおくめんもなくいつてくるに違いない」

あり得ることだと信方は思った。諏訪頼重が里美を欲しがっていることは別にして、彼が小県制覇に熱を入れて来ていることはいままでの経過で明らかである。禰津一族が諏訪に刃向つて来れば、芦田城も長窪城も危くなる。この二城が落ちれば、諏訪の勢力が小県から追い出されたも同然なことになる。それに諏訪頼重として、もう一つ小県に執着する理由があった。諏訪の凶作である。自国が凶作のときには、隣国を攻めて、糧食を奪うのが古来からのならわしのようになっていた。小県はけっして豊作ではないが、兵を動かす方角としたら、もっとも恰好のところであった。

「諏訪殿より、共同出兵を求めて来られましたら、いかがなさいますか」

信方はそのいくさの軍勢や、大将などの概数を頭の中で計算しながらいった。

「引き受けるのだ。約束を破った禰津元直は許しておけない。こちらからも兵を出すと答えて、その準備にかかるのだ。走り馬（伝令の馬）を各地に飛ばして小県出兵をふれ廻って、いつでも

兵馬が集まるように手配するのだ。なるべく、大げさにそれをやるのだ。甲斐の国の全軍を挙げ、佐久と小県に出兵するようにふれ廻るのだ」

信方はそこまで晴信にいわれるとやっと先が読めた。

「ふれ廻るのですな、兵馬を古府中に集めるのではございませぬな」

「一部は集めねばなるまい。そうしないと諏訪は信用しない。取敢えず、津金衆、小尾衆を主力とする部隊だけは集めたらどうか」

晴信の予言は当たった。その日から十日も立たないうちに諏訪頼重からの使者が躑躅が崎に来了。小県共同出兵の要請だった。晴信は使者に会って

「まったく、禰津元直の最近のやり方は捨てては置けない。こちらから諏訪殿に御相談しようと思っていたところです。明日にでも、晴信自ら軍をひきいて出発いたしますと、諏訪殿にお伝え下さい」

といった。諏訪からの使者は晴信のことを胸におさめて信濃往還を諏訪へ向って馬を走らせていった。その諏訪の使者の一行を、甲斐の走り馬が、次々と追い抜いていった。諏訪の使者が長坂あたりまで来ると、そこに一群の騎馬と兵が集まっていた。急造りの木戸さえもうけてあった。諏訪の使者だというと、木戸のところにいた頭らしい武士が

「お役目、御苦労でござる。われらも、明後日あたりには、ここを立って大門峠へ向うことになるでしょう。小県の戦場ではまたなにかと御厄介になるかも知れませぬ。よろしく願います」

と丁寧にあやまった。

諏訪の使者は頼重にそのとおりのことを報告した。

「晴信め、小県というとひどく力を入れて来る」

頼重は、皮肉な笑いを頬のあたりに浮べながら傍にいる千野伊豆入道にいった。しかし千野入道はなにか一生懸命に考えていてそれには答えなかった。

「晴信め、禰津の……」

頼重はそういった。牡丹が一度に咲いたような笑い方をする里美の姿が浮んだ。そうだ、晴信が出兵をいそいでいる裏には里美がいるのではないだろうか、そうなると、ゆっくりしてはおられないと思った。

「明朝出陣する」

頼重が大きな声でいった。その声でやっと自分にもどった千野入道が、大きな眼玉をぎょろりと光らせていった。

「明朝出陣と仰せられたようですが、しばらく出陣はお見合わせになった方が、よいのではないかと存じます。ちと甲斐殿のやりように腑に落ちないことがございます」

千野入道は諏訪家一の智者であった。使者の帰って来ての報告のうち、長坂のあたりに、既に津金衆が集まっていたというのが腑に落ちなかった。なにか作りごとのように思われてならなかった。

「晴信殿は若年ながら油断できない相手でございます。両日の間、この入道のために出兵を御猶予お願い申し上げます。その間に、とくと調べて参りましょう」

入道は頼重に出陣をおくらせることを懇願した。

「いや、出陣をおくらせれば、晴信にひけをとることになる。明朝出発だ」

頼重は千野入道の言を入れようとはしなかった。頼重の頭には里美があった。里美を晴信に奪われたくないということが、戦いの主題として出されていた。

翌日、諏訪の軍一千は大門峠を越えた。小県に入って見て頼重は少しいそぎ過ぎていたことを知った。敵中に放った乱破からは、敵の防備の優勢をつぎつぎと報じていた。後詰めを待たずそのまま進軍すれば全滅の憂目^{うめ}に合うかも知れない。ときどき起る小ぜり合いでも、敵の抵抗は春のときとはうってかわって激烈だった。諏訪軍は芦田城から先は一步も進めなかった。諏訪軍が進撃をはばまれているのに、甲斐軍は甲諏国境に集結したままで、いっこう動く気配がなかった。使者を送っても言を左右にして行動を起そうとする気配がないばかりか、津金衆、小尾衆の精鋭は、国境を越えていまにも諏訪領に攻めこむばかりの形勢を示したのである。

「お引き下され」

千野入道は諏訪頼重にいった。

「このまま進めば、わが軍が大敗することは火を見るよりも明らかでございます。上杉の軍が陣を布くまでに一刻も早く退却を……」

千野入道は頼重の鎧の袖にすがっていった。諏訪軍は夜暗にまぎれて退却した。それから大門峠を越えるまでは退却というより敗走に似ていた。敵地の糧食を奪うどころか、なけなしの糧食を捨てて逃げねばならないようなみじめな敗退だった。諏訪頼重はその怒りを晴信に向けた。大

門峠を越えて諏訪の領地に入ると、そこで陣を建て直して、国境に集まって来ている津金衆、小尾衆を主力とする甲斐軍に総攻撃をかけた。

だが、国境まで諏訪軍が来たころには、甲斐の兵馬の影はことごとく消えうせていた。頼重は意味のない戦いにつかれ果てた兵馬を率いて悄然と上原城に引き揚げていった。

城には晴信から送られた味噌の大樽が三本届けられてあった。いつぞやは諏訪の味噌をたくさんいただいたて有難かった。そのときのお礼のしるしとして甲斐の味噌をおとどけするから、その辛さをしかとおためし願いたいと書いた晴信の書状が添えてあった。

天文十年晩秋のことであった。

滅亡の狼煙のろし

天文十年の暮から天文十一年の春にかけての甲斐の国はきわめて静かであった。甲斐をかこむ、いずれの国ともうまくいって、他国からの侵略を受ける心配はなかった。問題は甲信国境だが、ここにおいてもいま急にことが起るといふふうな徴候はなにひとつとして見当らなかった。しかし、これはあくまで見掛け上のことであり、こういうときこそ、裏面での工作は活潑に行われていたのである。

高遠頼継たかとうよりつぐのところ、密使としておくられた鎌田五郎と、諏訪の金刺堯存かなさしとの折衝に当っていた。飯富兵部いへぶが、相ついで古府中に帰って来たのは、天文十一年三月であつた。

「頼継という男はどんな男か」

晴信は鎌田五郎に聞いた。

「どんな男と申しましても……」

鎌田五郎はしばらく考えていたが

「この鎌田五郎と同じような、慾の深い男でございます」

晴信は鎌田五郎の答え方が、面白かったので笑いを浮べて

「すると頼継も合戦が好きで、敵の大将首の数をあげるのが好きだというのか」

そうではございませんと鎌田五郎は前置きして

「慾深いところだけは似ておりますが、その慾の内容になりますと、拙者と高遠頼継とは全然違つております。頼継は、ただもう諏訪が欲しいのでございます。もともと頼継は諏訪家の出、高遠頼継と名乗るよりも、諏訪頼継を名乗ると同時に、諏訪の惣領家そうりょうを相続したいのでござい
す」

「ばかな男だな」

晴信は吐き出すようにいった。

「ばかな男です。心の小さな男です。惣領家の諏訪頼重を中心に立てて諏訪家に血のつながる諸家が同盟を結べば、伊那、木曾、小峯ちいさな、諏訪と強大な勢力になるなどということは夢にも思つて

はおはより
はおきません。ただ、神代以来の諏訪神社の大祝、諏訪氏の位置に坐りたいということだけを願っているのです。だからこのたびのお使いも、至極簡単に用がすみました」

鎌田五郎はふところから高遠頼継の自筆の書状を出して、晴信の前に置いた。

晴信はその書状には手を出さず、板垣信方に読めと、眼で合図をしてから

「それで頼継は、諏訪攻略についていつごろがいいと云ってあったか」

「いつなりとも、晴信殿の軍が、甲諏の国境を越えると同時に高遠軍は諏訪へ攻めこむと申しとおりました。高遠が甲州にお味方すれば、諏訪はひとたまりもなく、落ちるでしょう。その節はぜひとも、頼継が諏訪惣領家たることをおみとめ願いたいというのが頼継の出した条件でございました」

そううまくいくのなら、とつくの昔に諏訪家は亡びていたに違いない。そう簡単にいかないから、父の信虎は娘の禰々を頼重にやって、機嫌を取り結んでいたのだ。諏訪家のうしろには小笠原家がひかえている。高遠が動こうとすれば、その背後を小笠原が突くのは必定であった。

「どうやら頼継はこんどこそ本気で諏訪へ攻めこむつもりのように見受けられます。やはり、埋言が功を奏したというものでしょうか」

信方は頼継から晴信におくられた手紙を一読したあとでいった。乱破を高遠に送りこんで、諏訪頼重が高遠に兵を向けるらしいという風説をしきりに放っていたことを信方は埋言といったのである。

晴信はそれには答えず、鎌田五郎をさがらせると、飯富兵部を呼んだ。

「金刺堯存とはどういう男かな」

晴信はさつき鎌田五郎に質問したと同じことを訊ねた。

「青い顔をした、なにかこう、話していると薄気味の悪くなるような、陰險な顔つきの男でございます。お館様のおことばを伝えましたところ、他国の力を借りようと思つてはおりませぬ、自分の力で、いつかはきつと諏訪をほろぼして見せますと云つておりました」

諏訪神社は古来、上社と下社に分れていた。上社の大祝は諏訪氏、下社の大祝は金刺氏と決つていたが、諏訪頼重の父、諏訪頼満によつて攻め亡ぼされて以来、ことあるごとに金刺氏の一党は再起を計つていた。小笠原長時はこれに眼をつけて金刺氏の残党を背後であやつつて、諏訪家を牽制しようとしたが、金刺堯存は他力をたのまず、ひそかに時機の到来を待つてゐるようであつた。金刺氏に同調する、諏訪の国人もあり、亡ぼされたといつても、金刺氏の根はまだ絶えてはいなかつた。

「それでどうした」

晴信は先を聞いた。

「どうにも偏屈で相手にならないような男です。もし甲斐の軍が諏訪へ攻めこんだときは、どうなさいますかと、聞いたところが、その時はその時、独自の行動を取り申すという返事でしたので、その折は、当方から、前もつて御知らせいたしますと云つて置きました」

飯富兵部は、金刺氏抱きこみがうまくいかなかつた責任を恥じるように、心もち浮かぬ顔つきで控えていたが、晴信は

「それでいい、そこまで確かめて置けば、大丈夫だろう」

と飯富兵部をさがらせて、すぐ大月平左衛門を呼んだ。

「諏訪神社の禰宜満清を探った結果は？」

晴信は三人目の注目すべき人間満清のことを訊いた。

「ひそかに満清の家へ忍びこみましたところ、満清は、燭台しよくだいの火を掻き立てて書状をしたためておりました。書き終って寝についたのを見すまして、書状を盗み出し、月の光で読み取り、書状は前どおりにしてまいりました。書状の宛名は高遠頼継殿で内容は、頼継殿が武田殿と結んで諏訪家をほろぼすつもりならば、大いに手伝いましょうと書いてありました」

「あいかわらず、そちの忍びの術は見事なものだな。ところで、その満清という男のことだが、どういう男かな」

「一口に云って嫌な奴という感じでございます。肥満した身体をもて余しながらも、まだまだ食いたらないように、あちこちへもの欲しそうに眼を向けるかと思うと、急にきちんと身を正して、諏訪神社を遙拝ようはいしたり、朝になると、誰よりも先にお城へ参上して、頼重の前にはいつくばってお世辞をたらたらと並べたてるような男でございます」

晴信は、大月平左衛門のその答えがよほど気に入ったと見えて、なんだか合あつちを打ったあとで

「神代以来、諏訪神社の神官といえば、朝廷でも一目置くほどの人物だったが、落ち果てたものだな」

ひとりごとだった。

「さてと、だいたい諏訪家の周辺はこれで分ったから、こんどはこっちの番だ」

晴信は板垣信方にいった。

「こっちの番と申しますと」

「津金衆と小尾衆に云いつけて、諏訪の国境をつっつけ。諏訪が兵を用意したころ、こちらは二千の軍勢を向けるのだ」

「いよいよ諏訪に攻めこみまするか」

信方は緊張した。

「読みが足りないな。二千の軍勢は国境まで行ったところで引きかえさせるのだ。こういうことを、ちょいちょい繰返さすのだ。諏訪はその度に兵を用意しなければならぬ、昨年の凶作で諏訪は困っている。それに、しばしば出陣の声がかかると、諏訪の領民は頼重を怨嗟するだろう、しまいに命令があっても、槍をかついで出て来なくなる——」

「ころ合いを見計って本当に攻めこむという御所存でしょう。悪い策とは申しませんが、度々の出陣では、甲斐の領民もまた、諏訪と同じようにお館様をおうらみ申すことになるでしょう」

信方は、その作戦には積極的には賛成しなかった。

「甲斐の領民の声は諏訪が亡びたあとになって、聞いて見るがいい。勝った場合と、負けた場合の領民の声はおのずから違うだろうし、敵にしかけられて出兵するのと戦いをしかけるために出兵するのでは心がまえが違う。要するにこの作戦で、甲斐と諏訪のどちらが精神的に疲労する

かというと、それは受身に立つ諏訪だろう」

「しかし、諏訪には小笠原長時がっていますし、高遠頼継が武田に味方するとすると、諏訪家の血につながる伊那の諸将が黙ってはいけませんまい」

信方は絵図をひろげていった。

「それについては余にまた考えがある」

晴信は、山本勘助を呼んだ。

「駿河に行つて今川殿に云つて貰いたいことができた」

晴信はそう前置きして、夏を待たずに諏訪を攻略したいから、諏訪家と縁のある伊那の知久頼元、保科正俊などを南から牽制して欲しいと今川義元に伝えるようにいつけた。

「書状を持参いたしましたようか」

山本勘助は、ものたりなような顔でいった。

相手が今川義元の場合、晴信は書状を持たせずに、口頭でいう場合がこれまで多かった。それは、山本勘助がもともと今川家から来た者であるということもあるが、山本勘助にして見ると、晴信の山本勘助を見る眼が、前と少しも違っていいことが不安だった。今川から来た山本勘助は今川と密約を持っているのではないかと疑われているような気がしてならなかった。

事実、山本勘助の妻子は今川家に人質として取られているし、彼が今川義元から与えられた任務は、武田の動きを逐一今川家へ知らせることだった。だが、山本勘助の心は、甲斐へ来てから、急速に晴信に傾きつつあった。今川義元より晴信の方がはるかに勝れた人間に思われた。できる

ことなら、今川義元と縁を切りたいという下心しんころがないでもなかった。

山本勘助の顔にはその苦悶くもんが時折、淋しげな表情となって現われる。

「書状はいかがいたしましょうか」

山本勘助は同じことをくりかえした。

「書状か、書状はない、そのように伝えてくれればいい」

「といって置いて晴信は急に思い出したように」

「そうだ、頼みたいことがある、禰津家ねづの里美どのに書状を持って行って貰いたい。そして小泉、佐久、上野、武蔵、相模と少々廻り道だが天下の情勢を探りながら駿河へ行ってくれ」

晴信は山本勘助を待たせて置いて、机上に向って筆を取った。信方は、ことさらに仏頂面をして、晴信が恋文をしたためののを、黙って眺めていた。

山本勘助は駿府城で久しぶりに会った今川義元を別人のように見上げていた。今川義元は公卿くけのような服装をしていた。京都から客を迎えて歌の会を終えたあとであり、酒もかなり飲んで、大機嫌だった。

「晴信はその後どうだ、もう病は治ったのか」

今川義元は、まず晴信の健康のことを聞いた。

「すっかり元気になられて、近頃は馬に乗って遠駈けにも出られるようになりました。しかし……」

と山本勘助は語尾をにごして

「とき折、軽い咳をしたり、疲れると発熱したりするようでございます」

「まだ本復したというわけではないな」

それと、今川義元は山本勘助に用件を聞いた。

「諏訪殿攻略のことにございます」

山本勘助は晴信に言いつけられたとおりのことを述べ、またその口上を義元に伝える用務とは別に、小県の禰津元直の娘の里美に恋文を持っていったことや、上野、武蔵、相模の情勢を見ながら駿河へやって来たことを話すと、義元は好色の眼を輝かせて

「その禰津元直の娘というのは美人か」

と訊ねた。

「美人です。それはもう、めったに見ることのできないような美人です」

といささか誇張して置いて

「それに里美殿は歌人としても秀^すれていると聞いています」

義元はそれだけで大いに食指が動いたらしかったが、今度は話の方向をかえて

「晴信がその娘へ送った恋文の内容は読んだであろうな」

義元の間者として、武田家へ送りこまれている山本勘助のことだから、そのくらいのことはして来たであろうという質問だった。

「読ませていただきました」

「云って見るがいい」

「それは恋歌一首だけでございました」

「恋歌一首か、晴信はなかなか味なことをやるではないか、そしてその内容は」

「離れていると恋しくて恋しくてたまらない、一日も早く、里美どのと一緒に寝たいという意味の歌でございました」

「あきれた奴だな、晴信という男は」

義元はそこでまた考えこんだ。晴信は一筋縄ではいかない男に思われて来たからであつた。どうやら、晴信は、山本勘助の背後に、義元がいることを見抜いた上で、恋文の使いなどさせたように思われた。そうだとすると他人の恋文の内容など聞かされた義元はばかにされたことになる。

「いかが返事したらよろしいでしょうか」

「なにをだ」

「天竜川沿いに伊那に兵を入れて、諏訪に好意を寄せている知久頼元、保科正俊などを牽制することです」

義元はそこでまた考えた。晴信の要求を入れて、伊那を牽制することなどわけのないことだが、そうすることによって、晴信が諏訪を制圧して、信濃進出の突破口を作る機会を与えるのも考えものだし、この些細な要求を入れないで置いて、他日、意地の悪い返礼をされても困る。

「さてどっちがいいかな」

義元はいくらか醒めて来た顔を平手でこすりながら

「とにかく、返事としては承知したという以外にないだろう。武田と今川は同盟国だからな」

「ではそのように返事をいたします。いずれそのうち、古府中より、走り馬が来て、正式に御出兵をお願いすることになると存じます」

山本勘助は、彼の任務を終了したものとして、義元の前に平伏した。

侍臣が入って来て義元に小声でなにかいって書状を渡した。

「なに、甲斐から走り馬が来た」

義元は書状に眼をとおすと、そのままそっくりそれを山本勘助のところへ投げるように渡した。出兵要請の書状だった。

「晴信という男はよくよく人を食った男だ。勘助をわざと遠廻りさせてよこしておいて、勘助が駿府に着いたと見るや、その辺に待機させていた走り馬をよこして出兵の催促だ」

「どうなさいます」

勘助は書状から眼をはなしていった。

「伊那へ出兵する、ただし、三百騎だ。牽制策なら、そのぐらいで充分だろう」

義元は苦々しく云い放って席を立った。そのころ、諏訪の上原城うえはらでは重臣たちが集まって軍議がなされていた。

千野ちの南明庵がそれまで入った状況を説明した。

「いらさき葦崎に集結した武田軍は約二千、これとは別に、国ぎかいの小尾衆が、約五百を率いて、今にも攻めこんで来るような形勢にございます。それに高遠の動きもただならぬ気配です。高遠家と

諏訪家はいわば兄弟家の間柄にあるのに、この際、急に戦の準備を始めるのは、なにかの野心があるように思われます。もう一つ心配なのは下社の金刺氏の残党の動きです。金刺氏に好意を寄せる者どもがしきりに槍や刀を集めていると聞き及びました」

その報告でまず色を失ったのは頼重の弟の諏訪頼高だった。彼は、もうすぐそこまで、敵の大軍が押しよせたかのように、身震いを始めた。

「敵が来た以上、即刻戦いの準備をいたさねばなるまい」

千野伊豆入道は落ちついた声でいった。そして、語気を変えて

「問題は武田より、高遠頼継の行動にあります。しかるべき人を、すぐ高遠にやって、なんのための戦さの準備かをきつく確かめる必要があると存じます」

その言葉に頼重が眼を上げた。それまでする必要があるかという顔だった。

「僭越ながら、ひとこと述べさせていただきます」

諏訪神社の禰宜満清であった。

「諏訪家と高遠家とは同じ血につながる家、諏訪は惣領家、高遠は分家の間柄でございます。高遠家が、戦の準備をもし始めたとすれば、それは、惣領家に対する援軍以外になにが考えられましょうか。高遠頼継様はとかく気の多い方ですが、こと惣領家に対しては異心のあるべきはずがなく、たとえ異心があったとしても、頼重殿の御器量に比較すれば、頼継殿は足もとにも及ぶものではございません。いくら頼継様でも、そのくらいのことは存じておられます。こういう非常の場合に、味方同士が疑い合うことは、敵に乗ぜられるものにもなり、また敵は、そのために、

高遠殿に異心ありというがごとき、流言を放ったのかも知れませぬ。この際、このことはとくと慎重になされることが肝要かと存じます」

禰宜満清のことばに頼重は大きくうなずいた。

「高遠には満清が行ってよく確かめて来るがいい。そして国境出兵は明日いっばいに完了しなければなるまい。小笠原家、小県、佐久へも直ぐ使者を送って援軍をたのむように」

軍議は頼重の裁断で終った。

合戦が始まるとなると、伝令は地方の名主・寄親にとび、馬や軍兵が集められる。いろいろの説があるが、所領一万石に対して兵三百人というところが、当時としてはせいっぱいのところだったらしいから、諏訪の所領石高を、過大に見積って三万石としたとしても九百人か千人が腹いっぱいのところであった。戦闘員が千名、それに荷駄隊やらなにやらの人を全部ひくくめるめても、千五百人というところが実勢力であったと思われる。頼重の父頼満はその少ないのを訓練によつて活かし、しかも、隣国とのたくみな連合によつて、武田を悩まし、しばしば国境を越えて、甲斐へ攻めこんでいたのである。

諏訪頼満は死んだが、彼の元で働いていた千野伊豆入道はまだ健在だった。彼はその夜のうちに諏訪全郡に走り馬をとばし、翌日の午後には上原城に諏訪の精鋭が集められていた。

小尾衆が国境を破ったという情報に矢島頼光が五百を率いて先行した。瀬沢まで来ると、小尾衆は既に退却したあとだった。物見を放って敵情を偵察すると、武田の本軍は長坂あたりに陣を立てる様子だった。しかし、その武田の本隊も、諏訪軍の本隊が瀬沢についたころは退却に移っ

ていた。

このような、戦争らしからぬ戦争が梅雨になっても続いた。

同じことが二度三度と続くと、諏訪軍も、いちいちそれに挨拶するわけにはいかなかった。

「晴信め、わが武勇におそれをなしているのだな」

諏訪頼重は、甲軍が退却したという情報を聞きたびにそういった。

「お館様、御油断召さるな、これは敵の策略に相違ございませぬ。こうして、諏訪を神経的に疲れさせて置いて、一氣に攻めこんで来るものと思われます」

伊豆入道は頼重に進言した。

「その時は国境で迎えうつだけのことだ。幸い諏訪は天嶮に恵まれている。甲軍はそう易々とは入れないぞ」

頼重は父の頼満がしばしば用いて成功した作戦を頭に画きながらいった。

「問題は前の敵ではなく、うちうちの敵でございます」

伊豆入道が声をおさえて言った。

「なに、うちうちの敵」

「はい、武田に高遠頼継が内応しその頼継に気脈を通ずるものが諏訪に出た場合、この戦さは負けになりまする」

「確たる証拠があるのか」

さすがの頼重も色をなしていった。

「その証拠がつかめないで弱っておりましたところ、かねて、不審な行動がある故、見張りを厳重にしておいた瀬宜満清の家から出た男を捕えました。男が高遠の者であることを諏訪家の家臣の中で、知っておる者がありましたので、きつく究明したところその男は舌を嚙んで死にました」

伊豆入道がそこまでいうと

「それだけでは証拠でもなんでもないではないか。それに高遠頼継がごとき、うつけ者を、なんでそれほど気にすることがある。高遠が諏訪に刃向うつもりがあるならば、こっちが先に攻めほろぼしてやってもいいのだ」

頼重は千野伊豆入道の言を聞こうとはしなかった。

今川義元の軍勢が伊那谷をおびやかしているという情報をもっとも重視したのは小笠原長時だった。彼にはこれが武田の諏訪進攻を助けるための牽制策にも今川氏が信濃侵略を始めるための打診にも取れた。駿河、遠江とおとうみを制圧し、いまや三河をもその勢力下に置いている今川氏が、信濃に軍を進めて来ることは、信濃の武将たちにとっては脅威であった。小笠原長時は伊那の知久頼元や保科正俊とも連絡をとり、援軍の準備までしていた。甲軍が、ひんぴんと国境をおかしたり、大軍を動かして来たりするたびに、諏訪は小笠原家に走り馬を立てた。小笠原家はその度に、出兵の準備をし、そして、甲軍の退却とともに兵を引きかえさねばならなかった。やがて小笠原家は諏訪家よりの出兵要請に注意を払わなくなった。

晴信は、諏訪や小笠原や伊那の情況を確實につかんだ上で、相変らず、一月に一度ぐらい、兵を国境に動かしては引き揚げさせていた。

「どうやら瀬宜満清が、高遠と通じていることが、伊豆入道に感づかれたらしい様子です」

信方が晴信にいった。

「すると早い方がいいな」

晴信は外に眼をやった。梅雨はもう上ったらしくセミの音が盛んだった。

走り馬が甲斐の国の隅々までとんだ。たびたびのことで馴れてはいるが、いささか面倒くさくなっていた地方の国人たちは、すぐにはその命令に応じなかった。第二の走り馬がとんだ。命令どおりの日づけまでに集まらない場合は、その責任者を処罰するという布令を持っていた。国人たちは晴信の決心を察知した。天文十一年六月二十四日、七百騎、兵三千の大軍は甲諏の国境を越えた。

諏訪頼重はそれに対して何等の準備もしていなかった。千野伊豆入道がもしかの場合にと用意していた三百五十騎と兵八百がそのときの諏訪軍の総兵力であった。

千野伊豆入道はその三百五十騎を率いて甲軍を迎え討つために出動した。だが、甲軍は千野伊豆入道と決戦を試みようとはせず、大軍を率いたまま、御射山へ陣を布いた。直ぐ動く気配はなかった。それだけの大軍を持ってすれば、諏訪は一日で落ちる筈であるのに、御射山へ陣をかまえたのは、よほどの余裕があったように思われた。ヘビの生殺しなまころということばがあるが、そのようにも見えた。合戦の機を失してあわてふためく諏訪軍の動きを、御射山から舌なめずりして見

おろしているようでもあった。諏訪軍はなすこともなくうろたえ騒いでいた。

小笠原家への援軍の使者と、高遠頼継への援軍の使者がとんだ。

小笠原長時は、甲軍が御射山に陣を張ったと聞いて、この戦さを勝味がないとあきらめていた。小笠原軍は、諏訪からの矢継早の要請にもかかわらず動かず、甲軍の来襲に備えて塩尻峠をかためた。

高遠頼継は援軍を送ることを受諾した。高遠頼継は全軍をひきいて杖突峠から諏訪に入る故、御安心あれという書状を頼重に送った。

「見ろ、この書状を。いざという場合は、やはり血のつながりはものをいう」

頼重は頼継の書状を千野伊豆入道に見せていった。

「これが頼継殿の本心ならば、この書状とともに、なにか実質的なものが送られて来る筈ではござらぬか。血のつながりがあるといっても、日頃仲が悪い、諏訪と高遠との間故、このような場合は当然、二心なきことのアかしがあつてしかるべきかと存じます」

頼継が諏訪に兵を入れるならば、適当な人質を先によこすのが、戦国のならわしではないかというのが千野伊豆入道の意見だった。

「ばかな、この機に臨んで人を疑うのか、この戦いに負ければ、神代以来の諏訪家はほろびるのだ。そんなときに、頼継が謀叛をたくらむと思うのか」

頼重は真赤になっていた。

「頼継殿ののぞみはただひとつ、諏訪の惣領家を取りたいのでございます。さすれば、好餌につ

られて武田と内通することは考えられます。お館様、人質を頼継殿に要求なさいませ、頼継殿が人質をよこさないかぎり、高遠の兵を諏訪へ入れてはなりません。」

だが頼重は首をふった。

「満清を高遠にやってある。頼継に二心なきことの誓約も取って来ている。これ以上の要求をすれば、頼継は、援軍をよこさないだろう。」

千野伊豆入道の予想は不幸にして当たった。七月二日になって杖突峠に集結した高遠頼継の軍二千は、峠から一気に諏訪の安国寺に向って攻めこんで来たのである。

「頼継が裏切った?」

頼重はそれを聞いて色を失った。激怒で口がきけないほどだった。頼重は千野伊豆入道に至急帰って来るように命じた。

千野伊豆入道は甲軍にそなえるために矢崎原（塚原）に陣を張っていた。軍勢は少ないが、精鋭だった。甲軍の動きによって、その弱点に噛みつきながら、時を過して形勢の変化を待つか、和睦に持つていこうと考えていた。武田が大軍を信濃に入れたとなると、相模の北条や、上野の上杉も黙ってはいないだろうし、北信の村上義清もなんらかの行動に出るだろうと思った。その形勢の変化があるまで、上原城を持ちこたえればいいと思った。伊豆入道が甲軍と対峙している間に上原城の籠城の準備がとこのうことを彼は切望していた。

だが千野伊豆入道の期待もむなしく高遠頼継が諏訪に侵入すると同時に下諏訪で金刺堯存が旗を挙げたという情報が入った。三方に敵を受けたのではいくら豪傑の千野伊豆入道でも陣を払っ

て、上原城へ引きあげるよりいたし方がなかった。それに頼重の帰城命令が立てつづけに彼をひき立てた。

彼は甲軍の追撃を予想しながら軍を引いた。甲軍は不気味なほど、静まりかえっていた。武田菱の旗さしものが初夏の風に翩翩とひるがえっていた。

千野伊豆入道が城に帰って見ると、城内は騒然としていた。

「頼継め、諏訪の分家でありながら惣領家を盗もうとする盗賊め」

諏訪頼重はいたずらに怒鳴っているだけだった。禰宜満清の裏切りも明らかになったが、そのころはもう、彼の一族は逃亡したあとだった。

「全軍をあげて頼継を攻めるのだ。こうなれば、武田など、どうでもいい、敵は頼継だ、獅子身中の虫だ」

頼重はほとんど自省を失いかけていた。千野伊豆入道は、従弟の千野南明庵の顔をふりかえっていた。

「最期のときが来たようだ。今宵頼継殿の本陣へ切りこもう」

諏訪は三方に敵を受けて浮足だっていた。まともに戦って勝てる戦さではなかった。夜襲しても、勝てる可能性より、負ける可能性の方が多かった。伊豆入道は安国寺の方へ眼をやった。敵が放火したらしく、煙が空高く上っていた。それは諏訪家滅亡の狼煙のようにも見えた。

合戦見分

千野伊豆入道は上原城をふりかえって見た。上原城を見上げるのもこれが最後だろうと思った。城もそのままのかたちで残るものとも思えないが、入道自身生きて帰れるとは思っていなかった。「今となつては守るべきでござる。守って守りぬいて、小笠原の援軍を待つべきだと考えます。ひと月守れば、小笠原は必ず動きます。北信の村上も、黙って諏訪の亡びるのを見てはいまさない」

千野伊豆入道は諏訪頼重に、上原城守備をすすめた。だが頼重は、その言を用いようとしないうばかりか、千野伊豆入道と千野南明庵に手兵をひきいて、高遠頼継を攻撃することを命じたのである。

「諏訪はいま三方からこまれています。一兵も無駄にすべきではないと存じます」
と諫言した千野南明庵も

「臆病者め、高遠頼継の二千の軍がこわいのか」

と頼重に一喝されるにおよんで、彼もまた、諏訪家の最期を身にしみて感じたのである。

（お館様は気が動転されているのだ）

伊豆入道はそう思った。その気を静める術はなかった。強いて静めようとするならば、主家の命にそむくことにもなり、反逆の汚名を着ることになるかも知れなかった。

伊豆入道も、南明庵も、代々諏訪家に仕えた宿老として、主家にそむいたと云われたくなかった。

ふたりが、頼重の命に従って、城を出たとき、事実上諏訪家は亡びたも同然だった。あとには頼重を補佐して、武田の大軍と戦う才覚を持った宿老はいなかった。

上原城はすぐそこにあるのだが、午後になって降り出した小雨に煙って一里も先にあるように見えた。

伊豆入道と南明庵は城に訣別してから、眼を安国寺の方へやった。黒煙は雨雲の下で横になびいていた。

「夜陰に乗じて、安国寺の裏山から、敵陣深く斬りこみ、高遠頼継殿御首をいただくより方法はないな」

伊豆入道がひとりごとのようにいった。

「いかにもさよう、百や二百の軍をつれて正面から斬り込んだところで、敵は二千、どうにもなるものではない、決死の勇者を率いて夜襲をかけるのが最上の策でしょう」

南明庵がいった。

ふたりの意見は全く一致したのである。伊豆入道は、引きつれていた武士の中から五十名だけを残し、他は城へ帰るように入った。

「お館様がなぜ帰って来たかと云われたら、高遠頼継殿の首を取るには五十名で充分だと、千野伊豆入道が申したと伝えるがいい」

城へ帰れと云われた武士たちが槍をかついで、降りて来た坂をまた登っていくのを見送ってから伊豆入道は選ばれた五十名の武士にいった。

「これからわれわれは、高遠頼継殿の陣所に斬りこんで死ぬつもりだ。相手は三千こちらは五十万が一にも勝てるいくさではない、必ず死ぬいくさだ。女房子供のことが気にかかる者は、女房子供のところへ帰るがいい。女房子供がいなくても、死ぬのがいやなら、戦列をはなれてどこへでもいくがいい。一刻の余裕を与えるから、その間によく考えて、もし、拙者と一緒に死ぬつもりの方は、後刻あ的一本杉の前に集まるがいい」

伊豆入道は道ばたに立っている一本杉をゆびさしていった。武士たちは伊豆入道の話が終ると同時にはげしい云い合いをはじめた。が、その論争もやがてしまつがついて、それぞれが勝手な方向へ姿をかくしたのを見て

「何人ぐらい集まりますかな」

と南明庵がいった。

「さあ、十名も来ればいいが……」

しかし、ひととき後に、一本杉に集合した武士の数は二十七名だった。

「ここに集まった者こそ、本当の武士というものぞ」

伊豆入道はそう前置きしてから

「これだけの人数で真正面から、高遠軍へ斬りこんでも、犬死となるだけで意味のないことだ。われわれは敵の眼に立たぬように、ひとりずつ安国寺の裏山にしのびこんで集結し、夜を待って、高遠頼継殿の本陣に斬りこむことにする。集結場所は安国寺のすぐ裏山の小さい祠の前である。もし集合に遅れた者は、敵の陣中に上った火の手の山手側に集まれ、そこに味方はいる」

伊豆入道は二十七名の武士にはじめて、夜襲の計画を洩らした。

伊豆入道と、南明庵は、薄暗くなってから行動を開始した。田圃の畔道を遠く迂回して、安国寺の裏山に出た。道案内に立った獵師源兵衛、作造のふたりに安国寺を探らせて見ると、高遠頼継は諏訪軍の抵抗を受けずに、簡単に諏訪の領内に侵入したことをいいことにして、軍を大熊から真志野方面に進めている様子だった。

「高遠頼継という男は諏訪惣領家と戦う前に、まず盗めるだけ領地を盗んでおこうというさもし根性らしい」

伊豆入道は憎々しげにいつてから

「本陣はどうだ、本陣も大熊へ移転したのか」

そうだとすれば、そっちの方へ急遽隠れ場所をかえねばならなかった。

「本陣はたしかに安国寺郷に置いてございます。安国寺郷のはずれの民屋三軒が本陣となっております」

獵師源兵衛は確信をもってそういった。

日がすっかり暮れるまでに、安国寺裏山の小祠に全員が集まった。千野伊豆入道は二十七名の

兵の中から六名を選び、更にこれを三名ずつに分けて、それぞれに案内役として獵師源兵衛と作造をつけさせた。放火して、騒ぎ立てる役であった。残りの者は、火の手に敵兵を釘づけにして置いて本陣へ斬り込んで一挙に高遠頼繼を討ち取ろうという計画だった。

雨は夜になると、本降りになった。

千野伊豆入道、千野南明庵の夜襲は、天文十一年七月四日の未明に行われた。火は安国寺郷の南側から起り、折からの南風にあふられて火の手は高く上った。

安国寺郷はその前日、高遠軍によって放火されたけれど、その日は小雨、無風であったから、類焼は少なく、安国寺郷はほぼ残っていた。

諏訪の武士は涙を飲んで、自らの領地内の民家に火をつけた。こうしなければ、侵略者を寡兵で倒すことができなかったのである。雨中の火事で、高遠軍はうろたえた。その中を諏訪軍の六人の兵と二人の獵師は

「千野伊豆入道が二千の大軍をひきいて夜襲して来たぞ」

とふれ歩いた。

その時の諏訪軍の兵力は全部集めても、千人足らずだった。二千の大軍が来るはずがないのに、二千の大軍が来たといえば来たように見えたのは、それだけ、高遠軍は諏訪からの攻撃を恐れていたのであった。高遠軍が浮足立ちながらも、諏訪軍の夜襲部隊への迎撃態勢に入ったところ、伊豆入道は二十一名を率いて、高遠頼繼の本陣へ斬りこんでいった。

本陣近くでも火の手が上った。

諏訪軍によつて包圍されたと感違ひして逃げる者や、同士討ちをする者で高遠軍の陣内は混乱をきわめた。彼等は雨の中で、やたらと刀をふりまわし槍をふるつて味方同士傷つけ合つた。

高遠頼繼は伊豆入道の来襲と聞いて、すぐ逃げる準備をした。彼は禰宜満清ねぎまんせいと、やはり、諏訪の家臣でありながら高遠に寝返つた有賀遠江守のふたりに守られて本陣を脱出して、大熊へ逃げた。伊豆入道と南明庵はこれを追つた。だが、そのころは夜が白々と明けかけていた。戦いは終つた。

千野伊豆入道と南明庵は高遠軍の五百の兵の包圍のなかで、刺しちがえて死んだ。

千野伊豆入道と千野南明庵が討死してから一ときほどたったころ、上原城に火の手が上つた。

諏訪頼重は上原城を焼き、桑原城へ全軍をひきいて逃げたのであつた。

「千野伊豆入道及び千野南明庵、そして、その部下の二十余人の武者たちのふるまいはまことに見事なものでありました」

床几しょうぎに腰かけている晴信の前にひざまずいて山本勘助がいつた。山本勘助は晴信の命を受けて、高遠軍の動静を調べて来たのである。

「昨夜の夜襲によつて、高遠軍の死者百人、負傷三百、ほとんどが同士討ちにございます。諏訪軍の死者、千野伊豆入道、千野南明庵のほか二十余名……」

「おいしい男たちを殺したな」

晴信はそのときになつてやつと口を開いた。まるで人ごとのようなことをいう晴信の顔を見る

と、晴信の眼は、炎上^{えんじょう}している上原城にそそがれていた。

「このつぎは桑原城だな」

晴信がいった。ひとりごとのようでもあるし、山本勘助にたいしての命令のようにも聞えるので、傍^{かたわら}にいる板垣信方が、なんとおおせられましたかと聞いた。

「今度は桑原城へ行つて、よくよくいくさを見分してまいるように」

晴信は山本勘助にはっきりいった。

「見分して参るのでございますか……」

山本勘助はやや不服そうな顔でいった。前夜の安国寺、大熊の戦いも、今宵^{こよひ}千野伊豆入道の夜襲がありそうだという間者の報告を聞いた晴信が山本勘助に、戦さの始まりから、終りまで、つぶさに見てまいれと命令したのである。山本勘助は見分にこだわった。戦さ見物だけではつまらなかった。

「そうだ。味方の方ばかりを鼠^{ひし}肩^{かた}目^めに見ず、公平な立場で、いくさを見分してありのままを余^よに報告するように」

山本勘助は分ったようでもまだよく分らなかった。

「すると、私の役目は戦さ目付^{めつけ}……」

と云おうとすると

「いや、軍さ目付はそちがやらずとも、ちゃんとした者がやる。そちは、飽^あくまで戦さの見分だ。はつきりいうといくさの見物をしてこいといっているのだ。第三者の眼で、いくさの経過を見る

「こともまた必要なのだ」

晴信が第三者の眼といったので、山本勘助はほぼ自分の任務がなんであるかを知った。

（やはり、自分は第三の眼なのである。今川義元の眼として、武田と諏訪の戦いを見てこいと晴信殿はいっておられるのだ）

山本勘助は晴信のそばをはなれると、桑原城へ向う武田の大軍のなかを駈^かけ抜けながら前へ前へと進んでいった。

桑原城は上原城に比較してひとまわり小さい城であった。城にこもって甲軍を迎えうつつもりならば、上原城の方が、はるかに地の利を得ているのにもかかわらず、上原城を捨てて、桑原城に逃げた諏訪頼重の気持は山本勘助には分らなかった。

それに上原城と桑原城とは呼べばとどきそうな距離であり、陣を立て直したと思われるほど目立ったものはなにひとつとして見当らなかった。

桑原城は小城だった。吹けば飛ぶような小城ではあるが、吹きとばす方法が容易に見つかりそうもない城だった。そこが、見どころと云えば見どころであった。城は松の木におおわれた小さい山の上にあつて、この山は意外に急傾斜であり、それに道が一本しかないので大軍が襲^おしよせたとどこでどうにもならない城であった。

「なるほど、諏訪殿は籠城するつもりらしい」

山本勘助は松の木によじ登って

「籠城を覚悟した以上、兵糧は充分たくわえてのことだろう」

と思つて眺めて見るのだがどうもそのようには見えない。桑原城は城というよりも、砦とりでであり、云わば、本城の上原城を守るための出城であつた。そこに逃げこんだ、数百の人の命を長期間支えられるだけの食糧のたくわえがあるとは思われなかつた。

(では、なんのために、諏訪頼重はここへ逃げこんだのであろうか)

山本勘助にも分らなかつた。

(なんの計画も方策もなく、さりとて、逃れていくあてもなく、思いあまつてこの城へ逃げこんだとすれば、これもまたあわれなことである)

山本勘助は眼を上原から桑原へかけての街道へやつた。武田の軍勢で道の色が變つて見えた。はるばる甲斐からやつて来た兵士たちは戦さに来たのに戦さらしいものはなにひとつしないうちに、上原城は焼け落ち、安国寺郷から大熊、真志野にかけての諏訪の領土は高遠軍におさえられ、敵の大將、諏訪頼重は一族をつれて桑原城に落ちのびていくという、ばかばかしいほど、手ごたえのない戦争に、あきれかえつていた。この辺でひとあばれ、あばれたいところだったが、あばれるにしても相手がいないことにはどうにもならなかつた。

「諏訪の腰抜けどもめ、甲斐の大軍を見ただけで逃げてしまった」

甲軍の兵たちはそういつて笑つた。事実そのとおりだったが、そうなのは、すべて、晴信の作戦が功を奏したのだということを知っているものは少なかつた。

「今度の戦いではわが軍から一兵の損失も出すな」

晴信は板垣信方に命じた。桑原城包囲完了の知らせを晴信に言上ごんじやうした信方は、小首をかしげて

「一兵の損失も出すなとおおせられても……」

戦いのことですから、多少の損失は止むを得ないことですと云おうとする信方に晴信はさらにいった。

「滅亡一步手前にいる敵を相手にして貴重な兵を失うことはない。もうしばらく見ていて、明日の朝にでもなつて、使者を送れば、頼重は、もともなく降参するだろう。下手に攻撃をしかけて、禰々^{ねね}に怪我^{けが}でもさせたなら可哀そうだからな」

晴信が妹の禰々のことを口に出したので、信方は、やっと晴信の気持が読めたような気がした。ひとおしに押しつぶさないのは、妹の禰々がいるからなのだ。もともと、禰々御料人^{みりょうにん}は政略結婚のために、頼重のところへ嫁した女である。十三になったばかりの禰々を諏訪頼重へやって、諏訪との間に同盟を結んだのは父信虎であった。女はすべて政略の道具としての結婚のみがしいられる戦国の習いであったとしても、晴信には、いたいけな妹の禰々が諏訪頼重のところへ嫁していったのが、不憫^{ふみん}でならなかった。その不憫な妹をこれ以上不憫にしたくないというのが晴信の気持であった。

「ただいまより陣中を見廻り、命令のあるまで無暗^{むやみ}と攻撃をしかけないようによく申しつけて参ります」

板垣信方は晴信のそばをはなれて、馬を桑原城のふもとに進めた。攻撃をしかけてはならないといつても敵と向き合っている甲軍の兵たちが黙っている筈がないと思つていた。多少のこぜり合いはやむを得ない。

板垣信方は馬をおりと、数名の屈強な兵に守られながら、桑原城への小道を登っていった。せまい道に兵があふれて、それをよけるのが容易なことではなかった。

「これはまずい。こんな状態なところへ、敵が城門を開けて、出撃して来たら、こっちがひどい目に合うぞ」

板垣信方がそういったのと山上の方角から喊声かんせいが起ったのと同時だった。弓組は前へ出ると、しきりに叫んでいる声が聞えた。城壁に向ってさかんに矢が射られていた。しかし、城壁には敵兵らしい者の姿は見えなかった。

「申し上げます。鎌田五郎殿の一隊が城に近づいたところ、城中より石つぶてが雨あられと飛んで参り、額を割られて死んだ郎党三名、手負い五名が出ましたので、一応、兵を森の中にひそめ、様子を窺うかがいましたるところ、相手はただひとり」

伝令は息をついだ。

「なに相手はただひとりだと」

信方は驚いて反問した。たったひとりの石つぶてに、甲軍の精銳がなやまされているということは、ありそうもないことであった。

「ただひとりでございます。石をふところにして、城のやぐらに現われたと思うと、次には、城壁に立上り、姿を見たときには、石が飛んで来るといったような早業はやわざ、とても弓では、射とめることができません」

信方は首をひねって聞いていたが

「そやつに深く取り合うなと鎌田五郎に伝えるがいい」

（諏訪の智将ともいわれた千野伊豆入道と千野南明庵は大熊で戦死したはずである。とすれば桑原城内で策をめぐらしている者はだれであろうか）

「そうだ矢島頼光がいる、若年じやくねんながらなかなかの武将だ」

信方は、更に伝令を飛ばして、鎌田五郎をいましめた。

板垣信方が軍使として桑原城に向ったのは諏訪頼重が、桑原城に移った日の翌日だった。

「余に降伏をすすめに参ったのか」

頼重は信方の顔を見ると頭からかみつくようにいった。

「いまとなつては、その方がよろしいかと存じます。降伏とは申せ、もともと晴信様とは深い縁につながることもゆえ、ほかの場合とはおのずから違ふかと存じまする」

信方が深い縁といったのは、晴信の妹の禰々が頼重の正室として嫁よめいでいることをさしていったのである。

「ほかの場合とおのずから違ふという意味はなにか」

頼重は、それが降伏の条件を指しているのだなと思った。

「晴信様は頼重殿、頼高殿の御兩人様がしばらく、古府中へお越しいただくということ以外には、なんの条件もつけないと申しておられます」

「余を人質とするのか」

頼重の顔は怒りでふるえていた。

「しばらくは、そうしていただかないと、おさまりがつきませぬ、枉^まげて御決心のほどお願い申し上げます」

信方はそのところは、はつきりと力をこめていった。

「余を古府中へ連れさり、余のあとの諏訪の領土と、諏訪神社の大祝^{おおはふり}の職を高遠頼継に与えるというならば、余はここを死んでも動かぬ、高遠頼継がごとき奴に神域をけがされたくはないのだ」

信方はその頼重の顔を侮^が蔑^{べつ}の眼で眺めていた。現に諏訪頼重は、あらゆる面で、諏訪という座から落ちてゐるのだ。領民からは離反され、家来も、上原城から、桑原城まで来る間に、その多くは逃げ去っていた。今は矢島頼光とその輩^は下^かの数十人の武士だけが、頼重の残存兵力だった。そういう状態では頼重の発言は効力はないし、その発言すらできる立場にはいなかったのである。（こうなったら、おとなしく助命でも乞えばまだまだ見どころもあるのに）

信方はあたりに眼をやった。隙間^{すきま}だらけの城だった。城というよりも、小屋のような暗い板の間に、熊の皮を敷かせて、その上に、ふんぞりかえって、信方を見おろしている頼重の、高くて細い鼻梁^{はなばな}が信方にはたたきつぶしてやりたいほど憎らしく見えた。

（諏訪家の当主というだけでなんの才覚もないくせに、やたらに兵を動かし、武田に楯^{たて}をついて来た頼重め）

信方は心の中でそう云った。

「講和の条件はただ一つ、高遠頼繼に諏訪の領土と、諏訪神社の大祝の職を与えないこと、これだけを約束してくれるならば、余は、晴信にこの城をあげわたすであろう。そのように晴信殿につたえていただきたい」

頼重の薄い唇から出たその言葉を、信方はもう一度復誦ふくしやうしてから

「では、そのように晴信様に伝えます」

そして、信方は、片膝かたひざを立てかけたところで、また、坐りなおして

「諏訪家には石礫つぶての名手がおられるが、差支えなければその名をお聞かせ願いたい。きのうは、その石礫の勇上に、さんざん、なやまされた」といった。

「石礫の名手、はてな」

頼重が不思議そうな顔を見ると、そばにいた矢島頼光が

「白狐島太郎左衛門にございます」

と頼重に伝えた。頼重はそのような勇者がいることすら知らなかったのである。

信方は桑原城に立って、附近を一望した。城内には、いたるところに石礫の塚があった。これだけの石礫と白狐島太郎左衛門ほどの腕の者が数名いれば、或はこの城は、かなりの大軍を長いこと引きつけて置くこともできたであろうと思った。

（それにしても、この城の中の戦意のないことはどうだ）

信方は城兵と眼が合うことがあったが、城兵の眼の中には敵意らしい敵意は感じられなかった。

信方は諏訪の敗北の決定的な原因は、その辺にあるのだと思った。

領民ばかりでなく、家来の心まで頼重から去っているのだと思った。やたらに戦争ばかりして歩いていて、領民を見てやらなかったそのむくい、このようなかたちとなって現われたのだと思つた。

その日の午後になって、諏訪頼重、諏訪頼高ほか、諏訪家の一族は桑原城を出て武田方に降伏した。晴信は、頼重の出した条件を全部了承したばかりでなく、頼重、頼高兄弟の生命の保証を与えた。諏訪頼重、頼高兄弟はその翌日には古府中へ送られた。

古府中に凱旋した晴信は、なにかと、十日あまりを戦さのあと始末に費したあとで、山本勘助を呼んで

「いそがしきにかまけて、そちの合戦見分の話はまだ聞いていなかった」

それを聞きたいといった。山本勘助は松の木の上から見た戦さの模様を話す前置きとして

「諏訪家の一人の石つぶての名人に武田の大軍がほんろうされる様は実に齒がゆく思われました。もしあのとき、信方様がお出にならなかつたならば、甲軍の死傷は相当な数になつたでしょう」といった。

白狐島太郎左衛門の石礫は矢よりも早く、唸りを発して正確にとんでいって額に命中した。その白狐島太郎左衛門ひとりのために、城壁に近よれずにいた甲軍を山本勘助は

「太郎左衛門の石礫がこわいので火も焚けず、まるで策を失つた野盗のように、ただごろごろと松林の中に寝ていた甲軍の様子はあまり讃められたものではありませんでした」

といった。

「その白狐島太郎左衛門という男はどうした」

「逃げました。諏訪家が降伏すると聞いて、ふところいっぱい石をつめこんで裏山へ逃げましたが、すぐそのあとを追って居どころを確かめてまいりました」

山本勘助はあたり前のような顔をして

「太郎左衛門は下桑原の豪士の子として生まれましたが、生来石投げが上手ですので、弓を用いず、石礫で鳥を落し、獣を取るという腕前が矢島頼光にみとめられて、今度のいくさにはじめて参加いたしました」

「なんとかして甲州へつれて来るわけにはまいらぬか、その太郎左衛門を石礫組の大將にして一隊をつくらせて見たいのだ。石礫は奇襲作戦には、役に立つ」

晴信がそうまでいうと山本勘助はにこっと笑って

「実は、白狐島太郎左衛門を古府中までつれて来ております」

晴信は山本勘助の顔を見た。油断できない相手だなと思った。おそらく、この男とは、今後、心の探り合いをやらねばなるまいと思った。晴信はやや不興ふきようげに横を向いたが、すぐ思いかえしたように

「小泉こいづなの里美さとみどののところへ使いにいってくれ」

「恋文のお使いでございますか」

それだけの用にわざわざ瀬津元直のところまで行くのですかと不満気な顔をする山本勘助に晴

信は

「いや恋文の使者ではない。里美どのに、このたびの、武田と諏訪との戦いの模様を話しにいつて貰いたいのだ。言葉に衣きぬを着せず、そちが見たままのことを里美どのに話せばそれでいい。実はそちに戦さを見分させたのも、もとはと云えば、そのためだった」

「里美どのはいくさの話がお好きなのでございますか」

「あまり好きではないだろうな。だから、話も、その辺のところは加減して、例えば、白狐島太郎左衛門の話などを多くしてやれば里美どのは面白く聞いてくれるだろう」

「御用はそれだけでございますか」

「いや、まだある。しばらく禰津殿のところに厄やっかい介になって、小県から佐久さくにかけての様子を見て参れ、それに里美どのの身辺のことものだ」

最後のほうを晴信は小さい声でいった。

「里美どのの身辺と申しますと――」

そう口でいって、いかにも分らないような素振りを見せながら、山本勘助は、美しい里美をねらう狼おおかみどもがいたらその身元を洗って来いと晴信は云っているのだなと思った。

「とにかく里美どのの身辺に気をつけていて、なにかあったら直ぐ知らせてくれ。余にとってはいづれここへ迎えねばならぬ女だからな」

晴信は、けろりと本音を吐いて、当てつけられてびくくりしたような顔をしている山本勘助に「敵の陣中に夜陰ひそかに忍び込んで情報を探るばかりが間者の役目ではない。時には天日のも

とに堂々と相手の身边を探ることだって必要だ。いいか、このたびの仕事は飽くまで堂々とやるのだぞ」

山本勘助はその日のうちに瀬津元直のところへ飛んだ。

「あら、このたびのいくさの話を私に聞かせるために、わざわざ来て下さったのでございますか」

里美は眼を輝かせていった。

さようでございます。お館様は、手がら話を里美様に申し上げるのではなく、ありのままを申し上げよと仰せられました」

山本勘助はそう前置きして、いくさの話をした。里美は花のように美しく、坐って山本勘助の話を聞き、ときどき、鈴をふるように澄んだ笑い声を上げた。

山本勘助の話が終ると、里美は、彼のその労苦にむくいるため、麦粉で作った菓子を出して「どうぞめし上って下さいませ。これは、父のところへ駿河の今川義元様から送られた京都風のお菓子でございます」

山本勘助はびっくりして手を出しかねていると

「今川義元様から小笠原長時様の手を経てとどけられたのでございます」と補足した。

山本勘助はその菓子の一つを口に入れた。口のなかで、とろけていくようにうまかった。

「どう、おいしいでしょう。そのお菓子も作りもの、お話も作りもの……」

里美がいった。

「拙者の話は作りものでございません」

「でも、諏訪頼重様からの手紙とはだいぶ違っております。どちらかが作りもののお話でございましょう」

里美は山本勘助の顔を見てにこりと笑った。山本勘助は里美に心の中を見すかされたように顔色をかえた。

山本勘助が里美の手文庫から、諏訪頼重の手紙を盗み取ろうと決心したのはその瞬間だった。

戦国に涙なし

山本勘助は諏訪頼重から彌津元直の三女里美に送られた手紙のことを考えていた。夜ひそかに忍びこんで、里美の手文庫からその手紙を盗み出すことは、たいしてむずかしいことではないと思った。一時はそうしようかと思っただ、晴信に、今度は正々堂々と里美に会って来いと云われたことを思いかえすと、うかつのことはできなかった。

「どうなされました。急に考えこんでしまわれたのは、なにか、わたしの申したことが気になったのでございましょう」

里美は山本勘助の心の動きをすばやく見て取っていった。

「実は、諏訪頼重殿から里美様へさし上げた手紙の内容が気にかかります」

山本勘助は、里美の聡明な美しさの前に出ると嘘が云えなかった。

「そうでしょう。でも、ほんとうに気になるのは、晴信様かも知れませんわ」

「晴信様の気になるようなことが書いてございましたか」

山本勘助は身体を乗り出すようにしていった。

「ございましたわ。でも、その手紙を他人様に見せるわけにはいきませんものね。そうそう、気になるといえば、あなたの御主君の今川義元様のお手紙のほうが晴信様には気になることでしょう」
そして里美は声を上げて笑った。

「拙者の主君は武田晴信様。今川義元様には前にお仕え申し上げたが、いまは関係はございません」

「あら、ほんとうにそうでしたわね。わたしは、まだ、あなたが今川家随一のお使者衆のような気がしておりました。あなたのお噂は、前々からあまりに高かったので、そのままわたしの頭に入って沈んだままでございました。こんどからは、あなた様は晴信様のお使者衆と思い直して——」
「思い直すことはございません。拙者は晴信様のお使者でございます」

山本勘助は里美にからかわれている自分がひどく可哀そうでならなかった。今川義元の家来が武田晴信のところへ来たのだから、誰もが、山本勘助の背後に光っている今川義元を想像するのは当り前である。それにしても里美という女は、どこまで本気で、どこまで、とぼけているやら

分らない。とぼけたり、本気になったり、からかったりしていながら、山本勘助にいささかも腹を立てさせないのも、彼女が才女である所以ゆえんであらう。山本勘助はすっかりやりこめられた恰好でまた考えこんだ。

「そんなに考えこんでばかりいると、お身体からだにさわりますわ。明日の朝、近所の豪士を集めて館の広間で歌の会がごございます故、お出席になりませぬか。わたしも、わたしのところの腰元たちも、総出で歌会に出ることになっております。この館は歌会となると、ほんとうにみんなが夢中になって、どの部屋もからっぽにして、歌つくりの精を出すのでございます」

里美はさりとって

「でも、山本勘助様は、そんな女どもがやるようなことより、御近所の城々を見て廻る方が、おいそがしいかも知れませんか、しいてお誘いはいたしません」

里美はそれまでの笑顔をひっこめて、歌会は明日の朝から昼ごろまでつづくだろうと念をおした。

山本勘助は里美の暗示を、何度か頭をさげて受け取ると、歌会にでるかでないか、よくよく考えさせていただきます。ひよっとすると、このまま古府中へ帰るかも知れませんか、ここで改めて、晴信様への姫様のおことばをいただきたいという

「私は雨がイヤでございます。一年立ては、またあのイヤな梅雨が来る。梅雨の音をひとりで聞いていると生きているのがイヤになってしまいます。わたしは、季節ならば、秋、それも晩秋の、澄んだ空が好きだと晴信様にお伝え下さい」

里美は意味ありげなひとことを残して座を立った。

山本勘助はその夜のうちに禰津家の邸内に忍びこんで夜の明けるのを待った。

里美の居室の縁の下に入っていると、里美がいったように、女どもの、立ち騒ぐ様子がよく分る。歌会に出る準備をしているのである。日が昇ったころ、頭上は急に静かになった。人の気配はなかった。

山本勘助は里美の居室に入りこんであたりを見廻すと、里美の手文庫はどうぞ中を見て下さいといわんばかりに彼女の机の上に置いてあった。鍵はかけてなかった。手紙が二通あって、一通は諏訪頼重からのものであり、一通は今川義元のものであった。

山本勘助は立ちながら手紙を読んだ。読んでいながらも気は八方に配られていた。もし家人が来たら、逃げ出す準備はできていた。

二通の手紙を読み終った山本勘助は、それをもとどおり到手文庫の中へおさめると、その部屋にはほこり一つ残さないようにして、再び縁の下にもぐり込んで、暗くなるのを待って、禰津の館を出た。

走り馬に乗って山本勘助が帰館したと聞いた晴信は咄嗟に里美の身になにかあったなと思った。

しかし、山本勘助の報告は里美の身の上ではなく、諏訪頼重が里美に宛てた手紙の内容であった。

「諏訪頼重殿は、手紙の中で晴信様が高遠頼継をそそのかし甲諏の条約を破って諏訪に侵入し、神氏以来の諏訪の地を奪取したことを述べ、これを快く思っていない小笠原長時、村上義清、長窪の城主大井貞隆等が、近いうち力を合わせて武田を攻めることになるだろうから、そのときは

なんとかして諏訪へ帰るか、諏訪へ帰れないときは、小県へ逃れて再挙をはかるつもりだと書いてありました」

晴信は山本勘助のことばを聞き終ると色をなしていった。

「武田が諏訪を攻撃したのは頼重殿が里美どのに書いたとおりだ。小笠原、村上、大井が協同して武田に刃向って来るというのも、いいだろう。問題は頼重殿が書いたその最後のくだりだ。諏訪へ帰るか、小県へ逃れて再挙を計るつもりだというのは、頼重殿がいまもなお、反逆の心を持つておられる証拠である」

晴信はそばに坐っている、板垣信方と駒井高白斎に

「そなたたちはこれをどう見るか」

といった。

「お館様、決心なさるべきときかと存じます」

信方はためらわずにいったが、駒井高白斎は黙っていた。

「高白斎はどう思うか」

と晴信に答えをさいそくされても、駒井高白斎は、なおしばらく考えてから

「諏訪をほんとうに取りつぶすのでございますか。諏訪は神氏出の名家、その諏訪家の取り扱い如何によつては、信濃国しなのくに全部を敵に廻すことになります」

「諏訪が亡びたことによつて信濃への道は開かれた。信濃の国全体を敵に廻すことを余はおそれてはいない。それに大義名分がある。襴々たらたらの生んだ寅王とらおうを諏訪家の後継者として、武田はその後

見役となる」

「やはり、頼重殿を……」

高白斎は晴信にすぎるような眼を向けた。

「そうだ、やはり敵は滅ばさずばなるまい。捕われの身にありながら逆心をいなく頼重殿を許して置くわけには参らぬ。信方、頼重殿に腹を召されるように伝えろ」

晴信の顔は蒼白だった。なにか大きな障害物を暗い淵へ突きおとそうとしている顔つきだった。頼重の貴公子然としたつめたい表情と入れ替って湖衣姫の悲しそうな顔が浮び上った。

信方が立上った。

晴信は信方のうしろ姿に手を上げて呼びとめようとしたが、声にはならなかった。信方が出ていってから晴信は一呼吸ついて、そこに平伏している山本勘助にいった。

「里美どのの手文庫の中にはほかには手紙はなかったか」

「は、はい。他に、一通もございませんでした」

山本勘助は嘘をいった。里美あての今川義元の恋文のことはいえなかった。山本勘助にとっては、今川義元は主人である。山本勘助の家族は、駿府の城下に今も尚止め置かれて以上、今川義元に背を向けるようなことはできなかった。彼は、他には手紙は一通もなかったと答えながらも、その嘘を意識して顔を上げられなかった。嘘を気にするのは、山本勘助の心が晴信に傾きつつある証拠だった。山本勘助は、その自分を叱った。

「そうか、今川義元殿から、里美どのに送られた恋文は手文庫にはなかったかな」

晴信は、山本勘助の顔をさぐるように見てから

「実は、小笠原家の、使い番のあとを従^つけていった大月平左衛門が、小泉の長窪の手前で、その使い番を取りおさえて、持っていた手紙を奪^{うば}ったのだ。一通は小笠原長時が長窪の大井貞隆にあてた手紙、一通は今川義元殿から里美どのにあてた手紙であつた。大月平左衛門は手紙を読んで、すぐ使い番に返してやったが、それからその手紙がどうなつたかは知らぬ。今川義元殿が里美どのに宛^あてた恋文は、信濃の国の絶世の美人といわれる里美どのを駿河^{するが}の海のそばに立たせて、富士とその美しさをくらべて見たい、もし駿河に心を寄せられるならば、小笠原家より、そちらへ御案内の使者を向けると書いてあつた」

山本勘助は黙^{もく}って頭を垂^たれていた。彼が盗み読みした内容と同じであつたからである。

「今川殿も今川殿、諏訪殿も諏訪殿……そして、この晴信も晴信だ」

晴信は自嘲^{じちやう}的なひとことを洩^もらすと、めつたに見せたことのない、はげしい顔つきで馬を引くと怒鳴^{どなり}つた。なにか、心の落ちつきを失^うつたときや、面白くないときに、晴信は馬に乗^のつて、あてもなく躑躅^{つづじ}が崎の館を飛び出すことがあつた。

数人の家来が、晴信の馬のまわりを取りかこんだ。

古府中東光寺学寮の周辺を警備する武者たちは怒^おつたような顔で歩き廻^{まわ}っていた。彼等は寺の中に捕^とわれの身になつている諏訪頼重、頼高兄弟になにかが起ろうとしていることを知^しっていた。朝から、武田の重臣が、何人か、寺の門をくぐり、すぐ歸^{かへ}つていった。重臣の顔には、ただなら

ぬ気配がみなぎっていた。昼過ぎたころ寺を訪れた駒井高白斎が門を出るときの顔は悲痛に打ちひしがれていた。涙こそ浮べてはいなかったが、その顔は泣いた顔だった。

「いよいよ諏訪殿は御切腹か」

ひとりの武者が空を見上げていった。午後になって、急に発達した黒雲が古府中の空を急激な速さでおおっていった。無気味なほど、黒く、厚く、能動的に空をうねっていく雲だった。雲の底が垂れ下り、なにかのはずみで、雲の天井が一挙に落下して来そうな空模様だった。

「竜巻きが起るぞ」

一人の武者がいった。

「いや、いまに雷が鳴りはじめるに違いない。おれは、雷が大嫌いだ」

一人の武者は槍をかかえて首をすっこめた。

騎馬の音がした。板垣信方が数名の家来をつれて来た。信方は門のところで、馬の手綱を、家来にわたすと、暗い空を睨みつけるように見上げてから、ゆっくり奥へ入っていった。

奥座敷には、切腹の座がつくられていた。真新しい、莫莖もぎの上に敷かれた白絹が眼に痛かった。そこが、頼重の切腹の場所だった。

板垣信方は、板の間に、家来を従えて坐った。

信方は彼の前の白絹を見るにしのびないように、睨目めいもくして頼重が座につくのを待った。

頼重はいささかの足の乱れもなく、諏訪神社神官かん長守屋頼真おきを従えて、切腹の座についた。頼重の白い死装束ししょうそくが、頼重の顔によく似合った、あっぱれな男ぶりであった。

頼重は座につくと、筆墨と紙を持って来させて

おのづからかれはてにけり草の葉の

主あらばこそ又もむすばめ

辞世の歌をしたため終ると坐り直して

「信方、酒と肴さかなを所望しよもういたす」

と信方の顔を睨にらみつけていった。

「はっ、酒と肴でございますか」

信方は不意をつかれたようにあわてた。

「切腹は武士の最高の儀礼である。切腹の作法は守りたい」

頼重は落ちついた声でいった。

信方は、酒と肴を、至急用意して来るように、家来に云いつけて置いて、頼重の顔を見直した。

頼重は、信方から瞬間なりとも眼をそらそうとはしなかった。その眼は検視役の板垣信方に向つて諏訪家最後の遺恨をこめて燃えていた。

武田家の家臣が、三方さんぼうの上に酒の入った大盃たいはいを載せて来て頼重の前に置いた。

「信方、肴はいかがしたのだ」

頼重が信方に詰問きつもんした。

「ここは、寺ゆえに、肴はございませぬ、酒だけでお許しを願いたい」

「ばか者！」

頼重の大喝は、寺中に響き渡るほどよく通った。

「信方、そちも武田家を背負って立つ宿老のひとりであろう、切腹の作法ぐらいちゃん心得ていてはどうだ。いくさに勝っても、武士の作法を知らないならば、野盗のたぐいと同じではないか。肴というのは腹を切る脇差のことをいうのだ。切腹をすすめる者は、切腹にふさわしい刀を白鞘に収めて、三方に乗せ、酒の肴として、出すのが、古来からの作法である。今後、武田は、あちこちから、城主、領主を、占府中へつれて来て腹を切らせることだろう。腹を切らせるのは、切らせるだけの理由がある。が、武士の作法をおこたったならば、やがて武田も武士の面目を失い亡びることは疑いない。晴信によく伝えて置くがよい」

頼重は諸肌を脱ぎ、白らの脇差の鞘を払って、切先を酒につけてから

「信方、切腹の作法をよく見ているがよい」

と叫んで割腹して死んだ。守屋頼真書留によると

肴というは脇指に候よと申せられ脇指を取りよせ、十文字に腹掻切り、三刀目にて右の乳の下に突き立て、天目ほど繰り落し、やがて後に仆れ候、壮烈極りなき御最期に候。

とこの時の様子を書き残してある。当時の切腹は鎌倉時代の遺風を伝え、いわゆる自刃形式の

ものが多く、腹の皮にちよつと刀の先を当てると、うしろに刀をかまえている介錯人^{かいしゃくじん}が首を切り落す後世の切腹とは様相を異^{こと}にしていた。

時に天文十一年七月二十日。

諏訪頼重、頼高兄弟が自刃して果てたのは、今の時間でいえば午後五時ごろであつた。

頼重が切腹したという情報を持った、板垣信方の家来が東光寺の門を出ようとするとき、にわかに豪雨が降り出し、電光が走り、大音響とともに落雷した。信方の家来は門前で電撃に打たれて死んだ。寺の鐘楼^{しょうろう}にも落雷があつた。

雷鳴はその夜おそくまで鳴り響き、豪雨は、附近の河川を氾濫^{はんらん}させた。

諏訪頼重は祖父の碧雲斎^{へきうんさい}頼満に愛されて、祖父のあとを継いだ。碧雲斎が、孫に頼重と名づけたのは、建武二年、鎌倉大御堂で北条氏に殉じて壮烈な死を遂げた諏訪昭雲入道頼重の名を取つたのである。鎌倉幕府の要職にあり、北条氏の柱石^{ちゆうせき}といわれた昭雲入道頼重と、武田晴信に亡ぼされた頼重との相似点は、その終局^{しゆうきよく}における切腹の一幕だけであつた。

禰々は雷鳴の中で頼重の死を伝えられた。

禰々は頼重の死を聞くと、その場に泣き伏したまままでいつまでも起き上らなかつた。侍女が寅王を抱いて傍に来ると、禰々はより一層はげしく泣いた。禰々は一晩泣き明かした。

翌朝になって、晴信の使いとして信方が禰々のところへ、機嫌を伺^{うかが}いに來たが会おうとはいわなかつた。信方は、侍女を介^かして、晴信様が、折を見てお会いしたいと申しておられると伝えると、禰々は坐り直していった。

「私は諏訪頼重の妻です。命を助けてやると、いつわって、古府中へ連れて来て殺すような卑怯な兄は兄とは思いませんぬ。会いたくもございませんぬ。私は、兄を呪い武田をうらみつづけながら、近いうちに、夫頼重のあとを追う所存でございます」

彌々は頼重を愛していたのである。政略結婚として諏訪に迎えられた彌々は、諏訪家の正室として丁重に扱われ、頼重もまた、少女のような彌々をよくいたわってやった。彌々は頼重とともに古府中に送られたとき、これからは、戦争もなく、夫と寅王とともに平和に暮せるものだと考えていたのであった。現実には甘くなかった、その彼女自身の見込違いに彼女は腹を立てた。

彌々は自虐した。その日から食を拒否した。敵武田の飯は食べぬといって箸を取らなかつた。彌々は日に日に痩せていった。侍女たちにいるさく云われて、やっと生命を保ちつづける極少量の食事を取るだけで、暗い部屋の中に坐ったままだった。

（彌々様は気が触れた）

という噂が立つほどだった。彌々は気は確かだった。彼女は、女が道具として使われる戦国をのろい、父をうらみ、兄晴信を憎みつづけていたのである。

彌々が見るかげもなく痩せおとろえて死んだのはその翌年の正月であった。

躑躅が崎にいる湖衣姫に父頼重の死が伝えられたのは、翌朝であった。

大雨のあとで、水溜りがあちこちに光っていた。北の郭の湖衣姫のところに晴信の使者として来た駒井高白斎は、なにも云わずに、湖衣姫の端麗な顔を眺めていた。駒井高白斎は信虎の使者

として、諏訪家へしばしば行ったことがあった。禰々御料人ごりょうにんの輿入れこしのときも同行した。そんなことから駒井高白斎は、なんとなく諏訪家と親しかった。駒井高白斎の祖母が、諏訪家にゆかりのあるものだったということも、高白斎が諏訪家に好意を持つ遠因でもあった。

高白斎は湖衣姫の母、小見氏のことをよく知っていた。小見氏は筑摩郡麻績城主おみ小見甚右衛門の娘であった。湖衣姫は父母のいいところを享けついでいた。気品の高い美しい女ひとだった。男好きのする、肉感的な女の顔ではなく、静かな叡智えいちのひらめきを内にかくして、じっと相手をみつめるといったふうな顔だった。

高白斎は湖衣姫を見ていると、薄幸はっこうな諏訪一族のことをつぎつぎと思い出す。禰々が頼重の正室として迎えられると、小見氏は、遠ざけられた。禰々がそうしろといったのではなく、武田家に対する気兼ねだった。小見氏は、禰々と引きかえに、人質として古府中へ送られていく湖衣姫に、「人前で涙は見せるものではありません」

それを最後のことばとして湖衣姫を送り出すと、供をつれて、諏訪を去っていった。小見氏が、頼重に自ら暇いとまを乞うたのである。その日はよく晴れた日であった。抜けるような青空の下で、相反した方向に別れていく親娘おやこを高白斎は見送っていたのである。高白斎はその日のことに始まって、今日までのめまぐるしい、世の変転に潰つぶえ去った諏訪家を思いながら涙ぐんだ。

「なにか御用ですか」

湖衣姫がいった。

「はっ、晴信様の——」

高白斎はそのつきがでなかった。湖衣姫は高白斎の顔をじっと見詰めていた。感情の動かない顔の下に、はげしく、かけ廻っている湖衣姫の智恵が見えた。

「晴信様が、使者として駒井様を、さしむけられたのですね」

湖衣姫は、だめを押すようにいうと、だしぬけに

「父上のことですか」

といった。湖衣姫の眼が光ったように見えた。

「はいっ」

高白斎は思わずそこに平伏した。しばらくして頭を上げたときには湖衣姫は前といささかも変った様子はなく、静かに、高白斎を見詰めおろしながら、

「父上がどうなされましたか？」

といった。さっき、見せたわずかな動揺はもう消えていた。既に覺さっている様子だった。覺さつていながら、その心をなにかの力でおさえて、懸命に外に見せまいとしているようだった。

「頼重様、昨日の夕刻ゆうこく、東光寺において立派な御最期を遂とげられましたでございます」

高白斎は一氣にいった。

「そうせよと晴信様がおさしずされたのですね」

そのひとことだけで、湖衣姫は沈黙した。高白斎は、やがて、その場に倒れ伏して、よよと泣きくずれる湖衣姫を思った。だが湖衣姫は泣かなかった。ほとんどその眼は開かれたままの放心の眼であったが、そこに湧わいて来るべき苦くの涙は見えなかった。人の前で涙を見せるものではな

いという母、小見氏の教えを湖衣姫が懸命に守ろうとしているのが、痛々しいほど、けなげに見えた。

高白斎は晴信にそのまま伝えた。

「湖衣姫は泣かなかったか」

晴信はそういつて涙ぐんだ。駒井高白斎は、ひどくあわてて懷紙を出して額に当てた。泣くべき湖衣姫が泣かずに、泣かないでいい晴信が泣いたことが、夢の中の倒錯どうさくのここのように思えた。高白斎は懷紙で額をこすった。すると、懷紙が額にべっとりつくついた。それをはがそうとしているうち、高白斎は突然、深い悲しみに襲われた。彼はぼたぼたと膝に涙を落した。

「高白斎、なんで泣くのだ、戦国時代に涙は不要ぞ。涙は湖衣姫でさえこぼさなかったではないか」

晴信の泪なみだは消えていた。いつものようによく澄んだ、鳶とびのように鋭い眼が遠く諏訪の方を睨んで

「まだまだ、当分諏訪は騒がしいことだろう。諏訪が静かになれば、そのとなりがまた騒ぐ……」
晴信の頭に信濃一国平定の地図が描かれつつあった。

「高白斎、すぐ諏訪にいつてくれ、焼けた上原城の後に、城を作るのだ。しっかりした城でなくともいいから早いところ作るのだ。城が完全にでき上らない前に、高遠頼継はきつと兵を動かすだろう。いや、そうさせるようにわざと隙を見せてやるがいい。高遠頼継という男は慾の皮だけが突張って身のほどをわきまえぬ奴だから、誘いに乗って上原城を攻めるだろう。そのときは戦

わずして、兵を引き、諏訪全土に高遠頼継の兵を入れるのだ。高遠頼継の野心が延びるだけのびたとき、一挙に追い落してやるのだ」

駒井高白斎は、晴信の命を受けて諏訪へ立った。頼重の死んだあとの諏訪へ、諏訪をよく知っている高白斎を向けて、人心の掌握しやうあくを計ったのである。

七月の戦いの結果、諏訪は武田晴信と高遠頼継によって、宮川を境にして西は高遠頼継、東は武田晴信の所領と決められた。高遠頼継は、それを不満とした。はじめの約束は、諏訪頼重を亡はろぼしたあと、諏訪家を引きつぐ約束であったと、晴信に抗議したが、晴信は言を左右にして受けつけないばかりか、駒井高白斎によって、上原城の新築を始めたから

「よし、晴信がその気なら、こっちには、こっちの考えがある」

高遠頼継は小笠原長時や伊那いなの箕輪みのわの城主藤沢頼親等に書状を送って、同盟を結ぶと、九月十日になって兵を上原城に向けた。

駒井高白斎は旗を巻いて逃げた。

高遠頼継は諏訪一国を手中におさめ、諏訪の惣領家を、わがものにし、諏訪神社の大祝おほはかりを兼ねるという慾望を満足させた。頼継は兵を出して、下諏訪の金刺かなさし亮存を攻めて、これを追い諏訪神社しもじや下社もその勢力下に置いた。

「そろそろでございますな」

駒井高白斎が晴信に諏訪攻撃を示唆しそくした。晴信は、諸将を集めていった。

「七月の諏訪出兵には、兵は損しないように戦えと命じて諏訪の自滅を待った。が今度は違うぞ、

今度は高遠頼継を痛い目に合わせてやるのだ。甲斐の軍の強さを高遠頼継だけでなく信濃の諸將に知らせるためのいくさをやるのだ」

走り馬が甲斐の国の隅々に飛び、兵馬が集められ、それぞれ、衆団の長に引きいられて、甲斐の国境を越えて、高遠頼継の軍と対峙した。

甲軍の再度の出兵に対して、小笠原長時は動かなかった。小笠原長時は、甲軍を迎え討つのは塩尻峠と心に決めていた。まさか、晴信も、そこまでは来ないだろうとたかをくくっていた。

伊那軍と甲諏連合軍との戦いは十月二十五日安国寺で行われた。この戦いは高遠頼継と藤沢頼親の連合軍二千に対して、武田の軍勢が二千、これに諏訪の兵五百余が加わった。この戦いで勝敗の鍵を握っていたのは、諏訪の兵力であった。

諏訪氏滅亡とともに諏訪は、武田氏と高遠氏によって二分された。諏訪の豪士たちはその期になつて、諏訪家をなつかしんだ。神氏以来諏訪をおさめていた領主が亡びたことは、親を失ったような気持だった。

領主の諏訪頼重は死んでから、再評価され、頼重を滅亡に導いた原因の一つは諏訪家に累代庇護されてきた豪士たちの責任であることを自覚した。

晴信は、彌々の生んだ寅王を表に出した。

「頼重殿は、寅王を以て諏訪の後継者すると遺言された。諏訪の豪士たちは、寅王のもとに集まれ」

晴信のかかげた大義名分は去就に迷っていた諏訪の豪士たちに功を奏した。彼等は武田の旗の

もとに、続々集まつて来た。諏訪家の旧臣たちは高遠頼継を討つべしと口々に叫んだ。

（諏訪家を亡ぼしたのは、武田ではない、高遠頼継なのだ）

という、高白斎の宣伝も効いた。諏訪の民心は、甲斐よりも高遠を憎んでいた。十代も前に諏訪家から分れていった高遠家が、いまになって諏訪惣領家の座につこうとした野望を怒った。

「諏訪衆の働きの如何によって、諏訪家は寅王を奉じて再興されるのだ」

晴信はこういつて諏訪の衆を前線に出した。

「今こそ、主家のかたき高遠を討て」

高白斎はその背後からしきりにけしかけていた。

戦いは諏訪衆と伊那衆との衝突によってはじまり、その日の夕刻、高遠頼継の弟、高遠蓮峰軒が矢島頼光の手に討ち取られたときを以て終った。

高遠軍は多くの戦死体を残して杖突峠を越えて敗走した。

晴信は、戦いに功があった諏訪頼重の叔父、諏訪満隆、諏訪満隣、矢島頼光、神官長守屋頼真などを呼んで、その武勲を讃めてから

「寅王はなにぶんにも、まだ幼少であるから、寅王が成人するまで、諏訪は、寅王にかわつてこの晴信が見ることにする、異存があればいうがよい」

諏訪は完全に晴信の手中に入つたのである。武田信虎が生涯かかつて、なし得なかったことを晴信は、父信虎を追放してから二年とたたないうちに、なし終えたのである。

「それから、もうひとつ申し渡して置くことがある。余にかわつて諏訪に郡代を置く。板垣信方

に、采配をゆだねる。諏訪の衆は、なんなりとも信方に相談するように」

晴信はいうだけのことをいうと

「余は、まだ諏訪の湖を廻って見たことがない、そこに居並ぶ諏訪の衆に、案内を願いたい」

晴信は気軽に馬に乗った。戦いはすんだといっても、まだ、余燼よじんはくすぶっていた、その中を、諏訪の衆を先達せんだつとして見廻るといい出した晴信を、武将たちは心配そうな顔をして眺めていた。

「矢島頼光は諏訪家でも名なうての乗手と聞いている、先導してくれ」

晴信は、馬にひらりとまたがると、いたずらっぽい眼で、矢島頼光に笑いかけた。

夫恋つまい歌

天文十一年、躑躅が崎の館の屋根に霜の降りるころになって、晴信は甘利虎泰を呼んで、彌津元直の三女里美を古府中に迎えたい旨を告げた。

「彌津殿の御息女里美様のお名前は古府中にまで知れわたっております。歌人としても有名であり、その麗姿は信濃にならぶものがないともうけたまわっております」

虎泰は里美をまず讃めて置いて

「里美様を古府中にお迎えなされることに異存をさしはさむのではございませんが、その時期を

もう少々お延ばしになったらいかがかと存じます。やっと諏訪が静かになったばかりであり、諏訪につづいて、伊那では、いまでも尚戦いがつづけられております。佐久、小県には豪族共がそれぞれ城を持っており、主なる者の名を挙げて、その数十名ほど、城、砦の数になると三百はございましょう。つまり、東信濃には、豪族がいても、それを統轄する武将がいなかったため、或は上野の上杉憲政と氣脈を通じ、或は村上義清に庇護を願ひ、小笠原家にも媚態を示すといったようありさま……」

もうよいと晴信は虎泰を制して置いて

「結論はどうなのだ」

「いま彌津家から里美様をお迎えすることは東信濃へ武田菱のくさびを打ちこむことになり、附近の豪族どもを刺戟するばかりでなく、上杉、村上、小笠原等を刺戟することになります。上伊那の方がかたがついてからにしたらいかがかと思ひます」

虎泰は常識論を述べた。

「無理矢理に里美どのを迎えたらどうなる」

「ふたたび戦争が起ります。昨年大門峠を越えて小県地方に軍をすすめ、どうやら話がまとまっているところに、また騒動が起ります」

虎泰の顔に諫言かんげんをしているのだという自意識がはつきりして来ると、言葉の調子もはげしくなる。

「余は里美どのを欲しいのだ。里美どのも余のところに、秋までには来たいといつてきている。」

その秋も過ぎた」

晴信は夏のはじめのころ、山本勘助に託されて来た里美の手紙を虎泰に読むようにといつて渡した。

「これはどうもおそれ入りました」

虎泰は若き領主晴信が、里美をすっかり手なづけているのを知って、かなり驚いたようだった。「里美どのが、承知しておられるということは、禰津元直殿に異存はないということになりますな」

虎泰は考えた。里美がいくら利口で進歩的な女であっても、晴信との文通を父元直に黙っていることはない。元直は知っている。知っていて、知らんふりをしているのは、附近の豪族や、上杉・村上の勢力に対する遠慮だと考えられた。

「だがしかし、里美様をお迎えするとして……」

虎泰はまた考えこんだ。

「里美様をお迎えするならば、輿こしの警護の者として百や二百はつけねばなりませんまい。道は二筋、佐久往還を通るにしても、大門峠を越えるにしても、敵の中を通るようなもの」

虎泰がそこまで話すと、晴信は、わかったと、彼を制して、侍臣に、山本勘助を呼んで来るようにいった。

山本勘助は日焼けした顔で、板の間に両手をつかえて、先刻せんこく、立ちもどりましたといつてから、彼の与えられた任務について、話し出した。話は要領よくまとめられていて無駄がなかった。

「南佐久の豪族たちの中で、いますぐ、武田に反旗をひるがえすように見受けられるものはありませぬ。南佐久は甲斐と境を接していますから、なにかあったとしても、さほど心配することはないと存じます。小県は、諏訪が亡びて武田領となった今は、南佐久と同じように、武田と境を接する国になりました。長窪城主大井貞隆を除いては、まず心配はございません。問題は北佐久でございます。北佐久は、甲斐と境を接していませんし、いままで、武田とこれといって、はげしい戦さをしておりませんので、武田をあなどっている気配が見受けられます。それに北佐久には隣国の上杉憲政の援助がございます。東信濃でもっとも手ごわいのは北佐久だと存じます。小諸城に大井忠成、望月城に滋野信雅、岩尾城に大井行頼、耳取城に大井大輔、前山城に伴野信豊、小田井城に小田井又六郎、芦田城に芦田信守、平原城に平原入道、内山城に大井貞清、依羅城に依羅遠江等がおります。なかなか以て一筋縄ではいかない豪族のものばかり」

しかし、晴信は、別に驚いたような顔を見せずに

「それで」

とあとをうながした。山本勘助はしばらく呼吸をととのえてから

「小県、北佐久、南佐久を通じて、心利いたる者を探してまいれという、おおせでございましたが、その人選はまことにむずかしく、この人はときめることは……」

「きめるのは余がきめる、そちは候補者をあげるだけでよい」

晴信は大きな眼を見開いていった。

「小県、真田庄、松尾城主、真田幸隆こそしかるべき御人ではないかと存じます」

「会ったのか」

「いえ会いませぬ」

「会わずにどうして、しかるべき人であると分ったのだ」

「里美様が推薦されたからでございます。歌もよくするし、武芸にも勝^{すぐ}れており、近隣の豪族の間にも非常に評判がよいのは、この耳で聞いて参りました」

晴信はうなずいて

「昨年、上杉憲政をたよって上野へ逃げた海野棟綱の甥に当る幸隆のことだな、幸隆には昨年小県で会った」

「お会いになりましたか。それならば、いまさらなにも申しあげることはいけません」

山本勘助は口をつぐんだ。

晴信は考えこんだ。だいたい晴信は考えこむということを、そうちよいちよいやる人ではなかった。頭の回転が早く、即決する場合が多かった。晴信が考えこんだのは、ことがそれだけ重大に思われる。虎泰と山本勘助は、ちょっと顔を見合わせて、すぐまたもとの姿勢にかえって晴信の顔を見守った。

「里美どのが、真田幸隆を心利いたる者と推薦していたというならば問題はない」

晴信は顔を上げていった。

「なにが問題がないのでございますか」

虎泰はびっくりした顔でいった。

「里美殿を古府中に迎える役を真田幸隆に命じよう」

「それはまた突飛な」

「いや決して突飛ではない。甲斐の国から迎えにいったら、道中がうるさい。道中で騒いだ者たちはあとで処分するとしても、もし、里美どのに間違いがあったら、たいへんだ。ここは、信濃の真田幸隆にまかせた方がいいだろう。里美どのが推薦される人だから、きつと策をめぐらすだろう」

なるほどと、虎泰はそこまで聞いて、やっと分ったような顔をした。

「ついては、そちは武田家の使いとして、禰津家へ里美どのをいただきにいったきについて貰いたい。禰津家は、諏訪家の支流で、なかなか由緒ある家柄だ。するとところはちゃんとして置かねばならない。ごく少数の供をつれていって、挨拶だけしたら、さっさと帰って来るのだ。あとは真田幸隆にたのもう」

「いつ出立いたしましょうか」

「いますぐ立て」

いますぐとは性急なという顔をする虎泰に晴信は

「余は一日も早く里美どのを迎えたいのだ。里美どのの心もきつとそうであらう」

けろりとした顔でいうと、もう、虎泰には用がないぞという顔で、真田幸隆への、手紙を書き出したのである。

山本勘助は晴信の手紙を持って真田へ出発する前に玄以坊げんいぼうに会って、彼の使命の概要を伝えた。「走り馬を使って、駿河へいくがいい。そうしても或は間に合わないかもしれないしれぬ」

勘助は最後にそういった。

玄以坊は僧衣そうえをまといっているけれど、山本勘助と同じように、今川義元が、古府中に送りこんである忍び衆のひとりであった。足の速いのが見こまれて、緊急の場合の連絡役として使われていた。足の玄以という別名があった。

山本勘助が玄以坊を使って晴信が里美を古府中へ迎える決心をしたことを今川義元に知らせようとしたのは、今川義元もまた里美につよい関心を示していることを知っていたからであった。距離的にいって、とても、今川義元に勝味はなかったが、報告すべきことはしておかないと、彼の任務をつくしたことになるからである。

その日のうちに玄以は南へ走り、山本勘助は北に走った。北へ走りながら山本勘助は、里美に對する今川義元の執念を、見事に出しぬこうとしている晴信を、心憎く思った。山本勘助と今川義元との裏の關係を承知の上で使われているようにも思われる。そうでなければ、佐久から帰って来た彼をすぐまた小県へ向けることは考えられないことだった。

山本勘助が真田の庄の松尾城について、晴信の書状を真田幸隆にわたすと、幸隆は、勘助を待たせたままで、一気にそれを読み終ると

「承知つかまつったと晴信殿に伝えてください。多分、里美様は三日の間に甲斐の領地へ足を運ばれるでしょう」

幸隆は自信ありげな顔でそういった。顎が張り、細い眼の吊り上った、額の広い、いかにもひとくせあり気な男であった。細い眼の奥に油断なく光っている眼が山本勘助にはおそろしかった。「三日と云われましたか」

山本勘助は幸隆のことばをはねかえすようにいった。彌津家の方だつて準備もあろう。すぐというわけにはいかないだろう。それを三日といい切ったあたりに疑問を持ったのである。

「いかにも三日でござる。三日以内には里美様のおともをして、甲斐の領地へおもむくことになるだろう」

幸隆は口のあたりに微笑をたたえていうと、替え馬が用意してあるから、使ったらどうかといった。

山本勘助は、幸隆になにか、ばかにされたような気がした。このことは、すでに、晴信、幸隆、里美の間で、ちゃんと話がすめられていたかも知れないとも思うのである。

「それとも、拙者と同道されて、途中より一足先に、晴信様に、里美様の到着を知らせるのも一興かと思うが」

勘助はその真田幸隆のことばに従うことにした。晴信よりは七つ八つは上に見える年輩の、この、なにごとにつけても自信ありげにものをいう、幸隆という男をもっとよく見てやりたいと思つた。

山本勘助はその夜は松尾城に泊つた。夜半、馬のいななきを聞いて眼をさましたが、すぐまた静かになった。

翌朝早く山本勘助が眼をさますと、外に小者が待っていた。

「だまって私のあとをついて来て下され」

小者のあとについて城の裏門から出て、真田の庄のはずれに来ると、そこに二挺にちようの女駕籠かごを親類縁者らしい者が取りかこんでいた。

「山本様が見えられたからさあ出発だ」

小者頭こものかしらの男がそういつて合図した。駕籠が動き出してから、その男の顔を見ると、幸隆だった。

「真田幸隆どの……」

「これは真田の庄の被官ひかん、山本三郎兵衛殿のお息女おきよめ様が、和田の庄おきわらの萩原千内様へのお興入れの駕籠でございます。お見送り総代山本勘兵衛様、御苦労様でございました」

と大きな声で怒鳴ると、勘助に向ってばかりいねいなおじぎをした。

山本勘助は、いつか山本勘兵衛にされていた。お見送り総代と云われて見ると、稍々やや服装は粗野に過ぎていたが、旅支度としては申分がなかった。駕籠は二挺あって、その前の方に里美が乗っているらしかったが、里美かどうかを確かめることもできずにいるうちに、駕籠は真田を離れていた。

山本勘助はぶらぶらと歩いた。幸隆がなにかの策謀をめぐらせていることは明らかであり、依よ田だで小憩しょうけいしたとき、侍女に助けられて、駕籠からおりる里美の姿を見てからは、山本勘助は、この奇妙な道中の渦中にあることをむしろ興味ぶかく感じていた。それにしても、夜が明けて見た

ら、里美が瀬津から真田へ来ていたということは夢のようなことだった。

(ひょっとすると、昨夜の馬のいななきが)

山本勘助ははっとした。美女里美は、歌に通じ、馬術にも勝れているという噂は嘘ではないなと思った。晴信が里美を正式に迎えに来たと分ったら、その日のうちにでも出発してしまわぬと、他から横槍が入って、ことが面倒になる。戦国時代においては、嫁取りも、国取りと同じように、いくさの一つであることを里美はちゃんと知っていて、夜陰ひそかに、瀬津城から真田城に抜け出し、そこから身分をかくして、駕籠に乗ったのも或は彼女白身がそうしたいといい出したのかも知れない。

(しかし和田の庄へ行くのはおかしい)

山本勘助はそう思った。順路とすれば、佐久往還を若神子へ出るのが当然である。和田の庄へ行く途中から大門峠へぬけるとすれば雪がある。

その疑問を真田幸隆に聞こうとするが、彼は、飽くまでも小者頭になり切っていて、山本勘助の問いに答えないのである。

昼近いころになって、一行は長窪にさしかかっていた。長窪城主、大井貞隆は、武田に逆心をいだき、小笠原長時や、村上義清と通じていることは明らかである現在、その城下を通ろうとする真田幸隆の気持が山本勘助にとっては更に分らなかった。

柵がかまえてあって数人の侍が通行人をいちいち取調べていた。

「真田の庄の被官山本三郎兵衛様の息女が和田の庄の荻原千内様のところへおこし入れにござい

ます」

幸隆は柵の両側に立っている武士たちに腰をかがめて挨拶すると、持参して来た酒の樽を、お祝のしるしでございませとさし出した。

頭らしい武士が、一応中をあらためるといって、駕籠の垂れをまくって、里美の顔を覗き上げるようにして首をひねった。が、彼は、別に、一行に停止を命じはしなかった。駕籠は柵を越えてゆつくりと去っていった。そして、柵から見えないところまで来ると幸隆は一行を止めて云った。

「木戸頭が中を覗いて首を傾けたところを見ると、見破られたかも知れぬ。かねての用意をするように」

駕籠は飛ぶように走った。大門峠への登り口まで来ると、そこには数頭の馬が一行を待っていた。

「里美様、馬の用意ができました」

と幸隆が駕籠の中へ向つていうと、里美は、いつの間にかちゃんと、野袴姿のばかまに変わっていた。里美ばかりでなく、うしろの駕籠の老女も、服装をととのえ直していた。

山本勘助は、ひらりと馬にまたがる里美の姿を息を飲みこんだまま見詰めていた。里美はありふれた美人ではなかった。野性美に輝いていた。比較すべくもなく、たくましいその美しさを今川義元が見たら、一国を賭けても晴信と彼女を争うだろうと思った。

里美は馬上の人となると、馬に鞭を当てた。里美のあとを騎馬が追った。一行が宮の上まで来

たとき、はるか下に、騎馬隊の姿が見えた。長窪城からの追手であった。

「姫様は峠へ、いざとなったらわれらはあと備えをつかまつる」

幸隆は、家来に命じて用意して来た旗さしものを、やぶの中の木蔭にちちち立てさせて、関の声をあげた。

追撃は一時停止した。大井貞隆の追手の兵は武田の兵が峠をおりて来たものと思った。伏兵がいると思った。彼等は、物見を出して、戦いにそなえようとした。物見によって、軍兵の姿が見えないと知ったときは、幸隆の一行はさらに大門峠のいただきに近づいていた。雪はあったが深雪ではなく、馬で通れる雪の深さだった。

幸隆の一行が峠の近くまで来ると、そこに板垣信方の兵が百人ほど待っていた。信方の迎える兵と幸隆の一行とは峠のいただきですれ違った。信方の兵は峠を登って来る大井貞隆の兵に、こんどは本当の関の声を上げて襲いかかっていった。

「ここから下が諏訪ですわね」

里美は馬首を大門峠に立てて云った。背後で、板垣の兵と大井の兵が血みどろになって争っているのも意にかけないようだった。

上原城までいかないうちに、つぎつぎと里美の一行を迎えるための騎馬武者が来た。矢が崎まで来ると、晴信の弟の典厩信繁が里美を迎えるための輿を用意して待っていた。

里美は馬からおりると、そこに居並ぶ、甲斐のつわものたちに向って一礼していった。

「ほんとうは、馬の方が好きだけれど」

そして彼女は民家で、衣裳いしやうをととのえて、輿に乗った。美しい顔に、やや疲労の色が見えていた。

山本勘助は輿の人となった里美に眼をやりながら、完全に打ちのめされた自分を思った。先手先手と打っていく真田幸隆という人物を末おそろしい人だと思った。山本勘助は首をたれた。寒い北風が吹いていた。

躑躅が崎の城内は遠来えんらいの客を迎えるための準備にいそがしかった。古府中についた里美は、甘利虎泰の館に一応おちついてから日を選んで、躑躅が崎の晴信の館へ輿入れすることになった。

当時の武将は正室のほかに、少なくとも数名の側室を持っていた。妾は子を生む道具であり、武将の欲望の対象以外のなにものでもないという見方からすれば、側室の地位は低く、実権もなかったように見えたけれど、たまたま、正室より側室の方が先に男子を生んだ場合は、正室と側室の勢力は逆転した。しかし、それは子を生んでからの話で、子を生むまでの側室の存在は小さかった。結婚式というようなものではなく、あったとしても、ごくうちわに盃のかためをするだけであった。多くの場合は、そういうこともなく、交合のみによって、側室の地位は決定した。晴信と側室おこことの関係がそうだった。

だが、里美の場合は違っていた。晴信が側近の女に手をつけたというような簡単なものではなかった。相手が彌津氏の息女であり、しかも、かなり危険な目にあいながら、古府中までやって

来たのだから、そこになんとか区切りをつけねばならなかった。

晴信は第二の結婚式を思いついた。正室の三条氏の手前正式な結婚式はできなかったが、武将、土豪、国人たちを呼んで、側室に禰津家の里美を貰い受けたということを披露してもいっこうさしつかえがないと考えた。晴信らしい明るい考え方だった。あらゆる機会を利用して武田の威力を示そうという気持もあった。

晴信は、禰津家の息女里美どのを迎えて歌会を開くから、ぜひ参加されたいという招待状を、甲斐、信濃の城主や豪族たちに配った。表現こそ違い、これは晴信の第二の結婚式の披露宴であった。

天文十一年も十二月に入ってから、晴信の招待を受けた近隣の権力者は、その招待と彼等の領地の安泰とをはかりにかけたうえで、古府中に集まって来た。晴信に心服するものは、その招待に疑義をさしはさまなかったが、或は歌会を餌にとらわれの身になるのではないかと考えた者は、理由をもうけて招待に応じなかった。

晴信は歌会の招待状を、遠く、今川義元にも出したし、小笠原長時、村上義清にまで出した。ことに北佐久、南佐久、小県の豪族たちには洩れなく出した。

上伊那で転戦していた、板垣信方が、久しぶりに古府中へ帰って来て晴信にいった。

「どのくらい集まりましたか」

「八分どおりというところかな」

「まず上々というところでしょうな」

信方は、歌会を催すことについて、不平らしいことはひとことも云わなかった。むしろ晴信のその思いつきを讃めていた。そういう催しは、もう少しあとでもいいとか、諏訪を取ったからといって、おごりたかぶってはいけないとか、正室三条氏の手前もあるから、こういう派手なことはやめた方がいいという、宿老たちのなかにあって、信方だけが晴信と同じ気持であってくれたことが、晴信にはうれしかった。

「ひとりだけ、気になるのがいる、小県の長窪城主、大井貞隆だ」

「招待をことわって来たのですか」

「そのことわり方が憎い。歌などという殿上人てんじょうびとの真似ごとはきらいだというのだ」

「そむきますね」

「いや、すでにそむいているのだ」

信方は、それにうなずいて、口の中で、日でも数えるようにしていたが

「伊那の方をもう少しかためて置いて、来年になったら攻めましょう」

信方は歌会には出ず、里美に会って挨拶しただけで、伊那へ帰っていった。

里美は利口な女だった。虎泰の館についた翌日、晴信の正室三条氏を訪問して、土産みやげとして、白絹ひと重ねをさし出して、田舎者ゆえ、なにぶんにも御指導を願いたいといった。晴信にあってかという、まだ会ってないと答える里美に、三条氏は、晴信より先に正室の顔を立てた里美の心を読んだ。歌会についても、里美は、いちいち三条氏の教えを乞うた。

「歌を詠むと申しましても、田舎歌、ほんとうにおはすかしいものでございます」

そんなふうにはりくだって、三条氏の京都風をあおった。歌会における作法や、服装についてもいちいち三条氏の指導を受けるといった、気の配り方だった。

歌会は昼過ぎてから始められた。

歌会の招待を受けて、歌はできないが、ぜひ歌会の見学をしたいといって来た者の方が多かった。だから歌会に列席していても、歌を作る者は二十名ほどしかいなかった。

晴信のとなりに唐衣からぎぬに金糸きんしの入った裳もをつけた三条氏が坐っていた。歌の道にかけては絶対の自信があり気だった。そのよこに典厩信繁が感情の凍結した顔で坐っていた。

里美は主賓の席についていた。

肩すそ小袖の着物に緋袴ひはかまをつけていた。坐ると豊かな黒髪が、敷物にとどくほどだった。微笑を含んだ顔は春の陽炎かげろうのようにおだやかだった。

「では歌会を催すについてひとこと申し述べる。この歌会は、何々風といわれるものでもないし、何々流というものでもない。しいて云えば、甲斐風、武田流でやろうと思っている」

三条氏が晴信の顔を見た。なにをいうのかという顔だった。歌には歌の文法があるように、歌会には歌会の作法があるといったようであった。

「いわば型やぶりの歌会ともいうべきものではあるが、余はそれでいいと思っている。時代の進歩とともに歌も変っていかねばならぬ。もともと歌会というものは、庶民の中に自然発生した歌垣うたがきから始まったものである。歌会はけっして、公卿くけの遊びごとではない」

三条氏は顔を動かさなかった。いうだけ云わせて置けという顔だった。

「ちょうど雪が降って来た。余は雪という題を出そう。まず最初に、本日の歌会の主賓である瀬津殿の御息女、里美どのの歌を所望する、読み手は駒井高白斎にたのもう」

しんとしていた。新しい歌会に対する批判の眼が座をしらせさせたということもあったが、多くは歌会について、それほど深い知識はなかった。むしろ、晴信が甲斐風の歌会を開くといったことに對する一種の感動のようなものが座を静めたのであった。

里美は晴信の方をちらつと見て、目礼してから、紙を取り、筆を取った。彼女の頬から微笑が消えた。きりつとひきしまった烈女の顔がそこにある。その顔は、雪のとけるように、唇のあたりから、ほころびていく。また前々どおりの、微笑を含めた顔にもどると、彼女の筆の先が動き出した。

彼女は書き終ると、しばらく、その筆のあとを確かめるように眺めてから前に置いた。晴信の近習がそれを受取って駒井高白斎に渡した。

高白斎が晴信に一礼して胸を張った。

甲斐ありて躑躅^{つづじ}が崎の雪の野を

きみに寄りつつともに歩まん

歌は繰りかえして二度読み上げられた。低い声があちこちに起った。それは里美が晴信の側室たるべき心を歌った夫恋^{つまこひ}い歌であった。さすが里美どのだという声も聞えた。晴信は満足気に里

美を見つめていた。これで、歌会にかこつけた、第二の結婚披露は事実上成功したのだと思った。あとはでき次第、駒井高白斎が読みあげるほどに……」

晴信は歌の座につらなる一同に眼をやった。隅にうつむいたまま坐っている湖衣姫の姿が眼にふれた。筆墨と紙は前にあっても、それを取ろうとしない湖衣姫があわれであった。

父諏訪頼重が死んでから半年しか立っていないいま、湖衣姫に陽気になれといっても無理であった。歌をつくれといってもできないかも知れない。

（しかし、湖衣姫は、みずからこの歌会に出ようと云って来たのである）

湖衣姫が眼をあげた。晴信は、その湖衣姫の眼をおそれていた。おそれていたから、頼重が白刃^{じん}して以来、湖衣姫とは一度も会ってはいなかったのである。

晴信が視線をそらそうとすると、湖衣姫が、晴信の視線を追った。晴信を責めている視線ではなかった。恨^{うら}んでいる眼でも、憎悪^{ぞうお}している眼^{まな}ぎしでもなく、それはあきらめから立直って、女として自己を主張しようとする眼^{まな}ぎしであった。

「諏訪殿の御息女湖衣姫どのの歌のお手なみを」

晴信は云ってしまってからまずかったかなと思った。あとは歌のできた順に高白斎が読みあげるのだと宣言して置いて、また、名指したからであった。

湖衣姫は晴信の呼びかけに目礼で答えた。そのときはもう、彼女の頭の中に歌が作られていたようだった。

一首、したため終ったところへ、晴信の近侍が、その歌を取りにいくと、彼女は低いがはつき

りした声でいった。

「わたしは、自分で作った歌は自分で読み上げます」

はっとしたのは晴信ばかりではなかった。座の視線はいっせいに、湖衣姫に集まった。三条氏の眼は燃えていた。生意気な小娘がと、はっきりと敵視している眼であった。里美はただ驚いていた。諏訪家の息女の湖衣姫をはじめて見た驚きより、自分の歌は自分で読むといった毅然とした態度に畏怖した。里美よりは、湖衣姫の方が一つか二つ年下に見えたが、その気品は、とても及ぶものではないと思った。

諏訪家が禰津家の遠い本家だと聞かされており、神氏の出であることも充分に知っている里美にとって、湖衣姫を見る眼は姉妹を見る眼だった。立派な歌を詠んで貰いたいという期待が里美の顔に浮んでいた。

静寂そのものの中に、雪の降る音が聞えていた。

三女鼎立

武田晴信は躑躅が崎の館の廊殿に立って、遠い雲を眺めていた。

(諏訪は既に手中におさめた。佐久と小県はほぼ武田の勢力下にある。板垣信方の軍は上伊那を

席巻しつつある。父信虎が古府中を去ってから二年の間に、武田はこのような進出をしたのだ。

二十三歳の晴信の感慨であり、駿河へ追放した父に対する感傷でもあった。

（だが、前途は遠い、信濃には、村上義清と小笠原長時の二大勢力がある。この勢力を追放しないかぎり、信濃を併せ得たことにはならない。そして信濃の次には——）

晴信の頭の中には駿河の今川義元の顔が浮んだ。甲信のつぎが駿河、駿河の次は三河と東海道をとおし上っていった終着点は京都である。

（武田は源氏の末である。將軍の名を戴くにふさわしい家筋なのだ）

晴信の夢は春の雲が湧き上るように、かぎりなく膨脹していき、突然、なにかにつまずいたように大きくゆれて消える。戦さには人と金が要る。人はいるが、金はない。父の時代から戦乱につぐ戦乱で、国中が疲弊している。だからといって、敵を亡ぼして、敵の財産を奪い取るような野盗の真似をしていたら、とても天下を平定することはできない。

晴信は駿河の今川義元を思った。彼は梅ヶ島金山、富士金山を開発して、だいぶ懐具合がいらいしい。朝廷に物を献上したり、京都から人をまねくことができるのも金があるからである。

（わが郷土甲州はどうなのだ）

砂金が出るには出るが、その量は知れたものである。そこまで考えると、前途が暗くなる。

侍臣が、板垣信方の来訪を告げた。

「信方が、伊那から帰って来たのか」

晴信はよくないことでなければと思いながら、広間に引きかえすと、そこに板垣信方と今井兵

部^ががいた。

「おお今井兵部か、しばらくだったな」

晴信は、今井兵部にまず声をかけた。今井兵部は父信虎の暴虐に愛想をつかして他領へ逃げた、奉行衆の一人だった。

「あれから二年たちます。二年の間にお館様は……」

あれからと今井兵部がいったのは、父信虎を駿河に追放したときのことだ、がそのあとを兵部は云えずに涙ぐんだ。日に焼けて色が黒く、二年前よりはずっとやせて、白髪^{しらが}も増えていた。

「そちも元気で結構だな。ところでなにかいい土産^{みやげ}を持ち帰ったのか」

晴信は二年前に、もと奉行衆たちを前にして云ったことを思い出した。

（たとえ父信虎が悪かったにしろ、なんの手柄もないのに、帰参^{きさん}をかなえてやるわけにはいかない、武田に仕えたいなら土産を持ってくるがいい）

たしか、そういったのは韭崎へ出陣したときだった。

「今井兵部殿は、たいへんな苦勞をなされました。そしてまたとないお土産を持って帰られましたぞ」

信方が口添えをした。

「土産とは……」

という晴信に

「呼ぶがいい」

信方は今井兵部をふりかえっていった。今井兵部は一礼して下がると、すぐ三人の男をつれて来た。

「土産はこれなる三名の金山師にございます。それぞれすぐれたる腕前を持っておりまする故、この三人を充分にお使いなされて、甲州の金山を開発なさいますように」

今井兵部は二年間の辛苦をそのひとことにこめて云った。

「ひとりひとり頭を上げて、名乗るがいい。ついでに、なにを得意とするかいつて見るがいい」
晴信は一番右側に坐っている年輩格の男に向つていった。

「振矩師（測量士）百川数右衛門と申します。鉾山の測算、縄張り、坑道の掘鑿等すべて測量に關することをいたしまする」

百川数右衛門は言葉少なく答えた。

次の男は丹波弥十郎と名乗った。

「金鎚で石をたたいて諸国の山々をめぐり鉾山を発見するのが拙者の仕事でございます」
色が黒く、眼のぎょろりと大きい、人相のよくない男だった。

「諸国の山々をめぐったと申したが、諸国の金銀山の主なるものをいつて見るがよい」
晴信はきつい眼をしていった。

「さらば、石見国大森銀山、但馬国生野銀山、佐渡金山、越後国上田銀山、越中国河原、松倉、
亀谷、吉野、下田の諸金山、岩代国黒森金山、駿河国梅ヶ島、富士金山、伊豆国……」

「もうよい」

晴信は丹波弥十郎の言葉を制して

「だがまだ甲州の金山は歩いたことがないだろう」

「いえ、既に甲州の金山も歩いておりまする」

丹波弥十郎はけろりとした顔でいった。

「誰の許しを得て余の領内の山を歩いたのだ」

「誰の許しも得ておりませぬ。そもそも山師は、遠く平安朝のころより、どこの山なりと自由に入ってもいいことになっておりまする」

この答えに晴信はひどく驚いたようだった。

「勝手に探して勝手に掘るといふのか」

「いえ、山師は金銀を発見するのが仕事でございます。諸国の山をめぐり歩いて、金銀の鉱山を発見すると、これを朝廷に報告し、朝廷はその採掘を地方の国主に命じました。そもそも、金銀はすべて、日本国のものにて、個人のものではございません」

そもそも、ということばを乱発する丹波弥十郎の話を聞いていると晴信はいささか愉快になった。

「甲州に金が出る山はあるのか」

「黒川山、芳山、黒桂山、御座石山、金山嶺……このほかにもまだございます」

晴信の愉快になりかけた心が、弥十郎の答えによって、またひきしまつて来た。この丹波弥十郎のいっていることはほんとうだろうか。

「そのうちでもっとも金が出る山は」

「黒川金山でございましょう。この周辺に砂金が出ることは以前から知られております。いまはほとんど砂金はありませんが、鏈くさり（金鉱石のこと）はございます。筋鏈すじくさり（良質な金鉱）の鉉つる（鉉脈）は無数にございます。まず、日本においては、佐渡の金山に継ぐ金山でございましょう」

丹波弥十郎は臆する様子もなくなったらたと述べ立てた。

「だが、石の中にまじった金をいったいどうして取り出すのだ」

すると、第三の男が顔を上げた。山師らしからぬ、青白い顔をした男で、大蔵宗右衛門おおくらと小さな声で名乗った。

「この者は、もともとは大蔵流の能役者でございますが、ふとした縁で、金山に興味を持ち、金の採取法について、新しい方法を発明いたしました」

今井兵部が口添えをした。

「その方法は」

晴信にいわれると、大蔵宗右衛門は、ふところから紙に包んだ石を出して、前に置いた。その鉉石は、信方の手を経て晴信の手に渡った。

「その石が、いわゆる鏈くさりと申すものでございます。白い石の中に青みを含ふくんで見えているのが金でございます。金は砂金のような形をしているものもあれば、そのような姿で、石の中にひそんでいるものもございます。この金を取るには、まず石を掘り、撰より分け、粉にし、ふるいにかけ、水に流して、石と石でないものをより分け、これを焼き、鉛なまりの湯の中に入れまする」

「金と鉛を一緒にするのか」

「さようでございます。金属と金属のつきやすい性質を利用して、一度は金と鉛を一緒にしておき、その次の段階では、灰に鉛を吸いとらせて、金だけをあとに残します。これを灰吹き法と申します」

「なるほど、そちが考えたのか」

「前からこれと同じような方法をいろいろ工夫した人はおりますが、この方法を大がかりに使った話はまだ聞いたことはございません」

「おおがかりにやったら、多量の金が取れるというのか」

「それは鍍くさりの量によります」

晴信は今度は振矩師の百川数右衛門に向っていった。

「黒川金山を測量したか」

百川数右衛門は今井兵部の方をちょっとうかがってから

「おおよそはいたしました」

「金の埋蔵量はどのくらいある」

「さよう、五十万両と推算いたしました」

五十万両と聞いてうなったのは板垣信方だった。唸うなってから信方は、そこにいる山師たちのいうことが少々心配になったらしく、今井兵部の方を見て

「黒川山へどのくらい入っていたのか」

と聞いた。

「三つきばかりかけて、調査いたしました」

「その結果五十万両という数字がでたのか、もしその数字に誤りがなければ、武田家にとって、これ以上のことはない」

信方は、金のことで興奮した顔を晴信の方に向けた。

「しかし信方、その金はまだ取ってはないのだ。取ってなければ、ないことと同じではないか」
晴信は落ちつき払っていた。

「金山発掘となれば、それ相応な人を集めねばならない、取り敢えず、どのくらいの人が必要かな」

信方は今井兵部に聞いた。

「石工、穿子ほりこ、大工、吹工（製煉工）等千人ぐらい人を入れますと、年間一万両の金きんを出すことは、そうむずかしくはないと存じます」

晴信の顔が一瞬ひきしまった。怒りを発する前の顔だった。でたらめをいうなど怒鳴りたい心を抑制した顔だった。晴信は深くひといきついて、前のおりのおだやかな顔になると

「兵部、そちは夢のような上産を持ってまいったな。その夢の上産が、夢でなかったと、余を喜ばせてくれるのはいつごろになるかな」

「いますぐかかれば、三つきあとには……」

「よしやって見るがいい。だが、その金を取り出す方法を他国に知られないようにやるのだ。石

工、大工はもとより、金山にたずさわるものは全部一カ所に集めて、金山衆として優遇するがい。そのかわり他国との交通を遮断しやだんしろ、それから……」

といひかけて晴信は言葉を切った。千人の人を使って、年一万両の金が出なかったら、切腹を命ずるぞと云おうとしたが止めた。晴信は旧臣今井兵部の白いものが混った頭を見るとそれが云えなかった。晴信はあとを信方にまかせて席を立った。多量の金が領内から出るということはまだ信じられなかった。金が出れば、甲斐は名実ともに強くなれるのである。夢のような話だった。にわかには信じがたい話だったが気持ちがいい話だった。

晴信は従者を呼んで、馬を牽ひいて来るように命じた。晴信は、この春の夢を馬に乗せて走って見たかったのである。十里も走ったら、春の夢は覚めるかも知れない。覚めないにしても、あの三人の金山師の使い方に関して、もっといい考えが浮ぶだろう。

晴信は館の中を馬で廻った。いつも馬に乗ると、馬の足の向くままに走り出すのだが、その日だけは、館を出るまでに、行く先をきめて置こうという気があった。晴信は三度館の中を廻った。館を出たが、まだ行く先は決っていなかった。そこに、里美が馬に乗って待っていた。

「お供をさせていただきます」

里美は微笑を浮かべながら馬上から挨拶した。晴信は、いいとも悪いとも云わなかった。ほんとうは里美ともどもに馬を走らせたいのだが、家臣たちの眼もあるし、三条氏の眼もあった。

女が馬に乗るなどということは、源平時代なら、まだしも、今の世になつては、もの笑いの種

でございます」

三条氏が晴信にそういったことがある。だがその三条氏も里美に面と向つては

「昔から信濃と甲斐は馬術のお国柄、女で馬の名手といえは木曾の板額、その板額を妻にした浅利与一は甲斐の人と聞いております。いまは戦国時代ですから、女でも、武術の心得があつた方がよいと思います。わたしも、あなたに馬の乗り方でも教えていたどうかしら」

里美の馬術はなかなか達人だった。たいていの男なら、里美に迫いぬかれてしまうほど、彼女の馬術はうまい。彼女は軽量であるということをよく生かしていた。

晴信は里美を眼の隅つこの方に入れて、まるで知らぬふりをして一鞭当てた。だが、晴信が、そういうしぐさをやることを知っている里美は、晴信が鞭をふる前に、彼女の馬を前に立てていた。

「これは生意気な、女のぶんざいで」

晴信は口の中でいった。女の分際で領主の先に馬を立てようなどとは、もつてのほかだと、はげしく鞭をふつて、里美のあとを追うのだが、里美との間隔はちつとも、ちぢまらない。里美は馬上に伏せるようにして走っている。晴信からは、里美の丸い尻のあたりが見えるだけである。

晴信はしばらくはやっきになって里美のあとを追つたが、とても追いつけないと分ると、あきらめて、うしろを見た。石和甚三郎と塩津与兵衛の二騎が、上げむりを上げて走ってくる。

晴信が馬のたづなをゆるめると、前を行く里美も馬のたづなをゆるめる。

(いつもの手だな)

と思った。こうして誘いこんで、そのうちわざと隙を見せて、晴信の馬を先に出すのである。

晴信は苦笑した。里美のあざやかな手の内は躑躅が崎の館に帰るまで晴信をはなさない。いよいよ躑躅が崎の近くになったとき里美は馬を寄せて来て

「今宵お待ちしております」

とほほえみかけるのである。そうされると晴信は、里美のところへいかねばならなくなる。そういう夜の里美は、いつもの里美とは別人のように燃えた。狂ったように晴信を求めるのである。晴信はその里美をこよなく愛していた。おこを失って以来の空聞くうけいの淋しさは里美を迎えてからはない。

里美が来てから、晴信は三条氏の寝所を時折たずねることがあった。里美がそうしろというからである。そうしないと、妾としての立場がなくなるから、今宵は三条氏のところに行つてやれといわれると、里美の氣のつかい方があわれになつて、つい三条氏のところにいくのである。

三条氏も、裏で里美が氣を配っていることをうすうす知っているから里美には好感を持っているようだった。晴信は馬上で、三条氏のことを考えた。三条氏が眼くじら立てて晴信のところに来たのは十日ほど前だった。苦情を申しこんだのは十日ほど前だった。

（お館様は、湖衣殿にお見舞いとして絹三匹をさし上げたそうですが、ほんとうでございますか）

(たしかにやった)

（なぜおやりになったのです。たかが、風邪を引いて寝こんだぐらいなのに、絹三匹は過分な贈

り物です。お館様は、あの諏訪家の孤児を側室にでもなさるおつもりですか、——父を殺して、その娘を妾にしたら、さぞかし京都の聞えもいいでしょう」

三条氏は皮肉たつぷりにいった。なにかにつけて京都を口に出すのは、彼女の癖であった。

（湖衣殿は、去年の暮の歌会うたかいの時には、戦いに敗れた亡き父を思い出しながら、雪の音を聞いている女の心ほど淋しいものはないと詠よんだでしょう。あれは淋しきではなく、怒りでございます。折があらば、お館様の首をとろうとする女の執念があゝの歌を作らせたのでございます）

（ばかな）

晴信は取合わなかった。湖衣姫はそんな女ではない、もっと賢い女なのだ。

「どうなさいました」

気がつくと、里美が馬を寄せて、晴信の顔を覗きこんでいた。

「どうもしない。つまらぬことを思い出したのだ」

「つまらぬこととおっしゃいますと、まさか、わたしのことではございますまい」

「里美のことではない」

「すると三条様のことでしょいか、それとも——ああそうだ、お館様は湖衣姫様のことを考えていたのではございませぬか。お館様は湖衣姫様が好きなのですわ、ということとは、私がこちらに興き入れして来た、歌会のおり、湖衣姫様の歌を聞かれたときの、お館様の顔に出ておりました」

二頭の馬は主人たちが話をはじめると、仲良く鼻面はなづらを合わせて歩いて行く。

「余が湖衣姫が好きだったらどうする」

「側室にお迎え申したらよろしいではございませんか、諏訪家ほどの名家はそうはございません。湖衣姫様はその直系でございます、私にとっても、湖衣姫様のような姉君が来られることはほこりでございます」

「姉君といったな、湖衣姫は里美より若い——」

「若くても、私よりはるかに多くの苦勞をしておられますし、家柄からいっても、上でございます。家柄から申せば三条様よりも……」

といいかけてやめると、里美は、大きな眼を見開くようにして

「実は、その三条様と湖衣姫様が石水寺せきすいじにおでかけになっておられまする」
「なに！」

晴信は思わず馬の手綱を引きしぼった。馬がいなないた。

「三条様が花見にことよせて、湖衣姫様を石水寺に誘ったのでございます」
晴信の顔色が変わった。

三条氏は嫉妬深い女である。愛妾おこは、晴信が小県遠征中に、三条によって毒殺されたのである。

（ひょっとすると今度も）

そう考えるとじっとしてはいられなかった。晴信は馬に鞭をくれた。

そのあとを里美の馬が追ったが、追いつけなかった。晴信が真剣になれば、里美の馬術も、晴信には及ばなかった。

湖衣姫と三条氏は睨み合ったままだった。二人の間に、花見らしい酒肴しゅこうの食べものが置かれてあった。高坏たかづきに盛った団子にかけた蜂蜜が、あふれ落ちて敷物の莫蔭もくえんの上まで糸を引いていた。団子を食べた形跡はなかった。土器かわらけの盃もあり、瓶子へいじもあったが酒を汲んだ様子もなかった。湖衣姫は一人の侍女を従え、三条氏は八人の女を従えていた。

「召し上りませんか」

と三条氏がいった。

「いただきますはございません」

湖衣姫が答える。

「私はあなたを、花見に御招待申し上げたのでございます。それでは礼を欠くではございませんか」

「いやだというのに食べさせようというのが、京都の作法でしょうか」

湖衣姫は顔色ひとつかえずにいった。

「諏訪のような田舎者に京都の作法が分つてたまるものですか。では食べないでもよろしゅうございますから、ひとつだけ私の質問に答えて下さい。あなたは、今度、風邪のお見舞を受けたお礼にお館様をおたずねするということですが、そういうことはやめていただきたいと存じます。お見舞に品物を受けたなら、品物で返すのが当り前でしょう。諏訪家が亡びて、返すものがないというならば、その着ている着物でも脱いでお返ししたらいかがですか」

三条氏は湖衣姫の着ている花鳥模様の小袖に眼を向けて憎々しげにいった。

一瞬湖衣姫の顔に翳がさした。そして、きらめくような光りが、湖衣姫の眼に浮んだが、ほとんど瞬きする間のできごとのように消えて、前と同じような静かな調子でいった。

「私は他人の指図はいっさい受けないことにしています。これが諏訪家の作法でございます」
 では、お館様のところへうかがって、つべこべ、泣きごとを申すというのですか、それもいいでしょう、側室のはしくれにでもしてくれというがよい」

三条氏はそういうと、おかしくもないのに、いかにもおかしように声を上げて笑うと、背後にひかえていた八人の女が、これもまた、三条氏に負けないように声を合わせて笑った。

声にはならない叫び声が湖衣姫の背後でした。その声とほとんど同じくらいに、湖衣姫の侍女、千野伊豆入道の娘志野が懐剣を抜き放って前に出ようとした。湖衣姫の手が延びて、志野の裾を引いた。志野は、足を取られて湖衣姫におおいかぶさるように倒れかけたが、持っている懐剣で湖衣姫を傷つけないために、懐剣を捨てた。懐剣は高坏の上の団子に突き刺さった。

座は騒然とした。三条氏のうしろにひかえていた女たち八人がいっせいに、懐剣を抜いた。馬の蹄の音がしたのはそのときだった。

晴信は、三条氏の侍女八人が抜き放っている懐剣の光りと、高坏に盛った団子に突き刺さっている短刀と、そして、湖衣姫に抱きかかえられている侍女志野の姿を見た。

「いかがでしたのだ」

晴信の一言で、八人の侍女はあわてて懐剣をおさめた。

「ただいま三条様より、武田晴信様の側室になるようにとのおすすめを受けたところでござい
す」

湖衣姫は落ちついた声でいった。

「なに余の側室になれと？」

「湖衣はお嫌いでございますか」

晴信は湖衣姫の斬りつけて来る眼をこわいと思った。それほど、おそろしい眼で女に見られたことはなかった。その眼は、憎悪の眼ではなかった。恋の眼でもなかった。それは死を賭けた眼であった。いやだといったら、即座に、舌を噛み切^かって死ぬつもりでいる眼であった。

晴信はそこに坐った。坐るまでの間にいくらか心を落ちつける余裕があった。

「湖衣はおきらいでございますか」

二度目の湖衣姫の声はふるえていた

晴信は、いくらか座をずらして、姿勢を正していった。

「神氏諏訪家の直系をお迎えすることは、武田家にとっても、晴信にとっても、光榮至極と思う。いずれ、あらためて、使者を立ててお迎えしよう」

諏訪家は亡びたが、諏訪家の歴史は亡びてはおらず、その直系は、そこにいるのである。晴信は、湖衣姫を人質の湖衣姫とは思いたくなかった。戦いを離れた諏訪家の息女と思って迎えたかったのである。

「では湖衣を――」

湖衣姫の眼に涙が光っていたが、それを露とはせずにこらえて、

「父は既におりませぬ故、大伯父おおおじの諏訪満隣おおおを父がわりとして、祝言を取りおこなうようお願い申上げます」

湖衣は臆せずに行った。

「側室を迎えるのに祝言がいるのでございますか」

それまで黙っていた三条氏がいった。

「側室であろうが正室であろうが、妻の座にはかわりはございません。祝言は取りおこなうのがあたりまえでございます」

湖衣姫はきっぱりいうと、団子に突き刺っていた志野の懷剣を抜き取って、懷紙で、ぬぐいながら、志野に向っていった。

「たとえ、この団子に毒があったとしても、団子を食べるのに懷剣を使うという作法はよくないことですわ。京都風の作法をなにからなまでに心得ておられる三条様の前ですから、つつしみのないことをしてはなりません」

その言葉で女たちの座はまた険悪になった。

外が急ににぎやかになった。女の声が聞えたかと思うと、間もなく、野駈け姿の里美が、二、三人の小者こもをつれて入って来て

「これはこれはみな様おそろいの花見の席におくleshして、なんともおわびのしようがございません。それというのも、私の生れ故郷の花見餅を用意しておりましたものですから——どうぞ召

し上って下さいませ」

里美はそういいながら、小者に命じて彼女の用意して来た餅や酒や菓子などをそこに持ちだし、それまで、そこに並び立てられていた団子や瓶子の酒などを引込めはじめたのである。

引込めるについても、みなさん充分召し上った、残りだから、小者たちが、いただくがいいといったような、いいわけまで用意していた。

新しく出された餅に、まず晴信が手をつけた。里美はそれを三条氏にすすめ、つぎに湖衣姫にすすめ、彼女自身もそのひとつを取ると

「私はほんとうは、お餅よりお酒の方が好きでございます」

そして侍女がつぐ酒を盃に受けて飲むと

「酒を飲むと歌が歌いたくなるのでございますが、歌ってもよろしいでしょうかしら」
とあっちこっちに顔を向けながら

「そして私は、歌うとおどりとくになるのでございます」

といった。晴信が笑った。三条氏はにが虫を噛みつぶしたような笑い方をしたが、湖衣姫はころころと玉をころがすように、のどのあたりをふるわせて笑うと

「里美様の踊りはぜひ見せていただきたいわ。私は踊れないけれど、志野が諏訪の踊りを心得ております。里美様のあとで、私が唄い志野に踊らせましょう」

里美が踊り、湖衣姫が歌い、志野が踊るということになると、三条氏は黙っておられなくなつた。三条氏は、うしろをふりむいて侍女になにかいった。

侍女が立った。

晴信は、三条氏は、おそらく誰かに琴を取りにやらせたのであろうと思った。

里美は野袴を穿いたままで扇を片手に、歌いながら舞った。踊り方に、きびきびした節度があった。

里美の舞いがおわった。

湖衣姫が歌い出した。

洲羽^{すわ}の湖^{うみ}や

恋する者のところを

舟にうかべて

春がすみ

ただようままに

洲羽の湖や

恋する者のところは

氷の上をわたって

夜もすがら

明けてもはなれじ

湖衣姫の声は澄んでいて美しかった。

晴信は湖衣姫の声を聞きながら、ここにいる三人の女が、将来ともこのままの姿でいくのではないかと思った。

三人という数を考えると、晴信は、さっき会ったばかりの三人の金山師のことを思いだした。晴信の頭の中で、三人の金山師と三人の女が、ぐるぐると廻った。

晴信の傍に石和甚三郎がすりよって来て、そとに大月平左衛門が待っておりますと耳打ちをした。

庭に床几しじやが置いてあり、その前に大月平左衛門がひかえていた。

小泉、長窪城主、大井貞隆がにわかにくさの準備を始めました。近隣の諸城にも誘いかけられます。小笠原長時、村上義清との往来も頻繁りんぱんでございます。

「なにをたくらんでおるのかな」

晴信は腰を延ばしていった。

「伊那攻略に対する牽制策戦ばかりとは思われません。現に内山城主の大井貞清も、大井貞隆と呼应して動く気配がございます。」

「貞清は貞隆の子だからそうなるのだろう。真田幸隆はどうしている。」

「真田幸隆殿は防戦のかまえるようです。四方からかこまれたら、ひとたまりもないと思われま
す」

晴信は考えこんだ。いずれ大井貞隆は討たねばならない。討とうと思えばわけないことだが、それより先にしたいことがあった。湖衣姫との祝言だった。

晴信は大月平左衛門の報告を片方の耳で聞きながら、恋する者とは歌った、あの哀愁の翳かげの中に気品を失わない湖衣姫の顔を思い浮べていた。湖衣姫を思うと、三人の女の数がでる。三人の数が三人の金山師にとび、埋蔵量五十万両の黒川金山に通じた。

「春だな」

と晴信はいった。晴信は心のまよいを春のせいにした。

「はいっ！ まさしく春でございます」

大月平左衛門は半ば口を開いたまま、晴信の顔を見つめていた。

長持唄

小県、長窪城主の大井貞隆が武田晴信に対して敵対行動をしている証拠はつぎつぎに挙げられた。元来、大井一族は小笠原一族と姻戚関係にあり、北信の村上義清とも近かったから、小笠原と村上が誘いかければ、それに従うのはあたり前だった。

晴信にとって問題なのは、東信の諸城主がどう動くかということだった。南佐久、北佐久、小

県には二十にあまる群小城塞じょうさうざいがあつて、それぞれ、その城には、われこそ、この地方の領主と自負している一族がこもっていた。囲めば、一日か二日で陥おちる城塞ばかりだったが、攻め手が引けば、すぐまた、その附近の砦に旧領主か、旧領主の縁につながるものが立てこもるのである。こういう小城を相手に戦きをしていたのではきりがないことだし、そうかといって、いちいち、その城に武田家直系の将士を置いたら、これまたいへんなことであつた。

晴信は、大井貞隆の出方を待っていた。大月平左衛門のほか、多くの間者を、東信に送つて、情報を集めていた。

どの城主がどういふ考え方をしているかを充分調べあげたところで、ひとまとめにして、攻めおとそうという考えをもっていた。大月平左衛門は月に一度は晴信のところへ歸つて来て報告した。

「長窪城主の大井貞隆、南佐久内山城の大井貞清、それに北佐久の志賀城をまもる笠原清繁の三名は、はつきりと武田に対して叛意を持っておりますが、他の諸城は、情勢次第で、どちらにでもつこうという考えのようでございます」

大月平左衛門は絵図をさし示しながらいった。

「内山城、志賀城は、上野こうぜと国境を接している。二城とも、おそらく、上杉憲政のりまさの援軍をたよりとしているのだろう」

そして晴信は二つの城の見取り図をたしかめた。

「よく似た城だな」

「同じような山塞でございます」

「水の手はどうだ」

「まだ、はつきりとつかんでおりません」

「それでは、その調べがつくまで内山城、志賀城の攻略はあとまわしとしよう」

大月平左衛門には、それで、晴信の戦略がはつきりした。こういう山城を、真正面から攻めても容易に陥るものではない。水の手をおさえてしまえば、あとは、放っておいても、城は陥る。

大月平左衛門をかえしたあとで、晴信は甘利虎泰を呼んだ。

「秋になったら、長窪を攻めるぞ」

「心得ております。軍勢の用意をいたしましょう。で……」

その軍勢は、と聞こうとすると、晴信は

「騎馬六百ほどを集めるのに、どのくらい時間がかかるだろうな」

と訊いた。

「弓や長柄ながえの足輕は集めないのでございますか」

「そうだ。今度は騎馬隊だけで、始末をつけたいと思っている」

「それならば、走り馬を出して、出陣を布ふれまわるのが半日、集まるのが半日、ここから小県まで、途中にさまたげるものがなければ一日あれば充分かと存じます」

晴信はそれにうなずくと

「いいか虎泰、今度の小県出兵は、大井貞隆を生捕りにして帰ることにある。おそらく貞隆は、

小笠原や、村上や上野の上杉との間に援軍の約束をしただろう。武田が動き出したなら、間髪を入れず、同盟国の軍が小県に到着して武田の軍を迎え討つというようなことになっているに違いない。余は、その裏を搔くつもりだ」

晴信の眼には微笑が浮んでいた。

「裏を搔くと申しますと」

「あつという間に、長窪城をわが軍が取りかこむのだ。援軍をたのみに行く間もないぐらいの速さでそれをやるのだ」

「できるでしょうか」

「それをやるのだ。古府中内には、おそらく、あちこちの間者、乱破のたぐいが入りこんでいるだろう。そいつらが、甲軍が小県に向ったと知ったときには、騎馬隊は佐久往還を海野口あたりまで、突走っているだろう。道中の物見もおろうが、道中の物見が乗った馬が小県につくときにはこちらの馬も向うについている」

甘利虎泰は不安な眼をしていた。晴信の策略計画は、非凡であった。いかにもすばらしいものに見えるけれど、どこかに、ほころびる隙があるようにも考えられる。六百の騎馬隊が長窪城を取りかこんで、関の声をあげたら、大井貞隆は果して降伏するであろうか。死にもの狂いで戦って、十日も持ちこたえたら、援軍が到着する。そうなれば、こんどはこっちが危くなる――

「大丈夫だ、心配はいらぬ」

晴信は、それで、もう長窪城攻略の軍議のいっさいは終ったように、姿勢を崩して

「虎泰、長窪の大井が片づいたら、湖衣姫を迎えようと思うがどうだな」といつて笑った。

「それは、お館様のお心次第ですが……」

虎泰は、去年の冬、瀬津里美と祝言したばかりなのに、また湖衣姫とは、少々早すぎるではないかと思ったが

「早すぎるかな」

と先を越されると、いけませぬ、おつつしみなされとはいえなかった。

「余は湖衣姫が好きなのだ。姫は美しい、それに気品がある。なんといいたらいいかな、雪をいただいた峯々を見るような気品があり、湖衣姫の名のとおり、諏訪湖の春霞のなかに舞う天女の衣のような、情緒がある」

「それを情緒と申すのでございますか」

「情緒でなければ、風情だ。女のやさしさだよ、じっとして見てはいられない、魅力なのだ」

「もう結構でございます」

武田家の宿老の前で、平気で惚氣をいっている晴信を虎泰はたのもしい主君と思いつながらも、表面は、勿体ぶって、あまりそういう話に気乗りがしないような顔をしていた。

「承知してくれるか」

「反対申しあげるわけがございません」

「それでは、これから、諏訪へその話を持っていつてくれないか、諏訪満隣に正式に申込むのだ。」

諏訪満隣は、湖衣姫の大伯父に当るから、今度の祝言の仮親かりおやになって貰いたいということも忘れずに申し入れて来るのだ」

「分りました」

「分ったら、すぐ諏訪へいってくれ」

「すぐと申されましたが、小県出兵の用意はどうなさいます」

「湖衣姫との祝言の手筈が終ってからでよい。余にとっては、長渕の大井貞隆など、どうでもよい。湖衣姫のほうが大事なのだ」

虎泰は、晴信が湖衣姫との結婚をいそぐのは、その心の底には政策的なものがあるのではないかと考えていた。晴信と湖衣姫が結ばれることは、武田と諏訪が事実上、合体することなのだ。甘利虎泰は、その日のうちに諏訪へ向った。

先導の馬が三騎ほど土煙りをあげて走っていった。その土煙りがおさまらないうちに、男装姿の里美を乗せた栗毛の駒が風を切っていく。そのあとを数え切れないほど多くの騎馬武者がつづいた。数は六百だったが、一列になって、佐久街道をまっしぐらに走っていくのを見ると、その数は、千騎にも二千騎にも見えた。

晴信は、彼よりもずっと先を走っている里美を追い抜いてやろうという気はないようだった。

里美は里美で、勝手に走れ、おれはおれの好きなように走るぞといった態度だった。

（騎馬隊の一番うしろから、邪魔にならないようについてまいりますから、どうぞ、お供をお許

し下さい」

古府中を出るとき里美はそういった。そういつて置いて、いざ軍馬が動き出すと、里美はその先頭に立ったのである。

はじめのうち晴信は、その里美の出しゃばりを怒っていた。なんとかして追いついて、叱りつけてやろうかと思っていた。大事な戦さに女が出るなどということは、軍の士気にも影響する。とだと考えたりしたが、あとにつづく騎馬隊の表情を見ると、それほど里美の存在を重要視しているふうはなく、女としてはまれに見る乗り手に興味ぶかい眼を向けているだけのことのようにだった。

晴信は甘利虎泰と時々眼を交しながら、ひとすじに遠い八ヶ岳の山麓の道を走りつづけていた。道が急な登り坂になり、せまくなると、馬からおりて、歩かねばならなかった。走りつづけるといっても、馬に水をやったり、飼葉かいばを与えたりすることもある。小休止になると、里美は晴信のそばにやって来て、なにかと身のまわりに気をくばっていた。

「もう少し、たちますと、山ぶどうが、食べられるようになりますけれど」
里美は、ようやく、色づきかかった山ぶどうの葉を眺めながらいった。

「山ぶどうはすっぱくてあまりうまくないな」

晴信はそのすっぱい山ぶどうの味こそ、この里美ではないかと思った。

「でも、山ぶどうで作った酒はおいしゅうございます。小県へいったら、瀬津の里まで一走りして、それを持って参りましょう」

里美は、戦争などということを、いっこうに氣にしていはいないようだった。六百騎を率いての、野駈^のけにでも来たかのようなふるまい方だった。

「里美、少しはことばをつつしむがよい。われらは長窪城を攻めおとすために参ったのだぞ」

「充分に存じております。でも、長窪城の大井貞隆はお館様が氣になさるほどの敵ではございませぬ。大井貞隆のような男は、この戦国時代において、まっさきに亡びる男だと瀬津の父がよく申しております」

里美が貞隆のことをいったのは、そのときが初めてだった。

「大井貞隆のことを知っているのか」

貞隆という人が、至極、単純な人だということだけはよく知っております。けっして利口なお人ではなく、村上義清や、小笠原長時から、大井貞隆殿こそ、東信の雄などとおだてられれば、天下の情勢もかえり見ず、武田に弓を引いて自滅する人なのでございます」

里美はこともなげにいった。

「思い切ったことがよくいえるな」

「私は小泉の生れでございますから、お館様より、小泉のことはよく存じております」

そばで聞いている甘利虎泰が顔を上げた。いささか、言葉が過ぎるのではないかというふうな眼の色だったが、虎泰はなにもいわず、その眼を下におとした。

「貞隆の弱点は」

「ささいなことで、部下をひどく叱りとばしたりする反面に、涙もろいと申しますか、情にもろ^{じょう}」

いと申しますか、そういう面があります。貞隆が長窪城主でおさまっておられるのは、この情のもろさに部下がついているのかも知れません」

「情のもろさか、なるほど」

晴信は、幾度かうなずいてから、虎泰に

「長窪についたら、三百騎で城を取りかこみ、あとの三百騎で城下の道々をふさぎ、城下に住んでいる、城兵の家族をことごとく捕えるのだ」

「承知つかまつりました」

虎泰は晴信の頭の回転のよさに感心した。大井貞隆が情にもろいと聞いたとたんに建てたこの策は、必ず成功するだろうと思った。

虎泰は、騎馬隊が出発する前に、それぞれの侍きむらいだいしやう大将に晴信の下知を伝えた。甲斐の騎馬隊六百が長窪城を取りかこんだのは、その日の夕刻だった。

日はすでに山に沈みかけていた。

騎馬隊の到着する、ほんの少し前に、武田の騎馬隊来襲の報は長窪城に伝えられ、城内は大騒ぎになった。城内よりも、城の外の方が騒ぎはたいへんだった。荷物を持って、戦火から避難しようというもの、逆に城内へ避難しようとする城兵の家族で、せまい城下町はごったがえしていた。武田の騎馬隊の半数は城の要所を押え、そして他の半数の騎馬隊によって、道という道は封鎖された。

「長窪から、歩も外へ出てはならぬ、出た者は殺す。出ない者は保護してやる。城内の兵の家族

は、即刻、寺に集合すること、寺に集合しないものは謀叛者と見なして斬る」

武田の武者たちがそう叫んで歩いた。

混乱は夜になっておさまった。

かがり火が一晩中赤々と燃えた。城内から夜襲をかけて来る気配もなかったし、武田軍の進撃のほら貝の音も聞えなかった。

翌朝は雨だった。

晴信は甘利虎泰、横田備中守高松^{びつちゅうのかみ}、多田三八などの部将のほかに里美を加えて軍議を開いた。

晴信の本陣となったその寺は、よほど貧乏寺と見えて、雨が漏^もった。

「城内の兵は、およそ三百あまり、われわれの進撃が急だったために、在郷の兵で城に駆けこむことのできなかった者が、およそ四百はありましょう」

横田高松が報告した。

「寺に集まった、城内の身寄りの者は、およそ二百ばかり、その中に、大井貞隆の母がおりました」

多田三八が報告した。

「大井貞隆の母を生捕りにしたのか」

晴信は喜色を顔に出していった。

「昨日、大井貞隆の母御前は、墓参のため、城外に出ておりましたところへ、不意にわれらが参りましたので城へ帰ることができず、寺にひそんでおりました」

「簡単な結末になりそうだな」

晴信がいった。そして彼は里美に向っていった。

「余の代理として城中へ行つて貰いたい」

「軍使の役でございますか」

里美の顔は瞬間ひきしまったが、すぐもとどおりの顔になると

「なんなりと、御命令のとおりにいたします」

しかし、里美の顔に動いている混乱の色は見逃せなかった。

「大井貞隆の母を駕籠に乗せて城内に送りどけ、大井貞隆に降伏をすすめ、大井貞隆をその駕籠に乗せてつれて来るのだ。もし大井貞隆が降伏しないならば、寺にいる、城兵の家族は皆殺しにすると伝えるがいい」

里美の眼の中に恐怖の翳が走った。それは大役だった。下手をすると、彼女自身が捕虜になり、まかりまちがえば、殺される可能性があった。恐怖の色はやがて、晴信に対する恨みの色にかわった。もし晴信が里美を愛しているならば、そんな危険な役を与えるはずがなかった。大事な女を、たかが大井貞隆ごとき男との戦いの手段に使うはずがないと思った。だが里美は、彼女のそういう、うらみをこめた眼に、じっとこたえている晴信を見ると、春の日ざしに雪が解けるように気持がなごやかになって来る。この仕事は危険ではないのだ。大井貞隆という涙もろい男に、まずその男の母を送りかえすという恩情を与えて置き、そのつぎに、城兵の家族二百人の人質を前におしだせば、おそらく大井貞隆は武田に降伏するだろう。どう考えても降伏しないわけ

がなかった。里美の眼から暗い翳は消えた。

「お引受けいたします」

里美は手をついた。

「その役は拙者がつかまつります」

横田高松と多田三八がほとんど同時ぐらいにいった。

「このようにことに里美様をお使いに出されることは武門の恥となります」

ふたりはこもごもいった。

「武門の恥というのはそんなことではない。この役は里美でないと務まらないから、里美にさせるのだ。里美も、遠駆けや物見遊山ものみゆうさんにここまでついて来たのではないことを充分心得ているはずだ」

晴信は、いささか、でしゃばり過ぎた里美の行為に、婉曲えんきよくな皮肉をいって置いて

「里美から、大井貞隆の御母堂に降伏のことをよくよくたのんで置くがいい。もとをたどれば、瀬津家と大井家とは血のつながりもあることであり、城内には知っている顔もあるだろう。落ちついて、やるのだ」

里美はいく分か濃い化粧をして、大井貞隆の母を乗せた駕籠について、寺を出た。雨はやんで風が出ていた。里美は、乱れようとする裾をしきりに気にしていた。

城門はなかなか開かれなかった。大井貞隆の母が、駕籠からおりて、自ら呼びかけたので門が開いた。

「おお、そなたは彌津家の息女里美どのではないか」

大井貞隆は里美を見て眼を見張った。

「里美で、ございます、おひさしぶりでございました」

里美は、丁寧に挨拶を述べたあとで、降伏をすすめた。

「城兵の家族、二百の命がおしければ、降伏せよというのか」

「降伏ではございません、武田家についていただくことでございます。そうなさいませ。すべてが丸くおさまりまする」

「降伏しなかったら、どうするのだ」

「残念ながら、寺に集めてある、二百余名のお命がむなしくなりまする」

「晴信殿には里美どのの命と引きかえに、それをする勇氣があるかな」

「妾は死装束を用意して参りました」

里美は、よどみなくそれが云えた。

「いい覚悟だ。では、しばらくの御猶予を――、主だった者を集めて心のほどを聞いて見たい」

大井貞隆は、里美をそこに残して去った。

会議は一刻あまり続いた。

家族が殺されてもいいから、城を死守するという少数の者の意見が支配的だった。ほんとうは家族を助けたいのだが、主戦論者の前で、降伏論も出せずに、黙りこんでいる者の方が多かった。「降伏されてからのお館様のおいのちの保証があれば、話はおのずとちがって来る。われわれは

まだ武田と血を流し合つてはいないのだ」

大井貞隆の従弟の大井正隆がいった。その発言に勢いを得て、それまで沈黙していた和平派が、活発にしゃべり出した。できることならいらざる血を流さない方がいいというのが、その主張だった。

里美はその席に呼ばれたとき、なにを聞かれるかをちゃんと覚悟していた。

大井正隆が、貞隆にかわつて、貞隆の生命の保証についてたずと

「大井貞隆殿の御生命に別条なきことはこの里美が保証いたします。私は晴信様の名代で、ここに参つておるもの故、私のいうことは晴信様のことばとお考えくだされますように」

里美は凜とした声でいった。

大井貞隆が駕籠に乗つて城を出たのはそれから半刻ほどであつた。小県の要害長窪城は一兵も損はず武田の手に落ち、城主の大井貞隆は、そのまま古府中へ送られた。甲軍、小県に進攻という報を聞いて、小笠原長時や村上義清や上杉憲政などが援軍の準備を始めたときには、甲軍六百騎は、佐久街道を引揚げたあとだった。

電光石火の早業で小県の長窪城を陥した晴信はいささか得意だった。彼は東光寺に大井貞隆をおしこめた。処遇は諏訪頼重がとらわれたときと同じだった。原則として東光寺からはではないが、出たいときには、許しを得て古府中を歩き廻ることもできた。文通は自由であり、面接も許されていた。彼の周囲につきまといっている武田家の警護の者が少々うるさいだけで、特に

不自由なことはなかった。

大井貞隆は、人質ひとじちの身になってから丁度二カ月の十一月に脱走をくわだてた。その道びきをしたものは小県生れの若い僧であつた。ある夜大井貞隆は僧衣そうえに身をやつして、東光寺から脱け出し、馬に乗って雁坂峠へ向う途中で迫手につかまつた。晴信は大井貞隆に切腹を命じた。東光寺の若い僧は、小県の生れでも、大井貞隆に好意を寄せていた者でもなかった。彼は大月平左衛門の手の者で早瀬小五郎という男だつた。

「うるさい奴がひとり片がつきました」

甘利虎泰の報告を受けると、晴信は洪い顔をした。大井貞隆の処分法はあまりよくはなかつた。諏訪頼重のときよりも、あと味が悪かつた。

晴信は、大井貞隆の脱走のいきさつを書いたものを、大井貞隆の遺骨に添えて、長窪に送つた。大井貞隆の従者として、東光寺に起居していた萩原重清が、大井貞隆の遺骨に従つた。

十二月の初めに、湖衣姫は躑躅つじが崎を離れて諏訪に帰つた。

諏訪はすっかり變つていた。彼女の知っている上原城うえはらはそこにはなく、板垣信方によって新築された新しい上原城があつた。諏訪家は亡び、諏訪をおさめているものは、郡代の板垣信方だつた。その板垣信方は湖衣姫を迎えるについて、それまでにない考慮を払つた。

彼女の仮の家となるべき館が、諏訪満隣の家いへのそばに新築されていた。そこが湖衣姫の家であり、そこから武田へ興入れをする手筈が整えられていた。嫁入の調度品も諏訪家の息女にふさわしいように取りそろえてあつた。代々諏訪家に伝わっている調度品や、興入れのために京都から

取りよせられた金泥きんでいの屏風などがあつた。湖衣姫はそれらの費用のほとんどが晴信からひそかに
 おくられた結納金千両でまかなつたものであることを知っていたが、知らないふりをしていた。

「姫様はなにも気になさることはございません」

侍女の志野のいふことを、そのまま鵜うのみにしながらも、晴信が、三条氏に気兼ねしてい
 る様子がおかしかった。

湖衣姫は、三条氏には負けたくなかつた。たとえ三条氏が正室であつても、里美のように御機
 嫌を取るつもりは毛頭なかつた。彼女はいつも

（私は諏訪頼重の息女）

という意識を持っていた。彼女の中に、そういう形で諏訪頼重が生きているのだということは
 考へて見たことはなかつた。

湖衣姫が諏訪に帰つたことは諏訪の人々に明るさを与え、さらに湖衣姫が武田家へ興入れする
 のだと聞くと、それまで武田と諏訪との長い間の確執がこれでなくなつて平和が訪れるのだと喜
 んだ。

その年はことのほか寒かつた。

諏訪湖が凍つた。その湖の氷の上を、渡つて、近隣の諸豪士から、お祝いの品がとどけられて
 来た。凍こてついた山道を山浦衆が、馬に祝いの品を乗せて来た。

湖衣姫の興入れの行列は一里も続いた。行列の先の男が長持唄を歌う間、行列は動かなかつた。
 ひとふし、上手な歌が披露されると行列は、ぎしぎしと音を立てて動き、そのつぎの唄を待

った。行列の沿道の民家は、湖衣姫の輿入れを祝って、戸ごとに酒を出して、行列の人たちにふるまった。湖衣姫は彼女の生れ故郷と別れるために、ときどき駕籠の垂れをあげさせた。そういうことにして、実は諏訪の人々に別れを告げたのである。

諏訪の人々は、人質として長いこと古府中へ送られていた湖衣姫の不幸に同情して泣き、そしてまた、今度晴信と結ばれることが嬉しいといって泣き、その姿があまりにも美しいといって泣いた。

湖衣姫の行列は甲斐の国に入っても、あたたかく迎えられた。諏訪では戸毎に酒を出したという噂が伝わると、甲斐でも負けずに、酒を出して一行にふるまった。

三日目の夜、湖衣姫の行列が古府中に入るといので、行列を迎えるためのたいまつが一里余も続いた。迎えにいくたいまつと、迎えられるたいまつが交叉こうさして、みだれて、赤く揺れた。

晴信は躑躅が崎の丘の上から、遠く湖衣姫の輿入れのたいまつたいまつの火の近づくの眺めていた。彼は十四歳のとき上杉朝興の娘の於満津を迎えた。そのときの婚儀には灯はなかった。

於満津に従したがって来たのは三名の侍女と二十人の侍だった。

三条氏を迎えたときは、供の数は少なかった。はるばる京都からやって来たというのに、さっぱり京都らしくない供廻りだったことだけをはっきり覚えてる。

おこことは祝言はなかったが、おこことの初夜の思ひ出は晴信の身体の底に生きていた。そして瀬津里美との祝言は歌会うたかいにことよせて行われたのである。

「火というものは美しいものだな」

晴信はそばにいる駒井高白斎にいった。

「さよう、美しいものでございます。このたくましかがやきのように、武田家の運は開けていくでしょう」

武人というよりもむしろ、学者といったほうがふさわしい、駒井高白斎の端麗な顔に、久しぶりに浮んで見える、春のような、のどかな色を晴信は見のがさなかった。

高白斎の顔の隅には、いつもさびしいものがあつた。それは戦いに対する不安であり、治世に対する苦慮であり、隣国に対する心配だつた。高白斎は、それをつとめて表面には出さなかった。めつたなことで、感情を表面に出さない駒井高白斎が、心から湖衣姫との祝言を喜んでいてくれるのが晴信には嬉しかった。

「よいときには、よいことがつぎつぎとつぎきます。まだまだ、よいことがつづくでしょう」

高白斎が妙なことをいった。

「よいことがつづくというと？」

晴信は高白斎の暗示がなんであるか、すぐには分らなかった。伊那攻略が一段落したということだろうか——それでもなさそうである。里美が懐妊したということも聞いてはいない。

「よいときに、よいことの知らせが参りました」

高白斎は半ば微笑を浮べながら、うしろをふりかえつた。そこに今井兵部が、三名の金山衆を従えて、ひかえていた。

「祝言に来てくれたのだな」

晴信はそうだったが、すぐ今井兵部の前に置いてある白紙を敷いた三方さんぱうの上に盛り上げてある菓子を見て、おやっというふうな顔をした。祝儀に菓子を持って来ても、いっこうにさしつかえはないが、その菓子を三方に盛りこんで、領主の前に置くのは、なんともへんだった。

「お館様、お受取り下さいますように」

口添えをする高白斎の微笑が消えて、ひどく緊張した顔になったので、晴信は、その菓子がただの菓子ではないと思った。

（菓子でなければなんであろう——もしや）

その気持が晴信の眼の中で燃え出すと、高白斎は、燭台をその近くに引きよせた。

それは菓子の形をしていたが、菓子ではなかった。ひとくちにほうばってもいいほどの大きさの丸い黄金の菓子は、かき立てられたあかりの下で燦然さんぜんと輝いていた。

「黒川金山で取れました武田の金でございます」

今井兵部は、それだけをようやくのことといった。それまでに、どれだけの苦労があったかは、兵部の痩せこけた頬のあたりによく見えていた。

晴信は金のつぶをひとつひとつ手に取った。それはつめたくて重かった。ひとつひとつを改めるように取っては三方にもどし、さいごに、三方に手をかけて持ち上げようとしたが持ち上げられなかった。

晴信の心の中にその金の重さがしみた。

（武田の金でございます）

といった今井兵部のことばが、彼の頭のなかで、雷鳴のようになりひびいた。

「今井兵部、丹波弥十郎、百川ももかわ数右衛門、大蔵宗右衛門おほくらの四名の者どものやったことは、城を百ばかりも取ったほどの手柄に当る。これから、いよいよ、その手柄の数を多くしてくれ」

晴信はもっと、おおげさに彼等を讃めてやりたかったが、すぐに言葉が出なかった。そばにいる高白斎の方に助けを求めるように眼をやると、高白斎は晴信の眼を迎えて、すぐ下におとした。漆塗りの乱れ籠の中に、陣羽織が用意されていた。

高白斎は、一番上に置いてある、錦の陣羽織を眼の高さまで捧げて晴信にわたしながら、小声で、今井兵部殿へといった。

錦の陣羽織の背に、金糸きんしで武田菱が織り出されていた。

四つとも、揃いの陣羽織だったが、金糸の武田菱が入っているのは、今井兵部の陣羽織だけだった。

四人は感激がことばに出せずに平伏したままだった。

「金山衆の支配役として格好なものかどうか着て見るがいい」

晴信は、そういうながら、駒井高白斎のこまかい心づかいに感謝した。いい家臣を持って幸いだと思った。

「これで武田は万々歳でございます」

高白斎がいった。

湖衣姫の行列は躑躅が崎にせまっていた。長持唄が凍てついた夜の空気をふるわせている。

晴信はふと今宵の湖衣姫との初夜のむすびを想像した。あの湖衣姫が、どんな顔で、晴信を、迎え入れるかを考えると、胸が鳴った。

和の盾

伊那の高遠頼継たかとおよりつぐがいまなお惣領家の諏訪に野望をいだいていることを晴信はよく知っていた。野望をいだいたところでどうにもならないのに、伊那地方の豪族と語り合って諏訪進攻を本気で考えている頼継の心情があわれでもあった。

「この前あれほど手痛い目にあっているのに、まだあきらめきれないのだろうか」

晴信は駒井高白斎にいった。手痛いというのは天文十一年（一五四二）の九月の戦いのことであった。甲斐と諏訪の連合軍に敗れていのちからがら高遠へ逃げかえった頼継が性懲りもなく、諏訪を狙っていると聞いただけで晴信は頼継の背後にある伊那の勢力が強大であることを考えねばならなかった。

天文十三年十一月、高遠頼継の乱破が諏訪神社の神官かん長守屋頼貞おきの家に火を放った。いやがらせであった。

晴信はその翌年になると高遠進軍のふれを出した。

（高遠頼継の所業は許しかねる。武田の軍勢に諏訪の軍勢を加えて、およそ三千をもつて近いうち高遠の地を攻略する）

晴信は信濃の諸將に書状を送った。高遠を討つとはいったが、なかなか兵を動かさず、晴信が古府中を發つたのは四月に入ってからだった。

（武田晴信という新しい甲斐の領主は、従うものはあつく迎えるが、そむく者は徹底的に成敗する。諏訪は頼重ひとりだけが腹を切つてすんだけど、高遠が武田にそむけばみなごろしに合うかもしれない）

そういう噂が高遠地方に流れた。

晴信は四月二日に古府中を立つたが、すぐには高遠に向わず、道中悠々と泊りをかさねて、上原城についたのは四月十四日であった。

（武田は黒川金山の開発を始めて、多くの人数が要るそう^いだ。武田に手向った男たちは、黒川金山に送られて、石掘りの人夫にされ、女たちは人夫相手の遊女^{あそびめ}に追いやられる）

という噂がまことしやかに流された。すでに黒川金山には、そういう運命の男や女がいるのを見て来たなどといふらしい。

晴信は上原についたが、ここには一日しか滞在せずに、翌日には杖突峠^{つえつき}に向つて兵をすすめた。（甲軍はおびた^だしい縄を用意して来ている。あれは、捕虜を捕えて、黒川金山へ送るためのものである）

そんな噂が高遠の村々につたわっているころ、高遠軍の物見^{ものみ}の者、数名が甲軍に捕えられ、そ

の一名が、その夜、縄を抜けて逃げかえつて

(とにかくえらいことだ、おそろしいことだ。武田の兵たちのいうことには、高遠の男たちをみな殺しにし、女をことごとくかつさらって黒川金山へつれていくのだそうだ)

といった。

四月十六日、杖突峠に陣を張った武田勢が徐々に動き出した。甲軍が動き出すと、高遠軍は戦わずして引いた。

四月十七日、夜があけてみると、前面にいた高遠軍はことごとく消えうせていた。甲軍は一兵も損ぜずに高遠に進攻した。老人の姿が若干じやつかん見えるだけで、若い人の影はなかった。高遠頼継は城を捨てて逃亡したあとであった。

住民にはなんらの危害も加えないという晴信の布告が村々に伝えられた。実際甲軍の兵たちは、各自が持参して来た乾飯ほしいを食べて静かに命令を待っていた。軍律はきびしく、住民に危害を加える者があると、即座に罰せられた。

僧衣そうえをまとった山本勘助が晴信の本陣に來たのは、暮れ方であった。

「流言の葉は効ききすぎたようだな」

晴信は勘助の顔を見るとすぐいった。

「葉が効きすぎたのではなく、投薬の機がよかったのではないかと存じます」

勘助がおそろおそろいうと晴信は

「投薬の機か、なるほど、どっちみち、高遠頼継は亡ぶべき男であり、それを家臣も領民も知っ

ていたということになるのかな。それにしても、男を黒川金山に送り、女を遊女にするという流言はよく考え出したものだ。思いつきとして、讀めてやってもいいが、聞きようによっては少々残酷に過ぎるようでもあるな」

晴信はかたわらに坐っている駒井高白斎の方へ眼を向けた。

高白斎は晴信のことばに軽く相槌あいつちを打ったが、高白斎のとなりに坐っている横田備中守高松は、晴信の視線が延びてくるのを待っていった。

「おそれながら、拙者にはいささかも残酷には思われませぬ。味方やいばに刃を向ける者はひとつとらえて、鉦山におくり、その家族は奴婢めひに売りとばすぐらいのことをしなければ、この戦国の世をおさめることはできませんまい、——山本勘助が、そのような流言をふりまくのはごく当り前のことかと存じます」

横田高松の眼はぎらぎら光っていた。

「戦国のならいだとすると、今川殿は、戦いくさに先だって、しばしばこのような流言を放つのかな」

晴信は山本勘助に聞いた。

「しばしばというほどではございませんが、時と場合によっては使うこともございます」

「使うだけか」

「いえ、そむいたものをとらえて、重労働をさせたり、その家族を奴婢に売ったりすることもさうめずらしいことではございませんぬ」

晴信はひとつだけ大きくうなずくと、もう、そのことはそれでおわりにして、話のついでに出

てきた今川義元の方へ思いを走らせていた。

余はこれから伊那の福与城に向う。福与城は堅固な城ゆえ容易に落ちるとは思われぬ。福与城をかこめば、小笠原長時も黙っていないだろうし、伊那の諸豪も場合によっては敵に廻ることとなろう。かねての甲州と駿河の盟約どおりは今川殿から援軍を出してもらいたい。多くはいらぬ、三百騎ほど至急さしむけられたいと今川義元殿に伝えてくれ」

晴信は彼の意志をその席につらなる者たちによく聞えるように大きな声でいうと、ちよつと駒井高白斎の顔を窺^{うかが}うように見てから、うしろにひかえている祐筆^{ゆうひつ}に今川義元あての書状をしたためるようにいつけた。

晴信は一部の軍勢を高遠城に残し、その翌日には上伊那の福与城に進攻した。高遠頼継の背後にあつて、頼継をそそのかしたのは、福与城主、藤沢頼親であり、頼親の背後には、小笠原長時がいてと見てとったからであつた。

頼親の妻は小笠原長時の妹であることも、いったんは武田になびいていた頼親が武田に反旗をひるがえした遠因になつていた。

福与城は天竜川を見おろす要害であつた。西は断崖、南・北は深い沢になつていて、容易に近づくことはできなかった。大人数でかこんでも、どうにもならぬところであつた。水の手をおさえるか、兵糧攻めにする以外にこの城をおとす方法はなかった。

頼親の勇猛さは近隣に聞えていた。甲軍来ると聞いて、藤沢頼親に加勢して、この城にこもつたもの千五百人と記録に残っているが、実際はその三分の一ぐらいだったであろう。

小笠原長時は晴信の軍が福与城をかこんだと聞いたとき、家臣たちを集めて

「これで晴信の首は貰ったようなものだ」

といった。

「晴信は若い、若い小倅こやがれについている武田の老人たちは能がない、いまこそ、われわれは晴信の延びに延びた腕を根元からばっさり斬っておとすときが来た」

長時は伊那の竜が崎城に陣を張った。伊那の豪族知久頼元が小笠原長時の軍に加わった。

「敵は長期戦に持ちこむ気だな」

晴信は駒井高白斎にいった。

「さようでございます。長期戦になれば、佐久、小県、諏訪、伊那と、いまだに安定しない新領地を持っている武田側が不利になると見込んでいるのでございましょう」

「策は」

「やはり、あまり長居は御無用かと存じます。こうなれば、福与城の方はあとまわしにして、まず竜が崎城の方を衝くのが賢明かと存じます」

「小笠原長時の本陣を攻めるのか」

「さようです。藤沢頼親は勇将であり戦上手いくさと聞いてはおりますが、未知数の人物です。小笠原長時の方は、しばしばの合戦で、手合わせが済んでいます。小笠原長時には、諏訪から板垣信方殿をさし向け、これに駿河衆を加えたら、いかがと存じます」

戦線は膠着こうちやくしたまま動かなかった。今川義元の援軍が来なければ困るほどのいくさではなかつ

たが、晴信は駿河の今川義元の兵がどのくらいの働きをするか見たかった。

今川義元から援軍受諾の返事があったが、実際に援軍三百を稲垣玄蕃げんぱが率いて到着したのは五月の終りであった。

「御苦労であった。充分休息をしてから戦いに参加してもらいたいのだが、この度は少々いそぐ。板垣信方の軍と力を合わせて竜が崎城を攻めてもらいたい」

晴信は稲垣玄蕃にいった。

「承知つかまつりました。われわれは武田家の御味方として参上した以上、御館様の御意のままに働く所存でございます」

稲垣玄蕃は髭の濃い男だった。髭の中から眼を輝かせながら、いささかもいやな顔をせず、隊伍をととのえると、竜が崎城に向って発たっていった。

板垣信方は稲垣玄蕃を鄭重に迎えて、兩二日の休養を取らせたうえ、竜が崎城攻撃の相談をした。稲垣玄蕃の率いた兵は騎馬五十、徒士かち二百五十であった。

「竜が崎城をおとすには、小笠原長時と知久頼元との間隙を衝く以外には方法はない。両者は表面上は共同して武田と戦っているように見えても、内心では、もしかすると武田方に内応して、こっちに攻めて来はしないかという疑心を持っている」

そこで板垣信方は言葉をついで

「今宵戌いぬの刻（夜の九時）ごろ、城内に潜入させてある乱破が火を放つのを合図に、城の裏手から関の声をあげて、討ち入ってもらいたい。わが方は、正面から攻め入る所存である」

稲垣玄蕃はその策を了承して、暗夜に乗じて城の背後に廻った。

予定の時刻が来ても火の手はなかなか上らなかった。へんに思った玄蕃が物見をつれて、城に近よって中をうかがうと、城内はなんとなくさわがしい。あかりが、あちこちと動いている。人の叫ぶ声を聞いた。玄蕃は、城内の混乱を、武田方が城に忍ばせておいた乱破が放火しようとして捕えられたがための騒ぎだろうと見た。

稲垣玄蕃は、全員に下知して鬨の声をあげさせた。それに呼応して正面でも、板垣信方のひきいる軍勢がいつせいに鬨の声をあげた。

夜襲は成功裡に終わった。城兵は城を棄てて逃げ、そのあとに攻めこんだ信方の軍によって、城は焼かれた。

天をこがすばかりの炎は福与城から望見された。

藤沢頼親はやぐらからこの火を眺めながら、やがて、身にせまってくる危険を考えた。

矢文が福与城に射ちこまれたのはその翌朝だった。城主藤沢頼親と遠い縁つづきに当る武田の家臣、小山田信有の書状だった。

晴信の使者小山田信有は藤沢頼親と面会した。晴信が藤沢頼親に示した降伏の条件は、福与城を焼くこと、藤沢頼親の実弟権次郎を人質として晴信にさし出すという二項目であった。

六月十一日、福与城に火が放たれた。上伊那一の名城も、五十日近く、武田勢を支えたが、ついに、灰となった。

晴信は藤沢頼親と会った。

「残念でござる」

藤沢頼親がひとこといった。残念であるといいながら、晴信から少しも眼をそむけようとしな
い、頼親の不遜にも見える傲慢な面がまえを晴信はじつと見詰めていた。

「いくさには勝敗はつきものだ、このつぎには勝ちいくさをすればいい」

晴信は頼親の眼を見ていった。

「勝ちいくさとは……」

「武田はつねに勝つ。この晴信のゆくところ必ず勝利がある」

頼親の眼のなかに、なにかが動いた。はつきりと動いたとわかるほどの動きではなかったが、
それを晴信は、頼親の侮蔑の心と見た。若い晴信をあなどっている証拠だと思った。

（この男は、そのうちきつとそむく）

晴信はそう思った。

晴信が古府中に凱旋したのは六月十三日だった。梅雨はまだ完全にはあがってはいなかった、
躑躅が崎の館に帰ると、晴信は、御旗楯無の前で先祖に戦勝報告をすませ、その足で湖衣姫の部
屋へ入っていった。

「まだ日が高うございます」

湖衣姫は顔をそめていった。

「ここに手を当てて胸の高鳴りをたしかめるがいい。夜がくるまで待てないことがわかるだろ
う」

晴信は湖衣姫の小さな手を取って、彼の胸にあてた。若い晴信にとって、五十日間の出陣はつらかった。なんとかして湖衣姫か里美を呼ぼうと思ったが、そばについている駒井高白斎の学者然とした顔を見ると、それがいい出せなかった。うっかり、へんなことを云おうものなら

(お館様がそのようなことをなさっては軍紀が保てませぬ)

と云われそうだった。

晴信は湖衣姫を抱きながら、この一瞬のために、戦いをしてきたのではないかと思った。湖衣姫は、眼を見開いたまま晴信の愛を受けた。いつものことだった。天文十二年の暮に湖衣姫と祝言をしたときからそうだった。それまでに晴信が体験した女性のすべては、そのときは眼を閉じた。それが終わっても、眼を閉じて、恥じらいを見られまいとする女ばかりだった。なにごとく積極的にふるまう里美でさえ、閨むねのなかでは、ひどく内気だった。晴信は、彼の腕の中で里美が眼を開いたのを見たことは一度もなかった。いささか図々しいほど、さっさと、みずからを、歓楽の頂点に持つていこうとする三条氏も、そのときはけっして眼をあけなかった。

湖衣姫は晴信の眼をけっしてはなさなかった。

よく澄んだ彼女の眼は、晴信の眼とともに燃えた。晴信は、湖衣姫がむしろ懸命に、眼を開こうと努力しているのではないかとも思った。そのときに、眼をつぶるのは女性のならわしであるのに、そのならわしを破っても、眼を閉じまいとするのは、晴信に対する献身以外のなにものもあり得ないと考えられた。

晴信は湖衣姫を愛した。晴信が、諏訪湖のように澄んだ湖衣姫の眼の底に沈み、湖衣姫が、い

くらか茶褐色をおびた、晴信の丸い眼の中に吸いこまれたとき、ふたりは別なものを意識しなくなった。

ひとときが過ぎた。湖衣姫の見開いた眼尻に一条の光るものが見えていた。晴信は、それを湖衣姫とのいとなみの完成の証拠のように眺めながら、湖衣姫がなにを云うかを待っていた。

湖衣姫はなにも云わずに、静かに燃えている眼の炎を晴信に向けたままだった。

晴信は湖衣姫の褥しとねをはなれた。回廊に立つと涼風が彼を迎えた。涼風に乗って、花のかおりがした。そのかおりが、晴信に里美を想わせた。里美の肌のうつり香かに似たあまさだった。

「湖衣姫様のところにいっていらっしやったのでしよう」

里美は晴信に皮肉を云った。

「でも、私はお館様が日の高いうちに、私のところに来てくださることは間違いないと思っておりました」

里美は晴信により添っていった。晴信は里美を抱いた。新しい火が彼の中で燃え出していた。

今川義元からの書状を持った使者が、古府中にやって来たのは、七月になってすぐだった。

北条氏康うじやすが駿河に攻めこんで来る気配がある。もし北条氏康が駿河に進攻して来たら、かねての盟約どおり、今度は武田の援軍をたのみたいという書状であった。

「今川義元は本来、こういう人なのだ。三百の兵を六月に貸してくれたと思ったら、ひとつきもたたないうちにそのおかえしを求めて来た」

晴信は駒井高白斎に書状を示していった。

「やはり、援軍はださずばなりますまい。今川義元殿は、お館様の義兄にもあたられるお方であるし、父君信虎様の奇遇先でもある。誰か適当な部将に三百の兵をつけて……」

その高白斎のことばを晴信がさえぎって

「いや、余が自ら駿河に出陣する」

晴信はけろりとした顔でいった。

「伊那攻めのときの今川の家臣の稲垣玄蕃の奮戦ぶりは見事なものであった。が、あれは、あくまでも侍大将としてのふるまいである。今度は今川殿自らの下知ぶりをとくと拝見したい」

「いくさ見物にいくのではございますまい」

駒井高白斎は、いくらかきつい顔でいった。

「いや、いくさ見物にいくつもりだ。今川勢に加わって、北条と戦うのではなく、今川と北条の仲に立って、いくさをやめさせるように努力したいと思う。そうすれば両方にいい顔ができる。駒井高白斎は奇妙な顔をした。横面を張り倒されたようなびっくり顔で、晴信が、冗談をいっているかどうかを窺^{うかが}いながら、一方では、晴信のいつていることを吟味^{ぎんみ}しているようであった。」「今川殿と同時に北条殿にも書状を送ろう。いまのところ北条殿には、近隣のよしみだけを通じておくことにしよう。そうだ、北条殿には甲州市川大門の肌吉紙^{はだよし}の上品を瀉^すきあげて、送りとどけるのがいいだろう」

八月になって、北条氏康の軍が駿河に侵入したという報が入った。

天文十四年八月晴信は兵五百をひきいて駿河に出征した。五百の人数の最後尾に二挺の女ものの駕籠があり、十人ほどの武士がこれを警固していた。

里美と侍女の駕籠であった。

晴信が駿河遠征に、なぜ里美を同道するのか、駒井高白斎にも分らなかった。ただ晴信が、出征中の空閑をみたすために、里美をつれていくのではないことははっきりしていた。晴信と里美の寝所は別だった。

里美は戦略の取りひきに使うのだという噂が流れた。今川義元の妾にさし出すのだとか、北条氏康の妾として贈るのだなどという者すらあった。里美が近隣に聞えた美人であって、今川義元も、北条氏康も、禰津元直のところに、誘いの手を延ばしたことが伝えられていたからであった。晴信の軍は富士川沿いの道を駿河に向って進んでいた。行軍中に、駿河や相模にさかんに間者を放ったり、正式な使者も送ったりしていた。なんとなく和平をにおわせた晴信の手紙が、北条氏康の陣に送られてもいた。

晴信は駿河に入ったがにわかには動かず、形勢を觀望していた。富士郡上条の大石寺の晴信の陣所には、今川義元と北条氏康の使者が交互に訪れた。両方ともいきり立っているようだったが、内心は和平をのぞんでいることは明らかだった。

北条氏康の背後には関東管領上杉憲政が、貪婪な眼をひからせていたし、今川義元には、尾張の織田信秀、美濃の斎藤道三の動きが心配だった。

今川義元は、北条氏康が約をたがえて駿河に侵入したことをひどく怒り、北条氏康は、今川義

元が相模の農民の逃亡を誘ったのはけしからぬと怒っていた。

氏康の軍勢はすでに駿河に入っていたが、今川義元が、進んでこれを撃退しようとしなのは、氏康をおそれているのではなく、できるだけ引き寄せておいて徹底的な打撃を与える腹のようでもあった。

戦線は吉原附近を境として動かなかった。晴信は山本勘助を使って、氏康と義元の仲たがいの原因を探らせていた。九月の半ばごろになって山本勘助は、かなりくわしい情報を持って帰ってきた。

「要するに国境附近のこぜり合いがもとで起きた紛争でございます」

勘助はそう前置きして話し出した。

駿河と相模の国境争いは、天文十年北条氏綱が死んで、家督を氏康が継いでからはげしくなった。氏康が好戦的であったというよりも、氏康が新領主としての威光を見せようという示威行動であった。

駿河の領民が相模の領地の小川で魚を取ったということがきっかけでこぜり合いがつづいた。

氏康はこの話をきくと、人数を出して、駿河領内の青田刈りあれたがをやった。これは事実上の宣戦布告であったが、今川義元は、その挑戦には、まともには応ぜずに、細作さいさく（工作員）を使って、相模の農民を有利な条件で駿河に誘った。

「それで北条氏康は兵を率いて駿河領内に侵入したというのか」

晴信は、いささか退屈な国境の紛争事件を、同じようなことが、どこにもあるものだというよ

うな顔で聞いていた。

「さようでございます。そうしないと恰好がつかないようなことになってしまつて、氏康殿自身も困っているのではないかと存じます」

「北条の兵の意気はどうだ」

「さかんだというよりも、せっかく駿河に入ったのだから、ひとあばれしたいという気のようにです」

晴信はうなずいた。

北条の兵たちがそういう気でいるうちは、和平はむずかしい。そのうちなにか起るだろうと思つた。

九月十六日、北条の乱破が吉原に火を放った。折からの北西の風にあおられて、町の半ばは焼失した。

長久保城に陣取っていた今川義元の軍が動き出して、北条氏康の軍を三方から取り囲む態勢を示した。今川義元の軍はおよそ二千、北条氏康の軍は約八百であった。戦えば駿河勢が勝つことはほぼ予想されていた。

天文十四年九月二十日、北条と今川の軍は岡宮の原で対峙した。そこまでくれば、一戦を交える以外解決の道がつかなくなっていた。

晴信は軍使を北条氏康と今川義元に送った。

（合戦をなさるのは勝手だが、両軍がたがいに傷つき合うのを喜ぶのは、誰であるかをよく考え

られてから矢合わせをなされたらいかがでしょうか。どうしても合戦をしないと気がすまないというならば、合戦に先だって、甲軍の舞いをお眼にかけましょう。けっして源平の故事を真似ているのではなく、意味のない戦いで死んでいく将士たちに、今生こんじょうのなごりの舞いを御覧に入れたい所存のほかなにもありません。最後にひとことつけ加えておきますが、武田はいずれにもお味方はいたしません」

その朝、岡宮の原には露がおりていた。今川軍と北条軍の旗差物が三丁余もはなれて向い合っていた。旗差物は群団をなしていた。ひとつひとつの小群団を横に並べて遠くから見れば全体的には一列横隊になっていた。今川の本陣は原を見おろす小高い丘の上にあった。林のように旗差物が密集していた。北条氏の陣にはところどころに木の櫓やぐらが組んであった。そこが見張り所であり、指揮所でもあるようだった。

鳥の一団が原の上空を横切っていった。張りつめた空気の中で両軍は鳥の飛んでいった方向に眼をやった。

森の中から一騎が駈け出して来たのはそのときだった。騎手は真赤な鎧よろいを着ていたが、兜かぶとをいただいてはいなかった。両軍の視線はその一騎に集中された。騎は矢のように原の中央に進んでいく。

「女だ、女だぞ」

両軍の中から声が上った。鎧と見たのは鎧ではなく、真紅の狩衣かりぎぬであり、馬上の騎手は、金襴きんらんの鉢巻をし片手に槍を抱いた女性だった。馬が疾走すると長い黒髪が、うしろになびいた。

騎手は里美であった。里美が原の中ほどまで出て来ると、こんどこそ鎧姿の騎馬武者が朱房のついた長柄の槍をかかえこんで、一列になって里美のあとを追って出た。一列の騎馬隊の先頭はまもなく里美を追い抜き、そこで騎首をかえすと、里美を中心とする円陣を作った。太鼓が鳴った。円陣は方陣になった。太鼓の合図で隊形は色々に、変化した。最後に騎馬隊は八の字形になった。八の字の頂点に里美がいた。法螺ほらが鳴った。

それまで、広い原を縦横無尽に駆け廻っていた騎馬隊が八の字形のままで停止した。大きな盾に白紙を張ったものを持った郎党数名が原の中ほどへ出ていって、盾たてを木の杭に固定した、太鼓が乱打された。

朱房の槍を持った里美の馬が、その白い盾に向って突き進んでいった。里美の槍が盾のところでひらめいたように見えたが、馬は止まらず、そのまま走り去った。里美のあとを、朱房の長槍を持った騎士がつきつきと突っ込んでいった。ほとんど全力疾走しながら白い盾を槍でついた。突いた槍を盾に取りられることもなく、ちゃんと手元に繰りもどして走り去っていく技は、人間業わじんぎとは思えないほど見事なものであった。

五騎、十騎、二十騎と騎士が白い盾を槍で突いているうちに、白い盾の中に槍のつきあとの文字らしいものが見えてきた。

百騎ことごとくが、走り去ったあとに和という字ができてあがっていた。

北条氏と今川陣の両方から喊声かんせいが上ると、それに迎えられるように、郎党たちが和という字を両面に書いた盾を持って原の中へ出て来た。和の盾は、北条軍と今川軍が対峙たいじしている境界線に

一列に並べ立てられた。武田の騎馬隊が和の盾を護るようなかたちで、背中合わせに並んだ。朱房の長槍をかまえて、和の線へ近よるものは、今川勢であろうと、北条勢であろうと、容赦はしないというふうな気迫が見えていた。

その勢はおよそ三百騎だったが、その威容は数千の軍隊にも匹敵して見えた。

今川軍から撤退がはじまり、すぐ北条軍が引いていった。今川義元と北条氏康が、武田晴信の仲介で休戦に同意したのは二十二日であった。

今川、北条、誓十月二十二日矢留。（『駒井高白斎記』）

天文十四年十月二十二日、武田晴信は二十五歳であった。二十五歳にして、大国の紛争を解決するだけの才腕を認められたのである。

鉄砲と微熱

日向三郎四郎は、山伏姿だった。すずかけの衣にも、はばきにもつぎが当たっていた。兜巾ときんは風雨にさらされて色を失い、錫杖しゃくじょうはすりへっていた。日向三郎四郎のたどった道のけわしさが読

み取れた。

「お館様のお噂は遠くにおつてもしばしば耳にしておりました」

日向三郎四郎は駒井高白斎にいった。

「旅に出てから何年になりますかな」

駒井高白斎がいたわるようにいふと、

「晴信様にお目にかかり、他国を廻って、土産を持って来れば帰参をかなえてやると云われましたが、天文十年、あれからはや五年もたちました」

日向三郎四郎の鬢びんには白いものが混っていた。

「御察し申す」

駒井高白斎は頭をさげた。日向三郎四郎は信虎を嫌って他国に逃げた元奉行衆のひとりであった。駒井高白斎にとって大先輩であった。老の身を携かげて諸国遍歴はつらかつたろうと同情した。「そうそう、今井兵部殿が先年、金山開発という大きな土産を持って帰られましたぞ。金山にくだわしい者を三人ほど召しつれてまいられ、その者たちの手で、かなりの金が掘り出されております」

今井兵部殿がのう、と日向三郎四郎は、なつかしげに、元奉行衆の手柄を自分のことのように喜んでから

「さて、拙者の土産をお館様はお喜び下さるかどうか」

とにかく、すぐお館様に伝えようと、小走りに去っていく駒井高白斎のうしろ姿を見ながら、

日向三郎四郎は、新しい時代を迎えつつある武田のあり方を覗いたような気がした。久しぶりでかえって来た躑躅が崎の館は、なにごとにつけても活気があふれて見えた。信虎のときのような、じめじめとした暗さがなかった。館につかえている侍も女どもも大きな声で話している。いたるところから笑い声が聞える。

（武田家は変った）

日向三郎四郎は自分の年齢を思った。

「そのままでもいいからすぐ通るように、とのお館様のおおせでございます」

駒井高白斎は、にこにこしながら日向三郎四郎に云った。

「よく帰って来たな、丈夫でなによりだった」

晴信の声は澄んでいた。日向三郎四郎は晴信の顔を見た。五年前に、板垣信方の口添えで、^{にら}崎で会ったときの晴信とは別人のように成長していた。丸い大きな眼には自信があふれていた。あのときは痩せていたが、いまは肉づきがよくなっていた。ただ、顔の色の白すぎるのがいささか気になった。白いというよりも青かった。日向三郎四郎には、それが病的な白さに見えた。

「長い間、御苦労であった。旅の話でも、ゆるりと聞かせてもらおうか」

土産を持って来たかとはいわず、旅の話をといたのは、晴信には老人をいたわる気持があつてのうえの発言のように読みとれたので、日向三郎四郎は、念のいった礼を返してから

「鉄砲の絵図面を手に入れて参りました」

「なに鉄砲の絵図面を」

晴信は一瞬耳を疑った。鉄砲が日本に伝来したのは天文十二年（一五四三）であつた。渡来と同時に、鉄砲が急速のいきおいで諸国にひろがっていくことは聞き伝えていた。

前年、晴信が、今川義元と北条氏康の紛争に際して仲介の労を取った謝礼として、今川義元から鉄砲一挺と弾薬を貰ったが、それは、珍しい武具の見本として、飾って眺める、いわば置物でしかなかった。置物の宝を分解して、その構造をきわめようとする気になれなかった。

日向三郎四郎が絵図面を持って来たということは、鉄砲製作のめどをつけたことになる。

「絵図面を見る前に、諸国の鉄砲製造の状況を話してもらおうか」

日向三郎四郎は、晴信の鉄砲に対する興味の示しかたが、普通でないことを知ってほつとした。無駄ではなかったのだと思つた。

「天文十二年、種子が島に鉄砲伝来以来、鉄砲はおそろべきはやさで普及しております。まず、九州においては太友宗麟（そくりん）がポルトガル人を呼びよせて、鉄砲製造にかかつており、紀州根来寺（ねくりじ）の杉之坊では人を種子が島にやって鉄砲製造法を習得し、和泉堺（いずみ）の橘屋又三郎が種子が島に渡つて鉄砲製造法を学び、堺において鉄砲製造を始め、近江国、国友郷（くにとも）においても鉄砲製造を始めました」

「それで各地の武将たちは」

「金にいとめをつけず、鉄砲を買いこむことと、製造を始めることに躍起（やつき）になっております」

「弾薬はどうしているか」

「硫黄（いおう）はわが国で取れますが、硝石（しょうせき）は支那かシャムより輸入する以外に方法はありません。また

鉛もわが国の産出量は少ない故、これも南蛮渡来のものにたよるよりいたし方がございません」

「海の向うのものをたよりにするのか」

晴信は去年、駿河の吉原へ、出向いたとき見た海の広さを思った。あの果てしもなくひろがっている海の向うに、多くの国々があり、その国から新しい兵器が日本に渡って来たのだ。鉄砲は製造できるとしても、弾薬はすべて外国にたよるとするならば——船と港が要る。

「甲斐には海がなかった。晴信の顔が曇った。

「港を持つ国々は、船を外国へやって、弾薬を買いこむことを心懸けているようでございます。鉄砲伝来以来、わずか、三年で、もはや鉄砲は弓矢にかわるべき兵器となっております。薩摩さつまの島津たかひら貫久や、毛利家ではすでに鉄砲を実戦に使っております」

日向三郎四郎はひといきついた。日向三郎四郎と同時に晴信も深くいきをついた。

「そちは鉄砲の将来をどう考えるか」

間を置いて晴信はいった。

「おおげさな申しようかもしれませんが、鉄砲を制するものが、わが国を制することになるでしょう。鉄砲の数で勝負がきまる時代が、そう遠くない将来に来るように思われます」

「どうすればいいと思うかな」

「鉄砲製造に取掛かることと、できるだけ多くの鉄砲弾薬を買いこむことだと存じます」

晴信は何度かうなずいてから日向三郎四郎に鉄砲の絵図面を出して説明するようにいった。

「鉄砲の絵図面については私よりくわしい者を紀州からつれてまいりました」

その男は——浅黒い顔の男であつた。いかにも工人らしく、つつましやかに坐つてはいるが、眼光はするどく、相手の顔を見詰めると、自分から決して眼をそらさなかつた。

「根来寺の麓の鍛工芝辻清右衛門のところにおりました。文左衛門と申すものでございます」

「鉄砲は作れるのか」

晴信は文左衛門に聞いた。

「材料さえそろえば作つて御覧にいます」

文左衛門はためらうことなく答えて頭をさげた。

「材料とは」

「鉄砲の筒をつくる良質な鉄でございます。南蛮鉄か、もしくは備後、備中、美作、安芸、伯耆、出雲、石見の鉄を精錬したものでなければなりません」

文左衛門はそうことわつてから、日向三郎四郎の笈の中から取り出した、鉄砲の絵図面の説明に取りかかった。

晴信は文左衛門の説明を熱心に聞いていた。今川義元のところで聞いた鉄砲の音が耳元で鳴つた。おそらく諸国の武将たちが鉄砲製造と鉄砲集めに狂奔しているだろうと思うと、じつと、鉄砲製造の講釈を聞いているのも、齒がゆいような気持であつた。

「日向文斎と名乗るがよい、いい鉄砲を作ってくれ」

晴信は文左衛門にそういうと、日向三郎四郎に

「長いこと御苦労だつた。そちが、甲斐に鉄砲製造を持ちこんだ功績は大将首を百取つたより大

きい。身体を大事にして、こんどは鉄砲奉行として働いてもらいたい。身体を大事にしてな」
 身体を大事にしてなと晴信に云われると、日向三郎四郎は感情がせまって来てつい涙を流した。
 帰参がなかったという感情ではなく、生きていてよかったというよろこびだった。

（身体を大事にしてな）

晴信は日向三郎四郎にかけてやったことばを、回廊を歩きながら自分にかけていた。晴信自身に誰かが身体を大事にしてなと云ったとしても、それはおかしくないように思われた。見掛け上は、どこも悪くはなかった。いたって健康のように見えていて、晴信自身は、自分の身体が尋常でないことを知っていた。

遠駆けに出ると疲れた。午後になると熱が出た。軽い咳がときおり出るのである。晴信は回廊を渡りながら、風をつめたさを感じた。五月である。もう風をつめたく感ずるころではなかった。熱が出るのだなと思った。そう思うと、自分の顔が紅潮して来ることがはっきり分るのである。晴信の身体は熱の出る時刻を境として反旗をひるがえしたように、それまでの晴信に向って攻めかかって来る。晴信にとっておそるべき午後であった。

晴信の身体が晴信に反旗をひるがえしてくると、彼はおこりっぽくなる。それまでの自分ではなく微熱の出た晴信がおこるのだと、自分をおさえつけても、時によつては押えきれないことがあった。晴信は書見にことよせて、夕刻近くになると家臣に会わないことにしていた。熱はしばしば夕刻を待たずして彼をせめることがあった。なにか、昂奮するようなことがあると、はやば

やと熱が出た。

その日もいつもよりはやく熱が出た。鉄砲が晴信を刺戟したためである。鉄砲を作ることができても弾薬は買わねばならない。買う道をつけねばならない。甲斐で鉄砲ができるころには西国の強豪はその鉄砲より、ずっと優秀なものを作るだろう、一度おくれを取れば、追いつくまでにたいへんなのだ。

晴信は書院にいく途中で踏みとどまって考えた。

「山本勘助を呼んでくれ」

晴信は侍臣にいった。山本勘助のもっともうまい使い道を思いついたような気がした。山本勘助が、今川義元の目付役としての任務を帯びて武田家に仕えていることはほぼ間違いなかった。山本勘助がそれを好まず、武田晴信をただひとりの主として仰ぎたくとも、今川義元が生存するかぎりそれはできない。それは山本勘助の二重間者としての宿命だった。

山本勘助は諸国御使者衆（武田の諜報機関員）として、着実にして眼ざましい手柄を挙げていた。そして晴信は山本勘助を思う存分使って、その戦勝ぶりを義兄の今川義元に知らせてやることを、今川義元牽制策として利用していたのである。山本勘助を通じて晴信の行動すべてありのままに伝えることによって今川義元を安心させておき、信濃経営の陣をすすめ、信濃を手中しゅちゅうにおさめたあかつきは、信濃の人と物とを嵩かさにきて、一挙に駿河に進出しようという晴信の心までは、今川義元は知らなかった。

（だが、いまは、今川義元牽制策よりも、大事なことがある。それは鉄砲だ）

晴信は山本勘助に、鉄砲と弾薬集めの仕事をさせようと考えた。

（もともと山本勘助は駿河の人だ。家族も駿河城にいたことだ、しばらくは、東海道を泳がせておこう。鉄砲の仕事をさせることは東海道の武将たちの動静を窺い知ることもなるのだ）

「内山城のことでしょうか」

庭に膝をおろして山本勘助がいった。晴信は山本勘助の勘も今日は狂ったのだと思った。

「内山城がどうしたのだ」

「南佐久の内山城の城主大井貞清がそむく気配を示しておるとのことでございます。大井貞清は長窪城主大井貞隆の子であります」

「殺された父貞隆のことを根に持っているのであらう。子が親の仇を打つのは当り前だ」

「内山城は内山峠越えに、上野国甘楽郡南牧なんもくに通ずる街道の要衝ようしゅうでございます。早いところ手を打たないと上野の諸将が必ず援軍を出すものと存じます」

「分っておる」

晴信は山本勘助を一かつした。晴信は熱を感じた。熱の出るにはいささかはやい時刻だったが、熱が出て、熱が山本勘助を怒鳴りつけたのだと思った。いままで家臣を怒鳴りつけるようなことをしたことはなかったのに、大きな声を立てたのは、身体の奥から湧いて来る奇妙な熱のせいだと思った。

山本勘助は平伏した。いい過ぎたのだと、彼自身反省した。

「内山城の方はいしたことはない。それよりもそちにたのみたいことがある。山本勘助でなけ

ればできないことだ」

「と申しますと」

「鉄砲だ、鉄砲を集めてくれ。今宵のうちに出立^{しゅつたつ}して、鉄砲を集める仕事に掛つてもらいたい。日向三郎四郎の話によるといまのところ鉄砲を商^{あきな}いとしているのは、和泉国、堺の商人たちだそうだ。金さえ出せば、どこの国にも売るだろう。どこの国でどれだけ鉄砲を買うかもついでに調べてもらいたい。近江の国友村へも行ってみてくれ。金はおしむな、必要なだけ金は送る。一番大事なことは、いついかなることがあっても、鉄砲と弾薬の甲斐への道を失ってはならないことだ。そのうち誰か、堺の鉄砲を武力で独占するものがでて来るにちがいない。そうなくても、鉄砲と弾薬の道はつけて置かねばならない」

晴信は山本勘助に云いながら、おそらく、同じことを駿河の今川義元も考えているに違いないと思った。山本勘助がこの話を今川義元にしたところで、今のところ、今川義元が甲斐への鉄砲輸送を封ずることはないだろうと思った。甲斐に新兵器を送らないことは相模の北条にとってはもっともありがたいことになるのだ。

「分りました、すぐ出立いたします」

晴信は山本勘助に金貨百枚を与えて、日向三郎四郎とよく連絡を取って出掛けるようにいつけた。

山本勘助が立去ったあと、晴信はなぜかほっとした。鉄砲買いは商人の仕事だと他人はいうかもしれないが、商人だけにまかしては置けないあせりを感じていた。信濃の平定はゆっくりやれ

ばいい。いそぐことはない。だが鉄砲はいそがなければならぬ。鉄砲買いには目先の効く山本勘助のような男が必要なのだ。晴信は書見机に向った。

今川義元が見せてくれた鉄砲の実演が思い出される。

庭に一頭の大きな猿が引き出されていた。今川義元が晴信にいった。

「あれは、里に出て害をなす悪猿の集団の頭目である。矢を足に受けて傷ついたところを捕えられたものだ」

猿は首に縄をかけられて、庭の木にしばられていた。時々、遠く居ならば人間どもに向って歯をむいた。

「鉄砲から弾丸がとび出していつて猿に当る。よく見られよ晴信殿」

晴信は鉄砲をかまえている侍と猿とを等分に見られるところにいた。

今川義元の合図とともに、轟然と鉄砲が火を吹いた。猿はころりと倒れた。弾丸は見えなかった。なにもものも、鉄砲と猿との間を通過したものはなかったのに猿は死んだのだ。

そのときのことを思うと胸が鳴った。鉄砲の轟音とともに、世の中が変ったように覚えたのである。そのときに嗅いだ煙硝のにおいも彼の心をゆすぶった。異常に刺戟性の強いにおい——晴信は里美を思い出した。煙硝のにおいと里美とはなんの関係もなかった。しいてあるというならば、その鉄砲の実験のとき里美が晴信の傍にいたということだった。

「佐久一の美人と、かねがね噂に聞いていたがやはり噂だけのことはある」

今川義元は、その夜の酒宴の席で里美を讃めた。宴席には参加していない里美の容色や馬術を

いやというほど讃めた。晴信はその夜、古府中出立以来はじめて里美の寢所へ足を運んだ。戦争は済んだといういいわけを心の中でつぶやきながらも、陣中に妾をつれて来て、そこへ泊ったということが家来に知られるのをおそれた。彼は夜の明けないうちに陣所に帰った。

晴信は本を閉じた。煙硝の臭においとともにあの夜の里美とのほげしい交情を思い出すと欲情した。衝つきあげるような欲情だった、こらえきれない、ほげしい欲情だった。晴信はこれと同じような欲情を、おここに持ったことがあった。そのときは、夜まで待つことができずに、昼間から、屏びよう風をめぐらせておここと火のようにもつれ合った。

晴信は、何年か前の愛妾おこことの交情とその経過が突然よみがえってきたのも熱のせいかもしれないと思った。晴信には我慢できなかった。晴信は書院を出ると、里美のところへ真直ぐいった。

「このごろお館様は少しはげしすぎはしませんか」

ひとつきも、ふたつきも、離れていたときのような性急さで、それを求めて来る晴信を受け止めながら、里美はいった。

「あらしのようにはげしくて、あらしのようにはやく通りすぎていく、そしてわたしはひとりぼっちで残される——」

晴信が里美からはなれたとき里美がいった。晴信ははっとした。確かに、嵐のように過ぎたその行為は晴信の一方的な行為でしかなかった。それまでのように、長い時間をかけて、睦言むつごを並べたてながら、里美の燃えて来るのを気長に待つ晴信ではなかった。

「それにお館様の身体は、お館様の身体でないように熱い」

里美にそういわれて晴信は、その欲情は、彼ではなく彼の熱がさせたのだと思った。あらしのあとに晴信は、どうにもならないほどの倦怠感をおぼえた。

晴信は寝所に引きかえして眠った。ひとねわりして眼をさますと、深夜だった。熱は去っていた。晴信は枕元の壺の水を飲んだ。頭がはつきりした。

（みんなはもう眠っている、湖衣姫も眠っているだろうか）

眼をぱっちりあけて晴信の愛を受ける湖衣姫の顔を思い出すと、奥の方に沈んでいた欲情がまた鎌首を持ち上げた。

晴信は身体の変調を自覚した。ほって置いてはならないと思った。病気だとすれば、その症状は、数年前、風邪をこじらせて、半年ほどぶらぶらしていたときとよく似ていた。

（おここの労咳がお館様に移ったのです）

三条氏がいったことを思い出した。あのときの熱が、労咳（肺患）のなせるわざであったとしても、あれからだいぶたっている。もはや完全に治っているはずである。

板垣信方が久しぶりに諏訪からやって来て晴信の顔を見ていった。

「お館様どこぞお悪いのではないでしょうか」

晴信はどきっとした。老臣板垣信方にはやはり晴信の身体の変調がわかるのだと思った。

「医者に診せましたか」

晴信は首をふった。

「お館様自身で、身体の変調をお感じになることがあるでしょう」

晴信は答えなかった。信方は、彼のそばに控えている駒井高白斎をふりかえっていった。

「側近につかえていながら、お館様の顔色御不調に気がつかぬのか。拙者は諏訪と伊那のことでいそがしい。甘利虎泰は佐久のことでいそがしい。駒井殿こそこの古府中でお館様のもっとも近くにおられる人ではないのか」

駒井高白斎は武田家第一の宿老に叱られると、頭を上げられなかった。高白斎は、恐縮しきつてうつむいた。

「そう怒るな、余はまだ病気だと決ったわけではない」

晴信は高白斎をかばった。

「いえ、お病気です。そのお顔は病気の顔でございます。すぐに立木仙元に診て貰うのがよいと存じます。諏訪の一部に反乱の兆きざしが見えています、その報告は、お館様の御身体のことと済んでから申上げましょう」

板垣信方は口をつぐんだ。

「あいかわらず頑固だな、信方は」

晴信はつぶやいた。

「頑固です、年齢を取れば頑固になります。そうしないと、お館様が立ちませぬ」

「なんと申した」

「お館様のまわりに若い者ばかり置くのも考えものだと言っているのでございます」

板垣信方は、晴信の周囲のものに、さんざん当てつけて置いて

「立木仙元の診断が終るまで諏訪へは帰りませぬ」

信方は腕を組んだ。

晴信はその翌日立木仙元を呼んだ。

立木仙元は晴信の顔色を見ていった。

「よくないお顔色でございますな」

そういつて置いて立木仙元は

「病には表に出る病と表に出ないで潜む病がございます。潜む病に労咳がございます。労咳は身体の中に長いこと潜んでいて、表に出たときはもうどうにもならないほどになっているものでございます。労咳が体中にひそむと、その毒が、身体を疲労させます。夕刻頃に熱が出ます。それから、人によっては、異常に色慾が昂進いたします。我慢できないほどに色慾がたかまり、精力の浪費が、身体の消耗に拍車をかけるものでございます」

立木仙元は一気にいつて晴信の顔色を見た。

「余が労咳だと見立てたのか」

「いえ、さようではございませんが、いま申し上げたような、病の兆候がもしございましたら困ったものだと思っております」

立木仙元は晴信の顔を見ただけで、彼の身体の中までも知りつくしたような顔をしていった。

「実はそれらしい傾向がないでもない」

「やはり、さようでございましたか」

「どうすればいいのだ」

「こらえるしか方法はないと存じます。いくさに出るのもこらえる。遠駆けに出るのもこらえる。聞^わの交わりもこらえる。心を安静にしてうまいものを食べてじっとしているよりほかに薬はございませぬ」

「その一つも、余にはこらえられぬだろう。こらえられなかったらどうなるのだ」

「死が迎えに参りますゆえ、こらえていただかねばなりません」

仙元と晴信は互に眼を交^かわしていた。仙元が晴信の顔を見てすぐ、労咳を口に出したのは、おそらく、数年前、晴信が長わづらいをしたときに、その病の兆候を察知したのかも知れない。

「労咳について、もっとくわしく話してくれ」

晴信は憂鬱をかくさずに表に出していった。

「さきほどから申し上げておりますように労咳は潜む病でございます。体内に潜んでいて、隙が見えると動き出す病でございます。過勞をして身体がおとろえると、いっせいに蜂起する病でございます。治ったように見えても治らず、その肉体の亡びるまで、しつこくつきまとはなれぬ病でございます。この病に勝つには根気がいります。短気を出したら病に負けます」

晴信は仙元の労咳に関する説明をそのまま戦争に当てはめて考えていた。身体のおとろえを見ては蜂起する敵は、その辺にいいいた。諏訪にも伊那にも佐久にも、武田の勢力が弱まれば、

すぐ反旗をひるがえす敵がいた。

「薬はすぐおとどけたいします。しかし、薬はあまり効きませぬ。薬にたよるより、さきほど申し上げたように、耐えることです。自分に克つ以外に勞咳に勝てる道はありません」

自分に克つ——晴信は胸を張った。自分に克つことはできる。自分に克つことができずして、天下を治むる武将になれるはずがない。胸を張って気張ると、晴信は、空虚な咳を三つほどした。意識しないで、軽くでてるその咳は、晴信の決心をからかうように思われた。

「その咳が曲者でございます。とにかくお館様には、本日より聞のねことをおつしみなされるのが肝要かと存じます。つつしむのでございます、断つのはございません。断つことは、かえってそれが気の負担になります故、さよう、十日に一度ぐらいになさいませ。身体も心も安らかに置くことが、いま一番大事なことでございます」

仙元が去っても晴信はその場に座っていた。立木仙元というあの医者は、おそらく晴信のところに来るまえに、側近に彼の様子をそれとなく聞いて来たのであろう。少なくとも駒井高白斎には会っているはずだ。そうでなければ、顔を見ただけで、微熱がでることや、色慾が昂進していることまで知っているはずがない。そんなことを考えていると、ふと、三条氏のことを思い出した。三条氏が、数日前身体が悪くて仙元に診てもらったことがある。三条氏は医者が好きだ。たいしたことがなくても仙元を呼ぶ。三条氏がよいいなことをしゃべったのかもしれない。おそらく三条氏は、晴信の欲情の昂進を嫉妬まじりで仙元に洩らしたに違いない。仙元は医者だ。すぐそれを病気に結びつけたのだ。

晴信は仙元に診てもらったあと、しばらく考えごとをしていたが、板垣信方の待っている広間の方へはいかず、回廊の途中から階段をおりて馬に乗った。

晴信は塩山の恵林寺に向って走った。天文十三年に晴信によって再興された恵林寺は、まだ木のかおりがぶんぶんしていた。京都妙心寺から迎えられた住持、鳳栖は鋤で庭の片隅を掘っていたが、予告なしに現われた晴信の方をちらっと見て、ちょっと会釈しただけで、庭の仕事をそのままつづけていた。鳳栖が掘っている穴は大きかった。たけにして二間か三間もあるような植木でも移し植えるつもりらしく見えた。

鳳栖はゆっくりと鋤を動かしていた。鋤でかきあげた土が、蹴でいる鳳栖の臍の半ばをかくすほどになっていた。穴の直径は三尺もあり、深さは二尺もあった。穴掘りが終わると鳳栖は井戸から手桶で水を運んだ。三度ほど水を穴に入れると、そこに土を入れた。土が充分に水を吸ったところへ、彼は庫裡の縁の下に置いてあった両手にかくれてしまふようなほどの小さな胡桃の木を持って来ると、根本を包んだ落の葉をていねいに取って、その大きな穴の中央に置いて、周囲から土をかけてやった。

鳳栖は仕事が終わると、手と足を洗って晴信のところへやって来て

「長々とお待たせいたしました」といった。

縁側に腰かけて鳳栖のやりようを見ていた晴信は、勢いこんで来た、彼の気持を、鳳栖にうまくかわされたような気がした。

「なにか御用かな」

対座すると鳳栖がいった。

「仙元は余の病を労咳と申した。いくさもならぬ、遠がけもならぬ、女もならぬ、うまいものを食べて静かにしていいと治らぬと申した」

「それで」

「それだけのことだ。仙元にそういわれると、ふと貴僧の顔を見たくなくなって参った」

「愚僧の顔になんと書いてあったかな」

「なんとも書いてない。泥のはねたのがちよっぴりついているだけだ」

鳳栖と晴信は顔を見合せて笑った。

「では帰る」

晴信がいった。

「もう帰られるか。いつでも来たいときには、ここへ来られるがよい。拙者は心の病は治せるが、身体の病は治せぬ。病になったら医者のことを聞くより仕方がなからう」

晴信が躑躅が崎の館へ帰ると、佐久からやって来た多田三八が待っていた。

「内山城は落ちました。城主大井左衛門尉貞清は城を捨てて野沢へ逃げました。降参した者、およそ二百、その家族が五百人ほどございますがいかがいたしましょうか」

多田三八は剽悍な顔の中に、いささか残酷にも見えるほどの期待をただよわせていった。

「敵はよく防いだか」

「五月九日の朝より二十日まで、よく持ちこたえましたが、わが軍に水の手を取られて降伏いたしました」

「主だった者は古府中へつれて来て吟味するがいい。他は許してやれ。降伏したからは味方と固然に扱ってやれ」

「お館様のおことばですが、今度の内山城の戦いぶりは、今までの佐久の諸城と違っておりまして。なんと申しましょうか、心の底から武田に憎悪を抱いての反抗のように感じられました。そのような者を許しておけばまたいつ……」

多田三八がいうのを晴信はおさえるように

「よく防いだ者を味方につければ、こんどは武田のためによく戦う者になるのだ」

晴信は内心、その処置をいささか寛大に過ぎはしないかと思わないでもなかったが、晴信の心の中のどこかで、気を静めよという声があった。微熱をおさえるためには、心をたかぶらせないことだ、いかりをこらえることなのだ、それが病と戦う方法なのだ。

晴信は多田三八をさがらせると、回廊をひとりで渡っていった。風を感じる。また熱が出るなと思った。

生首三千

晴信は静かなその日を送っていた。書見と詩作と、恵林寺の住持鳳栖に会って禅ぜん要を聴く以外はあまり頭を使わないことにしていた。戦争のことは家来たちにまかせておいた。諏訪、高遠、上伊那、小県、佐久は武田のものとなった。その領地を失わないようにかためていくことが今は大事なことで、自分でも考え、重臣たちにもそういつていた。信方も虎泰も高白斎も晴信の意を解していた。晴信はほんとはいくさが好きであり、馬上にいるときの彼がもっとも幸福そうな顔をしているのを知っている家来たちが、たとえ、病を得たとしても、禅僧のような生活をしているのを見ていると気の毒でもあった。

晴信は意識的に妻妾を遠ざけた。会えば欲情が奔流となって、彼をおし流そうとした。医者いしやの立木仙元にすすめられて、午睡もした。栄養になるといので諏訪の味噌と大田螺たにを取りよせた。微熱はやはり出た。軽い咳も続いた。微熱が微熱でなく、熱としてはつきり感じられるようになり、倦怠感が全身をおおうようになると、起きているのがつらくなった。

「思い切って休まれたらいかがでしょうか」

仙元は晴信に寝て養生することをすすめた。

「余が病でふせっていると聞けば、敵はここぞと動きだすだろう」

「外の敵は御家来衆にまかせておいて、今は中の敵と戦うことがお館様にとつては大事なことでございます」

立木仙元は晴信に床に伏すことをすすめた。

晴信は午前中起きていて、午後は寝ることにした。起きているときは書を読んだ。久しぶりで、ゆっくりと文字に接することは楽しいことだった。四書五経諸子百家の書を読み、孔孟こうもうの經書に眼を通すことは興味あることだった。だが、彼はその書に飽きた。晴信の若さを、中国の古典にしぼりつけて置くことは困難だった。彼は古書の中の観念的な理想主義が鼻につき出してくると欠伸あくびをした。中国の兵書においてもそうだった。それはきわめて常識的なことをもってもらしく、いささか誇張して扱ったものにすぎなかった。実戦に役立つものは少なかった。晴信は中国の兵書にけっして陶醉しなかった。むしろ彼は、著書の文学的表現に敬意を払った。孫子の兵法に出て来る

疾はやきことかぜのことくしずかなることはやしのバツとくしん如風
徐ひやくすること如林
掠りやくすること如火
不動如山

の名字句も読めば読むほど平板なものにしか思われなかった。大声をあげて読めば、調子がよかった。それだけのことだった。実戦について教えられるものはそのなかにはほとんどなかった。

だがその字句を晴信は捨てはしなかった。その字を幟旗^{しき}に書き、陣中に立てて置けば威勢がよかった。孫子のその教えは晴信には通じなかったが、家臣達の中にはその文句を口に出したがる者がいた。寄子^{よりこ}、被官^{ひかん}を引きつれて参戦して来る、寄親^{よりおや}と称する者も、馬上姿はいかめしかったが、なかには自分の名前を書くのがやつの者がいた。そういう郷士^{ごうし}の集団こそ実戦の場の花形であり、武田を支えるものであった。

晴信はそれらの土豪たちに風林火山の読み方を教えてやると、彼等は好んでそれをそらんじた。彼等は疾^{はや}こと風のごとしと、口になえては馬を風のように走らせた。

(戦術というものは原則としてきわめて常識的なものである)

晴信はすでにそれを知っていた。きわめて常識的な戦術を使って戦^{いくさ}に勝つには、その戦を形成する個人にかかっていた。人と馬にかかっていた。

「そうだ、人を作り、人を治むることに迂遠^{うえん}ではなかったか」

晴信は書から眼をはなすと、いま頭の中に浮びつつあるなにかを文章にまとめたかと思つた。人を作ることに、人を治むること、それが富国強兵の根本になるのだ。甲斐にも人を治むる法^{ほう}度はあった。それは父信虎時代のものであり、法度というよりも習慣のようなものであった。長い時代を経てなんとなく踏襲されて来た掟^{おきて}であった。明らかに悪いと知りながらも改めずに来たものもあり、存続することに意味のあるものもあったが、総体的には法度はないと同じだった。少なくとも甲斐国の人びとが、法度として心服できるようなものはなかったのだ。

晴信は駒井高白斎を呼んでいった。

「甲州法度を作りたい。これによって領民を苦しめるのではなく、領民の心を安定させるための大きな道しるべとなるものを作りたい。領民、家臣の権利、義務、身分の保証、土地、夫役、年貢、棟別、争い、婚姻、通貨にいたるまで、法度の条に盛りこみたい」

駒井高白斎は晴信のことを黙って聞いていた。おそるべき領主だと思った。いくさに明けくれている、いまの甲斐国で、ちゃんとした法度を作るということは容易ではなかった。作っても、それを実施することはむずかしい。それをやろうとする晴信は、おそらく、天下に並びなき名君になる素質を持った人に違いないと思った。

「とにかく一度に作るのは無理だろうから、まず大きな項目を立て、それを更にこまかく分けるようにして、作るがよい。そうしていけば、例えば——川を流れおちて来る材木は拾ってもさしかえないが、その木が橋がこわれて流れて来たものだとなつたら、もとのところへ返さねばならないといったふうな条目まで作れるはずだ。むずかしいことを書いてはならない。誰でも読んでも聞かせれば分るようなものこそ、領民のための法度である」

駒井高白斎は責任を痛感して、いささか固くなった。

「余も手伝ってやるから、さっそく草案に取りかかるがいい。高白斎は文を作るのに馴れているからな」

甲州法度を作るといふ仕事は、見掛け上晴信の身体にさほど疲労を与えるものではないように見えたが、ひとたびそれに没頭すると晴信はわれを忘れた。駒井高白斎とは連日打合わせを行った。家臣を集めて、意見を聞くこともあった。

甲州法度に頭を突込んでいると、戦争のことを忘れる。戦争のことが頭から去ると、熱があっても熱を感じなくなった。晴信は寝なければならぬ午後までも書院にこもっていて、駒井高白斎に注意を受けることがあった。

天文十六年六月一日、甲州法度の項、二十六カ条ができた。（甲州法度五十五カ条が完成したのは天文二十三年五月である）そして晴信はその夜から寝こんでしまった。

「いったい駒井殿はなにをしておられるのだ」

諏訪からかけつけて来た板垣信方に、駒井高白斎はひどく叱られた。

「この戦の最中に法度なんか作っているとはのんきな人もあるものよ」

甘利虎泰は駒井高白斎に面と向って当てつけた。

だが、この甲州法度は甲斐の領民たちに喜ばれた。内容が分りやすいこと、どっちつかずで困っていたことを、右か左かにはっきりきめたことが、生活に安定を与えることになった。

甲州法度の末尾に、

「晴信がもしこの法度に違背したならば誰でもいいから日安（個条書）を持って申し出よ」と書いてあった。

晴信が甲州法度二十六カ条を作ったことと晴信が病気になったということは隣国へ伝わった。晴信病気の噂は微妙な反響呼んだ。諏訪の矢島一族が小笠原と通謀の気配を示した。伊那の空気も不穏だった。諏訪と伊那は名将、板垣信方がにらみを効かしているからいいとして、佐久の諸城は、表面は鳴りをひそめているが、峠を越えて隣りの上野との人の往来がはげしくなった。

そのなかでも志賀城によっている笠原清繁は上野の援軍を城へ入れて武田に対してはつきりと敵対行動を取るようになった。志賀城は内山城と同じように上野へ通ずる峠の要衝であった。志賀城は南、北、東の三方は断崖にかこまれており、西方は尾根続きの平地になっていた。そこに高い石垣が築かれていた。

七月六日内山城で降伏して武田についていた大井貞清の家来たち百数十人が、集団脱走して、志賀城へ走って合流した。

志賀城謀反の報は真田幸隆が走り馬をもって古府中へ知らせた。

晴信はまだ病床にあった。熱は下つてはいなかったが、その報告を聞くと床の上に起き上つていった。

「敵の情勢は」

「志賀城には上野甘楽郡かんらくの高田憲頼のりより父子の援軍を含めておよそ五百あまりが立てこもっておりま
す。また碓氷峠を越えて浅間山山麓、小田井原に陣をかまえた上杉憲政の軍はおよそ三千にござ
います」

晴信は、それを聞くと、床を蹴って立ち上った。立木仙元がかけつけたときは、晴信は着がえ
が終つていた。

「仙元、余は、体内の敵に負けたとしても天命とあきらめる、だが人間の敵には負けられぬ」
晴信は弟信繁を呼んで総大将として出陣させ、自らも出陣の準備にかかった。

晴信が古府中を出たのは七月十三日である。すぐに佐久へはいかず、諏訪明神に向つて馬を走らせた。

諏訪明神と武田家とは古代よりつながりがあつた。養老五年朝廷は信濃国のうち諏訪と甲斐国のうち武田之庄（現在の韮崎市周辺）の二地方をまとめて諏訪の国を作つた。諏訪の国の中心は諏訪明神であつた。それ以来武田家は代々諏訪明神を祖神として崇拜していた。

武田家と諏訪家は決して仲がよくなかつたが、こと諏訪明神に関するかぎり、両者は共通な姿勢を取つた。武田晴信が、頼重を亡ぼしたあと、諏訪に對して寛大であつたのも、諏訪氏が諏訪明神の大祝の職を司つていたからである。

晴信は数騎をひきつれて諏訪の神宮寺郷へ入つていった。神官長、守屋頼真は晴信を迎えに出たが、晴信の顔を見て声を呑んだ。晴信は真青な顔をしていた。

晴信は諏訪明神に金三百枚を供えて戦勝を祈願した。前の年の九月にも晴信は、高遠頼継から奪つた高遠の地を諏訪明神に寄進していた。そうしなければいけない氣持だつた。晴信は、偉大なる自信家である反面に、その自信の裏づけとなる精神的な支えを求めていた。宗派の別なく高僧を招き講話を聞き、寺を建てた。由緒ある神社に寄進をおしまなかつた。晴信の仏神にたよろうとする根本のものは、やはり人間としての弱さであつた。彼は神仏の加護を信じた。

晴信は神殿に額づいて長いこと祈願した。このたびの戦いに勝利を与えたまえと祈つた。懸命に祈つて眼をあげると、神殿の両脇に立ててある旗が眼についた。

南無諏方南宮法性上下大明神

晴信は神官長の守屋頼真の方へ眼をやった。

「この旗を陣頭に立てて敵に当られたならば勝利は疑いなしと存じます」

頼真は結論を先にいってから、夢の話をした。

「昨夜は、蒸暑くて寝ぐるしい夜でございました。やっと眠りについたと思ったら、青毛の駒にまたがったお館様が旗を立てて、敵陣にかけこむ夢を見ました。お館様がこの旗を上げると、お味方衆がいっせいに敵にむかい、敵はあらしの前の木の葉のように逃れ去っていききました。あとは嘘のような静けさ、お館様がただひとり、この旗を持って立つておられます。そのとき私ははつきりと旗に書かれた南無諏方南宮法性上下大明神の文字を確かめたのでございます。眼が覚めると、私は早速この旗をつくって御館様をお待ちしたのでございます」

晴信は守屋頼真の好意を感謝した。その話が守屋頼真のつくり話だと思いたくはなかった。彼はその夢の話諏訪明神の神告しんこくとして受取った。

「よし、この旗を先頭に立てて、上杉の兵を蹴散らしてくれよう」

晴信が外へ出ると、諏訪満隣が五十騎をひかえて待っていた。

「このたびのいくさにぜひにと存じまして、心得のあるものを揃えました」

「諏訪の軍勢が全部出払ってしまえば、あとが心配ではないか」

「あとには諏訪満隆が残っております。お気づかい御無用と存じます」

既に板垣信方は、諏訪地方の兵をひきいて大門峠だいもんを越えていた。甘利虎泰も志賀城をかこんでいる。

（こんどのいくさは、ここ数年来見なかったほどの大きないくさになるかも知れない）

晴信は馬上でそう考えていた。

晴信が小県の長窪城につくと、板垣信方、禰津元直が待っていた。

「上杉憲政は自らは出馬せず、金井秀景を大将として中仙道を小田井原まで来て陣を張っております」

板垣信方が絵図を前に置いて敵味方の布陣について説明をはじめた。小田井原の敵に対しては、晴信の弟、信繁を大将として板垣信方、甘利虎泰の軍が陣を張り、志賀城には横田備中守高松と多田三八が向っていた。

「真田幸隆はどうしている」

「小田井原とは眼と鼻の先の高瀬岩尾城にこもっております」

「兵は？」

「約三百ほど」

「十日持ちこたえることができるか」

晴信の意外な質問に板垣信方は、晴信がなにを考えているやら戸惑った眼で

「真田幸隆どのならば、十日はおろか二十日も城を持ちこたえることはできるでしょう」

「城内に水は出るか」

「いい水が出ます」

と答えたのは禰津元直だった。

晴信は瞑目めいもくした。瞑目して考える晴信の顔は透徹すきとおって見えるほど青かった。

「禰津元直どのは、真田幸隆の守る岩尾城へ兵糧と矢を運んでもらいたい。充分な兵糧と矢があれば、岩尾城は二十日は持つだろう」

それで板垣信方は晴信の作戦を読んだ。

「するとお館様は、小田井原の敵はあとまわしにして志賀城を」

「そうだ。弱いところを突いていくのが戦いの常道だ」

晴信は、古府中を發たつ前に、早瀬小五郎が持って来た志賀城の絵図をよく読んでいた。

「志賀城をおとすには水の手を取ればいい。水の手はこれだ」

晴信は、図の上の一点をゆびさしていった。

「明朝を期して、全軍を志賀城へ向ける。まず水の手を目がけて攻撃をかけるのだ。水の手を取れば志賀城は半死の状態になる。そうして置いて、今度は小田井原の敵をたたくのだ」

晴信の頭脳は澄んでいた。先の先までが読めるような気がした。彼は、板垣信方が、なにかひとことふたこと言おうとする口を封ずるように

「きまつたらすぐ手配をするように」

小田井原に陣を張って形勢を見守っていた金井秀景は、その朝甲軍の動きはじめたという報告を受けとると、とび起きて全軍に合戦の準備を整えさせた。だが、夜がすっかり明けて見ると甲軍の陣には一兵もいなかった。

金井秀景は、それを晴信の策略と見た。引くと見せかけておしよせる。いつもの懸引きだと思

った。あとを追うと手痛い目に合うかも知れない。金井秀景は物見を出して、甲軍の動静を探らせた。

「甲軍は志賀城へ道をいそいでいます」

つぎつぎと来る報告は同じだった。

金井秀景が気がついたときには追尾しても及ばないところまで甲軍は移動していた。金井の軍が甲軍のあとを追おうとすれば、真田幸隆が黙っているはずはなかった。金井秀景は、やむなく真田幸隆が守る岩尾城をかこんだ。晴信の志賀城攻めに対する牽制作戦だった。岩尾城は門をとぎして静まりかえっていた。楼上にたくさんのお見を置いて、籠城の準備に入っていた。金井秀景が岩尾城の攻撃を始めたとはほとんど同じころに、甲軍は、志賀城攻撃を開始していた。晴信は力で攻めた。南と北と東は断崖で登れないから、西側の石垣を攻めた。

矢と石つぶての援護射撃を受けて、つぎつぎと梯子はしごが石垣に掛けられていった。城内からも、矢と石つぶてが飛んで来た。だが、矢玉と石玉の数は武田勢の方が圧倒的に勝っていた。石垣の一角を守っていた兵がくずれると、そこへ武田の兵が突込んでいった。兵につづいて、鍬くわを持った人夫が石垣を乗りこえていった。人夫たちは、兵士たちにまもられながら、土を掘った。水道を探しためだった。城兵は、それを見て、死にものぐるいの逆襲に出て来た。城から出てくる多くの兵は甲軍の矢にかかって倒れた。

二日目に人夫は水の手を掘り当てた。志賀城は山のいただきにあって水が出ないから遠くから水道を二の曲輪くるわの下まで導いていた。人夫の手によって発掘された水道は栗の木の板でつくった

樋であつた。樋は取りこわされて、水が音を立て石垣を流れ落ちた。甲軍は凱歌を上げた。水の手を取つてしまえば、城の落ちるのは時間の問題だった。

晴信はそこに多田三八の率いる兵五百を残して、その日のうちに全軍をあげて、小田井原へ転進した。

金井秀景には、晴信の策戦がめまぐるしく感じられた。全軍が志賀城に向つたと見ると三日後には引きかえして来るそのやり方が、薄気味悪く思われた。秀景は岩尾城包囲をやめて小田井原へ引きかえして陣を整えた。

「志賀城の水の手を敵に取られました」

志賀城に援軍として送られている高田憲頼からの使者が金井秀景のところに到着した。左腕にひどい矢傷を負っていた。

「至急援軍をお願い申し上げます。水の手を奪いかえさぬかぎり、志賀城は十日と持ちませぬ」だがそのときは、晴信の軍が、金井秀景の軍にせまっていた。金井軍と甲軍の差は、はっきりしていた。志賀城へ五百を残して、全軍を小田井原へ廻すと武田の方は優勢になった。

「志賀城を捨てるつもりで全軍が打って出て来て武田の軍の背後をつくように」

金井秀景は志賀城の高田憲頼あてに、そのような手紙を書いてやった。だが、その使者は城へ帰りつく前に多田三八の兵にとらえられた。志賀城は外界と遮断しやだんされた。

甲軍は金井秀景を包囲したが、すぐには攻撃にかからなかった。晴信はそこでも策を弄ろうした。岩尾城の真田幸隆に命じて、金井秀景の背後を衝く作戦を取ったのである。金井秀景は、志賀城

に大軍を送りこみながら、これを利用できず、晴信は、真田幸隆の城と兵とをたくみに使ったのである。

上州の軍兵たちは、そのころ、いやな流言に悩まされていた。志賀城が水攻めにあって落ちたという噂と、甲軍が碓氷峠の要衝をおさえて、上州軍を袋の鼠にしようとしているという話だった。退路が断たれるということは上州軍に取つていやな話だった。もともと上州軍は、甲軍と雌雄を決しに来たのではなかった。北佐久の領土拡張を狙っているのではなかった。志賀城にこもった高田父子と志賀城の笠原父子は親戚だったが、金井秀景は笠原父子とは赤の他人だった。上杉憲政が金井秀景に与えた命令も、甲軍を徹底的に打ち破れというのではなく、あくまでも志賀城の援護作戦を上手にやれということだった。甲軍ににらみをきかせて、それ以上の信濃侵略を許さないためであった。

晴信は、金井秀景と高田父子を信州にさしむけた上杉憲政を憎んだ。しつこく、佐久地方に乗り出して来ては攪乱戦術を取る上杉憲政のやりかたに憎悪を感じていた。佐久には二里に一つぐらいの割りで小さな城があった。城というより砦に近いもので攻めれば簡単に落ちるけれど、引けばまたそむく城が多かった。長窪城の大井貞隆がそうだった。内山城の大井貞清がそうだった。現にいま武田にそむいている笠原清繁にしても、一度は武田についていた。それらの佐久の諸将が、繰りかえし反抗を示すのは、峠を越えて向うの上州の上杉憲政のあとおしがあるからだ。」「二度と上州軍が佐久のことに口を出さないようにするために徹底的な痛手を負わせてやらねばならない——それには」

晴信は諸將のひとりひとりの顔を見て

「それは上州軍をして一兵も碓氷峠を越えさせないことである」

戦いは天文十六年（一五四七）八月六日夜明けとともにまず真田幸隆の先兵によって開始された。地の利にくわしい真田幸隆は夜陰に乗じて上州軍の背後に廻り、三つ谷のあたりにたむろしていた金井秀景の小荷駄隊を突いた。小荷駄隊は寝ぼけ眼で、算を乱して本陣へかけこんでいった。そのあとを真田幸隆が追った。

真田幸隆があげた狼煙があかつきの空を赤くそめた。

晴信の本陣ではら貝が高く鳴り響き、太鼓の連打が一定間隔を置いて三度鳴った。右翼の甘利虎泰の軍と左翼の板垣信方の軍がいつせいに突撃を開始した。

朱房のついた槍をかかえこんだ騎馬隊が朝露をけ散らして突っこむあとから、槍の柄を赤くそめた足軽隊が喊声をあげて突込んでいった。

死闘が小田井原に繰りひろげられた。弱い者は斬られ、突かれ、首を奪われた。あちこちで勝ち名乗りが聞えた。

「板垣信方殿の郎党古屋八兵衛、糸井十郎左衛門を討ち取ったり」

という声が流れると

「高田主膳」

と名乗って古屋八兵衛に突きかかっていく武士がいた。ふたりはもつれ合った。組打ちになって、どっちがどっちだか分らずに、しばらく草の上をころげ廻ったあげく、一方が動かなくなった。

「金井秀景殿の手のもの、高田主膳、古屋八兵衛を打取ったり」

だがその声の主も、両方から、同時に突込んで来た二本の槍を受け損じて倒れた。

晴信は南無諏方南宮法性上下大明神の二旒の旗にまもられて、小高い丘の本陣にかまえていた。晴信の近くに、二十人の伝騎^{でんき}がいて晴信の命令を戦っている各部隊の侍大将に伝えていた。伝騎が背にさしているムカデの指物が風を切って進んでいった。軍神摩利支天の使者のムカデから取った指物だった。二十騎の伝騎はむかで衆と呼ばれていた。

太鼓が連打された。尻上りに速度をはやめていく打ち方だった。正面にいた、信繁の軍が動き出した。

左右から攻められ、その方に気を取られ、中央の備えが薄くなったところを信繁の軍が突いたのである。上州軍は左右と前からの攻撃をこらえかねて、じりじりと後へさがり出した。

十個の太鼓が同時に連打された。目茶打ちにも聞える早打ちだった。上州軍の背後に廻りこんでいた横田備中守高松の軍がそれを合図に動き出した。上州軍は袋の鼠となった。上州軍の足軽が動揺しだした。戦列から脱落して、活路を見つけて逃げるものが二人、三人と出て来ると、それに続くものが続々と現われた。全軍が浮き足立った。それまでは、ややおされ気味ながら互角の戦いをして来た上州軍が、にわかには戦意を失ったように、崩れ出した。逃げようとする兵は背後から突かれ、踏みとどまって戦おうとする者は、数本の槍を同時に受けねばならなかった。戦は一刻半（三時間）で終わった。

小田井原は血で染った。首のない死骸が、あちこちにくらがっていた。

勝負はついたが、晴信は追撃と掃討作戦を徹底的に行った。真田幸隆の軍は碓氷峠で、落ちて来る上州軍を待っていた。ほとんどの将兵は傷を受けていた。戦う余力のないものばかりだった。碓氷峠は上州軍の死骸で埋まった。降伏して来る将兵は捕えられてうしろ手に縛られて本陣に送られた。

「一兵も許すな、余さず殺せ」

晴信はそうに下知した。

それまでの晴信は降伏して来る者には寛大だった。多くは何らかの代償を取られた上で許された。

「一兵も許さずに殺せと云われましたか」

いつもとは違う晴信の下知に対して、板垣信方は疑義をさしはさんだ。

「そうだ、将卒ことごとく首を討て」

「吟味はなさいませぬか」

いつもなら、捕虜となった主なる敵将は必ず吟味したうえで、適当な処置を取ったのに、そっくり首を斬れとは晴信らしからぬ処置だと思った。

「かまわぬ、ことごとく斬れ」

晴信は熱に浮かされた顔をしていた。熱が捕虜を殺せといっているのだなと晴信は自覚した。だが、晴信はその熱に勝てなかった。

『妙法寺記』によると、このときの戦いで侍大将の首十六、ぜうひよう雑兵三千ほど討ち取ったと書いてあ

る。『妙法寺記』には誇張が多い。しかし、かなりの数が討たれたことは事実である。

「討ち取った首を、ことごとくひっさげて志賀城へ向え、城の石垣にその首を、懸け並べるのだ」

晴信の下知は、いちいち残酷に聞えた。まるで、晴信が突然、信虎になったように思われた。

（やはり、晴信は信虎の子だ。晴信の中には父信虎と同じような残酷を好む血が流れているのだろうか）

板垣信方は暗澹たる気持になった。信方は晴信の下知は、晴信がさせるのではなく、晴信の熱がさせているのだと気づいていなかった。

晴信は南無諏方南宮法性上下大明神の二旗にまもられながら、その日のうちに志賀城へ向った。三千の生首の顔を城の方に向けて石垣に掛け並べると、城兵はこぞ出て来て生首を見た。

知っている大將や組頭、組下頭、足輕の首を見て涙を流した。その酸鼻きわる生首の陳列に激怒して城から出て来る者もあったが、全身に矢を受けて死んだ。

「降参すれば命は助けてやる、敵対すればみな殺しにする」

晴信直筆の矢文が城中に送られた。

城からは答えがなかった。生首の陳列は城兵に決死の腹を決めさせた。城中は水に困っていた。汲みだめの水はもはや底をついていた。

十日の朝外曲輪が焼け落ち、その日の夜半子・丑刻（午前零時―午前二時）に二之曲輪が落ちた。それでも城兵は戦った。城内にいる女・子供まで、石を投げて、武田勢に抵抗した。

十一日の朝になると甲軍は本丸にせまった。城主笠原父子と援将高田父子は相ついで切腹した。神津賢道、賢良の兄弟は郎党五人を引きつけて、武田勢に斬りこんで、壮烈な討死をした。

志賀城はよく戦った。男で生き残ったものはひとりもいなかった。七月二十四日に武田の総攻撃を受けてから八月十一日まで持ちこたえたのは城を守る将兵の甲軍に対する反骨精神だった。

城中に二百三十余名の婦女子がまだ生き残っていた。

「女・子供ばかりでございますから、許してやった方がよいかと存じます」

板垣信方が、女・子供の処分案を持ち出した。晴信は首をふった。

「甲州方に身寄りある者は二貫匁以上十貫匁で身請けを許す。受け人のない女はすべて黒川金山へ送り、鉾石掘り相手の遊女にしろ、子供は奴として働かせるがいい」

板垣信方は顔色を変えた。

「お館様、それは、むごすぎるいたし方かと存じます。さようなことをすれば、佐久全体が心から武田を憎み、いよいよ激しくそむくでしょう」

「そむく者は殺せ」

晴信は一言のもとに板垣信方の言をしりぞけた。

武田の兵士たちに、口ぎたなくののしられながら志賀城を降りていく、女・子供の泣き声が晴信のところまで聞えて来たが、晴信は、考えを変えようとはしなかった。晴信の、熱で紅潮した顔は、彼のしたことにまだ物足らぬようであった。もっともっと生首を懸け並べ、捕虜を斬り、捕虜の婦女子を奴婢にたたき売りたいような顔をしていた。

戦いは終った。

晴信はあとの処置をすませると、兵を率いて古府中へ凱旋した。武田軍もかなりの死者、負傷者を出していた。道々で家族が、死者の遺品を抱いて泣き、負傷者にすがって泣いた。勝った者に取っても戦いは嘆きに通じていた。

戦いが始まると、走り馬が来て、集合場所と日時と人数を指定していく、寄親よりおやはそのことを子・被官・名子なご・子者こものに伝える。彼等のうちの多くは鎌を持って働いている農夫であった。彼等は鎌のかわりに槍を持ち、武器に身をかためて寄親のところに集まらねばならなかった。寄親の多くは手柄を立てれば領地が貰えるから戦いに参加するのであって、武田のために命を捨てようと考えている者は少なかった。寄親が領地を貰えれば、その配分は下々しもじもにまで及んだ。甲州は米があまりとれなかった。主として雑穀にたよって粗食に甘んじている。甲斐の人々にとっては米がよく取れる信濃への進攻は魅力的だった。だが戦いは毎年続いた。村の若者が戦いに出てはつぎつぎと死んでいくのは悲しいことだった。

この年も、信州と甲州が取り合ひ止まず、一年に二度の働きなされ候、はや奉公の人々、信州の御陣に迷惑致し候ひて、言語に及ばず

『妙法寺記』は志賀城攻めの戦についてこのように書いている。甲斐の人々にとっては戦争は迷惑千万であった。領地を増してもらわないでもいいから、平和な生活がしたかった。

晴信は古府中へ帰ると論功行賞の下知をして、その翌日から高熱を發して寝込んだ。夢の中で晴信は生首三千を見た。

志磨の湯

小田井原おたいはらの戦いで上州軍を破って古府中に凱旋した晴信は論功行賞の沙汰をすまずと床について。戦いの疲労が一度に出たのである。だが寝たのは、十日あまりで、疲労が取れると、起き上って、家来をよんであれこれと指示したり、馬に乗ったりする。動き廻るとその労働量に比例したように熱が出た。

「こんなことをしていると、命にかかりまする」

医者立木仙元がいった。労咳という病は、こじらしたらどうにもならない病だから、完全に治るまでは二年でも三年でもじっとしていなければならぬと、繰りかえしていった。

「二年も三年も……」

晴信は仙元の顔をあわれむように見て

「余が二年も三年も寝ていたら、甲斐の国は他国の蹂躪じゅうりゃんにまかすことになるだろう。父の時代から長いことかかってやっと平和になったこの国が、また乱れるのを寝て見ているわけにはまいら

ぬ。甲斐を守ることは、甲斐より出でて戦うことだ。これよりほかに守る方法はない」

「私は医者ですから戦争のことは分りませぬが、病は身の内にあるものですから、出でて戦うにも戦いようがございませぬ。病は防ぐよりいたしかたがございませぬ。防ぎ戦うことが療養でございます。身の内の病をほろぼすためには、いっさいの力を体内にひそむ病敵に向けるよりほかに道はございませぬ。そのためには、身体を休め体力をつけることが第一かと存じます」

仙元はそういいながらも、この若い領主の晴信がなかなかじつとしてはおられないだろうと思った。

「寝ていたらそれでいいとはかぎるまい。寝ているとさっぱり食がすすまぬ、病氣に勝つまえに、こっちの身体がほろびてしまいそうだ」

「適当な運動はけっこうでございます。が身体を疲労さすような運動——」

といいかけて立木仙元は

「閨のことは、とくにおつつしみいただかないといけませぬ」

口ではそういっても、晴信の若い身体がそれをがまんできるものではないと思った立木仙元は、晴信の枕元をさがると、駒井高白斎に

「お館様の容態は、このままほっておくと、病状がすすむ一方のように思われますから、なんとかして、完全静養をおとりになるようにおすすめた方がよいかと存じます」

「完全静養？」

駒井高白斎はその意味を解しかねるような顔をした。

「実はさきほどお館様のお診^みたてをいたしましたる折、女の移り香をかぎ申しました」

わかったと駒井高白斎はいった。日頃女好きな晴信のことだから、いくら女を遠ざけるようにといつてもそれは無理であろうと思つた。

「それにあの病にかかると、人によつては男女のいとなみがいつそうはげしくなる傾向がございます。それは病を^{こうしん}亢進させる大きな原因にもなります」

「そのことは、この前に聞いておる」

駒井高白斎は考えこんだ。夜のこつをつつしめと医者なら云えるが、侍臣からそれをいうことはできなかった。

駒井高白斎は武田家切つての智恵者である。その智恵者が考えこんでしまったほど、それは、むずかしいことであつた。駒井高白斎はしばらく考えた末にいかにも苦しそうな表情でいった。

「こうなればお館様の方を遠ざけるよりしかたがないと思うがどうだ」

「それができたら、それでもよいと思います」

できるだろうかと立木仙元は高白斎の顔をうかがつた。

「お館様を志磨の湯（現在の甲府市湯村温泉）へお移しいたしたいと思うがどうだろうか。志磨の湯が、お館様の病に効くと、そちから申し上げるのだ。お館様がお聞入れにならなかつたときは、諏訪にいる板垣信方殿にたのもう」

高白斎は、やはり智恵者と云われるだけのことはあつた。

立木仙元は、翌日、晴信の寝所を見舞つたときに、温泉療養をすすめた。

「志磨の湯とは志磨の庄の湯のことか」

晴信は湯の名を知っていた。

「あの湯は、疵きずに効くとは聞いてはいるが、労咳に効くということはいまだ一度も聞いたことはないぞ」

晴信は、すでに立木仙元の心の中を見抜いていた。

「いえ、あの湯は、遠く養老年間に開かれましたところより……」

「もういい」

と晴信は仙元の口をおしとどめて

「そういう入れ智恵は、駒井高白斎が考えたのだろう。高白斎に、余のかわりに入湯を命ずるといつておけ」

晴信は横を向いた。

諏訪にいた板垣信方は駒井高白斎の書状を受け取ると

「困ったことだ」

とひとこといった。

板垣信方は、家来たちを呼んで、留守中のことについていろいろと指示を与えた。

「諏訪の西方衆は小笠原長時にそそのかされているらしい。今井と矢島の一党にはとくに注意を払うように。誰が誰と通じているかをよく見届けておくことだ。けっしてこっちから手を出してはならぬ。伊那の藤沢頼親の動きも注意しなければならない。藤沢頼親は小笠原長時とも、諏訪

の矢島頼光とも縁戚関係にあるからな

諏訪には依然として、諏訪家復興に執着する者がいた。晴信がいかに諏訪一族に寛大な処置をとり、諏訪神社に高遠の所領を寄進するなどの、懐柔策を取っても、武田の風下かざしもにつくのがいやだというものがいた。諏訪頼重がそうだったように、神氏の子孫ということだけにこだわる、頑固で理窟ぼくて頭が高くて、他人との融通性に欠けた人間が多かった。

板垣信方は、たとえ、僅かでも、代官としての任地を離れるに際して、彼の不在中に起るかもしれない不祥事についての手配をちゃんと整えていた。板垣信方は、それほど、注意深い男だった。

板垣信方が諏訪からやって来たと聞くと、晴信はいそいで蒲団を敷かせた。信方が古府中へやって来たのは、駒井高白斎のさしがねで、おそらく身体を大事にしろという諫言だろうと思った。信方が来ると晴信は寢床からいま起き上ったようなふりをして対面した。

信方は晴信の顔色を見て、これはいけないなと思った。前に会ったときより、一層、顔色が青くなっていた。

「なにしに参った、余はそちを呼びはしないぞ」

晴信はまず信方を叱った。

「お館様のおさしずもなく、任地を離れた点については、改めてお叱りをいただきましょう。まずそれよりも、火急のことについてお館様に申し述べたきことがあって参りました」

信方は本論に入った。

「火急のことという」と

晴信は、ひょっとすると諏訪に反乱でも起ったのかと思ったが

「お館様のお身体に関する火急のことでございまする」

やはり駒井高白斎と仙元の入れ智恵で信方が来たのだとわかると、いささか愉快でもあった。みえすいたことを考える家来たちだと思った。

「そのことなら分っておる。志磨の湯へ行けということだろう」

分っていてなぜ、お出でになりませぬ。お館様の身体は、お館様個人の身体ではございませぬ、甲斐の領民すべての身体でございます。いや、やがて、御館様が天下を統一されるとき、天下のためのものがございます。志磨の湯へ行くことはまことにわずらわしいことだとは存じますが、大事の前の小事、こらえていただかねばなりませぬ」

「わかった、信方、行けばいいだろう志磨の湯へ」

「さよう、行けばいいのでございます」

「では、それでよい。そのうち必ずいくから、信方ははやく諏訪へ帰れ、諏訪に反乱のきざしがあるというではないか」

「話をそらされては困ります。拙者はお館様を、志磨の湯に送りこまない限り、諏訪へは帰りませぬ」

「なにっ！」

晴信は顔がほてって来るのを覚えた。また熱が出るのだなと思った。

熱が出るようなときには下手なことは云えない。あとで取りかえしのつかぬようなことになる。晴信は自省しようとしたが、いつになく、強いことをいう信方には、なんとしても黙っているわけにはいかなかった。

「余の意志に逆^{さか}つてまで、志磨の湯へおくりこもうとするのか」

晴信の顔は紅潮していた。

「逆つても志磨の湯へいつていただかねばなりません。志磨の湯で、仙元がいいと申すまで、静養されるようにお願い申し上げます」

「くどいぞ信方、余の身体のこと余が一番よく知っている。いちいち他人に指図されないでも分っている」

「それではお館様に、ひとことだけお伺いいたします。お館様の病に、閨のことが一番悪いということを御承知でしょうか」

「そんなことは充分心得ている」

そのひとことで信方は急に力を得たように、晴信の前へ膝をすすめていった。

「それほど、お分りのお館様の首すじのあざはなんでございます」

「なに首すじの痣^{あざ}？」

晴信は、はっとして自分の首すじに手をやった。そこは見えなかったが、そのあざに覚えがあった。それはあざではなく、夕べの湖衣姫との夜の名残りであった。湖衣姫に吸われてできた充血の跡であった。

前年勝頼かつよりを生んで以来の湖衣姫は、しばしば晴信が辟易へきえきするほどの、すさまじい愛情をしめした。湖衣姫は、他の女たちとは違って、晴信の愛情を受けるときには、ちゃんと眼をあいていた。その眼の中に炎が燃えあがって来ると、それ以上、そうしていることが耐えられないように、晴信にすがりついて、晴信の唇を求めた。晴信は湖衣姫との唇のまじわりを、彼女の献身的な愛情の表現として受け取った。

だが、仙元に、彼の病が労咳だと云われ、労咳は、人に移るものだと言われてから、湖衣姫の唇をさけた。労咳を湖衣姫に移してはならないと思ったからであった。晴信が唇をこばむと、湖衣姫は、彼女の唇を晴信の首すじに当ててそこを吸った。

「お館様、ここにいたら病によくないことがたくさんあるということにお気づきになりましたら、どうか志磨の湯へお移りいただきたいと存じます。はじめはつらいと存じますが、一月、二月とたてば、やがて、馴れてくるだろうし、身体がよくなりさえすれば、別に、閨のことを、おつつしみになることはございません。戦争のことはわれらにお任せいただければいっこう心配されることはないし、国内のことは、しばらく駒井高白斎におまかせになってかまわないかと存じます」

板垣信方は晴信の前に平伏していった。

「どうしても志磨の湯へはいかないと申したらいかがする」

「拙者は腹を切つて相果てます。お館様にかけている望みを失うことは、拙者自身生きる希望を失つたも同然なことになりまする」

信方がそれを冗談にいつているのではないことは信方の顔にはっきり、現われていた。

(信方が腹を切ると云ったら、必ず切るだろう)

晴信は困惑した顔をした。

「では二、三日待て、その間に支度をする」

「思い立ったが吉日ということばがございます。二、三日立てば、また出にくくなるでしょう。

拙者これからお供をつかまつります」

信方は、晴信が承知したとなると、大きな声を出して、駒井高白斎を呼んだ。

晴信が躑躅が崎の館から、志磨の湯へ移ったのは、その日の夜であった。それまでの間に志磨の湯はすっかり、受入れ準備がととのえられた。

翌日の昼、躑躅が崎の館から立派な女駕籠が出て、志磨の湯へ向った。晴信の生母大井氏おおいが、持病の神経痛を治すために長逗留だというふれが出た。晴信の母、大井氏を、志磨へ送りこんだのは、晴信の入湯を擬装するためと、大井氏によって晴信の監視をさせるためであった。

「こんどは信方と高白斎に負けてやろう。だが、いつまでも負けてはいないぞ」

晴信は志磨の湯に落ちつくと、侍臣の石和甚三郎に向ってつぶやいた。

志磨の湯のまわりは嚴重に警戒された。おもてむきは大井氏警備ということになっていた。その中に晴信がいることを知っている者はごく少数しかいなかった。

晴信は湖衣姫や里美のことをしきりに思ったが、こういうことになる、いまさら湖衣姫や里美を呼ぶわけにもいかなかった。晴信は、歌や詩を作り、ときには鳳栖ほうせいを呼んで禪問答をやった。

「たまにはこういう生活もいいものだ。なにもかも忘れて湯に浸^{つか}っていると、なにか生きるよろこびを感じる」

晴信は鳳栖にいった。

「病が快方に向われていくときは、そのように将来に喜びを感じるものです。お館様は間もなく、躑躅が崎へ御帰館できるでしょう」

鳳栖がいったとおり、その年の十月になると晴信の顔色はすっかりよくなった。食欲も出て来るし、肥って来た。微熱もほとんど感じないようになった。

「奇蹟です。たった三つきや四つきで、こんなによくなられるとはまさに奇蹟としか考えられませぬ。だが、こういうときにこそ注意をしていただかないと、またぶりかえすことになります。もう二月^{ふたつき}ほどは御不自由を我慢していただかねばなりません」

仙元がいった不自由なことのなかで、晴信にとって、もっとも不自由なことは、禁欲をしいられることだった。

志磨の湯における晴信の周囲には色気がなかった。晴信の身のまわりの世話をするものは、すべて老女であった。一日に一度か二度、母の大井氏に従ってやって来る女たちもすべて色香のうせた女だった。晴信を刺戟するものはなかった。

内部に刺戟がないばかりでなく、外部からの刺戟もなかった。躑躅が崎の湖衣姫、里美等の愛妾たちからのたよりは、大井氏がすべて押えてしまって、晴信には渡さなかった。晴信が愛妾たちにやった手紙がとどいて、向うから手紙が来ないことも不自由の一つであった。

(いくら母だからといっても、妻妾たちの手紙までおさえるのはひどい)

そうは思うが、本来、親孝行な晴信は、大井氏の前に出ると、猫のようにかしこまっているだけでもない云えなかった。

晴信は湖衣姫や里美に会いたかった。このまま欲望をおさえていると気が狂いそうだった。

晴信は侍臣の石和甚三郎に、夜ひそかに、志磨の湯を抜けだす計画を打ちあげた。塀へ縄ばしごを掛けて抜け出し、そこへ用意して置いた馬に乗って躑躅が崎の館へ帰るといふ計略だった。

「晴信殿、きょうはなんとなく落ちつきがないのう」

その日の午後、晴信の顔を見て大井氏がいった。

「このごろは、すっかり気分がよくなりましたから、心は外へ向きます。それが、落ちつきのない態度になって現われたのでございましょう」

晴信は母の前をうまく逃げた。母が、彼の心の中まで見抜いていることにおそれをなした。

その夜おそく、晴信は甚三郎との約束の刻限に庭に出た。おぼろ月夜だった。

晴信はその夜の愛妾ふたりとの逢瀬を思いながら月を仰いだ。足音がした。庭の、植込みのかげから、母の大井氏が現われた。

「おや晴信殿も月見ですか」

大井氏が晴信の姿へじろりと眼を配っていった。

「月見に、野袴とは、風流のことですのう」

晴信は、冷汗をかいた。大井氏は、晴信が志磨の湯を抜け出すことをちゃんと見抜いていたの

である。

しかし晴信はあきらめなかった。その夜は、おとなしく寝たが、床の中で、母をいかにして合理的にあざむくかを考えていた。

(これは戦よりむずかしい)

戦なら、方策はいくらでも、たてられたが、母大井氏をあざむいて、愛妾に会いに行くことはむずかしかった。だが、晴信はそれをするつもりだった。

晴信の日課はこまかくしくまれていた。朝起きると、半刻ほど、志磨の湯の裏の丘のあたりを散策した。牧のあとがそのままになっていて、そこをひとまわりするのに半刻を要した。立入り禁止になっていたから、外部からは見えなかったが、念のために、晴信は僧衣をまとい、頭には頭巾をかぶって歩いた。朝食を食べると、書見、昼食は摂らず午睡を一刻あまりして、午後の散歩に出て、帰って来て書見、夕食、就寝という日程になっていた。

晴信はこの日程のなかに情事を計画した。

その朝、晴信は僧衣をまといいつものとおり裏の丘に散歩に出た。従者は石和甚三郎と塩津与兵衛のふたりであった。

丘のまわりには警護の武士の姿がところどころに見えたが、いつもの見なれた風景に、さほどの注意もひかなかった。

三人は丘の上の草むらの中で小休止した。そこに小尾豊信がひそんでいた。豊信は小尾衆の寄子であったが、内山城攻めのとき戦功があつて、旗本衆に加えられていた。たまたま容貌が晴信

とよく似ていたから、晴信は、小尾豊信を彼の替え玉に使ったのである。晴信は小尾豊信と衣服を取りかえて牧のそとに待たしてある馬に乗って躑躅が崎の館にいった。

湖衣姫は、晴信の忍びの帰還を涙を流して喜んだ。里美は晴信を志磨の湯には帰したくないと駄々をこねた。

晴信は昼の情事を思う存分楽しんでから、午後の散歩の時間になってから志磨の湯へ帰っていった、牧の草むらの中で、小尾豊信と入れ替った。

母の大井氏は、晴信がなんとなく不愛想になったのを感じた。朝の散歩から帰って来て食事を済ませると、自室に入って書見机に向ったままで、午後の散歩の時間までは誰とも会わなかった。母の大井氏が尋ねていっても、侍臣の石和甚三郎が

「ただいまお館様は御書見ですのうで」
といって面会をこたわった。

晴信が昼の情事を始めてから七日目に、大井氏は、朝の散歩から帰って来た晴信と顔を合わせた。大井氏が声をかけようとすると晴信は横を向いた。母に顔をそむけるなどということをしたことのない晴信の態度に、大井氏は疑問を感じた。

そのことがあってから三日ばかりへて、晴信の正室の三条氏からの手紙が大井氏のところへ来た。

昼の日なかに、晴信は躑躅が崎へやって来て、湖衣姫や里美と会っているが、もし、そのようなことをなさるように、大井殿が、おさしずなされたのだとしたら、たまには、私のところへも

来られるように御口添え願いたいという、皮肉をこめた手紙だった。

晴信と三条氏との間をはじめからうまくいかなかったが、大井氏と三条氏の間も、やはりうまくいっていなかった。なにかというと、京都を鼻にかけ、父の左大臣さんじょうきんより三条公頼を持ち出す嫁は大井氏の氣にいるわけがなかった。大井氏は、晴信の妻妾のうちでは、万事そつのない里美にもっとも好感を持っていた。

三条氏の手紙を受け取って、大井氏はすべてを了解した。晴信のやりそうなことだと思った。翌朝早く大井氏は晴信が散歩に出る前に躑躅が崎の館へ帰ると、真直ぐに里美の部屋へいって晴信を待った。

晴信は母の大井氏が来ているとも知らずに、湖衣姫のところろうばいで小半ときをすごしたあとで里美の部屋へやって来ると、正面に大井氏がこわい顔をして坐っていた。

晴信はひどくあわてた。まるで敵の大軍にでも包囲されたように、狼狽ろうばいをかくせなかった。

「晴信殿ひとことだけいって置きます。女には女として愛を受ける資格があります。無視されたとなると、その女は腹も立てよう、悲しがるでしょう。つい云わないでもいいことをいたくありません。里美どののつぎには北の方（三条氏）へ行かれるがいい。三人のところへ公平に廻まわれぬようなら、今後は志磨の湯から出てはなりません」

晴信の昼の情事は大井氏によって封鎖されて、晴信はまたしばらくは、味気ない毎日あじけなひを過すごさねばならなかった。

晴信が躑躅が崎の館へ引き揚げたのは十一月の半ばであった。

立木仙元が奇蹟だといったほど晴信の恢復が早かったのは、やはり晴信が、はじめの三つきあまりは、療養に専念したたまものでもあったが、彼の若さが病を克服したと見るべきであろう。

躑躅が崎に帰った晴信はすぐつぎの作戰計画に取りかかっていた。

信州から上州軍の勢力を駆逐した勢いで、今度は北信の村上の勢力を叩きつぶそうと考えたのである。

村上義清の軍とは、未だ直接に戦ったことはなかったが、村上義清が、佐久の諸城のうしろだてとなつてゐることは疑う余地のないことであり、村上を追放しないかぎり佐久の平定はまだ遠いように思われた。

晴信は北信の村上義清の動静を探るためにさかんに問者を放った。村上義清についてもっともくわしい情報を得るために真田幸隆を古府中に呼んだのは暮もおしせまったころだった。

真田幸隆は細い眼の奥に鋭い輝きを見せながら晴信に答えた。

「村上義清という男は、戦上手と云われるほどではございませんが、村上義清の家来に豪勇な武士がたくさんおります。この家来たちが死にもの狂いになつて戦うことになる、味方はかなり苦戦になるかと存じます」

戦わない前から味方が苦戦になると予告した真田幸隆は、その論拠についてかなりの自信を持つてゐるようだった。

「死にもの狂いになつて戦うのは、どこの将兵も同じであらう」

晴信のその言に対して真田幸隆は

「同じ戦いでも、そのときときによって、将兵の気持は、ずいぶん違つて参ります。村上の将兵が死にもの狂いで戦うと、拙者が申しましたのは、村上の兵が今年の夏の小田井原の戦いと志賀城攻めのことをよく知っているからでございます。彼等は、武田と戦つて負ければ、志賀城同様、男はことごとく首をはねられ、女子供は奴婢や遊び女として売られていった事実を眼のあたりに見ております。だから死にもの狂いで戦うことになるのです」

「すると、余が志賀城攻めのあとに取つた処置がきつ過ぎたと申すのか」

「そうではありません。戦いはそのときときによつていろいろと手を変えねばなりません。内山城のときは寛大であつたから、そのあととすぐ、志賀城がそむきました。志賀城のあとは、きつかつたから、ここしばらくは、そむく城はないと思います。村上攻めは、佐久が固まるまで、もうしばらく猶予されてはいかがでしょうか」

「猶予はならぬ」

晴信はいった。

「なりませぬか」

「ならぬ、早いところ信州の方はかたをつけてしまいたいのだ。村上義清ごとき男に一年も二年もかかつていたのでは先が思いやられる」

「それでは、味方の損害、御覚悟の上で、かかるよりいたし方がないと存じます。葛尾城はなかなかの堅城にて容易に落ちる城ではございません。長びけば御味方は不利となります」

「城の外で一戦を交える方策はないか」

「お味方が城攻めにかからず、適当なところに陣を張り、村に火を掛ければ、村上勢は黙ってそれを見ているわけには参りませぬから、必ず城から出て来て戦うでしょう」

「さきほど、村上義清はたいしたことはないが、部下に勇将が多くいると申したな。その者たちの名を申して見るがいい」

「村上の軍には八人衆と申すものがおります。西条義忠、森村清秀、信田隆生、屋代道斎、塩崎八郎、五加重成、石川高清、高坂範重、このうち最も勇猛な部将は西条義忠、森村清秀、信田隆生、五加重成の四人、他の四人はどちらかというと武勇より智略にすぐれております」

晴信はそれらの部将の名前を聞いただけで、村上軍との戦いが始まったように覺えた。矢のうなる音が聞え、鬨とぎの聲が聞え、軍馬のいななく聲が聞えた。

晴信は真田幸隆を加えて村上撃滅の作戦會議を開いた。

板垣信方と甘利虎泰が口を揃えて、反対した。理由は真田幸隆と同じであった。

「村上を討つよりも、小笠原を先にたたいた方が有利と存じます。小笠原勢とはしばしば矢合やあひわあせをしていますから手のうちは分っております。戦えば必ず勝ちます。小笠原をたたいて、安曇あづみを、犀川さいがわに添そって北へ下り、村上の背後に廻れば、村上は孤立することになり、自落すること必定と考えます」

信方の戦法は正攻法であった。甘利虎泰も、信方の案に賛成した。

「小笠原はいつでもたたける。すでに、諏訪と伊那をおさえたわが軍に取っては、小笠原はもの数ではございませぬ。いま信濃の唯一の敵は村上義清ただひとり。小笠原長時ごときを相手に

して時間をかけているより一気に村上の本拠をつくのが、信濃を平定する早道かと存じます」

小山田信有がいった。

飯富兵部（おぶりょうぶ）がこれに賛成した。作戦会議は信方、虎泰等宿老たちの慎重派と、どちらかというところ手諸将等の主戦派とはっきり二分された。

晴信は軍議の尽きるのを待たずにいった。

「正月早々に村上義清を攻める。それぞれ、その準備にかかるように。真田幸隆が云ったように、村上勢はいままでになくきびしく抵抗を見せるであろうから、わが軍もその覚悟をせねばなるまい」

晴信は若かった。自信があった。

信方や虎泰等宿老たちの言を聞かずに、信州制覇（せいはい）をあせったところに重大な危機がはらんでいた。

晴信は正月を迎えるとすぐ、諸将、諸士に

（このたびの戦は、わが軍に取って至極重大な戦である。この戦に勝てば、信州の地はわが方のものとなる故、それぞれの功名手柄にふさわしい土地を与える用意がある。各将士とも、武門のほまれにかけて戦うがよい）

晴信は朱印状を各将士にわたして士気を鼓舞した。

天文十七年二月二日、晴信は、古府中を発って、諏訪に入り、大門峠（だいもん）を越えて、長窪城へ着いた。

甲軍來襲の報は既に村上勢にとどいていた。村上勢は城を出て戦う気配を見せていた。

「村上勢の方から決戦の気構えを見せるならば、もっけの幸い、敵を殲滅^{せんめつ}して二度と立つことのできないようにしてやろう」

晴信は物見を出して敵情を探った。

敵兵およそ二千、甲軍とほぼ同じ勢力が上田原^{うえだはら}のあたりに陣をかまえていた。

「さすがに村上義清、よくそれだけ集めたものだ。だが、集めただけで、おそらく、大部分は、槍のつかい方も知らない百姓どもであろう」

長瀬まで前進して来ると、さらに新しい情報が入った。

「敵の将士のことごとくは経かたびらを旗差物のかわりにしておりまする」

「敵は分散せず、上田原を見おろす山麓に陣を張っております」

「伏兵らしき者は見えませぬ」

晴信は依田^{よだ}まで来て軍を止めた。

村上勢の決死の覚悟が、そのころになって、晴信にも分って来たのである。

柱石逝く

上田原^{うへだはら}は上田市の中心より千曲川をへだてて西方約四キロメートルのところにある。埴科^{はにこな}、更^{さら}級^{しな}、小県の三郡の境界である。東側と南側は小県の平野をのぞみ、北と西は山がせり出しており、その間を千曲川が北に向って流れている。上田原から北方一二キロメートルの千曲川を見おろす山の上に、堅城をほこる葛尾城がある。

天文十七年（一五四八）二月十日葛尾城を出て来た村上義清の軍は、西から千曲川に向ってせり出している城山（当時の呼名は明らかでない）を背にして陣を張り、その北方、二キロメートルの岩鼻城には三百の兵がこもって甲軍の到着を待っていた。

武田晴信の率いる二千の軍勢は真田幸隆が先導しながら、依田から千曲川に添って西北方に進んで来て、中之条のあたりに陣を張って村上義清の軍と対峙^{たいじ}した。

晴信は諸将を集めて軍議を開いていった。

「この度の戦の目的は村上軍を全滅させるにある。去年、小田井原の戦いで上州軍を全滅させたと同じように、今度のいくさにおいても、村上軍を全滅させねばならぬ。それには、敵を包囲して退路を断つことが必要であり、敵が逃げこむおそれのある岩鼻城をまずかこまねばなるまい」

軍議に先だって晴信は彼の決心を披瀝した。この一戦で村上氏をほろぼすという前提のいくさであることを強調してから、こまかい策戦に入っていた。

戦いは初鹿野伝右衛門が兵三百を率いて岩鼻城攻撃に向ったときから始まった。天文十七年二月十四日のことである。

それまで山を背にして動かなかった村上勢が急に動き出した。岩鼻城に向う初鹿野伝右衛門の軍のあとを衝こうとして、三百ほどの村上勢が河原を移動していった。

「よし、いまの機を失せず、右翼の板垣隊は敵の左翼を衝け」

晴信はむかで衆を走らせて板垣信方に命じた。

板垣信方は晴信の命を受けて突き進んだ。板垣信方の進撃と同時に、甲軍はいっせいに前進の気配を示した。

ところがこの時、初鹿野伝右衛門の軍のあとを追っていきこうとした村上軍が突然廻れ右をして、動き出した板垣信方の側面を衝いた。板垣隊の側面は崩れた。板垣隊は、村上勢の左翼を包囲しようとして逆に包囲されたのである。ひとたび甲軍の右翼隊に乱れができると、村上軍はその弱点に向けて、強兵をつぎつぎとつぎこみ、甲軍の背後へ廻ろうとした。甲軍の背後には山はなかったから、廻りこもうとすれば、それが出来たが、山を背にして動かない村上勢の本隊は、いくら甲軍が攻めても動こうとしなかった。それは背水の陣ではなく背山の陣であった。村上軍の本隊は山や木立ちを背にして高いところから近づいて来る甲軍に矢を射かけていた。

このような隊形になると、背後から襲われる心配のない地形を背負っている村上勢の方が有利

であつて、武田勢は右翼から背後に廻りこまれてじりじりと引いていった。

初鹿野伝右衛門の軍は、板垣軍の急を聞いて引きかえそうとすると、岩鼻城から村上勢が出て来て背後に襲いかかるので、動くこともできず城に釘づけにされたままであつた。

右翼隊苦戦と見て、晴信は原加賀守の予備隊を救援に廻そうとした。

だがそのとき、さらによくないことが起つた。それまで、守備一方だつた村上軍の主力が、突然攻撃に移つたのである。それも、甲軍の中央へ向つての全力突撃であつた。

ひとりひとりが経^{きよう}かたびらの旗差物を立てて、ものをも云わず、突込んで来る様は、それまでになくすさまじかつた。それにもうひとつ不思議なことは村上軍の戦いぶりだつた。村上軍は、将兵ことごとく無言で突込んで来た。名乗りもあげず、突き伏せた相手の首級もあげず、ただ狂つたように、一途^{いちず}に本陣をめざして突込んで来る様子は気が狂つた者の集団としか見えなかつた。「お館様、お引きめされ、ここは拙者が引き受けますからお引きめされ」

甘利虎泰が晴信にいった。

とても考えられない戦いだつた。村上軍はいままで見たこともない戦いぶりを見せたのである。戦いは敵の首をなるべく多く挙げ、できることなら大将首をあげることによつてそれ相応の、土地や金額や名譽を与えられる。要するに戦いは敵の首を取ることが目的であつて、それがなければ、戦う意味がなくなるのである。ところが村上勢は、その首を欲しがらずに、しゃにむに中央めざして攻めこんで来るのである。常識では考えられない戦いぶりであつた。

三騎が馬をつらねて晴信の本陣に向つて真直ぐに駆けこんで来るのが見えた。晴信の旗本たち

が前に立ちふさがって三騎を斬りおとした。先頭にいた騎上の武者が馬から落ちるとき、憎悪の眼を晴信に向けた。死を賭けての呪いの眼であった。国を奪い盗りに来た盗賊に向ける眼であった。

「お館様、いまのうちに陣を引いて、立て直さなければなりません、早く」

甘利虎泰は晴信の手を取っていった。

「引くのか陣を」

晴信にとっては、未だ一度もないことだった。戦えば必ず勝つ戦しかしていなかった晴信が、陣を引くなどということは考えられなかった。

兜をかぶらず、頭髮をふり乱した部将らしい騎馬武者が、郎党三名を引きつれて斬りこんで来た。郎党のひとりが晴信に向っていきなり斬りかかった。晴信は太刀を抜いて敵をふせいだ。

「くたばれ」

敵がそういつて斬りこんで来た刀を受けそんじて、晴信は高もものあたりに傷を受けた。痛みは感じなかった。晴信は、その敵の肩先を斬った。晴信は返り血をあびた。晴信の本陣が分つたと見えて、つぎつぎと敵が襲って来た。もはや、そこにそうして居られるような場合ではなかった。

晴信は本陣を左翼隊の小山田信有の軍の中にうつした。本陣が左翼隊に移ったことによって右翼隊は完全に孤立した。板垣信方は敵の包囲に陥った。

「信方を救え、信方を殺してはならないぞ」

晴信は采配をふるって下知したが、混乱の中に信方を救うことができなかった。

「敵将村上義清の所在が分りました」

物見が走って来て晴信の前に片膝ついていった。

「あの丘の上の松の根方でございます」

晴信は、この危機を脱するには村上義清の本陣を突く以外にないと思った。晴信は小山田信有にそれを命じた。

小山田信有は自ら精銳三十数騎を率いて敵将村上義清の本陣にせまった。村上勢はせめるのにそがしく、本陣附近は手薄であった。

小山田信有の斬りこみに突きくずされた村上の本陣が、じりじりと山麓にそって北へ引いていった。

夕日が上田原を赤くそめるころ、その日の戦いは終っていた。

板垣信方は全身に槍と刀傷を受けて晴信の本陣にかつきこまれた。重傷の信方が、晴信の本陣につれて来られたときにはまだ呼吸をしていた。

「お館様御健在で大……」

おそらく大慶至極といおうとしたのであろう。それが板垣信方の最期のことばとなっていた。甘利虎泰は敵の郎党たちの死骸とともに折重なつて死んでいた。鬚びんの白髪が風にゆれていた。

晴信は涙を出さなかった。泣きごと云わなかった。彼は二人の宿将の死顔をじっと見詰めているだけでものを云わなかった。

板垣信方と甘利虎泰は父信虎を甲斐から追放して、晴信を領主にして以来、晴信の左右の腕として働いて来ていた。

晴信は一度に両腕をなくした思いであった。

(血気にはやりすぎたのだ)

晴信はするように自省した。宿老二人のいうことを聞いて、小笠原攻めの方を先にすべきであったのに、それをしなかったのが敗戦の大きな原因だと思った。

村上勢の戦いぶりは、想像を越えていた。敗ければ、男という男は斬られ、女子供は奴婢にされ、遊び女に売られていくという志賀城陥落後に取られた晴信の処置が、村上勢に死にもの狂いの戦いをさせたのであった。

村上勢にとっては首の数によって恩賞が決まるという戦ではなかった。勝たねば、家の子郎党、その家族全部がほろびるから戦ったのであった。甲軍は損得の戦いであり、村上軍は生死の戦いであった。それが勝負の分れ目になった。

若い晴信がそのことに気がついたときにはおそかった。すでに甲軍は五百の損害を出していた。その夜はひどく寒い夜であった。篝火を焚いてそのまわりで仮眠を取ろうとしても、眠れなかった。夜になるにおよんで、村上軍の矢が、篝火を目がけて射かけられて来て、そのたびに犠牲を出さねばならなかった。原加賀守の部隊は、村上軍の小部隊の夜襲を受けて、十八人が討たれた。

村上軍は夜になると山の中へひっこんでしまって、篝火もたかず、どこにどうしているやら、

さっぱり見当がつかなかった。

甲軍はひと晩中、夜襲になやまされて、明け方近くになって、やっと、うとうとしたところ、北の方で鬨こゝろの聲が起った。

岩鼻城を包囲していた初鹿野伝右衛門の軍が襲われたのである。村上軍は、甲軍を夜襲でさんざんになやまして置いて、明け方近くなると、全軍を、岩鼻城に向けて移動し、初鹿野伝右衛門の率いる三百の兵を取りこめたのである。甲軍が、救援におもむくまでには勝負はついていた。城内と城外からはさみ打ちになった初鹿野伝右衛門の軍隊は全滅した。

村上軍は朝日の中で陣を整えると、勝鬨を上げた。

その声が、凍こおった河原に陣を張る甲軍の将士の胆きもをゆすぶった。

晴信は戦線を縮小した。これ以上、無理な戦いをすれば、もっと大きな被害を受けるかも知れないと思った。

村上勢は勝った。武田勢を打ち破った。だが、村上勢が決定的な勝利を得たというのではなかった。村上勢も、数百の死者を出していた。村上勢中もつとも勇将とうたわれた西条義忠、屋代道斎、森村清秀の三人は戦死した。

村上勢としても武田勢に追い討ちをかけるほどの余力はなかった。

二軍は対峙したまま動かなかった。

甲軍大敗の悲報は、諏訪の上原城にいる駒井高白斎のところに二月十五日届いた。

駒井高白斎は諏訪満隣を呼んで兵二百騎を率いてすぐ上田原に応援にいくように命じた。その夜雪が降って、大門峠を越えようとする諏訪軍をはばんだ。

駒井高白斎は使者を出して、晴信に退陣を進言した。

（今年は例年より雪が多く、寒さもことのほかきびしい故、一時お引き取りになった方がよいかと存じます）

しかし晴信から返事がなかった。

晴信は中之条の人家に本陣をかまえている。住民は戦火をさけて逃げ去り、村には人がいなかった。

「お引き召された方が」

部将たちがことごとく進言したが、晴信は聞かなかった。

「敵も疲れている。敵が引かないかぎり、こちらもし引けない。ここで引いたらそれこそ負けたことになるではないか」

晴信は村上軍はせいっぱいの戦をしたのだから、もう一度、あのとおりのことはできないだろうと見ていた。死にもの狂いの戦は一度しかできないと思っていた。晴信は敵の乱れを待った。「敵が戦に勝ったということを触れまわっているおりですから、そのなかへ、こちらの乱破らんぱを放つても、成功はむずかしいと思われます」

真田幸隆が云った。

「だが、なにか策はあるだろう。とにかく、あの敵を動かさねば戦にはならぬ」

晴信は、少しも動く気配のない村上勢に眼をやっていた。

「ひとつだけ策がございます。敵の村上義清が一番心配しているのは、岩鼻城です。この城が落ちれば村上勢は退路を断たれるし、この城が、御味方のものになれば、村上勢の小県への出口は封じられたことにもなります。村上義清は、岩鼻城の守りには特に気を配っているものと思われまする、それで——」

真田幸隆はちよつと考えるふうをしてから

「村上義清の氣にさわるようなことをしたらいかがかと存じます」

「氣にさわるようなこと？」

晴信はその意味が分らなかった。

「氣にさわるようなことをしてやると、村上義清は必ず動きます。村上義清という人は、お館様より二十歳も年上ですが、短氣者で、その上部下を偏愛へんあいするという悪い癖があります。つまり、そういう人には、どこか心の中にそれだけの弱いところがあるわけですから、そこをつけばなんとかなるかと思ひます」

その夜おそくなつて岩鼻城からのろしが上った。真田幸隆が放った乱破があげたのである。城内といつても、とりでのことであるから、城の背後は山つづきで、敵の間者が忍びこんで来て、狼煙のろしを上げるといふことは、考えられないことではなかった。が、村上義清が氣にしたのは、岩鼻城に狼煙が上ると、あたかもそれに応ずるように、本城の葛尾城かすらおにも狼煙が上ったことであつた。

狼煙はいずれも赤一色を帯びていた。

村上義清は、物見からの報告を聞くと全軍に出動準備を命じた。だが、なにも起らなかった。岩鼻城と葛尾城からはそれぞれに、狼煙を上げた者は不明であるという報告だった。

「武田の乱破のしわざと存じます。ただいやがらせに、狼煙を上げたということであって、気にすることはないと存じます」

信田隆生が村上義清にいった。

「敵の乱破が城内に潜入したというだけでも、容易ならざることではないか。もし万一、味方のなかに」

「そんなことはございません。御味方には、武田に寝返りを打つような者はひとりもございません」

「それならいいが、よくよく警戒を嚴重にするように」

翌々日の夜、村上の本陣近くで火事があった。藁小屋^{わらこや}がひとつ燃えただけの火事であったが、その火事とほとんど同時に、岩鼻城でまた狼煙が上った。

村上義清はその翌日未明、岩鼻城を見廻りに馬を馳^はせた。

(村上義清岩鼻城へ移動)

という情報は武田の間者によって、晴信に報告された。

「お館様いんです」

真田幸隆が晴信にすすめた。

甲軍は晴信自らが先頭になって、村上軍に総攻撃をかけた。村上義清は不在だったが、信田隆生は、武田勢をよく防いだ。だが、やはり、本陣に村上義清がいなかったことは、士気に影響した。村上勢は、北へ北へと押し上げられ、岩鼻城のふもとまで来てやっと陣を立て直すことができた。

この日の衝突は甲軍が優勢の内に終わったが、決定的な打撃を村上勢に与えることはできなかった。

村上勢は岩鼻城を背にして、それから、甲軍の陽動策戦には、容易に応じては来なかった。二月十九日、古府中より晴信の生母、大井氏の手紙を持った野村筑前守が中之条の晴信の陣所へ到着した。

晴信は母の手紙を読んだ。

「そちらの戦はたいへんなように聞きおよんで心配しています。戦は勝つことも負けることもあるものです。負けたからといって、そのことにあまりとらわれず、今回はすみやかに古府中へ引きあげることこそ肝要と存じます」

母の大井氏の手紙にはそのように書いてあった。晴信は手紙を読み終って、これは駒井高白斎の才覚だろうと思った。

「御苦労であった。母上には、御心配くださらぬようにと伝えてくれ」

晴信は野村筑前守ちくぜんのかみにそういった。帰るとは云わなかった。

晴信が退く気配をいっそう示さないとすると、村上勢は薄気味の悪いものを感じた。板垣信方、

甘利虎泰、初鹿野伝右衛門の三將を討ち取られても、なお、白若^{じじやく}として本陣に居据っている晴信をいまさらのように恐怖しはじめた。

（晴信と彼のひきいる軍勢はおそろしいということを知らないのでしょうか、命知らずというのだろうか）

村上勢は、対陣が長びけば長びくほど、不安なものを感ずるようになった。当初は全員が死を賭けて武田勢と戦ったが、その戦いが、勝利に終り、更に幾日か過ぎると、村上勢の士気はたるんだ。せっかく生き延びたのだから、という気持も起って来る。もう一度武田勢と戦って勝てるという自信はなかった。勝ったはずの村上勢が負けたはずの武田勢におされ気味のままで日時は経過していった。

二月が終って、三月になったが両軍は膠着^{こうちやく}状態をつづけていた。そのころになって、ようやく、甲軍に疲労の色が見えだした。甲軍は原則として、食糧は自弁であった。彼等は乾飯^{はんぱん}や蕎麦粉^{そばこ}や、黍^{きび}の粉などを背負って戦場に臨んでいた。食糧が不足すれば、現地徴発ということになる。そうなれば、その地方の百姓の怨^{うら}みを買うことになるから、そういうときは金を出して買うことにしていた。晴信が民衆を敵としないという方針は、いささかもゆるめてはいなかった。甲軍は近くの農家へ人を買って食糧を求めようとした。百姓の姿は見えなかった。食糧を運ぶ小荷駄隊は雪で難渋^{なんじふ}していた。

「このあたりが引き際かと存じます」

小山田信有が晴信にすすめた。

晴信は上田原を出るにのぞんで、板垣信方、甘利虎泰、初鹿野伝右衛門等将士の墓前に手を合
わせた。荒けずりの木の墓標が、うず高く盛り上げられた土の上に立てられていた。

墓の上には雪が降り積っていた。

通算すると晴信は上田原に二十日あまりも敵と対峙していたことになる。母のいうことも聞か
ずに、本陣の床几から動かなかったことになる。瘦^{やせ}がまんをしているのではないと、彼は自分自
身に云いきかせていた。負けたからといって、すぐ引き揚げれば、ほんとうに負けたことになる。
負けても敵と二十日も対峙していたならば、それはほんとうの負けではないと考えていた。負け
たからといって、すぐ引けば、板垣信方や甘利虎泰の死を無駄にすることになるとも考えていた
のである。

三月三日、全軍が引揚げを開始しても、村上勢はこれに追い討ちをかけようとはしなかった。

晴信は撤退に当って不用なものはいっさい焼き払い、あとには、ちりひとつ残さぬようにして、
堂々と引きあげていった。

三月五日、晴信は諏訪の上原城についた。沈痛な顔をして駒井高白斎が晴信を迎えた。

「高白斎、こんどの戦いは余の負けであった。敵に負けたのではない、信方と虎泰に余が負けた
のだ」

晴信は、信方と虎泰の進言を取り入れなかったがための敗戦が身にしみてこたえたようであっ
た。

「お館様の御奮戦の御様子、報告を受けましたが、疵^{きず}はいかがでございましたや」

高白齋は話を晴信の負傷の方へ持っていくとした。

「疵か、たいしたことはない、そのうち治るだろう」

「いえ、大事があつてはなりませぬから、いそぎ古府中へ帰つて、志磨の湯へ入湯なされては」

「また志磨の湯か、こんどはそうはいかぬぞ。湯なら諏訪にたくさんある。諏訪の湯に入りながら、しばらくここを動かぬつもりだ」

「なんと、古府中へお帰りになりませぬか」

「高白齋、よくよく大きな眼をして諏訪の西方衆の動きを見るがいい。上田原の戦いで、甲州軍が負けたという噂は、きつと誇大に宣伝され、小笠原長時等は、諏訪衆や伊那衆をおだてて、この諏訪に攻めこんで来るだろう。ここしばらくは防ぐかまえを立てねばならないだろう。余は、信方の死を、決して無駄にはしないつもりだ。今度は、小笠原を攻めて、さいかわ犀川を北に向つて押していくて、村上を孤立させるつもりだ」

晴信は将上に休養を与えた。戦死したものの家族には、それぞれ、その者にふさわしいものを与えた。戦死した父の所領をその子に与えたり、子のない者は、残された家族にそれ相応なものを送った。戦傷者は領内各地の湯へやって療養させた。費用いっさいは公費でまかなった。戦いが終わったあとの、この処置は戦いよりもむずかしかった。えこひいきがあつてはならないし、恩賞洩れがあつてもならない。

諏訪に落ちつくとすぐ晴信は古府中の湖衣姫に手紙をやった。久しぶりで、里がえりをしないかといつてやったのである。ついでに里美もつれて来るがいい、諏訪をまだ知らない里美はきつ

と喜ぶだろうとつけ加えることを忘れなかった。手紙を書きながら、母大井氏が、妻妾を公平に
 かわいがれといったことを思い出した。母のいうことは分るが、正妻の三条氏はなんといつても
 嫌いだった。ただ、大きいだけで、まとまりのない顔を思い出すと、とても諏訪へ来いなどとい
 ってはやれなかった。

「諏訪へ湖衣姫様と里美様をお呼びなさいましたか」

駒井高白斎は古府中からの知らせを聞くと、困ったおひとだという顔を晴信に向けた。

「信方のかわりに、こんどはそちが余のかんげん諫言役を引き受けるのか」

晴信は笑った。

「おふたかたを諏訪へ呼ぶのを悪いといっているのではございません。呼ぶ場所が悪いと申して
 いるのでございます。諏訪へは間もなく小笠原が攻めこんで参るかも知れませぬ、そのときは」
 「じつはそのときを余は待っているのだ。小笠原長時の手の内は、しばしば戦って知り切ってい
 る。あれは凡夫だ。家柄だけに居据っていた諏訪頼重とよく似たところがある。みえっぱりで、
 内容のない男だ。上田原の戦いで村上義清に余が負けたと聞いて、いままで引込めていた手を伸
 ばして来るだろう。その手を取ってこんどははなさぬぞ。まずそれまでは諏訪の湯に入つて疵の
 手当でもしていよう」

晴信は湖衣姫と里美とのために諏訪に湯館を新築した。

湯殿が新築成ったころ、晴信の予言どおり、小笠原長時はに仁科道外、藤沢頼親を誘つて諏訪神
 社下社社領へ侵入した。たいした兵ではなかった。諏訪下社の神官たちを追い出し、その辺の農

家へ火を放ただけだった。あきらかにいやがらせであり、晴信の出方を見たのである。

晴信は黙って見ていた。兵も動かさなかった。伊那の藤沢頼親が、予想どおり、そむいたことが晴信にとっては、人の心の動きをたしかめることができたという点で、いい参考になった。

晴信は新築された諏訪の湯館に湖衣姫と里美を古府中から招いた。湯館の湯舟に入って戸をあけると諏訪湖がよく見えた。諏訪湖のずっと向うに、白銀の山々が見えた。

湖衣姫は晴信といっしょに湯に入ることをはじめは遠慮していたが、一度一緒に入ってから入湯の時間になると、晴信のところへ迎えを出した。

当時諏訪の湯は男女混浴であった。そうするのが習慣だったから、別に弊害は起らなかった。

男女混浴があたり前なのだから、晴信と湖衣姫といっしょに入湯したとしてもへんに思う者はいなかった。湖衣姫は諏訪の生まれで、幼いときから入湯に馴れていたし、こういう風習は聞き知っていたから、晴信と入湯することをそれほど気にならなかった。里美も温泉に未経験ではなかったが、諏訪の湯のように豊富な温泉につかったことはなかった。

里美は湖衣姫に誘われると一緒に湯に入ったが、晴信とはどうしても一緒に入ろうとしなかった。

晴信は湯につかりながら、諏訪湖に眼をやった。諏訪湖には春霞がかかっている、夢のように遠く見えた。

「湖衣姫の名前についてはいつか聞いたことがあったが、いまそのいわれが眼のあたりに見える」

晴信は湖衣姫に云った。

「どのように見えますか」

「諏訪の湖みづうみにふわりと着せかけた衣のような、この春霞こそ湖衣姫の名にふさわしい美しさだ」

「春霞ではつかまえようがございませぬな」

「いや、その春霞を余はつかんでいるのだ、ほら」

晴信は手を伸ばして湖衣姫の肩をおさえた。

「おたわむれを」

湖衣姫は身をちぢめて、晴信の手からすりぬけると、つと立ち上って、諏訪湖の方へ眼をやった。

湖衣姫の白い立像を中心としてひろがる諏訪湖の春霞は、いくら見ても動かなかった。晴信は、彼に背を向けながら、諏訪湖に眼をやっている湖衣姫の表情を見たかった。うっとりした眼で春霞を見ている湖衣姫の顔を見たかった。

晴信は、湖衣姫の肩から背、背から腰部、そして足へとつづく、豊かな曲線をめずらしいものでも見るような眼で眺めていた。

白くすきとおるように見える湖衣姫の身体が、あまりに美しいということが晴信にとって心配だった。美しい花は散るのが早いように、この湖衣姫もひょっとすると短命ではないかと考えると、晴信はびくっとした。失いたくないと思った。

湖衣姫は人のかたちをした宝石だと思った。

「湖衣姫、あまり外に出て立っていると風邪をひく、湯に入るがいい」

晴信は湖衣姫にそう呼びかけて、こっちを向く湖衣姫のために眼をそらすようなふりをしながら、彼の視角のなかに、真正面からの湖衣姫の裸像をちゃんととらえこんでいた。

四月十五日に諏訪神社下社へ乱入した小笠原長時、仁科修理、藤沢頼親は、六月十日、再度、下社領に侵入した。下社の領地の豪族共は力を合わせて、防ぎ戦ったが、矢島、花岡の一族及び諏訪西部の西方衆（にしかた）は、この戦いに参加しなかった。諏訪西方衆が小笠原長時と気脈を通じていることは、これで歴然とした。

晴信は、六月の騒動が起る前には古府中へ帰っていた。湖衣姫も里美も躑躅が崎へ帰館した。諏訪の代官、板垣信方が戦死し、そのあとにやって来てしばらく諏訪にいた晴信が、急遽古府中へ帰ったことは、外見的には晴信が小笠原の勢力におそれをなして、諏訪を放棄したかに見えるた。

諏訪西方衆の間には、いまこそ諏訪から武田勢を追い出し、諏訪は諏訪人だけのものにしようという意気が高まっていった。

七月一日、諏訪西方衆の内乱が起った。矢島頼光と花岡忠常がその主謀者だった。

諏訪は二つに割れた。西方衆の多くは小笠原長時につき、東方衆は武田方について上原城へたてこもった。

西方衆でも、小笠原方に加担するより、武田方の方が有利だと思ふ者は、家や家財を棄てて、

家族ともども上原城へ逃げこんで来て、武田への忠節を誓った。

諏訪西方衆反乱と聞くと、晴信は、すぐ古府中を發った。そして、諏訪までの普通ならば一日の日程を八日かけて、ゆっくり進んでいた。八日の間に、走り馬が各地へ走り、寄親よりおやを中心として、寄子よりこ、被官ひかんたちが兵をひきいて続々集まって来た。

七月十八日晴信は二千の軍をひきいて、上原城へ到着した。

そのころ、塩尻峠には小笠原長時の軍五千が陣を布いていた。

遅足行軍

甲府から諏訪までは急げば一日で行ける距離である。晴信とその軍隊はそこを八日間費した。小笠原軍が大軍を擁ようして塩尻峠に迫っているというのに、甲州軍のその遅足行軍は小笠原長時から見ると、きわめて奇怪に思われた。このような甲軍の行動は、沿道上に放つてある問者かんじやから次々と塩尻峠の本陣へもたらされた。

「甲軍の先方衆さきかた十六日二里あまり北上、瀬沢にて休息、午睡二刻ひるね（四時間）あまりにて、それから二里前進、大沢あたりにて休止……」

という報告が小笠原長時の陣にとどいたのは、天文十七年七月十六日の夕刻であった。

「いったい甲軍は戦う気があるのだろうか。小笠原軍、塩尻峠に迫ると聞いて出て来たものの、ほんとうは、和睦のきっかけを待っているのではないだろうか。上田原の合戦で、板垣信方、甘利虎泰の両将ほか多数の戦死者を出した甲軍は、いわば手負いも同様、午睡ばかりして進まないのは厭戦気分がみなぎっているためであろう」

小笠原軍の武將たちの多くはそのように観測していた。

「それならば、一挙に塩尻峠を攻め下って軍を二つに分けて、諏訪湖の西と東から上原城に攻めかけたらどうだろう。上原城を攻めるには晴信の軍が到着しないうちの方がいい」

そういう武將がいた。しかし、その主戦論に対して賛成する者はいなかった。やはり、甲軍の強さを小笠原軍はよく知っていた。そう簡単に参る相手ではないし、しばしば、奇略を用いる晴信のことだから、彼の頭の中になにがあるやら分らないだけに迂濶に手出しはできなかった。

間者の報告を中心としての塩尻峠上の軍評定は同じようなことを毎日繰り返しているだけで進歩がなかった。

「甲軍に使者を送って、敵の意中を打診したら如何でしょうか」

十七日の朝の軍評定の席上坂西時重が発言した。小笠原長時以下会議に連なる者はいっせいに坂西時重の顔を見た。

「武田晴信殿の心中は、おそらく戦いたくない気持でいっぱいだと思います。そこで晴信殿の気を引くために、このたび武田に反旗をひるがえした諏訪西方衆の領地安堵について話し合いたいという書状を送って見るのです」

坂西時重は小笠原家重代の宿老であり智恵者であった。

「諏訪西方衆の領地安堵について、話し合いたいということは、わが方が国境を諏訪へすすめたいということだな」

小笠原長時は、会議の末席に並んでいる、諏訪西方衆の大將格の矢島頼光と花岡忠常のふたりにちらっと眼を配っていった。

「さようでございます。晴信殿の返事次第で、彼の心が分るでしょう」

坂西時重はもっともらしい顔で云った。

小笠原長時は即刻、晴信あての軍使を送った。晴信がその軍使の持って来た書状を見たのは、諏訪の金沢あたりであった。晴信は書状を読むと、そばにひかえている馬場民部ばばみんぶに黙って渡して、すぐ、筆を取って、小笠原長時あての返事をしたためた。

「入念の御申しいれ、はなはだ恐縮に存ずる。諏訪西方衆の所領安堵のことについては、明十八日もしくは十九日に駒井高白斎を軍使として、そちらへさしむけ、境界について、双方異存なきよう取りきめたい」

晴信は書き終ると、顔に微笑をたたえながらその手紙を高白斎に渡した。高白斎は、晴信の返書が、なにを意図しているかすぐ分った。

「さて、敵はこれを本気にするでしょうか」

駒井高白斎が心配そうに首をひねると、馬場民部が、ややひかえ目な、低い声で

「おそらくお館様の返事をおこんで敵の意見は二様に割れるでしょう。小笠原長時殿は、それに

判断がくだされず、和戦両様のかまえをして、軍使、駒井高白斎殿を待つことになるでしょう」

「敵將に迷いがでたらこちらの勝ちだ」

晴信は勝利を確信した口ぶりでそう云った。

その日も、甲軍はのろのろと上原城に向って行進していった。午後になると、この八日間続けたように、將兵たちに、木蔭で午睡を取らせた。この年はひどく暑い年であった。日中外を歩いていると、口もきけないほどの暑さだったから午睡はありがたかった。しかし、戦いが眼の前に迫っているながら、いつになくのんびりとした行軍について、武田の兵たちはこれまでにない、なにか異常なものを感じていた。武將のうち飯富兵部と小山田信有が晴信に遅足行進について、その真意を訊そうとした。

「いまに分る」

晴信はそう答えただけだった。

「私には分りませぬ。このままだと兵たちは心身ともにだらけ切って、ものの役にたたなくなってしまうでしょう」

飯富兵部は不満を顔に浮べていった。

七月十七日の夕刻、坂室の晴信の陣に、真田幸隆の使者角間七郎兵衛が到着した。小柄な男だが、ひどく足が速く、小県と古府中を一日で走るといわれる男だった。真田幸隆は緊急の場合この男を、使者として使った。書状を持たせず、口上をもって直接晴信に伝えるというのが、真田幸隆のいつものやり方だった。万一途中で、敵に捕えられても、書状を持っていないかぎり秘密

が洩れる心配はなかった。緊張して坐っている角間七郎兵衛の顔は、どこか猿に似ていた。

「申し上げます」

角間七郎兵衛は遠い距離を走って来たというのに、いささかも呼吸を乱さずに話した。

「板垣信方殿、御存命中に、小笠原長時殿の居城林城に潜入させて置きました、竹淵玄昌殿の働きによって、小笠原家の宿老、西牧四郎左衛門殿、三村駿河守殿の両名、この度の戦いに御味方つかまつること、真田幸隆殿を通じて申し出て参りました。塩尻峠にて、合戦となったおりは、いつにても御味方申すとのことにございます。甲軍の陣内より合図の狼煙三発が続けて打ち上げられたとき、小笠原勢の背後を衝くとのことでございます。また、安曇の仁科道外殿、合戦の始まる前に兵を引き上げると御約束なされました」

角間七郎兵衛は一気にしゃべった。

晴信のそばで駒井高白斎が要点を書き止めていた。

「御苦勞であつた。その他に……」

晴信は七郎兵衛から眼を放さずに云った。

「佐久全体が騒然としております。佐久衆が前山城を狙っております。田の口城も背く心配があります。村上義清殿は最近、奥信濃の高梨政頼殿と紛争をおこしており、その調停を越後の守護代長尾景虎殿（後の上杉謙信）に依頼したということでございます」

「長尾景虎とはいかなる人物か……」

晴信の眼が大きく見開かれたように見えたが、すぐおだやかになって

「いや、長尾景虎のことはそちも詳しくは知るまい、御苦労であつた」

晴信は角間七郎兵衛をねぎらつて、さがらせてから、駒井高白斎にしみじみといった。

「板垣信方は先の先まで考えて、要所要所にちゃんと手を打って置いたのだ。信方の深慮遠謀は、これからもよく見習わねばならない。戦は強いだけでは勝てるものではない」

晴信は、板垣信方の処置を激賞した。上田原の雪の河原で息を引き取つた信方のことがきのうのことのように思われた。

（いまここに信方がいてくれたなら——）

晴信は、顔にこそ動揺の色を見せてはいないが、いまが、彼の生涯のうちでもっとも重大なときであることを知っていた。

上田原の合戦は、結果においては五分五分の戦いであつたが、一般には甲軍が敗けたと伝えられていた。晴信の両腕とたのむ、板垣信方と甘利虎泰が戦死したのだから、敗戦と云えばまさしく敗戦だつた。佐久はこぞつて武田に背く気配があり、そして、諏訪では、既にその半ばが背いたのである。

（小笠原長時に決定的打撃を与える以外に武田の生きる道はない）

晴信はそう思った。いまここで、小笠原長時と下手な和睦をすれば、佐久地方ばかりでなく伊那も背くに違いない。いままでの苦心は水の泡と消えるであらう。

（勝たねばなるまい、勝つには……）

晴信はそれまで、彼の頭の中に秘めていた作戦計画をもう一度吟味した。馬場民部が晴信の床

几の前で一礼して云った。

「鉄砲奉行の日向三郎四郎が山本勘助とともに参りました」

馬場民部ははっきりと一語一語をいう男だった。板垣信方はどちらかというと雄弁家だったが、馬場民部は口数の少ない方だった。しかし、思慮深さにおいては板垣信方におとらなかつた。駒井高白斎と馬場民部の二人が傍にいと、なんとなく安心だった。学者然とした駒井高白斎と、額が広く眼光のするどい、いかにも武將らしい貫禄を持った馬場民部との取り合わせは、板垣信方、甘利虎泰の側近参謀と比肩して遜色はなかつた。

「鉄砲が間に合ったか」

晴信は日向三郎四郎と山本勘助に向っていった。その声は喜びにふるえていた。

「合わせて二十挺の鉄砲が揃いました」

日向三郎四郎が報告した。

二十挺の鉄砲のうち、占府中にいる鉄砲鍛冶日向文斎の製作したものは三挺、あとの十七挺は山本勘助が手に入れたものだった。

「たいへんだったであろう」

晴信は山本勘助をねぎらった。天文十二年に鉄砲が伝来してから、鉄砲は各地へ急速に広がっていった。港を持つ武將や、西国の諸將は鉄砲が他国へ流れることをおそれた。鉄砲あらためは嚴重だった。駿河の今川義元でさえも、晴信に一挺の鉄砲を贈っただけで、あとは言を左右にして、鉄砲輸出を拒絶した。どの国主も鉄砲の数をそろえたがった。来るべき戦いにおいては鉄砲

の数と弾薬の量によって勝敗が決することを知っていたからであつた。鉄砲の輸出をいやがつて
 いる駿河を舞台にし、甲州へ十七挺の鉄砲を輸入した山本勘助の功績は大きかつた。

山本勘助は、晴信に鉄砲の輸入先を聞かれると

「海路駿河に運びました」

といった。

「そうだろうな、鉄砲と弾薬を得るには海をたよる以外にない」

晴信の頭に、あの果てしない海の広さがちらつと浮んだ。港が欲しい。海のある領土が欲しい、
 海港を持たないかぎり、天下制覇はおぼつかないだろう。今川義元の尊大ぶった顔が浮んだが、
 すぐ、思考点を当面の問題に戻して、日向三郎四郎に云つた。

「二十挺の鉄砲を扱う人数は……」

「用意してございます。足軽二十五名に十分鉄砲の扱い方を仕込んで参りました。鉄砲隊の隊長
 には安原貫道と申す者を当てました」

晴信は暁光ぎやうこうを見たような気がした。角間七郎兵衛のもたらした朗報といい、いま日向三郎四郎
 の持つて来た鉄砲といい、それらは、小笠原勢との対決を前にして、数千の援軍を得たように心
 強かつた。

「今度の戦いは、その鉄砲によって、わが軍の勝利に終るだろう。戦いが終つたら、そちたちは、
 駿河に人をやって、もっと多くの鉄砲を取り込むように。山本勘助が開いた鉄砲道を今川殿に気
 づかれないようにな」

晴信は日向三郎四郎と山本勘助にそう命じて置いて、一礼して去ろうとする山本勘助を呼びとめて

「鉄砲道のことは日向三郎四郎に引き継いでおいて、そちは越後へ行ってもらいたい。長尾景虎という男がどんな男かよく調べて来てもらいたいものだ」

「どんな男と申しますと」

山本勘助は分つていながら、念を押すように反問した。

「長尾景虎は余よりも、ずっと若い。まだ二十そこそこのはずだが、その名が甲州まで聞えてくるところを見ると、ただの男ではあるまい、その男の癖が知りたいな。どんな物を好んで食べるか、どんな女を愛するか、どんな男を重く用いるか、要するに人間としての癖を知りたいのだ。晴信は長尾景虎という越後の領主が、将来容易ならぬ相手になりそうな気がしてならなかった。長尾景虎についてのなんの知識もなかったが、それは晴信の勘というよりも、予感に近いものであった。

山本勘助は明るい顔でその命令を受領した。その仕事は鉄砲買い込みにくらべればたやすいことだった。

「今日にでも越後へ出立いたします」

「いや、いそぐことはない。今度の戦いが終わってからでいい。駿河の鉄砲道のことを、しかるべき者に引き継ぐために一日は駿河へ行き、それから、越後へ行くがよい」

山本勘助はびくつとした。彼が開いた駿河の鉄砲道については、実は今川義元の了解を得ての

ことだということを、晴信は既に見破っているかも知れない。山本勘助の妻子が、今川義元の人質として取られていることも知っての上のことのような気がした。

山本勘助は二重間者としてのつらさを身にしみて感じた。晴信に一身をまかせたいが、今川義元と縁を切ることは、彼の家族と縁を切ることだった。山本勘助は、今川義元が、甲州の猿に鉄砲は無用だろうが、全然やらないとなると歯をむいて来るだろうからな、といいながら、十七挺の鉄砲を清水から陸揚げして、甲州へ送ることを見逃してくれたときのことを思い浮べながら、越後行きとなれば、ここしばらく今川家と武田家の中間に挟まれてあくせくしないでもいいなと考えていた。

十八口になって甲州軍はやつと諏訪に到着した。上原城には入らず、そのまま前進して先頭は下の諏訪に入り、本隊は上の諏訪に止った。下の諏訪から上の諏訪にかけての沿線は武田の軍兵で埋まった。

先頭隊が下の諏訪についたのが、午下りの暑い盛りだった。兵たちは、休止をいい渡されると、連日の作法どおり、武器を取って、木蔭に入って午睡した。下の諏訪から一里の先今井には小笠原軍の先頭部隊がいることが分つていてのこのふるまいは大胆というよりも、戦争などどうでもいいといった投げ出しの姿勢に見えた。

小笠原軍の間者はこのことを本陣に伝えた。

「いまこそ甲軍を討つべきとき……」

そういう部将が多い中で、坂西時重だけは

「晴信ともあろうものが、策もなく敵に討たるるようなことをなんでするものぞ。これにはなにかたくらみがあるに違いない」

といって、心利いたる物見に甲軍の武具と馬の様子をくわしく調べさせた。

「甲軍の兵は武具はいい加減に放り出して、こちよさそうに眠っています。十人に一人の割合で見張りが立っております。下の諏訪の甲軍は、木蔭に入って眠っていますが、上の諏訪の甲軍の中には昼湯をつかつているものもあります。軍馬には鞍を置き、一人ずつき添っております。下の諏訪附近にいる武田の軍馬は一樣に頭を上諏訪に向けてつながれています」

物見からこの報告を聞くと、坂西時重は、さもあらんとうなずいて、諸将に云った。

「甲軍のいましめの中でもっともきびしいのは、眠っている場合の武具の置き方であると聞いている。甲軍は敵襲を受けた場合、暗夜でも武具がつけられるように、日ごろ訓練しているはずだ。武具は手のとどくところにあつて乱雑に放り出すということはない。敵を前にしての甲軍の午睡がそもそもおかしいだけでなく、武具を放り出すなどということは更におかしい。それに、馬の頭を上諏訪に向けてつないであるということは、いざという場合、退く準備である——つまり下の諏訪から上の諏訪にかけての甲軍は、わが軍が攻めたらすぐ退く用意をしているのだ。上の諏訪から下の諏訪にかけては一方は山、一方は湖水、道がせまくて合戦に不向きであるから、わが軍を上諏訪から上原城近くまで引きよせて置いて、退路を断ち包囲しようという所存に違いない。おそらく甲軍の伏兵が、上の諏訪、下の諏訪近くの山間部の沢にひそんでいるであろう」

坂西時重は物見を放って諏訪湖の東側の谷や沢を探らせた。時重の眼に狂いはなかった。諏訪神社下社の裏山の沢と大和の沢に数百の伏兵がひそんでいた。

「晴信の策が見えた以上、わが軍は、軽々に動くべきではない。待つべきである。武田の大軍が塩尻に攻め寄せて来たとき一氣に攻め落すのが最良の策である」

「その時期は」

小笠原長時が眉間に皺を寄せていった。

「それは分りませぬ。今宵かも知れませぬ、明朝攻撃してやることだって考えられます。上の諏訪と下の諏訪で軍兵どもに湯を使わせて悠々と時を過しながら、なお諏訪衆、伊那衆の動きを見守っているとも考えられます。物見を八方に出して、いつでも迎撃できる用意が肝要と存じます」

小笠原長時は、坂西時重の進言を納得した。が、腹の中は、なんとなく、晴信に小馬鹿にされたようで、むしゃくしゃしていた。長時は怒りをすぐ顔に現わす男だった。氣に入らないことがあると、二日も三日も口をきかないことがあった。彼の本拠の林城は山の上にあった。老人がその城まで登るには呼吸が切れた。小笠原家重代の宿老や、近郷の武將たちが、その坂を登って挨拶に来て、虫の居どころが悪いとむっとして、そっぽを向くことがあった。なにが氣に入らないか側近も分らなかった。安曇の仁科道外と不和になったのも、こんなところに原因があった。

「諏訪の湯へ兵を入れて休憩とは、晴信の奴、人もなげな振舞ではないか。乱破を向けて、かきまわしてやったらどうだ」

小笠原長時はにくにくしげに云った。

「無駄なことです。それよりも、わが軍の邀撃態勢ようげきをもう一度検討する必要があるかと存じます」

「敵が湯に入つて、のうのうとしているのに、じたばたすることもあるまい。そうそう、晴信が諏訪に湯館を新築して、湖衣姫や里美をつれて来ていたというが、今度はまさか、女どもはつれて来てはいないだろうな」

長時は眼下にひろがる諏訪湖の対岸に眼をやつて云った。

「いや、今度は馬乗姿の里美どのを諏訪まで同道されたと聞いております。里美どの、婦人としては稀まれに見る馬術の名手……」

坂西時重がそこまでいうと、小笠原長時は顔の筋肉をびくびくさせて、なにか云おうとしたが、それを口に出さず、顔を横にむけた。ひどく不興な様子だった。その顔を見せられてから坂西時重はしまったと思った。小笠原長時が、信濃の名花として名が高かった幡津元直の息女、里美に恋歌を送っていたことを思い出したのである。

坂西時重は長時の前をさがると、小笠原軍の備えを見廻るために塩尻峠を今井の方へおりていった。陽を背にすると、湖水を越えて向うの上の諏訪のあたりがよく見えた。当時上の諏訪には、六、七軒の共同浴場があった。いたるところに湯が湧き出ていたから、そこに湯舟を埋め、清水しみずを引いて来て、入湯できるようにしてあった。屋根はあるが、かこいはなく、四圍に着物をかける木の柵があるだけだった。男女混浴であり、旅人も入湯自由であった。湯尻りには馬が入湯し

た。

古府中から、八日間もかかって諏訪へやって来た甲軍は、熱い湯に入って旅のあかを落した。

甲州にも温泉が多いが、諏訪の湯のように、湧出量が多く、温度の高い湯はなかった。

湧出口は土湯どゆといって、名のとおり地から湯が音を立てて湧き出していた。住民がザルの中に野菜や魚介類を持って来て土湯につけると、たちまちゆで上った。その風景もまた甲軍には珍しかった。彼等は湯を中心にしてはしゃぎ廻っていた。近い将来に戦争が起るといふようなことは予想もされない風景だった。

兵たちが夕陽を仰ぎながら湯につかっているころ、晴信は諏訪湖を一望のもとに見おろす、上の諏訪茶臼山ちやうすやまの本陣で諸將を集めて軍議を開いていた。

「今度の戦いには武田の興廃がかかっている。この一戦に負けたら、われわれは諏訪から去らねばならないだろう。そうすれば信濃は一斉に武田にそむくだろう。信濃だけでなく、甲州と接している諸国も、甲州に侵略の手を延ばして来るだろうことは火を見るより明らかなことである。信濃を安定させるためには是非ともこの戦いに勝たねばならぬ。小笠原が亡びれば、北信の村上義清も自落するだろう。この戦いに絶対に勝てる方策が一つある。それはわが軍の主力がいかに早く塩尻峠の入口の今井へ達することができるかどうにかかっている。わが軍は寅とらの上刻じようこく（午前四時）に行動を起し、今井に陣を張る小笠原の前衛隊をふみつぶし、敵が邀撃の準備に入らぬ前に、攻撃を掛けねばなるまい。今年の二月に、上田原で苦戦したのは、敵が決死の覚悟でかかって来たからだ。今度は、こちらが決死の覚悟でかからないとならない。このことを出撃の直前に

兵のひとりひとりによく云ってやるがいい」

晴信はひといきついて、更に作戦の細部について指示を与えた。

それまでの軍議とは違っていた。晴信個人の作戦計画を諸将に披瀝^{ひれき}して、その実行を求めたものであった。諸将がこれに口をさし挟む余地を与えなかったし、その余地もなかった。

行動を起すと同時に、上の諏訪にいる騎馬隊は下の諏訪の騎馬隊と合隊して今井を急襲して、これを攻め落すと同時に、塩尻峠へ通ずるあらゆる道を封鎖して、敵の間者が馬で通れぬようにする。敵の間者がやぶをくぐり抜けて塩尻峠の本陣へ急を知らせるころには、わが軍の本隊は今井に達しているだろう。敵があわてふためいて、塩尻峠で迎え討つ姿勢を示したころは、わが軍は峠四道を半ばまで攻め登っていなければならない」

晴信の頭の中には、こまかい作戦計画が組み立てられていた。

塩尻峠四道というのは、北から、旧中山道^{なかせんどう}の塩尻峠、田川峠（ほぼ現在の自動車道路の通っているところ。旧称は明らかでないが、一説には田川峠のほかに本塩尻峠または西塩尻峠とも云つたらしい）勝弦峠^{かつづる}（この戦いの後に名付けられたという説もある）小野峠の四道である。峠四道を総称して塩尻峠といい、古代より開けていた重要な峠路である。

晴信は中山道攻撃を飯富兵部の部隊に命じ、田川峠口は小山田信有に命じた。小山田信有は、武田家の譜代の武將たちとはややその立場を異にしていた。甲府盆地からはずれた、都留郡^{つるぐ}を領していた武將であり、身分的には、国人^{こくじん}（守護職に対抗できるぐらいの勢力を持った豪族）として、重きをなしていた。

晴信が信玄となり、やがて勝頼の代になったころは、譜代衆として名をつらねているけれど、晴信のころは、国人のうちもとても有力な寄親であったと見てさしつかえないだろう。

小山田信有の武勇は甲軍の中でも拔群であった。伊那の戦いにおいて眼ざましい働きを示してから、晴信に認められたが、上田原の戦いで、晴信の危急を救い、武田軍を立直させたのは、小山田信有が数十騎をひきいて、村上義清の本陣に殴りこみをかけたからであった。

現在でも、甲府あたりの人は都留郡の人を郡内の人と呼ぶ。それを聞くと、なにか郡内というところが甲州の中でも特異な存在のように感じられる。おそらく昔から郡内には向う気の強い、はげしい気性を持った人たちが住んでいたからだろう。

困苦欠乏に耐え、戦争に強い、郡内出身の勇敢な寄子よりこ同心どうしんを持っていたからこそ、小山田信有はその武勇を発揮できたに違いない。

晴信は、塩尻峠四道のうち、もっとも激しい戦いが予想される田川峠へ最強部隊と目される小山田信有の軍を向けたのである。

第三の峠、勝弦峠には、武田信繁の軍を向け、そして小野峠には馬場民部を向けた。

小野峠の小笠原軍の備えは弱く見えて取った晴信は、馬場民部の軍隊に、この峠を越えて、小笠原軍の背後に廻りこむことを命じた。

晴信は一応の指示を与えたあとで、末席にいた諏訪満隆と諏訪満隣に向っていった。

「諏訪衆は、四隊に分れ、それぞれの峠攻略の先陣をやってもらいたい。諏訪衆のことであるから、地勢をよく心得ておられることであらう」

先陣といえ、名譽のことであつた。合戦に先立つて先陣を仰せ付けられたいと駄々をこねた勇將の話は数多い。勝てる戦だったら、先陣もいいが、勝つか負けるか分らない——特に、この塩尻峠の戦いのように峠の上にいる軍隊を下から攻め登るという、最初から地形的に不利な戦いにおいて先陣をつとめるということは、名譽を与えられたというよりも死を与えられたことになる。進めば小笠原軍に討たれる。引こうとすれば、そこに甲軍の督戦部隊がいる。そうなければ死ぬ覺悟で突進するより仕方がないのである。更に諏訪軍にとって、もう一つ厭なことは、諏訪西方衆と戦うことであつた。同じ諏訪である。親類もいれば親友もいる。兄が小笠原方に走り、弟が上原城の武田方についたという例は数かぎりなくあつた。武田が諏訪軍を先陣とすれば小笠原軍も諏訪西方衆を先陣に送りこむだろう。そうすると血で血を洗う戦いになる。諏訪の武將たちの顔色は蒼白になつた。彼等は晴信の非情を憎んだ。が、それに口応えすることはできなかつた。

諏訪満隆は、いよいよ実質的に諏訪が亡びるときが来たのだと思つた。

弱い者は死なねばならないのが戦乱の世の常ではあるが、同族が戦い合つて死ぬような終末はあまりにもみじめなものに考えられた。

暁の騎馬突撃隊長として原加賀守が選ばれた。晴信の作戰指示はそれで終つた。軍議を開いたが、部將にはひとことも云わせず、晴信の一方的な作戰計画が押しつけられても、誰も文句は云わなかつた。文句が云えないのではなく、云うべき欠陥が発見できなかったからである。古府中と諏訪の間を八日もかけた遅足行軍が、実は明朝の電撃作戰のための下準備だつたことが分つた

武將たちは、いまさらのごとく晴信の叡智えいちに驚嘆した。

「さいごにひとこと云って置く。原加賀守の副将として里美をつかわす。この際一兵なりとも大事などきだ。里美の馬術はたくみであるから、よもやひけを取るとは思われない。里美出陣のことが小笠原長時に聞えれば、長時はしゃにむに峠をおりて来るだろう。明日のいくさには、なにがなんでも、南北朝以来の信濃守護職を鼻にかけている小笠原長時の白髪まじりの首を打ち取らねばならない」

晴信の愛妾里美出陣と聞いても、武將たちは黙っていた。里美は普通の女ではない。馬にかけては馬術巧者の武田の武者たちでも彼女には一目置いていた。里美が長刀ながなたを持ってあばれ廻る様子を武將たちはふと想像した。晴信は里美に出陣を命じたが、今川氏と北条氏の争いの調停に里美を出したときの趣旨とは違っていた。

晴信は、若くして聡明であり奇智に長けていた。つまらぬ名目にこだわってはいなかった。勝つためには考えられるところの、あらゆる手段を選ばなければならない。晴信はそう思っていた。緊張の中に、天文十七年七月十八日の赤い太陽が沈んでいった。

塩尻峠の合戦

上の諏訪に集結していた甲軍の騎馬隊三百騎は天文十七年（一五四八）七月十九日寅の上刻（午前四時）に行動を起した。三百騎の蹄の音は治道の人の眼を覚した。上の諏訪の騎馬隊は下の諏訪に到着して、その数五百騎となった。夜が明け始めていた。

原加賀守が率いる五百騎は一気に今井に向って走った。原加賀守につづいて青毛の駒にまたがった里美の姿があった。下の諏訪から今井までは一里足らずである。ところどころに、小笠原軍の見張所があり、馬を置いてあったが、甲軍の進撃があまりに急であったから、物見はあつという間に突き伏せられた。五百騎は今井につくと、小笠原軍の前衛部隊に一気に攻めかかった。声のない突撃であった。全くの不意打ちであった。守備軍は武器をつける暇がなかった。小笠原軍の前衛陣は迎え討つ術もなく、ただ甲軍の蹂躪に任せるばかりであった。

七月十九日寅卯（午前五時頃）に塩尻峠に押し寄せ候ところに、峠の御陣には、武器致す人もなく、過半は起き合はざる態に候。

と守屋信実訴状は、このときの状況を描写している。峠に押し寄せたというのは峠の入口今井に押し寄せたことをさすものと思われる。

暁の急襲は成功した。小笠原軍の今井守備隊の半数は討たれ、半数は逃走した。道という道は、甲軍の騎馬隊によって、ふさがれたので、敗残兵は、すぐ塩尻峠へは登れず、中腹の草叢くさむらの中へ身をかくし、道なきところを、上へ上へと這い登っていった。

今井から塩尻峠の頂上までの道は、それほど急峻きゆうしゆんではない。本道を行けば一時間とはかからないが、草叢を這って行ったのでは時間がかかった。今井を守っていた小笠原軍の兵が峠の見張り所に甲軍の急襲を知らせたのは卯うの刻（六時）を過ぎたころだった。これより半刻はんとくあまり前に峠の上にいた小笠原軍の見張り所では峠の下の異常を感知して、本陣へ知らせた。

「今井あたりで人の騒ぐ声が聞えます」

という物見からの報告を受けた侍は、寝ぼけまなこで、おそらく物見隊の衝突であろうといっただけで、その重要な報告を上部に伝えなかった。小笠原軍の迎撃準備はこのために一時間あまり遅れた。

今井からの敗走兵が次々と来るに及んで、小笠原軍は騒然となった。

下知があるまで、持場を動かずに固めよ。甲軍は小勢であるぞ、いたずらに立ち騒ぐことは敵の思う壺となる。静かに下知を待て」

坂西時重が心配していたことがいま、事実になって現われたのである。

「今井を占領し、峠道四道をおさえた武田の騎馬隊はおよそ千五百、総大将は、晴信殿の愛妾里

美の方と見受けました。青毛の駒にうちまたがり、大長刀おとなぎなたを水車のようにふりまわし、あたるをさいわい薙なぎ立てております」

物見が五百騎の甲軍を千五百と過大に報告したり、里美を総大将といたり、そのふるまいを誇張したりしたのは、それだけ、里美の存在が小笠原軍の眼を引いたからであった。晴信の計略はつぎつぎと功を奏していった。

小笠原長時はこれを聞くと、顔を真赤にして怒鳴った。

「おのれ晴信め、里美を木曾義仲きのよしかの愛妾巴御前しらゑぜんに仕立て上げて、斬りこんで参るとは——よし、他の者はおもうな。里美をとりこにしてやろう。里美をとりこにした者は、恩賞思いのままぞ。殺すでない、傷つけるでない、生け捕ったものには、一城を与えよう」

小笠原長時は馬上で叫びながら、峠をかけおりようとした。その馬の轡くわを坂西時重がおさえていった。

「敵の計略でございます。殿を引き寄せる策でございます。甲軍の騎馬隊はせいぜい数百、おそらく本隊の到着を待つまでの攪乱作戦かくらんと思われれます。わが隊が騎馬隊を追って攻め下れば、騎馬隊は西に引き、本隊の到着を待つて挾撃に出て来るでしょう。いまは騎馬隊にかかりなく、峠四道に甲軍本隊を迎え撃つ配陣をすることこそ緊急です。騎馬隊の後を追って間もなく到着する甲軍の本隊は息切れしているでしょう。その鼻面を叩き、一挙に諏訪の湖うみへ追い落す戦法こそ、味方を勝利に導く唯一のものでございます」

坂西時重は小笠原長時の馬の轡にすがって繰り返して叫んだ。

「殿、氣をおしずめ願ひとうございます。今こそ、信濃の守護職、小笠原家の浮沈にかかわる重大時でございます」

このひとことが小笠原長時の氣をいくらか沈めたようだった。長時は防戦準備を各隊に命じた。小笠原長時に従つて出陣して来た将兵は、安曇、筑摩の豪族とその配下の者たちだった。それぞれ一城を持つている小豪族が多く、小笠原家の支配下にはあつたが、小笠原家との主従の關係は、武田晴信とその親類衆、譜代衆との關係のように緊密ではなかつた。安・筑の豪士たちは、ひとりひとりが城主、領主としての見識を持っていた。塩尻峠へ出向いたのは小笠原長時の命に従つたというよりも、國を盜りに来た甲州の賊を防ごうという氣持の方が強かつた。

晴信が諏訪、伊那、佐久、小県をいかにして斬り取つたかは、安・筑の豪族たちはよく見て知つていた。黙つて武田に従えば所領は安堵されるけれど、背けば所領を失うことも知つていた。降参したあとでまた背けば、女子供まで、捕虜にするという残酷な仕打ちも心得ていた。彼等は現状のままであることを望んでいた。武田と小笠原の戦いに巻きこまれたくはなかつたが、眼の前に甲軍が来たからには、旗幟を鮮明にしなければならなかつた。彼等の多くは、戦争の経験がなかつたが、村上軍が甲軍を打ち破つたという話を聞いてからは、なにか信濃武士として甲斐の侵略をはばねばならないような宿命感にとらわれつつあつた。

「ここで甲軍を諏訪湖に迫り落さないやうな宿命感にとらわれつつあつた。」

各部隊に走り馬がそう告げて歩いてゐた。

筑摩の諸將は小野峠口と勝弦峠口の守りにつき、安曇の諸將は中山道口と田川峠口の守りにつ

いた。各部隊は峠道を見おろす、ほどよいところに、陣を幾重にもかまえて甲軍の来襲を待った。塩尻峠を攻撃するには、塩尻峠四道をしゃにむに登らなければならないところに、甲軍の苦勞があった。盛夏のことだから、草藪や灌木の山腹に登ることは容易なことではなく、やむなく峠道を登ろうとすれば、両側から射かけて来る矢の的になることは必定であつた。

小笠原軍の迎撃陣が整ったところ、物見の者が、甲軍の陣立てを報告して来た。

「先陣は飯富兵部殿、つづいて小山田信有殿、武田信繁殿、馬場民部殿、それぞれ、中山道口、田川峠口、勝弦峠口、小野峠口に向いました。各部隊の先頭には、それぞれ諏訪の衆の旗さし物が見えております」

武田の本隊が四隊に分れて来たことは特に驚くことはなかった。先頭に諏訪衆を立てていることが小笠原勢には奇妙に思われた。

「敵は諏訪衆を盾にして攻め登つて来るつもりらしい。敵が諏訪衆を先頭にして来るならば、こちらにも諏訪西方衆を先に立てよう」

小笠原長時は諏訪西方衆を、矢合わせの正面に立たせた。

ここまでは晴信の想像どおりであつた。晴信はこのつぎのことをこう考えていた。

（諏訪衆が東と西に分れて対決すれば、やはり、ここは同族同士、矢も刀も槍もお互に鈍るだろう。そこに戦いの間隙が生ずる。峠の途中で戦線が固着する。塩尻峠四道のうち三道で緩慢な戦が続いているうちに馬場民部はかねて指示通り、小野峠を越し、敵の背後に迂回して小笠原本陣の背後を突く）

晴信はそのように考えていた。

これは晴信の大きな誤算だった。

塩尻峠の合戦では諏訪衆は敵と味方に分れて、血みどろの戦いをした。ひとたび血を見ると、同族なるが故にかえって酸鼻さんびな戦いになった。

田川峠の先陣を命ぜられた矢島頼光は死を覚悟していた。彼は晴信が頼重を亡ぼしたとき、晴信を案内して諏訪湖を一周したことがあった。頼光はその時、何度か晴信に斬りつけようと思った。斬りつけられないことはなかった。斬りつければ晴信を討ち果すことができた。主家を亡ぼした弱冠二十二歳の甲斐の領主の首を取ることができたが、ついに刀を抜くことができなかったのは、晴信の隙だらけの姿勢だった。頼光を信頼しきっている態度であった。ほんの少しでも晴信が、警戒心を起したならば、——そういう気配が見えたならば矢島頼光の大刀は弧を描いたであらう。だが晴信は頼光に背を向けたまま、しごくのんびりと馬を走らせていた。信頼している者を斬るのは、闇打ちであった。矢島頼光は卑怯なことはしたくなかった。だが後になって頼光はそれは一時的な感傷でしかなかったことを悔くいた。

「今こそ諏訪を盗んだ兇賊を討つときが来た。兇賊晴信はこの坂の下に居るぞ」

矢島頼光は彼に従う諏訪西方衆に向っていった。

「敵の中に諏訪の衆がいるからといって手をひかえるな、兇賊の手下となった者はたとえ兄弟であつても賊である」

矢島頼光は怒鳴った。

塩尻峠の本格的な戦いは諏訪西方衆の先陣矢島頼光が小山田信有隊の先頭をつとめる諏訪満隆の軍に斬りこんだ時点をもって開始された。

矢島頼光は六尺近い大男であった。彼は大刀をふりかざして諏訪満隆を眼ざして斬りこんだ。

千野弥兵衛が防いだ。矢島頼光は千野弥兵衛の兜を大刀でしたたか打った。兜は斬れなかったが、その衝撃で千野弥兵衛は眼を廻した。頼光は二の太刀で千野弥兵衛の喉の^{のど}を衝いた。

矢島頼光は血のしたたる千野弥兵衛の首を大刀の先につきさして叫んだ。

「主家を裏切り、兇賊武田に従った諏訪の腰抜け武士の最期はこのようぞ」

全身血を浴びた矢島頼光の形相はすさまじかった。裏切りと呼ばわれ、諏訪の腰抜け武士と云われても武田方にいる諏訪衆はそれに答えられなかった。矢島頼光の言動が機先を制したのである。裏切りといえば、一度は武田に従って置いて今度は小笠原についた矢島頼光だって裏切り武士であった。合戦は理窟でなかった。その場の空気が、その場を支配した。矢島頼光のはったりは諏訪満隆隊を制圧した。

「うおうっ——」

矢島頼光のあとに続く諏訪西方衆が一斉にときの声を上げて、峠を登って来る諏訪衆に襲いかかった。諏訪西方衆は命がけだった。武田に背いた以上、負ければ、縁につながる女子供まで、武田の奴隷にされることは分り切っていた。

負けてはならない一戦であった。諏訪満隆は、諏訪西方衆全部が腰抜け腰抜けと口々に叫びながら自分を眼がけて襲いかかって来るような気がした。満隆はしきりに刀をふりまわした。左腕

に激痛を覺えたと同時に、黒いものがいくつか、かぶさりかかって来るのを感じながら、彼はうしろ向きに倒れた。

諏訪満隆が重傷を負ってしりぞくとともに、諏訪衆は諏訪西方衆に追われて、じりじりと峠を下っていった。

「おのれ、矢島頼光め」

小山田が彼の麾下の兵を攻めよせて来る諏訪西方衆に向けたが、もはやおそかった。諏訪西方衆のあとから小笠原勢が続々と新手を繰り出して来たばかりでなく、峠道の両側からは、矢や石つぶてが峠を登って来る甲軍に降りそそいだ。

「引くな攻めろ」

小山田信有は馬上で怒鳴った。矢が馬の首に当り、馬はのけぞって、小山田信有は落馬した。

「引くな一步も引くな」

小山田信有は、藪の中からおどり出て来た武者ひとりを斬り伏せた血刀をかざして怒鳴った。

天文十七年七月十九日の太陽が上った。

「諏訪満隆殿重傷」

「お味方衆、じりじりと後退」

「千野弥兵衛殿、土屋信義殿、今福平蔵殿討死……」

などの報告が晴信の本陣にとどいた。晴信の本陣は今井の北方——現在の出早雄神社のあたりにあった。暁の急襲は成功した。だがそのあとは晴信の思いどおりにはいかなかった。小笠原軍

というよりも、安・筑出身の信濃の兵は意外に強かった。彼等は、なかなか退^ひかなかった。

晴信の傍には参謀長格の駒井高白斎が坐っていた。高白斎はなにかものをいいたげに、しばしば顔をあげて晴信を見た。

（かねて、内応を約束して来ている、西牧四郎左衛門、三村駿河守に、合図の狼煙^{のろし}を上げて、小笠原軍の背後を突くようにうながしたらいかでしょうか）

といったかったが、云えなかった、いま武田は負けつつある。明らかに、じりじりと峠の下に追い落されようとしていた。こういう時に狼煙を上げても、西牧、三村の両将はおそらく立ち上らないだろうと考えられた。内応を求めて来るような男の心情は信用できなかった。ああいつては来たものの、西牧、三村は状況次第で、どっちにころぶか分らなかった。彼等に内応を促すには、甲軍優勢下でなければならなかった。

（鉄砲はどうであらうか）

さらに高白斎は考える。鉄砲二十挺の筒先を敵に向けて打ちかけたら、新兵器にびっくり仰天して、敵兵はたじろぐだろう。戦況はその時を契機として逆転するかも知れない。だが、その考えも、きわめて自己本意のものであった。小笠原軍にも、二挺や三挺の鉄砲がないわけがない。鉄砲の音を聞いて逃げるのは雀であって、いま現に、思いもよらないほどの、ねばり強い戦いぶりを見せている信濃武上が、鉄砲の音でしりぞくと考えるのは甘すぎるように思われた。

（残された最後の手は……）

高白斎がそこまで考えたとき晴信が口を開いた。

「原加賀守と里美を呼んでくれ」

晴信がいった。

「里美様を？」

高白斎はそう反問しながら晴信は最後の手として里美の存在に再び眼をつけたのだと思った。

「そうだ。ことによると里美に死んでもらわねばならないことになるかもしれないね」

晴信の眼は塩尻峠に向けられたままだった。

塩尻峠四道の戦いは時間の経過とともに攻撃軍に不利となっていた。守備軍の小笠原軍には地の利があった。甲軍はその地の利を逆転させようとして、藪の中を迂回して、小笠原軍の背後に廻りこもうとした。小笠原軍はそれに気がついて、藪から出て来るのを待つて槍で突いた。藪の中で組み合ったままごろごろと転がって行く者もいた。予定していた馬場民部隊の迂回作戦は、馬場隊が、小笠原軍の二木、溝口隊に鼻面をおさえられたことによって完全に停頓した。戦線はやや膠着状態にありながらも、外見的には、勝負は決しようとしていた。甲軍の負けであった。もし甲軍のどこかにほころびが生じ、小笠原軍を背に受ける小部隊が出れば、甲軍は收拾のつかないほどの混乱を起し、敗北を喫しなければならぬ運命にあった。

日は高く上った。午刻（正午）になってもいまだに血みどろの戦いが続いていた。

暑熱がきびしかった。両軍の兵たちは、血と汗にまみれながら、勝たねば、自分が殺されるのだと歯を食いしばって戦っていた。

午の下刻^{げき}を過ぎたころ、入道雲が横峯^{よこみね}、高ボッチ山のあたりに浮んだと見るまに、雲はぐんぐん空にひろがり、天日をかくした。諏訪湖が鉛色に光った。

兵たちはふと空を見上げた。夕立が来るなと思った。

滝のような雨が間もなく戦線をおおった。こうなると敵も味方も分らなくなった。戦いどころではなかった。兵たちは、それぞれ、物蔭を求めて避難した。小笠原軍の兵士と甲軍の兵士と同じ木のかげに雨を避けて、敵味方と知って斬り合う場面もあった。

雨は戦線を夜のように暗くした。戦いは一時休止となった。

この雨の中を、晴信の側近のむかで衆が走り廻っていた。

雨は半刻も待たずして止んだ。諏訪湖の上にぽっかりと青空が浮んだ。

雨があがったので、部隊の備えを整えようとした小笠原軍の部将たちは、いままで、そこにいた甲軍が一兵もいなくなったのに気がついた。雨の中を甲軍は退却したのだ。

小笠原軍は早速物見を出した。

甲軍は思い切って塩尻峠の山麓にさがり、今井、間下^{ました}、岡の谷^や、花岡にかけて、邀撃陣^{ようげき}を布いていた。

戦いの形勢はかわった。甲軍が守備に廻り、峠からおりて来る小笠原軍が攻撃軍となった。

雷雨中のこの見事な陣の立て直しは、小笠原軍にとってはきわめて不気味なものに感じられた。小笠原長時は坂西時重の進言を入れて、兵を峠の上に引き上げさせた。

この時、小笠原軍が峠をおりて、甲軍に襲いかかったならば、甲軍はおそらく敗北したであろう。

う。そうすると、その後、戦国の地図がどう変わったかわからない」

諏訪在住の考古学者、藤森栄一氏はこの戦いについて、こう語っている。

兵力においても地の利においても勝っていた小笠原軍が、兵をひきしめて峠に引き上げたのは、甲軍の陣の立て直しが見事であったこともその一つの理由であったが、もう一つの理由は西牧四郎左衛門と三村駿河守の動きにあった。西牧と三村は、甲軍撃滅に頭初からあまり熱心ではなかった。小笠原長時の再々度の勧誘にやっと腰を上げたが、どことなく戦意に欠けていた。坂西時重はこの二人の挙動に不審感を持った。小笠原家累代の家臣団であるから、武田に内応するようなことは考えられなかったが、戦意のない者を先に立てることはできず、西牧と三村の両軍は予備軍として塩尻峠後方の小高い山の上に置いた。

戦いが激しくなり、先頭隊諏訪西方衆の損害が増し、小笠原軍の前線部隊の疲労が眼に見えて来た。次々と新手を繰り出し、疲労した兵と交替させる必要が生じた。戦線が膠着こうちやくして来ると、この前線兵上の交替を上手にやらないと敵につけ入られることになる。

坂西時重は、西牧四郎左衛門と三村駿河守に、精兵三百名ずつの応援を求めた。西牧四郎左衛門は、坂西時重の伝令に対して

「ただいま食事をさせて、すぐ馳はせ参じまする」と答えた。

激戦の最中に、ただいま食事をさせてとはへんな答え方だった。三村駿河守は、洗馬章安せばに兵百三十あまりを率いさせて、のこの山をおりて来た。

なにを愚図愚図しているのだ、この激戦が見えないのか。それに精兵三百名といったのに、この人数は少なすぎる」

坂西時重は洗馬章安を叱りつけた。

「たしかに、伝令は精兵百三十と申しました。三百と百三十の間違いでございましょう、よくあることです。すぐ引き返してあとの百七十をつれて参ります」

そう云って、百三十名の兵をそこに置いたまま、山の陣に帰って、なかなか戻って来なかった。西牧、三村の行動はどうも解いせませぬ」

坂西時重は小笠原長時に云った。長時もそれに気づいていた。

「西牧四郎左衛門と三村駿河守にすぐ本陣へ来るようにいうがいい」

西牧、三村の両名になにかの下心したころがあったとしても、人質として本陣に置くかぎりは大丈夫であつた。

西牧と三村が本陣に呼ばれると、二軍は主なき部隊となって山の上に孤立した。

小笠原軍が甲軍追撃をやらずに峠へ引きあげた理由のひとつは、このような西牧、三村両陣の動きに牽制されたことであつた。小笠原長時は安・筑の各豪族をほんとうには擱おんでいなかったのである。

雷雨の去つたあとの道はまだ濡れていた。風が吹き渡ると、草の露が光を放ちながらはらはらと散つた。

甲軍が動き出しました。里美殿が先頭となり、騎馬隊およそ三百を率いて、勝弦峠におしよせ

ました。そのあとを追うように甲軍の主力は勝弦峠へ向って参りまする」

午後の戦いはこの物見の報告によって開始された。

「中山道口、田川峠口が駄目と見て、敵は勝弦峠に向うものと見える。それにしても先陣に里美を立たせるとは、人を小馬鹿にした晴信のやり方、おのれ、里美めを生け捕りにしてくれよう」

小笠原長時は午前中の勝ちいくさに、いささか酔っていた。坂西時重が、止めても、今度は聞きそうもなかった。一度は恋歌を送って愛妾の列に加えようとした信濃の名花を、眼の前にして、黙っておられないようであった。

小笠原軍の主力は勝弦峠に移動を始めた。晴信得意の陽動作戦ではないかと疑いながらも、主將長時が勝弦峠に向った以上、戦いの主力をそっちに向けるのは止むを得ない処置であった。坂西時重は、その軍移動に少なからざる不安を持っていたから、他の三道には、なお相当の人数を残して置いた。

「小笠原長時殿と一騎打ち中さん、と里美殿が呼ばわっておりまする」

小笠原長時が勝弦峠の上に来ると物見が来てそう伝えた。

勝弦峠の激戦は午前にもまして凄惨なものになった。峠の道を挟んで、左右の草原が、両軍の格闘の場となった。

里美は屈強な騎馬武者や郎党に守られていた。彼女は緋緘ひおどしの鎧よろいに兜いただは戴かず、流し髪の根元を金色の布で固く鉢巻して、大長刀をかざしながら、馬上から、進め進め、引くでないぞと叫んでいた。

陽は西にかたむきかけていた。里美の顔に西日がさしかけた。美しく化粧した里美の顔は峠の上からもよく見えた。小笠原軍は、そのような美しい敵の大將を見たことはなかった。甲軍にしても、里美が青毛の駒を自由に乗り廻し

「味方が苦しい時は敵も苦しいのだ。もうしばらくの辛抱ぞ」

とか

「御味方の武運はこの一戦に懸^かつておるぞ」

とか叫ぶ声を聞くと元氣が出た。

里美は晴信に、生命をくれと云われたときに、この激戦を予想した。できるだけ多くの敵を勝弦峠に引きよせるのが晴信の作戦だった。

戦いの中心は里美にあった。小笠原軍の將兵は里美を生け捕ることによって一城の主となろうと襲^おしよせた。甲軍は、その美しくて勇ましい大將を取られまいとしてよく防いだ。

勝弦峠の戦いは、自然の勢いで拡大されていた。甲軍がやや優勢であった。里美の透^すき徹^とつた号令を聞いたたびに、甲軍の兵たちは、なにかの暗示にかかったように、じりじりと小笠原軍を追い上げていった。

「なにをしているのだ。たかが女一人生け捕りにできぬのか」

小笠原長時はくやしがつていた。次々と、小笠原軍の兵が勝弦峠に移動され、それに応じて甲軍も、勝弦峠に増強された。小笠原軍が増強されて来ると、いままで押され気味だった小笠原軍が優勢になる。死闘は露の傾斜地の草原で続いていた。

小口に移動していた晴信の本陣から、むかで衆が八方に飛んでいた。それまで静かだった中山道口で太鼓を打ち鳴らし、法螺を吹く音が聞えた。勝弦峠口に襲しよせていた甲軍の予備隊が陣を引いて中山道口へ向った。軍の移動は整然と行われた。勝弦峠入口の部隊が移動しても、里美を大将として戦っている勝弦峠に主力を向けているように見せかけていた甲軍は、突然中山道口へ攻撃の主力を向けたのである。

峠の麓は道が四通八達しているから、塩尻峠四道のどの口へも自由に兵を動かすことができたが、塩尻峠の頂上は喬木帯で、峠道四道を結ぶ大道はなかった。僅かに木樵道のような小道が一本だけだった。小笠原軍が勝弦峠に投入した軍隊をすぐ中山道口へかえせと云っても、そう簡単にはできるものではなかった。

晴信は、峠の上と下の、軍移動における抵抗係数の相違を勘定に入れて、この作戦を取ったのである。

飯富兵部が指揮する軍隊は、中山道口を峠を眼ざしてしゃにむに攻め登った。午前中あれば強い抵抗を見せた小笠原軍は、その主力を勝弦峠に向けたがために、飯富兵部の進撃を支えることができなかった。

飯富兵部の軍が頂上につくのが早いか、小笠原軍主力がここに到着するのが早いかの時間的争いだった。

小笠原長時は西牧四郎左衛門と三村駿河守にすぐ兵をまとめて、中山道口へ向うように命令した。二人は、うけたまわって候と、彼等の陣地に帰ったが、いっこう動く気配がなかった。

飯富兵部の軍が峠の頂上に達しようとしているころ、三発の狼煙のろしが打ち上げられた。両軍は、しばらく戦いを休んで、するすると天高く上った赤い狼煙を見上げた。煙は夕陽に輝きながら東へ東へと流れていった。

狼煙が上ったが、西牧、三村はまだ動かなかった。

そのころ、鉄砲隊は、飯富兵部の軍に守られながら、塩尻峠の頂上に達していた。晴信は鉄砲奉行ひなた日向三郎四郎に、西牧、三村がのろしで動かない場合は内応をうながすために、鉄砲を射ちかけよと、命じていた。鉄砲隊とそれを守る一隊が小笠原軍の決死的な逆襲を排除しながら、射程距離の中に、西牧、三村両軍の陣地を望見したとき、鉄砲隊長の安原貫道は

「お味方の勝利ぞ」

と思わず叫んだ。

二十挺の鉄砲は、西牧、三村の本陣を狙っていっせいに火を吹いた。西牧四郎左衛門の床几の足に弾丸が当たった。四郎左衛門は床几と共に放り出された。三村駿河守は、旗さし物の柄を弾丸に折られたばかりでなく、郎党三名が弾丸に当たって死んだ。

西牧、三村の決心はついた。

西牧、三村の両軍がときの声をあげて山をおりた。

「西牧、三村が動き出したぞ。塩尻峠の頂上にたどりついた甲軍は一も二もなく追い落されるであらう」

小笠原長時はそう思った。だが西牧、三村は飯富兵部の方へは向わず、山をおりると方向をか

えて、小笠原軍の背後に襲^わいかかって来たのである。

戦いは、その瞬間に決した。

一旦負け戦となると、收拾のつかないほどの混乱を見せるのが当時の戦いの特徴だった。

主君のために命を捨てようと考えている武士はごく僅かだった。大部分の兵は、その戦いに狩り出されて来た農民であった。負け戦と決ったら早いところ家へ逃げ帰らないと殺される。どっちみち、敵の首を一つでも余計に取って恩賞にありつこうという考えで出て来た者が多かったから、負けたとなったら、命令もなにも届かなかった。彼等は蜘蛛^{くも}の子を散らすように逃走した。

甲軍は塩尻峠四道からいっせいに攻め登り、逃げる敵を追った。

塩尻峠四道を逃げおりる小笠原軍を甲軍の騎馬隊が追撃した。追手は安曇、筑摩にまで延びていった。

中山道長井坂の途中で、矢島頼光は身に十槍^{じっそう}を受けて討死した。花岡忠常は立ち腹を切った。諏訪西方衆の主なる者は、塩尻峠の露と消えた。

晴信は塩尻峠に立って眼下にひろがる安曇平野を見おろしていた。その広い穀倉地帯はこの戦いの勝利によって武田のものとなったのである。彼は眼を南に向けた。塩尻峠の戦いの勝利によって、安曇と伊那とは断ち切れ、伊那における小笠原の勢力は崩壊し、伊那は武田に全面服従を余儀なくされるだろうと思った。

晴信は馬の首ひとつほど下っている、馬上の里美に眼をやっていた。

「里美のその美しい姿を余は生涯忘れぬであろう」

張りつめていた里美の顔にある感動が走り、それが全身に伝わると、彼女は馬上に居るのがつらそうに身をよじった。里美の頬に流れる涙が夕陽に光っていた。

塩尻峠の戦いは武田晴信にとって、川中島の戦いよりも重大な戦いであった。この一戦の勝利によって武田の運命は決ったとも云える。塩尻峠の戦いの、両軍の戦死者の数は千余名である。記録に残っている戦死者の数は誇大に書かれたものが多いが、この千余名の戦死者の数は正確と思われる。両軍死闘を尽した合戦であった。塩尻峠を西側に下ったところの柿沢宿の塚本屋が今もなお、この戦いに倒れた戦死者の塚を守っている。

捕われ人の運命

小笠原長時を塩尻峠から追い落した晴信は兵を村井まで進めて、小笠原長時が捨てて逃げた城を急いで修復させた。村井城と小笠原家の本城林はみしじょう城との距離は僅か二里であった。

晴信はこの城の修復に塩尻峠の戦いで捕虜となった兵士を使った。

「城が出来るまで働けば自由を与える。武田の家臣となつて村井城に籠こもるもよし、家へ帰るのも勝手次第。ただし途中で逃げる者は必ず斬る」

晴信は捕虜たちに布令した。十日目に工事を脱走して捕えられた者があった。即日首を打た

れた。晴信はそこで、もう一度、前と同じ布令を出した。築城といっても、本格的な城を作るのではなく当分の間の出城であつた。村井城の修復は十五日あまりで終つた。晴信は捕虜たちに約束通りに自由を与えた。三分の一は城に止り、三分の一は生家へ歸つた。どうしようか迷っているあとの三分の一に、晴信は、商店を開く資金を貸与して、村井城下に店を出させた。

その頃の村井は寒村だったが、晴信がそこに城下町を作ろうとする心構えを見せると、急に關心が高まり、人が集まつて来た。

甲軍に捕えられたら、黒川金山へ送られるという噂があつたが、それは打ち消され、晴信の善政が、許されて故郷へ歸つたり、城下に店を出した男たちの口によつて、中信濃一帯に喧伝された。晴信の人心収攬の一手段だつた。晴信は村井城に馬場民部を置いて、城とその周辺の経営に当らせた。

「金を使うことを惜しむな。必要のときは、いつでも占府中へいつて来るがよい。中信濃を完全に手に入れるには、まず中信濃の人の心を掴まねばならぬ。人だ……」

晴信は彼の云い出した言葉に自らが打たれたように

「人は城、人は石垣、人は堀、なさは味方、あだは敵……」

と、つぶやいた。村井城を守る人は少なく、その石垣もそう高くはなかつた。堀はなかつた。だが晴信が中信濃進出と同時に、次々と打つた数々のなさは、人の心を動かしたことは事実であつた。食糧、物資の調達には必ず代金を払つたし、田租、夫役も旧領主時代よりも軽くした。

「甲州から金きんが流れて来る」

と、中信濃の住民がいうほど、晴信は、中信濃経営に金をつぎ込んだ。刀で斬り取るのも戦いであるが、経済戦もまた戦術の一つであった。

村井に市がたち、甲州との物資交流の中継点の様相をおびて来るにしたがつて、小笠原家の人氣はなくなった。人々は新時代の到来を喜んで迎えた。

晴信は、あとを馬場民部にまかせて、諏訪へ引き揚げた。かつて諏訪の郡代として重臣板垣信方を上原城に置いたと同様に、晴信のもっとも信頼すべき馬場民部を村井に置いたのである。

諏訪へ引きあげてしばらくぶりでの諏訪の湯館で湯につかっている晴信のところへ、金山奉行の今井兵部がやって来た。

晴信は、湯から上ると、すぐ兵部に会った。兵部の隣りに老武士が坐っていた。

「おお、鎌田十郎左衛門ではないか」

武田信虎によって追放された元奉行衆のひとりであった。彼は天文十年（一五四一）晴信が新領主になるとすぐ、韮崎にかけつけた。晴信は鎌田十郎左衛門に帰参を許さず、諸国遍歴を命じたのだった。

「あれからもう七年になる」

晴信は、鎌田十郎左衛門の旅やつれた顔を見ていった。髪は白く、つかえている両手は百姓の手のように、ふしくれ立っていた。

何を持ち帰ったかと訊こうとしたが、気の毒でふえなかった。晴信は、今井兵部の方へ助けを求めるように眼を向けた。

「鎌田殿は、諸国を廻り、多くの産業の種を持ち帰りました」

「御苦労であつたな」

晴信は、鎌田十郎左衛門にいたわるような眼をやつた。

「甲斐の国に適した産業としては、紙、漆、蠟燭、木綿の生産がもっともよいと存じます。しかしこれらの産物は主として、山や畑にたよるものであつて、いわば副産物。米や麦の主要食糧を増産して、国を豊かにするには、治水以外に策はございません」

「治水と申したな」

晴信は、どきつとしたような顔をした。甲州の諸川は、よく氾濫した。子供の頃から、それを見ていた晴信にとって、治水といわれると、なにか領主の弱点を衝かれたように聞えた。

「治水について、何か策を持ち帰つたか」

「策はただ一つ、根気よく堤を築き、川をさらい、川に道をつけてやる外にございません」

「そんなことは誰にでも分つてゐることではないか」

「さようでございます。ただ分つてゐても、あまりにもその工事が膨大になり、しかもその利益が眼に見えて戻つて来ませんので誰もしなかつたまででございます。古来より水を治める者は天下を治める者だといったことは、この甲斐にそのまま当てはまるかと存じます」

鎌田十郎左衛門の額のあたりに汗が光っていた。

「甲斐の国の治水を取り敢えず行ふには、どのぐらい費用がかかるか」

晴信は、こわいものに触れるようにいった。

「完全にするには、どのぐらいかかるか見当もつきませんが、取りあえずというところで二、三十万両はかかるでしょう」

鎌田十郎左衛門は、おそるることなくいった。晴信は、その金高に驚いて、今井兵部の顔を見た。彼はその晴信の視線をはねかえすと、やや気負い込んだ調子で

「黒川金山の金産出量は予定額を上廻っております。なお、最近他の金山から、金銀の吹錬者^{ふれんしゃ}として、松木五郎兵衛、野中十内、志村善右衛門、山下重吉等を迎え、金山衆の輩下と致しましてから、一段とまた金山の生産額が増え、この分だと年二万両は固いところと思われます。金銀の方は拙者がどんどん掘り出します故、御心配なく、御使用下さいますように」

そういわれても、晴信には、多額の金を投入して治水工事にすぐ取りかかるつもりはなかった。彼の頭の中にあるものは、戦争だった。一日も早く、信濃を平定することだった。

「その土産はあまりに大きすぎるようだな。いったい、なにかから先に手をつけたらいいと思うのか」

晴信は質問の方向をかえた。

「同時に手をつけたらいかと存じます。おそらく、その成果が現われるのは早いもので十年先、おそいものは二十年先となりましよう」

「工事奉行となつて、やってみるがいい。しかし鎌田十郎左衛門、治水は敵と戦うことよりつらいことになりそうだな。それに今は、戦争、又戦争で、治水に大金は使えない。なるべく金を使わないで治水をやる方法を考えてくれぬか」

鎌田十郎左衛門の晴信への献言は、彼のいった通り、十年後にその効果を見せた。十年後には、木綿の栽培と機業が盛んになり、綿布が他国へ輸出されるほどになった。また製紙、漆、蠟燭も甲州の輸出品目の花形となった。そして鎌田十郎左衛門が、根気よく続ける以外に策はないといった治水事業も、永祿三年（一五六〇）になって、釜無川の東岸、竜王町附近に所謂信玄堤となつて現われた。

「お館様、金の産出額は増加して参りましたが、人手が不足して困っております。なにとぞ、御賢察のほどを……」

鎌田十郎左衛門がさがるのを待つて今井兵部が云った。

「人か、人は……」

晴信は虚を衝かれたような顔をした。金山の仕事は重労働である。領民を徴発して金山掘りをやらせれば、領民は晴信から離れる。そうかといって賃金を上げたら採算が取れなくなる。結局考えられるのは、捕虜を消耗品として使うことであつた。

晴信は、武田と戦つて負けて、捕虜となり、武田に忠誠を誓つたものは、金山には送らない。が、一度武田に従つて、再び叛いて捕虜となつた者は金山に送つて働かせるという一つの基準を設けていた。

佐久地方で、一度は武田に従いながら叛いた城は、ことごとくこの適用を受けた。

現在、東京都の水源地帯となつてゐる奥多摩に金川千軒という地名が残つてゐる。黒川金山労働者の住居の跡である。無数に掘られた黒川金山の廃坑入口に立つと、武田の繁栄を支えるがた

めに、蔭で死んでいった犠牲者の慟哭どうくの聲が聞えるような気がする。

徳川家康が天下を取ると、彼は、政治、経済、軍略、すべて甲州流を見習った。鉦山術もそうであった。佐渡の金山に罪人を送って働かせたのも、黒川金山の真似をしたのかもしれない。

晴信は塩尻峠の戦いが終わったあとしばらく、上の諏訪に止って塩尻峠の戦いの際小笠原長時側についていた諏訪西方衆の旧領の処置をした。

塩尻峠の戦いで、小笠原長時が敗れたと聞くと、諏訪西方衆の家族は、持てるだけのものを持って、他国へ逃げ去った。家も土地も惜しくはなかった。この際、命だけ助かれば充分だった。先祖代々の土地を失い、身一つになって逃げて行く彼等の後に武田の追手はかかっていた。捕えられれば、男は金山、女は、金山の遊び女か奴婢という運命が待っていた。

諏訪西方衆の主謀者であった矢島頼光と、花岡忠常の広い屋敷は焼かれた。あとに石垣と掘割りだけが残された。

従来、晴信は、諏訪に対しては、他領に比較して、穏便な政策を取って来ていた。それは、武田家の発祥地、武田之庄が諏訪神社の氏子であったという歴史的なつながりと、彼が、諏訪神社をもっとも崇拜していたこと、それに晴信の愛妾、湖衣姫が諏訪家の直系だということ等によって、諏訪地方に対しては、親近感を持っていたのである。その諏訪の半分が叛いたということは、晴信にとって打撃であった。しかも、上田原の戦いで敗れた直後に叛いたのだから、憎悪も一段ときつかった。

晴信は、諏訪西方衆の土地は、すべて没収して、取り敢えず、武田の蔵入れ地（直轄地）とした。反乱には参加しなかったが、上原城にも駆けつけなかった日和見主義の諏訪西方衆についても、晴信は、容赦しなかった。それらの諏訪西方衆は、最初から武田家についている諏訪衆にたよって、なんとかその場を切り抜けようとしたが、晴信は、反乱に対しては極刑をもつてのぞむという政策を変えなかった。それまでの諏訪に対する温和策は捨てた。

諏訪は、武田の前にひれ伏して忠誠を誓った。もはや叛く余地はなくなっていた。

晴信は古府中に帰らずに、上の諏訪に滞在していた。中信、東信と戦がつづくかぎりには、古府中に帰るより諏訪に居た方が戦略的に有利であった。彼は湖衣姫を呼びよせ、里美を交えて、歌会などを催していた。家臣からみると、いらいらするほどの落着きぶりであった。

塩尻峠の戦には、勝ったが、武田の兵力が中信濃に向っている間に、東信濃の佐久地方に相ついで謀叛が起った。村上義清が背後で煽動することもあったが、佐久地方は、腹の底から武田を嫌っていたようであった。それは前代の武田信虎、その前の武田信繩にいじめぬかれて来ているという憎悪の遺伝のなせる業かも知れなかったし、晴信の再び叛いた者は極刑にするという方針が、かえって反逆心に油をそそいだようでもあった。

八月の末になると、諏訪は急に秋らしくなる。晴信は、湯館から出ると、家臣に馬の用意を命じた。

「どちらへお出掛けになるのでございますか」

近習の石和甚三郎が手をつかえて云った。

「秋を見に出るのだ」

「諏訪ならずとも秋はどこにもございます」

石和甚三郎は、主君の軽率な行動を止めようとした。

「すると、余は、甲斐以外の国の秋を見ることができないのか」

「いまのところ、止むを得ません、御自重を」

しかし、晴信は外へ出たかった。秋草の湖畔を思いきり馬を走らせてみたかった。ひと走りして来ないと、氣持が落ちつかなかった。戦争には勝ったが、その後始末で、いいかげん疲れている頭を休めるには、それが一番いいことを彼はよく知っていた。晴信は館の外へ出て、馬を引けと大声で叫んだ。館のまわりを警備していた武士が驚いているなかを、晴信は、青毛の駒にまたがっていった。そのあとを石和甚三郎と塩津与兵衛が追った。

下の諏訪へ通ずる街道に入ると、よく見とおしのきく道になる。その道ばたに、乞食とも、旅僧ともつかない風体をした二人の男がいた。二人は晴信を見て道をよけると、道端にひざまずいて額を土にこすりつけた。晴信はそのそばを、疾風のように走りぬけながら、鋭い一瞥を二人に投げた。二人とも左脇に杖というにはいささか長すぎる竹竿を置いていた。その置き方が、きちんとしていた。竹竿の方向と、額を地につけている乞食の背筋の方向が平行であるばかりでなく、二人の竹竿の置き方は全く同様であった。晴信の姿を遠く見掛けて、さっと道端に飛びのいたその挙動が敏捷だったのに思い合せて、晴信は、その二人の乞食に疑いを持ったが、通りすぎると、そのことも忘れて、あとはただ一心に駆けた。

湖から吹き上げてくる風に芦が揺れた。芦の間を行く舟の跡に水鳥が舞いおりた。晴信は馬を止めて、追いついて来た石和甚三郎と塩津与兵衛に、帰ると、一言いった。

帰り道にも乞食がいた。さっきは並んで土下座していたが、今度は道の左右に分れていた。

晴信は、来るときよりも強い不審感を持った。それは晴信をなにかの理由で待ち受けている姿だった。そうとしか思えなかった。

「ものども油断するな」

晴信は、馬上から背後の二人に呼びかけると同時に馬に鞭を当てた。一気に乞食の前を走りぬけるつもりだった。

二人の乞食が同時に立ち上った。いつの間にか竹竿の先が槍にかわっていた。晴信の馬が棒立ちになったのと、乞食が両側から晴信に突っかかったのと同時だった。晴信は馬から降りると、すでに刀を抜き放っていた。晴信は右手から無言で突き出してくる槍先をかわすと、返す刀で、左手から突き出した槍先をはね上げた。左手の乞食が血をあびてのけぞった。石和甚三郎が駆け違いざまに斬りつけたのである。塩津与兵衛は、晴信の危急を見て、しゃにむに、右手の乞食に向って馬を乗りつけた。乞食が馬をかわして、再び槍を晴信につけようとした時、石和甚三郎が、晴信の前に血刀をさげて立っていた。

「殺すな、捕えよ」

晴信が叫んだ。石和甚三郎と塩津与兵衛に迫いつめられた乞食は、槍の穂先をたぐり寄せると、白らの咽喉を突いた。乞食が持っていた武器は、竹の先に槍の穂先をたくみにかくし込んだもの

だった。いざというとき、竹竿の先を二節^{ふし}ほど抜いて捨てれば、槍になる仕掛けになっていた。

「こやつ腕に入墨の跡があります」

石和甚三郎が云った。やせ細った腕に、しの字の入墨がしてあった。

「これについて、なんぞ心当りがあるか」

晴信がいった。

「こやつは、黒川金山の脱走者と見受けられます。しは志賀城落城の折の、捕われ人で、金山に送られたる者の印でございます」

「金山に働いている捕われ人はすべて、入墨をしているのか」

志賀城を守っていた武士であつたとすると、まだまだ晴信に敵意を持つ者が無数にいるように思われた。

「叛く者は殺すか、金山に送れ」

晴信のことばを石和甚三郎と塩津与兵衛はどう解釈していいか分らなかった。二人は血に染まつている乞食に眼をやつて

「もはや、こと切れています」

と云った。

晴信は、めったに感情を顔に表わさないが、珍しく憂鬱^{ゆううつ}な顔をして湯館に帰ると、そこにはさらに面白くないことが待っていた。佐久の前山城の伴野信豊の叛乱と、田の口城へ向つた小山田

信有が、敵の重囲におちいったという知らせであった。

晴信は九月一日、諏訪を出発して、大門峠を越えて、小県から佐久へ入っていった。前山城にしろ、田の口城にしろ、吹けばとぶような小城であった。戦っても勝味のない城にこもって、武田に反抗する佐久の土豪の気持が晴信にはどうしても理解出来なかった。それまで佐久で叛乱が起きて甲軍が攻めこんでいっても、村上義清の軍勢が、佐久まで応援に出て来たことはなかった。田の口城にしても前山城にしても、そのことを充分知っているのである。叛けば討たれ、そのあとに苛酷^{かこく}きわまる処分が待っているのを知っているながら叛く佐久武士はもはや命を度外視しての反抗に思われた。

晴信の軍勢が、長窪城に到着すると、小山田信有の家来、九鬼平藏が待っていた。全身に槍傷^{やり}、刀傷を受けていたが、晴信の前に出ると、きちんと姿勢を正して、戦況を話し出した。

小山田信有は武勇に自信があった。戦も上手だった。佐久がそむいたから鎮庄せよという命令を晴信から受けると、塩尻峠を越えて、諏訪へ引き返し、一気に大門峠を越えて、小県から佐久へ攻め入った。期待していた敵襲はなかった。間者を入れて探らせると、甲州きつての勇将、小山田信有来ると聞いて、佐久の豪士たちは、田の口城と前山城へ逃げ込んで防備を固めているということであった。

「さもあろう」

小山田信有は大いに気をよくした。まず田の口城を陥そうと思った。三日と、頭の中で勘定した。小山田信有は、五百の兵を率いていた。彼は物見を四方に放ちながら、田の口城へ近づいて

行った。田の口城は、現在の臼田町の東約一里ほどのところにある山城であった。城というよりも砦であった。前方に石垣、背後に山を背負って容易に近よれないようになっていた。その夜小山田信有のところに、敵が動き出す様子が見えますという物見の報告があった。すわ夜襲かと、その準備をして待っていたが、城内に人の動く気配はするが、出て来る様子はない。そうこうしているうちに夜はあけた。

「敵が裏山へ逃げていきます」

朝露にびっしり濡れて物見が報告に來た。裏山は上州に続いていた。

「田口泰房やふさぶという男は口ほどにもない奴だ」

小山田信有は、兵を率いて無人の城へ入城した。城のあちこちに、首を切られた藁人形わらがころがっていた。その藁人形にいちいち武田家の家臣の名札がかけてあった。

武田晴信殿と名札がつけられた藁人形は、はりつけに架けられていた。そうして小山田信有の藁人形は御丁寧にも、馬糞が一杯につめ込まれて、つるし首になっていた。

「おのれ、田口泰房　草の根を分けても探し出して首を討ち取ってくれるわ」

小山田信有は激怒した。

その夜であった。城外の様子がおかしいといふので、小山田信有が、やぐらに登って見ると、いっどこから襲おしよせたのか、数千にも見える大軍が、城を囲んでいた。そればかりではなかった。いままで城内の泉水にこんこんと湧いていた水が出なくなった。敵が山から引いて来ている水の手を切ったのである。小山田信有軍は、長い戦で疲れていたし、食糧は現地調達のつもりで

来たから、持っていなかった。水と糧道りょうどうを断たれたらどうしようもない。さりとて城から討って出るにしては、敵はあまりにも多過ぎた。裏山への道は、城から出ていった田口泰房の軍勢が引き返して来てかためていた。水が付き、糧食が付きたところを見計らって、一気に攻め込んで来ることは、明らかだった。

「小山田信有の生涯の失策」

小山田信有はというと、決死隊二十騎をよりすぐって、城から脱出させて、急を晴信に告げようと計った。小山田信有は、二十人の決死隊の前でいった。

「ひとりでも二人でもいい。敵の囲みを破って、このことをお館様に伝えるのだ」

決死隊の隊長、九鬼平蔵は、小山田隊の中でも武勇に勝れた者であった。はじめ二十騎は、大手門を開けて討って出るつもりだったが、そこには敵が作った馬止めの柵があるから、やむなく、夜陰に裏山から抜け出て、敵の馬を奪うことにした。

「それで味方二十人は……」

晴信は結論を急いだ。

「城を抜け出すことの出来たのは、それがし一人だけでございます」

九鬼平蔵は、その言葉に続いて

「城中には、水のたくわえは一滴もございません。一刻も早く、援軍を——」

九鬼平蔵はそれ以上、ものを云うことは出来そうもなかった。晴信は、九鬼平蔵をさがらせる、そばに居る、もっとも佐久の地理にくわしい横田備中守高松に

佐久というところは、なぜこれほど、くどいのだろう」

と訊いた。

「佐久だけが特にくどいものではございません。くどいのは人の心です」

「と、いうと」

「佐久の人々は、お館様が志賀を攻め陥したあとの処置を憎んでいるのです。狭い土地ですから、それぞれ縁につながっております。同じ佐久の男や女が金山に送られて酷使されていると聞くと、黙ってはいないでしょう」

「どうすれば一番よいと思うか」

「お館様は、中信濃の村井で、馬場民部殿に、人は城、人は垣、人は堀、なさけは味方、あだは敵と申されましたが、東信濃でのなさけ方は、お言葉とはいささか違うように思われます。佐久のように強直な人間が多いところこそ、情は味方のお言葉どおりにしませんと、いくら武力でおさえても、また背くでしよう」

横田備中守高松のその諫言^{かんげん}は、晴信の心を寒くした。いったことと、やることの矛盾^{むじゆんてん}点を衝^つかれたというだけでなく、横田備中守高松の、そのもっともらしい顔つきが、晴信の氣に障^{さわ}った。

「なさけをかけてやるべきところには掛けてやるが、かけても無駄な人間は、ひとつとらえて、奴婢^{めいひ}にする方針には変りがない。佐久が叛^{そむ}けば、それだけ黒川金山の労働力が増強されるというだけのことだ。余は叛^{そむ}く者は徹底的にこらしめてやるのだ」

そう云っているながら晴信は、顔が熱くなっているのを感じた。例のあの病氣かな、と思った。

疲労すると熱が出て、怒りっぽくなる。志賀城征伐の時も発熱していた。晴信ではなく、晴信の熱が、あのような苛酷な策を取ったのだとすれば、反省しなければならぬ。そう思いながらも、晴信は、彼の身体はどこから湧き上って来るいつもの彼とは違った衝動をはねのけることができなかった。

晴信の軍勢一千は、まず田の口城におしよせて、包囲軍を破ると、その足で前山城をかこんで昼夜を分たず攻めたてた。前山城は田の口城の西一里半ほどのところにある。やはり山を背負った砦で、伴野信豊がそこを守っていた。

晴信は兵を二分して、一手で裏手の山をおさえた。敵の退路を断って、西側から攻めたてた。前山城は五日で落ちた。伴野信豊は白刃した。『妙法寺記』に

佐久の郡の大將を悉く打殺す。さるほどに打取る首の数五千ばかり、男女生け取り数を知らず。

と、ある。五千は誇張だろうが、十分の一とみて、五、六百人の首は討たれたに違いない。附近の城砦十二城は、戦わずして降伏した。

晴信は、おびただしい捕虜の群を率いて甲州へ凱旋した。

韮崎まで来ると、沿道の子供が、数珠つなぎにされた捕虜に石を投げた。馬上でそれを見ていた晴信は、家来に、その子供達に縄を打たせた。親たちが、武田の武將にすがって命乞いをした。「わが軍にしても、いつ敵に負けて、捕われ人の憂き目を見るかも知れぬ。その時、子供に石を

投げつけられたら、どんな気がするか考えて見るがいい」

晴信は、子供達の罪の代りとして、親たちに十日間の使役を申しつけた。この処分が終ると晴信は、横田備中守高松に、どうか、といたいような眼をやった。横田備中守は知らんふりをしていた。そんな見えすいたことをやったところで、なんになるか、といったふうな顔だった。

その夜、また一つ事件が起きた。佐久から連れて来られた捕われ人の女を横田備中守高松の家来が犯したのである。軍紀を乱したふとどきな奴という理由で、翌朝、晴信はその男を斬罪にした。横田備中守高松は彼の家来の命乞いを強いてしようとはしなかった。ただ一こと晴信に

「なにごともお館様のお心次第」

といった。それが晴信には皮肉に聞えた。領主の心次第で、やりたいことを勝手にやるがいい、と突き放されたように聞えた。

晴信は捕え人を古府中に連れてかえると、男はそっくり金山へ送り、身分のある者の女は家臣たちに与え、他の女は奴婢として売らせた。器量のいい女は、錢三貫文ぐらいで買われていった。買手のない女は黒川金山へ遊び女として送られた。

武田晴信は佐久遠征から帰って来ると、すぐ寝込んだ。風邪ということだったが、側近の者は、単なる風邪でないことを知っていた。

叛く者

その冬（天文十七年から十八年にかけての冬）はひどく寒かった。それに雪が多かったせいも、例年のように兵馬の動きはなかったが、東信濃と中信濃では、武田、村上、小笠原が三巴（みつどもえ）になって、諸豪族の抱込み工作に必死であった。中信濃の村井城に楔（くさび）を打込んだ晴信は、村井城を拠点として、中信濃経綸（けいりん）に乗り出していった。それまで小笠原長時のもとにあった中信濃の諸豪族たちは、村井城にいる馬場民部によって徐々に懐柔されていった。晴信がおしまずに金を使えといったとおりに、馬場民部は、大いに金を使って、中信濃の民心を武田方へ引きつけていった。地方の豪族とすれば、領主が小笠原長時であろうが武田晴信であろうが、土地の私有を認め、税と夫役の割当てを軽くしてくれればそれでよかった。彼等はまず所領安堵について条件を出した上で、武田方の動きを見守った。馬場民部は彼等の望むところを晴信に伝えて、おおよそ双方が満足できるところまで話を接近させるため何回か彼等と会った。交渉を重ねるうちに、相手の家中のものを武田方に内応させることも忘れなかった。そんなときには将来の約束をするよりも、金貨を握らせることが一番手っ取り早い方法であった。当時の武田の金貨は小判型ではなくて、碁石型をしていた。

或る日、馬場民部のところに北安曇の豪士豊科三郎とよしながやって来た。馬場民部という郡代がいかなる人物かを見るためだった。馬場民部は如才なくその男と話していたが、たまたま、豊科三郎が橋の補修と郷倉の建て直しに費用がかかって困ると洩らすと、馬場民部は即座に家臣に命じて碁石金を高坏たかつきに盛って来させて、どうぞこれを使ってくださいと渡した。豊科三郎は、それほど多くの金貨を一度に見たことは始めてであつたし、噂に聞いていた甲州の碁石金を見るのはじめてだった。

豊科三郎は高坏に盛つてある碁石金をひとつずつ数えながら甲斐の国の富裕さに畏怖いふした。「足りなければ申し出て参るがいい」

馬場民部は恐れ入っている豊科三郎をそう云つて送り出した。他日、豊科三郎が再度、村井をおとずれて橋と郷倉ができたから見に来てくれと馬場民部にいった。

「それはよかった。そこもとができたというのだから間違ひなくできたのでしよう。いちいち確かめに行くことはあるまい」

馬場民部はそういつて笑つた。そのとき豊科三郎は武田方に従つく決心をした。

「中信濃の出費が多くて困ります」

駒井高白斎が晴信にいった。

「人の血を流すより、安上りではないか」

晴信はそういつてから、その答え方が、この場合必ずしも適切ではないと思つた。

「しかし、お館様、佐久にくらべると……」

さすがに高白斎はその先がいえなかった。佐久には冷厳をもつてのぞみ中信濃には温和をもつてのぞもうとする晴信の二面作戦が、高白斎には心配でならなかった。晴信の若さが為せる業として放っておくことが不安だった。

「佐久は佐久、安曇は安曇、土地が違うように民情も違うから異なる方策を取ってもいいだろう。どっちがいいかは後になって見なければ分らないことだ」

それはそうでしょうがと駒井高白斎は、うなずきながら、晴信は今、おそるべき実験をしているのではないかと思った。晴信にもし天下を平定する野望があるとすれば、このような場合が今後も数かぎりなく出て来るであろう。晴信は身を以て、二つの行き方を体験しようとしているのではなからうか。

(だが、それも程度問題で、叛いた佐久に対する処置はあまりに苛酷に過ぎるし、佐久の捕われ人によって掘った金を、おしみなく中信濃に送って手馴ずけるのもほどほどにしないといけないな)

その高白斎の気持が晴信にはちゃんと読めた。この場合、板垣信方が生きていれば、顔を真赤にしてそれをいうだろう、甘利虎泰もそうだろう、だが二人はもういない。その二人の家老に変わるべき、駒井高白斎は、決して直言はしない。しかし、彼がいおうとしていることは心憎いばかりに晴信には分るのである。

「信方が上田原で戦死する前に、余を諫めていったことがある。まず中信濃を取れとな。中信濃を押していけば、東信濃は自然に陥ち、その次には北信濃が陥ちるということになる。だから余

は東信濃よりも中信濃を重要視しているのだ」

晴信は理窟をいった。理窟っぽくなるのは熱が出る前兆であり、熱が出てしまってからやることは、ろくなことはない。晴信は医師立木仙元がこの病には氣を立てるのが一番悪いといったことを思い出した。静かな氣持で養生して春までに身体を直しておかないと、春になれば、きっとまた佐久が叛く、それはもう分り切ったことで、佐久が叛けば、その鎮圧に出征しなければならぬ。

晴信は書院に入った。読書は昂^{たか}ぶる氣持をいくらか静めることができたが、それもほんの僅かの間で、彼の頭の中で、佐久と中信濃のことがぐるぐると廻り出すと、そこにもう坐っていることはできなくなった。晴信はしばらく会っていない、恵林寺の鳳栖に会いたいと思った。

ひどく寒いと思ったが、外は雪だった。雪の中を晴信主従が恵林寺についたとき鳳栖和尚は縁側に端坐して雪を眺めていた。

「雪というものは考えれば考えるほど不思議なものでございますな」

鳳栖は晴信と向い合ったときそういった。

「つめたく凍ったものでありながら、よくよく考えて見ると、雪は万物の精ですな。一冬越えれば水に姿をかえ、田にそそぎ、稲を育て、人間の体内に入って精とかたちを変えらる」

「精ですか」

「さよう精である。なにごとくも精の盛んなるときは榮え、精の衰えたるときは亡ぶ」

「精盛んにして亡びようとしたらどうなりますか」

「不自然である」

鳳栖はちらっと晴信の顔を見た。晴信がなにか相談ごとを持って来たかと覚ったようであった。「佐久は未だ精盛んにして亡びようとしません。従おうともせず叛きます、叛けば殺されるか金山に送られることを知っていながら叛くのです」

「精盛んにして叛くならば、精の元となるものを切ればいい」

「村上義清を斬れば佐久はおさまるといふのでしょいか」

「さよう、だが、精盛んにして叛くのでなくて、叛くべくして叛いているのだったら、精の根を断^たつても無駄だろう」

「叛いても叛いても斬ったら……」

「人は斬れても、人の心を斬ることはなるまい」

そういう鳳栖の眼が晴信を叱っているように見えた。庭の木の枝に積った雪が音を立てて庭に落ちた。

晴信は陰鬱な冬を過した。彼の病は他人から見ると病のようではなかったが、彼自身には、彼の身体が病と戦っていることがよく分った。熱が出ると身体中がだるくなつて怒りっぽくなる。気力だけで追い払うことはできなかった。身体の内深いところから出て来る軽いせきが続いた。（佐久の出征から帰つて来ると熱が出る、この前もそうだった）

晴信は、この嫌な関連を早く無くしたかった。医師の立木仙元は、佐久の戦いでは特に氣を使

い過ぎるから熱が出るのだらうといった。佐久の叛乱と晴信の熱とは、あながち無関係ではないように思われた。

熱が出て怒りっぽくなっていらしして来ると、晴信は、その熱を出している本体が佐久であるような気がした。その佐久からひっきりなしに間者が報告に来た。叛意はいささかも衰えていなかった。去年の秋、五百の首をはね、千人に近い捕虜を取ったから、叛く力はなくなったにしても、鳳栖のいうように心は確かに叛いていた。

天文十八年（一五四九）の春を迎えると、佐久にぼつぼつと、叛乱の兆候が見えていた。春日城が直ぐ隣りの平原城主平原左馬介入道全身（まぎのすけのめうどうぜんしん）に攻め取られたのである。平原左馬介入道全身はもと上州衆であり、上杉憲政の息のかかった男であった。平原城が叛くと、佐久と小県の郡境にある布引城の額岩寺守光（がくがんじ）が叛いた。額岩寺守光は村上義清とのつながりがあった男で、前々から危険な人物と見做されていた。

古府中の人質の館には平原入道の子と額岩寺守光の子供がいた。叛けば、人質はすぐ殺されるしきたりになっていた。人質は庭に引き出されて人質の館（やかた）全員の見まもる中で首を討たれた。泣く者は斬られた者の付添いの、ごく少数であった。他は何時同じ運命がふりかかって来るのか分らない自分の身の上を考えていた。雨が、首と胴に分れた死体に降りそそいでいた。

春になると晴信は健康を取り戻した。熱もそれほど気にならなくなったし、身体も肥った。

晴信は若芽の薫る大門峠を越えて佐久に攻めこんで、まず春日城を攻めて三日で落すと、城を修復して芦田（あした）四郎左衛門に守らせた。春日城を強化すると晴信は布引城と平原城の攻略に取りか

かった。梅雨が始まるまでには佐久を平らげてかえりたいと思っていた。

春日城は佐久平の西に位置する山城だった。それほど激しい戦もせず、に再び武田軍に戻って来た春日城の周囲には躑躅が咲いていた。

その朝、晴信はその血の色に似た躑躅の花を見ながら、躑躅が崎の湖衣姫のことを思い出していた。

「このごろ勝頼の健康が勝れず心配でなりませぬ、お館様が留守中に、勝頼にもしものことがあったら、私はいったいどうしたらよいのでございましょうか」

晴信が古府中を立つ前に湖衣姫はそういった。勝頼は二歳になったばかりであった。生まれつき丈夫の方でない勝頼は、このごろ吐いたり下したりした。医師の立木仙元は首をひねっていた。晴信は正室三条氏の生んだ子供たちより、湖衣姫の生んだ勝頼の方が可愛かった。妻妾にかける愛情の差別があっても子供たちに差別をしてはならないと自制しながらも、やはり愛妾湖衣姫の生んだ子が可愛かった。

赤い躑躅の花を見ていると城外に馬の蹄の音が聞えた。晴信はその音を不吉のものに感じた。

もしかすると勝頼の身に——そう思うとじっとしてはおられなかった。走り馬によって届けられた書状は、湖衣姫に仕えている志野からのものであり、それには容易ならぬことが書いてあった。取りいそぎ、お知らせいたしまする故に、筆の乱れをお許し願いとうございまずと前置きして、（三条様が近ごろ京都から呼びよせた、竜溪と申す修験僧は、石水寺の近くの堂にこもって、勝頼様のお命を縮めるための調伏を行っております。勝頼様の御健康がとくと勝れないのはこの

ためかと存じます)

と書いてあった。

(勝頼危うし)

晴信はそう思った。志野の情報が正しいかどうかを考えるより、今は至急引きかえして、その真疑を明らかにしなければならぬと思った。

晴信は駒井高白斎を呼んでその書状を渡した。めったなことで顔色をかえぬ、高白斎もさすがに驚いた様子だった。

「すぐ古府中へ引きあげる」

晴信は一方的にいった。

「御同道つかまつりますが、その前にひとことだけ申し上げたいことがございます。これが事実とすれば御家騒動でございます。このことは自国にも他国にも知られては困ることでございます。そしてもう一つ、竜溪と申す僧が調伏をやっていたという事実があったとしても、その竜溪だけを罰して、その累を他に及ぼすことはお慎み願うとうございます」

駒井高白斎は三条氏をかばった。

「その理由は」

晴信は、いらいらしていた。そうしている間にも勝頼が死にそうで不安であった。

「他日、お館様は必ず京都に上ることがございます。京都にお近づきの方が居られることはなにかにつけて便利でしょう。それまで……」

三条氏が左大臣三条公頼きんより公の娘であるから手荒なことはするなと高白斎は繰り返していった。「よく分った。しかし女というものは、なんとあさはかなことをするものだろう」

晴信が軍を率いて急遽古府中に引きかえす前に、竜溪は殺されていた。竜溪を斬ったのは湖衣姫のつけ人の小平又兵衛であった。彼は竜溪を一刀のもとに斬り捨てると、堂内にあった加持祈禱かじきに用いる道具いっさいを証拠品として、湖衣姫のところへ持ち帰り、その日のうちに自刃して果てた。

小平又兵衛が持ち帰った物の中には調伏ごま護摩を修するための三角形の火炉があった。血のような色で塗りこめられていた。炉底に独鈷杵どくこしよの三昧耶形さんまいぎようがあった。竜溪が調伏炉を使っていたのだから、誰かを調伏しようとしていたことは明らかであった。

晴信は三条氏を呼んで、竜溪が調伏炉を使って誰を調伏しようとしていたのか聞いた。

「武田に叛く、村上義清、小笠原長時、佐久衆たちでございます。竜溪は京都においても名僧、竜溪が調伏したからこそこのたびの佐久の戦いも、お味方勝利となったものではありませんか。その竜溪を、湖衣姫殿は、理不尽にも、人をやって斬り殺したのでございます。こういうことが、京都に聞えれば、お館様の名前にもかかわることでございます」

この狸め、晴信は心の中でそう思ったが、勝頼を調伏したという証拠がなにひとつない今となつてはどうすることもできなかった。

「私は三条様の近くに居ることは、一日たりとも我慢できません。勝頼とともに諏訪へ帰りま
す」

湖衣姫は、愛児の命が調伏によって縮められつつあったと信じこんでいた。勝頼を抱きしめて、そういう湖衣姫も哀れだったし、笑う力も失ったように、ぐったりと母の胸にもたれかかっている勝頼の姿も哀れだった。晴信は勝頼を諏訪へやることについて立木仙元に相談した。

「それは結構なことです。実は私からそのことを申し上げようかと思っていなくらいです」

立木仙元は転地療養をすすめた。

六月になって湖衣姫の一行は諏訪へ向って出立した。湖衣姫は二度と古府中へ帰るつもりはなかった。

「ほんのちょっとでいいから三条様に御挨拶を」

と周囲が湖衣姫にすすめたが、彼女は首を横に振った。三条氏も湖衣姫を送ろうとはしなかった。里美が間に立って、取りなそうと努力するけれど、冷却しきった女同士の間にもならなかった。

七月になって、晴信は湖衣姫の後を追うように諏訪へ向った。甲斐の国は安定しているから後顧の憂いはない。敵は信濃にある。居所を敵地に近いところへ置く方が戦略的にも有利であったが、晴信が諏訪へ行きたがるもうひとつの理由は、そこに湖衣姫がいるからだ。晴信は湖衣姫の白い肌を愛した。その雪のように白い玉の肌を抱いているとき晴信は戦争を忘れていた。

諏訪に移ってから勝頼は見ちがえるように元気になった。晴信は、湖衣姫と勝頼を、板垣信方が住んでいた家を改築して住ませた。上の諏訪の湯館へ行って逗留することもあった。諏訪の人たちは、諏訪氏の直系の湖衣姫と勝頼を心から歓迎した。

八月に入ると佐久で叛乱が起った。布引城を守る額岩寺守光と平原城の平原入道全身が春日城に兵を向けたのである。予期していたことであつた。晴信は、横田備中守高松の軍を先陣として佐久へ向けた。

大門峠は青葉でおおわれていた。峠に近くなると山梨の自然林が眼に見えて多くなつて来る。山梨の実はまだ固く、風が吹くと鈴のように揺れた。大門を越えて、小県へ通る道は晴信はもう何度となく通っている。なだらかな傾斜が遠く続く道であつた。

長窪城まで来ると、春日城主芦田四郎左衛門、望月城主望月左衛門の家来が、晴信を迎えに来ていた。

布引城も平原城もいままでになく防備を固めているということであつた。この春、両城が叛いたとき、徹底的に討たずに、急遽古府中へ引き返したのが、かえっていけなかつたのである。

小県の禰津城主、禰津元直が久しぶりにやって来て晴信を迎えた。

「今年の夏は暑かつたし、雨も充分ありましたので、稲はしごく伸びがよいようでございます。これで秋の風さえ吹かねば豊作となりましょう」

禰津元直はそんな挨拶をした。佐久の反乱も、北信濃の村上の動きもいっさい無関係な顔であつた。たまたま、禰津というところが力と力の緩衝地帯に当たっていたからだろうが、やはり、晴信の愛妾里美の出身地であるということで、武田家からの力の入れ方も違っているから、村上も、佐久の反武田勢力も禰津には手を出さなかつたのだらう。禰津元直は天候だの、農作物のことだ

の、祭事など、およそ戦争とはかけはなれたことをいったあとで

「佐久の尾台殿の御家来衆は見えておらるるか」

と晴信に訊いた。

「来ている。なにか用かな」

「いえ、別に用事はござらぬが、尾台又六殿は、最近病に伏せているとのことゆえ、ひとことお見舞いの言葉を伝えようかと思ひましてな」

「尾台又六が病氣なのか」

はてなと晴信は思った。さきほど尾台又六の家来、青沼赤右衛門という男の挨拶のなかには尾台又六が病氣だということはひとこともなかった。城主は城を離れることができないから、城主名代として迎えに参りましたと言上しただけだった。

「はつきり病氣かどうかは知りません。病氣だしたら、適当な者をさし向けられて、とくと容態を確かめられたら如何かと存じます」

彌津元直は、とくと容態を確かめろというところを力を入れていうと

「これはこれは長居をいたしました。城主が城を開けて置くことはできませんので」

といって、そうそうに帰っていった。帰るまで、里美のことはひとこともいわなかった。

「尾台又六が……」

晴信はひとりごとを云った。尾台又六が叛くとは考えられなかった。それに尾台又六の娘直子は横田備中守高松の妾であり、正妻より先に男の子を二人も続けて生んでいるから、事実上の横

田備中守高松の正妻の座にいた。

晴信は横田備中守高松を呼んで、尾台又六が病氣らしいから見舞つて来るように命じた。横田備中守高松は二十騎余を率いて尾台城に向つた。平原城と尾台城は呼べばとどくほどの距離にあった。

横田備中守高松は平原城の敵が何時襲ってくるか分らないから、遠まわりをして尾台城の正門の見えるところまで来ると馬を止めた。

尾台城は西から南にかけて乾田、北から東にかけて森になっていた。森からつき出したように小さな丘陵があり、そこに城が作られていた。最近になって、にわかに城を固めたらしく、あちこちに新しい石垣が見えていた。

横田備中守高松の一行が大手門に近づく、急に城の上の人数が増えた。楼やぐらの上に立っている見張りがいそいで下へおりていく様子もあわただしかった。備えは嚴重だなど横田高松は思った。横田備中守高松は門から百間ばかりのところに馬を止めて、家来のうち三騎を前に出して、彼の来訪を城主尾台又六に告げた。

「横田備中守高松の一行二十余騎武田晴信殿の名代にて参上つかまつりました」

ひとりが大門の奥に向つて呼びかけると、門は静かに開けられた。三騎はすぐには入らず、横田備中守一行が近づくのを待っていた。

横田備中守高松は城の石垣にいる兵から眼を放さなかった。味方を迎えるにしては人数が多すぎたし、彼等のことごとくが弓矢を持っているのも氣になった。たとえ戦の最中であっても、味

方が来たと分つてからは、弓は伏せて置くか、少なくとも抱えているのが当り前なのに、ちゃんと立てていた。それは命令一下、いつでも矢をつがえて放つことのできる姿勢であつた。もうひとつ気になるのは、あわてて楼からおりた侍と入れ違いに、楼にかけ登っていった侍の姿だつた。遠くだから、はっきりは見えないけれど、夕陽を受けてときどき光る武具の備えを見ると、ただの見張り役ではなくて、名のある者のように思われた。

横田備中守高松は城門まで五十間のところまで近づいた。そこまで来たら、当然、城内から、迎へる声とともに、横田備中守高松と面識ある者が出て来る筈だつた。彼は門の奥へ眼をやつた。門の中は静まり返っていた。小鳥が数羽、横田備中守高松の頭を越えて城の方へ飛んでいった。その鳥が門を入ると直ぐ方向をかえて飛び去つた。門の両脇に人がひそんでいるような気配がした。

「引けっ」

と横田備中守高松は叫んだ。直感だつた。それ以上進むことは危険だと思つたからである。味方の城へ入るのになせ、引けっという命令が出たのか家来たちは分らなかつたが、引けっという声が鋭かつたから、なにかあるなとは思つた。二十余騎の足並が乱れた。城内で太鼓が鳴つた。と同時に城の石垣の上から矢が降りそそいで来た。城内からも数十人が槍の穂先を揃えて突進んで来た。

「引けっ、引けっ！」

と叫びながら、横田備中守高松は馬に鞭を当てた。戦つたら負けるに決つていた。逃げる以外

に道はなかった。その退路に平原城の軍勢が待ちかまえていた。

横田備中守高松が、敵の囲みを破って、長窪城に帰るまでには主従五騎となっていた。

「尾台又六が叛いたのか」

晴信は、根強い佐久の叛乱のかげにあるものが、村上義清の支援だけでなく、武田に対する心からの憎しみであったならば、鳳栖のいったように斬っても斬っても叛くに違いないと思った。

晴信は間者を放って北信の動きを探らせた。村上義清が出て来る様子はなかった。晴信は佐久に腰を据えて、叛く者はことごとく討ち取る決心をした。ここで、遽に懷柔策を取れば、佐久衆はかえって晴信をあなどるに違いないと思った。晴信は佐久の処々に高札を立てて、叛いた者は家族諸共嚴重に処罰すると布告した。

晴信の軍はまず布引城を囲んだ。囲んだけれど、攻撃はせず、兵糧攻めの態勢を見せた。布引城主、額岩寺守光は勇猛な武将であり、その部下にも強い武士がいた。城の守りも嚴重で、攻め落すにはかなりの損害を覚悟しなければならなかった。

晴信はこんなところで兵を損じたくはなかった。甲軍が攻撃をして来ないと見ると、額岩寺守光はかえってあせった。このまま一月二月と立てば食糧はつきる。額岩寺守光は、使者を村上義清に送って、佐久に出陣をうながした。その使者は、城の背後の山を忍び出るところを甲軍に捕えられた。晴信は、わざとその辺の囲みを、ゆるやかにして、敵中から出て来る者を待っていたのである。捕えられた男は夜陰ひそかに禰津城に送られた。

禰津元直は武勇よりも諸芸に秀でていた。特に歌と絵が上手だった。彼は布引城から捕えられ

て送られて来る捕虜の似顔を書いた。手の特徴、足の特徴、最後には、裸にして、身体中のほくろや疵を絵に書いた。

「これが、そちの身柄じゃ、そちが名前を云わなくとも、この人相書をたよりに、そちの身許を洗い、そちの家族を人質に取ることはわけのないことだ」

そう前置きしてから禰津元直は、内応を懇々と解いた上、甲州の碁石金を盆に盛って出して「どうかな、右手一ぱいに金貨を掴み取りして見たくないか、もしそうしたいなら内応するのだな。首尾よく城が落ちたら碁石金の掴み取りを許してやろう」

禰津元直は男に前金として、碁石金三個を渡した。城から忍び出て捕えられた三人のうち一人が武田に内応を約束した。

布引城に怪火が発して、自落したのは九月に入って間もなくだった。額岩寺守光は、突然の出火は武田方の乱破らんぱが忍びこんだものと思った。彼は火炎をくぐり抜けて出ると、物かげに火を避けている味方に斬りかかった。城主がこのようだったから城内の混乱はたとえようがなかった。多くは同士討ちで死んだ。額岩寺守光は翌朝裏山から逃れようとするところを横田備中守高松の手勢に討たれた。

布引城は簡単に落ちたが、平原城と尾台城は肩を並べてなかなか屈しようとしなかった。両城とも、城内に井戸があり、兵糧の蓄えも充分だった。二城はあきらかに冬を待っているようだった。冬になって雪が降ると、遠征軍が窮地に陥おちることは分り切っていた。上田原の戦いで、武田軍が敗北したのも、寒気と食糧不足からであった。二城とも、力で押して落ちない城ではなかつ

たが、晴信は、それによって生ずる人間の損失を考えていた。村上義清と小笠原長時はまだ健在である。近いうち、この両将を相手に大戦争をしなければならぬ。佐久の小城で、人材を失いたくはなかった。

十月の中ごろになって、禰津元直が、晴信が本陣をかまえている鷺村さぎむらの寺へやって来た。

「平原左馬介入道全身の子又左衛門信盛とその妹が母とともに室賀むろがの郷さとに隠れておるらしいという情報が入りました。たしか、平原入道には三人しか子供はない筈」

古府中に入質として取ってあった平原作左衛門は、平原入道謀叛と同時に斬られたから、あとは、室賀に潜んでいる二人だけということになる。

「室賀といえは上田原よりずっと奥へ入ったところだな」

そこはまだ村上義清の勢力範囲だった。

「いかにもさようでございしますが、やりようによっては、そうむずかしいことはないでしょう。そういうことは、真田幸隆殿に、お任せになれば簡単かと存じます」

禰津元直はそういうと、晴信の傍にいる駒井高白斎に

「どうです、しばらくぶりで碁をかこみましょうか」

といった。

晴信からの指令を受けた真田幸隆は直ちに一計を案じた。まず室賀郷周辺の部落に流言を放った。甲軍と村上義清軍とが近々大戦争をするらしいが、今度の戦いでは、甲軍が優勢のようだ、武田勢は、鉄砲という新兵器を駿河の今川義元から送られて、どっさり持っている、といい触ら

した。室賀には城はなかった。室賀重政という郷土がその一帯を握っており、室賀重政の館に平原入道全身の妻女がかくまわれていた。

室賀重政は流言の真否を尋ねすために、家来二人を村上義清のところに送った。真田幸隆は途中に待伏せていて、そのふたりを斬った。室賀重政が二人の家来が帰って来ないので心配しているところへ、平原城が落城したので甲軍が鉾先を北信に向けて進撃中という噂が流れて来た。二、三日して、平原城から脱出して来たという武士が室賀重政を尋ねて平原入道の最期のことを伝えた。

「吾が子等は村上義清殿をたよって生き延びよ」

それが平原入道の最期の言葉だといって、武士は涙を流した。

武田軍が北進して来れば、この室賀も安全ではなかった。平原入道の妻子をどこへやろうかと、室賀重政が心配しているところへ、十騎ばかりを率いて、立派な武士が室賀の郷へ入って来た。

村上義清の家臣白石十兵衛と名乗って、甲軍北上の模様故、お迎えに参上いたしましたと口上を述べた。室賀重政は疑わずに平原入道の妻子を引き渡した。白石十兵衛は仮名であった。その男は真田幸隆の家来であった。

平原入道の妻子が捕えられたことは矢文を以て平原城主、平原入道に伝えられた。一日置いて降伏をすすめる矢文が送られた。名譽ある平原氏の家系を絶えさせるのも、継ぐのも貴殿の御随意なりとしたためであった。更に一日置いて、降伏の軍使を送ってよこすように矢文が送られた。平原入道は六十を過ぎていた。又左衛門信盛とその妹の波奈津は、彼が五十を過ぎてからでき

た子供であつた。平原入道は降伏を決意した。晴信は、平原入道の子又左衛門信盛とその妹波奈津の命を保証し、又左衛門信盛が長じたあかつきは平原氏のあとを継がせることの誓書を送った。平原左馬介入道全身は自刃して果て、平原城は落ちた。

十一月に入つて、晴信は未だに降伏しない尾台城総攻撃を決意した。横田備中守高松は自ら進んでその先鋒となつた。尾台又六は横田備中守高松の舅しゅうとであつたが、今は敵であつた。城の石垣の近くに、攻櫓せめやぐらが幾つとなく組み立てられた。裏山の道は切り開かれて、城の背後へ甲軍が廻つていった。

霜の降りた朝、甲軍はいっせいに攻撃を開始した。八方から攻められては守りようがなかつた。城は三日目に落ちた。横田備中守高松の戦いぶりはめざましかった。身を敵のなかにさらしたような戦い方であつた。捨身の戦いにも見えた。城の一角を破ると、横田備中守高松は真先に城中に攻め入つて、城主尾台又六の首を取つた。

「父は亡びました」

横田備中守高松は首を晴信の前に置いていった。全身血を浴びて、ものすごい形相ぎようそうをしていた。尾台城が落ちたあとに、悲劇が待っていた。捕われた男女が荒縄じゆうずなに数珠じゆず繋ぎにされて古府中へ送られていった。

「しかし、また佐久は叛くでしょう」

横田備中守高松は捕われ人の行列を見ながら云つた。

「叛けばまた討つただけだ」

晴信はいささかも動ぜずに云い放った。天文十八年の十一月の半ばを過ぎていた。捕虜たちの行列に白いものが降りかかった。その年の初雪だった。

諫死

天文十九年（一五五〇）七月十五日、晴信は大軍を率いて小笠原長時の本拠林城へせまっていた。た。

あらゆる情報を検討して勝算の高い戦いであった。林城から僅か二里しか離れていない村井に甲軍の出城を築いてから二年も経つのに、この間、ただの一度も小笠原長時は反撃の気配を示さなかった。武田方の近隣土豪に対する誘いかけにも、積極的な抵抗を見せなかった。

「お館様が太軍を率いて攻め寄せられたならば、おそらく敵は一本の矢も放たずに降伏するでしょう」

村井城を守る馬場民部が書状を持って晴信に知らせて来たとおり、小笠原軍反撃の気配はどこにもなかった。

甲軍が進攻する沿線に当る農民たちも、戦火を逃れて立ち去る様子ではなかった。筑摩、安曇地方の住民すべてが小笠原長時を見かぎっている様子であった。馬場民部の慰撫工作が功を奏した

のである。惜しみなく投じた甲州金がものをいったのである。

晴信の軍が進むのにつれて十騎、二十騎と兵をつれて、甲軍の傘下に加わる土豪も少なくはなかった。

「張り合いのない戦になりそうだな」

晴信はうしろをふりむいて、駒井高白斎にいった。

「血を流す戦よりも、たとえ張り合いがなくても、血を流さないで勝つ戦のほうが、はるかに有利と申すべきでしょう」

駒井高白斎はそう答えて笑った。

「ではその血を流さない戦をやろうか」

晴信は各部将に集合するように命じた

高白斎は晴信の性急な云い出し方に驚きながら

「軍議を開くならば軍議の席の準備をいたしましょう」

「軍議というほどではない。すぐすむから馬に乗ったままでよい」

晴信は無造作にいった。

「馬上での軍議ですか……」

晴信はそんなことをしたことは一度もなかった。軍議となるとものすごく神経過敏になる晴信が、馬上でよいと云ったことに、高白斎は不安なものを感じた。林城攻略に対する不安ではなく、晴信の考え方における不安だった。

（お館様、たとえ必ず勝てる戦いであっても、相手を呑んでかかつてはいけません。相手を呑んでかかるということ自体が敗北につながるものでございます）

高白斎はそんなことをいいたかったが、いつものように言葉を奥の方へ呑みこんで、ただなんとなく、せつなさそうな眼をして晴信を見ただけだった。

「時によれば馬上の軍議だつてかまわないだろう。分り切ったことをいうのに、いちいち軍議の席を設けることもあるまい」

晴信は高白斎の顔に浮んだものを見て取ると、すぐその顔つきに答えるように、召集を受けて馳せつけて来た武将たちが馬をおりようとするのに向つて

「馬上でよい」

と鋭い声を掛けた。

武将たちはその意味が解せないらしく、説明を求めるように高白斎の方へ眼をやった。高白斎がいちいち答えてやった。

「お館様、軍議を馬上でなさいますか」

横田備中守高松がいった。そのやり方に不満を持ったいい方だった。

「軍議というほどではない」

晴信はそう答えながら、真直ぐ馬首をよせて来る横田備中守高松の眼つきがいままでになくきびしいなと思った。

「軍議というほどのことでなければ、むかで衆をとばして御下知を賜わればすむことです。武将

を召された以上軍議は軍議ではないでしょうか――

理窟であつた。武將たちが、いっせいに横田備中守高松の顔を見た。理窟は理窟だが、なにもお館様の前で声を高くして云わないでもいいだろうという顔だつた。横田備中、少々へんだなと思つた武將もいた。

晴信は横田備中守高松の言葉になにか反論を加えようとしたが、それを止めた。

「よく聞くがいい。これから全軍を以て林城の乾の出城いぬいの包囲にかかる。取り囲んだら攻撃にかかり、城が落ちたら火を掛ける。乾の出城が落城するころには夜になるだろう、夜になったら、全軍に一人二本ずつの松明たいまつを持たせる、法螺ほらを合図に松明を振り立てながら全軍声を揃えて鬨しきの声を上げるのだ。分つたらすぐ部署に帰つてその準備をするように」

それは軍議ではなく晴信の一方的通達だつた。諸將は妙な顔をして、しばらくそのままで立つていた。

駒井高白斎がその場を取りつくろうように、乾の出城の包囲攻撃に向う各武將の担当地域を指示した。

攻撃分担を指図するのはいかなる場合も晴信でなければならなかつた。たとえ、攻める城が五十人そこそこの砦であつても、全軍で囲むとなると作戦は作戦である。その軍配を高白斎に任じたことが、武將たちにはへんに思われた。

それに武將たちは、できることなら、作戦は明日にして貰いたかつた。長旅をつづけて来た武將は疲れてゐた。そんな氣持がいろいろと重なつて、白々しい空氣となつて、晴信と高白斎のあ

たりにただよっていた。

「五十人の砦を三千人でかこもうが、松明をかかげて関の声を上げようが、すべてそれはお館様の御所存であること、われわれ武将が仏頂面ぶつちやうめんをすることはあるまい」

横田備中守高松は彼と並んでゐる飯富兵部に大きな声でいった。晴信に云いたいことを飯富兵部に当てつけに云ったまでのことであつた。横田備中守高松の声は、そこに参集している武將たちによく聞えた。

乾の出城の総攻撃は間もなく始まつた。五十人と三千人とは喧嘩にならなかつた。乾の出城を守つてゐた小笠原軍は、武田の大部隊が、明らかに、その小さい砦を目ざしておしかけて来ようとするのを見て、動顛どうてんした。もともと、戦つて勝てる戦だとは思つていなかったから、甲軍が包囲を始めたを見ると、われさきにと城を逃れ出ようとした。殺されるものもあつたし、無事脱出する者もいた。一方的に乾の出城は甲軍の手に落ちた。

乾の砦に火が放たれ、真黒な煙が立上り、やがて夜を迎えると、砦の燃える炎が低い雲の底を真赤に染めた。

砦の焼け落ちる火の手が下火になつていくと、それにかわつて、おびただしい、松明の火が乾の砦附近に充滿した。

林城から見るとその松明の火の数は数万の大軍が襲し寄せたように見えた。燎原りやうげんの大火が一気に林城に向つて襲しよせようとするように見えた。

その瞬間勝鬨かちどきの声が聞えたのである。関の声は雲の底に反射して、頭上から林城を守る將士の

上に、落雷のような響きとなって落ちて来た。二度、三度、声のどよめきと炎の揺れ動くのを見ていると、城兵は浮足だった。城の門を守っていた兵が二名ほど脱走した。

「逃げる者は斬るぞ」

城門を守る組下頭が刀を抜いて叫んだ。それは、逃亡者があったことを広告したようなものであった。続いて数名が逃げた。

「おのれ、この機になつて卑怯^{ひきよう}千万、叩^{たた}き斬つてくれる」

組下頭はそういいながら、逃げる者のあとを追つて彼自ら逃亡した。

小笠原長時は、城内になにかが起つたことを知つたが、まさか逃亡者がでているとは思つていなかった。彼はこの期になつても未だ信濃国の守護職を以て任じていた。武田の軍勢が、林城を取り囲んでも、五百の城兵があれば、二カ月や三カ月持ちこたえられるだろうと思つていた。武田を引きつけて置けば、北信の村上義清が、小県を突き、佐久を叛かせる。そうすれば甲軍は囲み解いて引き揚げねばならなくなるだろうと思つていた。

「騒々しいではないか、敵の乱破でもまぎれこんだのであろう、誰か見て参れ」

小笠原長時は侍臣にいった。その侍臣は間もなく真青な顔をして引き返して来ると、城兵の過半数が既に逃亡し、尚、続々と逃亡中であることを告げた。

「敵の松明の火と、関の声で逃げ出すとは、ば、ばか者どもめが」

小笠原長時は彼の前にひれ伏している侍臣の責任でもあるかのように、床板を踏み鳴らしながら怒鳴り立てた。

「お館様、ひとまず、この城をお立ち退きを……」

ふたつきぶんこのから
二木豊後守重高が云った。

「敵と一戦も交えずに、小笠原家代々の居城を捨てたとあつては、先祖に申訳けが立たぬ、本城を捨てて逃げるくらいならここで腹を切つて死ぬ」

小笠原長時は意地を張った。長時が腹を切るつもりはないことは分っていたが、ここでへんに話をこじらせていて、甲軍に包囲されると、ほんとうに腹を切らなければならない羽目にならないとも限らないので

「お館様、これは計略でございます。一度はこの城を敵に渡し、敵の大軍が引き上げたところを見計らつて奪い返すのでございます」

二木重高は本城を捨てるについて、そのような云いわけを考え出した。なにかといえ、見掛けばかりの大義名分を口にし、家柄を口にする小笠原長時を立ち退かせるにはそんなことをいう以外に手はなかった。

小笠原長時主従一族は林城を捨てて村上義清をたよつて落ちていった。本城がからになって、支城がそのままにいるわけがなかった。その夜のうちに、深志^{ふかし}、岡田、桐原、山家^{やまべ}の支城を守つていた城兵はことごとく城を棄てて逃げ去った。

駒井高白斎の日記にはこの夜の情景が次のように書かれている。

十五日、丁未^{ひのとひつじ}、西ノ刻イヌイノ城ヲ攻メ取り、勝鬨御執行、戌^{いぬ}ノ刻、村井ノ城へ御馬ヲ納メ候。

子ノ刻、大城、深志、岡田、桐原、山家五ヶ所ノ城自落。島立、浅間降参、仁科道外出仕。

武田晴信は一兵も失わず、勝鬨によって、小笠原長時の居城府中（現在の松本市）周辺を手に入れたのである。

塩尻峠で甲軍にあれば果敢な抵抗を見せた安曇武士が、甲軍の松明と勝鬨によって城を捨てて逃げたということは、まことに奇妙な現象であった。武田の諸将は、その時になって、晴信の勝鬨と松明の作戦がいかに有効なものであったかを知った。晴信が敵の心理を掴むことの非凡さに驚いたのである。

晴信は林城及びその支城が次々と自落していく報告を村井城で聞きながら高坂弾正こうさかだんじょうを相手に碁を打っていた。

翌日からこの地方に新しい経営が始まった。晴信はその地を部下に与えず、蔵入地とした。林城は城の型式として古いから、深志城ふかしを改築して馬場民部信房を守将としてここに止めた。

晴信は長くは信濃府中にはとどまらなかった。あとのことは馬場民部とその軍隊にまかして、晴信は、その月のうちに全軍に帰甲をふれた。晴信は諏訪にしばらくいるつもりだった。中信に乗り出した晴信に取って作戦基地としては、古府中より諏訪の方がはるかに有利であった。諏訪には湖衣姫がいた。これも、晴信を諏訪へ牽ひきつける大きな要素だった。

晴信は塩尻峠で馬を止めた。塩尻峠の戦いで討死した将兵の墓参りをするためだった。墓には

敵味方の区別はなかった。夏草の花に掩われた土饅頭が八つほど並んでいた。

晴信が墓に詣でているところ空模様があやしくなった。夕立の気配が濃厚だった。駒井高白斎は、そのことを晴信に告げようとしたが、一心に拝んでいる晴信の心をそらしてはいけなから黙っていた。黒い雲の手が垂れ下って来ると、それに誘われるように一陣の風が吹きおこって、墓に立ててあった卒塔婆を倒した。

高白斎は不吉な気持に襲われた。しかし晴信は、風に倒れた卒塔婆の方へちょっと眼をやっただけだった。気にしているふうはなかった。横田備中守高松が、倒れた卒塔婆を建て直しながら口の中で念仏をとなえた。そのあとに篠つく雨が来た。

豪雨について走り馬が峠を越えて来た。

晴信は松の根方に床几を置いて、猿によく似た顔の小男角間七郎兵衛を引見した。傍に高白斎がひかえていた。

「足で走るより、やはり馬に乗った方が速いだろう」

小県と占府中を一日で走るという角間七郎兵衛を晴信はそういつてからかった。七郎兵衛は張り切って来た出鼻を、そんな冗談で押さえられたので、用向きを直ぐには云えずにいたが、その間に頭の中のことを整理するだけの余裕ができた。

「埴科郡の豪族清野入道清寿軒及び高井郡福島城主須田新左衛門の両名がお味方に加わること確実となりました。また奥信濃の高梨政範、坂木盛政、寺尾重頼等もお味方に加わること、両日中のことと存じます。尚貞田幸隆殿は、北信諸将のお味方内応が更に拡大する模様であると申し

ておられました」

ときどき角間七郎兵衛の声が聞えなくなるほどの降り方だった。七郎兵衛の膝のあたりに小さな水たまりができていた。はげしい豪雨が通りすぎるのを待つて晴信が云った。

「余は、これより全軍を率いて和田峠を越え、村上義清の拠点、砥石城とどいし攻略におもむく。すぐ立帰って幸隆にそう伝えるがいい」

高白斎は、はっとした。明らかに晴信は、角間七郎兵衛の報告を聞いて、帰甲しようとしていた氣持を砥石城攻略に変更したのである。その氣持の変り方が、高白斎にはなんとなく不安に思われた。中信に向けた大軍は戦いらしい戦いをしていないのだから、このまま戦いの相手を求めて和田峠を越えるのも一理ある。

（しかし、今そうすることが、果して最上の策であろうか。小笠原長時が村上義清を頼って逃げこんでいったから、村上義清も、防備を固めて待っているだろう。それに、真田幸隆の報告にもあるとおり、村上勢力は崩壊しつつある。内応を約束して来た清野入道、須田新左衛門は村上の中心勢力であった。むしろこの際は真田幸隆に金を送って、村上の自壊運動を促進した方が有利ではなからうか）

高白斎はそう思ったが、晴信が砥石攻撃を既に口にした以上いまさらどうしようもなかった。高白斎は言葉を飲んだまま雨に濡れていた。

「諏訪にいる長坂虎房を先陣として長窪城に向わせるように」
晴信の第二の命令が出た。

その命令が高白斎にはよく分らなかった。諏訪にいる長坂虎房に先陣を命ずるよりも、このまま全軍が和田峠を越えていった方が時間的には早いのだが、それをせず、長坂虎房を先陣に立てるわけは、甲軍を塩尻峠の下の今井か下の諏訪あたりで休養させると同時に、食糧の準備をさせるためだと考えるしか考えようがなかった。

(どうもお館様のなされ方はいつもと違う)

勝鬨で林城をおとしたのは見事だったが、あの夜高坂弾正と暮を囲みながら戦況を聞いていた晴信は、今までの晴信にはなかったことだ。

(この辺でお館様に諫言しなければなるまい)

高白斎はそう思ったが、その諫言すべき言葉は出なかった

雨が霽れたあとの諏訪湖はきらきらと輝いていた、甲軍が塩尻峠をおりたところで、晴信から休止の命令が出た。高白斎の思ったとおり今井から下の諏訪にかけての部落で軍馬を休め、食糧の準備にかかった。

その日の夕刻晴信は数騎を従えて、上の諏訪の湯館へ行った。湖衣姫が待っていた。

「お待ちしておりました。これからしばらくは諏訪に御滞在でしょうね」

湖衣姫は晴信とふたりになるとすぐ云った。

「そう、しばらくはな」

晴信は頭の中で、しばらくという日を、二日ばかりと考えていた

「うれしゅうございます。私はしばらくではなく、みらいえいごう未来永劫に、お館様をここに止めて置きとう

ございます。諏訪は美しいところです。それに湯もあるし」

湖衣姫は晴信に甘えかけながら、ふと晴信の眼の中にあるなにか、いままでと違った淋しい翳かげに似た光りを見て、ぎょっとした。

「お館様、どうかなさいましたか」

湖衣姫は、晴信が頭の中で考えていることは戦争以外にないと思った。晴信が戦争のことを考えているときの眼と湖衣姫の身体を求めるときの眼とはどこか共通するはげしいものであった。それは熱度を感じずる眼であった。ところが、いま晴信の眼に浮んでいる翳さす光はなんであろうか。

「しばらくここにいるなどと、私を安心させて置いてお館様は明日にでもいくさに出立されるのではありませんか、……もしそうだったとしたら私はお止め申します」

「なに余の出立を止める」

なぜだ、そのわけをいうがいいと、晴信が、湖衣姫をたしなめると

「なぜか分りませんが、今度だけはお館様を戦争に出してやりたくはないのです」

湖衣姫はそういつて眼に涙をためた。

「ばかな。武将が戦争をしないで、そのほかになにかすることがあると申すのか、そのほかにすることと申せば、そうだ、こうすることか……」

晴信は湖衣姫を片手で膝の上に抱き寄せてその唇を吸った。

甲軍の先陣、長坂虎房は八月五日に諏訪を出発した。晴信の本隊は充分な用意を整えて八月十九日に小県の長窪城に着陣した。

砥石城についての情報はつぎつぎと入って来た。砥石城には山田国政、吾妻清綱、矢沢総重の三人の部将がいた。城兵の数はおよそ五百だが、そのうち半数は佐久衆であった。兵糧のたくわえは充分であり、城中に井戸があった。城は自然の要害の上に建てられている。攻撃軍にとってすこぶる不利のようであった。

晴信は、つぎつぎと武将を派遣して敵状を偵察させた。二十四日には今井藤左衛門と安田式部少輔、二十五日には大井上野介、横田備中守、原美濃守を偵察に派遣した。偵察隊の報告は、ほぼ似たものであった。

「城内には、武田に恨みを抱く佐久衆が多数加わっている様子です。力ずくで押しても押し切れる城ではございません。長い月日をかけて落すか、乱破らんぱを忍びこませて火を放つか、そんなことより他にやり方はありません。むしろこういう城は相手とせず、砥石城を一部の兵力でかこみ、村上義清の領地に攻め込んでいった方がよいかと思えます。そうすれば村上義清は決戦をいどんで来るでしょう。そこを討つのです」

横田備中守高松が進言した

晴信はそれにはなんとも応えず、しきりに物見を出して砥石城を探らせ、詳細な絵図面を作らせていた。

八月二十八日晴信は陣を砥石城近く進めた。晴信の陣中を東から西に向って、雄鹿が一頭駆け

抜けた。陣中をけものが横切るとは不吉の前兆とされていた。鹿を見た兵たちはそのことを部将に伝えた。部将たちは高白斎に告げた。高白斎はそのことを胸にたたんだまま晴信には話さなかった。

晴信は二十騎ほど従えて、砥石城の地形を見にいった

砥石城の東は神川を見おろす崖、西側も崖になっていた。城のある山上は広々としていたが、北側は山が深く近づけなかった。大軍を以てする攻撃には不向きな城であった。攻めるとすれば南西の崖をよじ登って、山上に達するしかないが、それにはかなりの損害を覚悟しなければならなかった。

九月七日になって北信に放つてあった林武市という者が帰って来て、砥石城に鉄砲を送りこまれてあるらしいという情報を伝えた。

「その数はどのくらいか」

「はつきりとは分りませぬが二十挺はあるだろうということでございます」

その情報の出どころは、砥石城に食糧を運びこんだ百姓からだった。鉄砲はきわめて有力な新兵器である。鉄砲一挺は兵百人に匹敵するものと考えられていた。鉄砲の威力より、その新兵器を所有していることが、精神的に味方を力づけ、敵を畏怖させた。だから鉄砲がないのにあるように見せかけることもよくあった。附近の百姓からその話が出たとすれば、敵の理言だと疑って見る必要もあった。

「鉄砲を送りこまれたとすればその元を訊かねばなるまい。それについては——」

林武市はそのことはちゃんと調べていた。

「奥信濃高梨政範殿の御家来の内田政成殿が越後の長尾景虎かげとら（後の上杉謙信）殿より鉄砲を譲り受けている事実があります。内田政成殿は村上義清殿ともひそかに通じておりますから、鉄砲が敵方に入ったとすれば、長尾景虎殿が背後で後押しをしていると見るのが至当かと存じます」

「越後の長尾景虎が……」

晴信はこのごろちよいちよい耳にする、長尾景虎なる人物のことをもっと知りたかった。

（山本勘助はなにをしているのだろう。越後に潜入したという報告はあったが、その後全然報告がない、或いは死んだのかも知れない）

晴信は、こんなとき山本勘助がいてくれたら、砥石城に鉄砲が何挺あるぐらいのことは簡単に調べ出してくれるのにと思っていた。

九月八日の午後、軍議が開かれた。

軍議に先だって、敵情の報告がなされた。敵兵五百人、うち三百人は佐久衆、鉄砲二十挺（但しこれは風説）兵糧は三カ月分、城内に井戸がある。

砥石城を攻撃するには南西の崖を一気に這い登って城門にせまる以外に方法はない」

小山田信有がいった。

「そのとおり、それ以外に攻撃のしようはないだろう。そして、その方法で攻めることは、敵の思う壺に落ちこんだことになり、味方が一方的に損害を増していくという結果になる。——やはり砥石城は力で攻めるべきではない。砥石城は囲むのみにとどめ、主力は村上の本領に攻めこみ、

人心の不安を起させることの方が得策である――

砥石城を直接攻撃するか、それとも砥石城は囲んで置いて主力を以て敵中攪乱策に出るか、二説に分れた。二説にわかれたといつても攻撃説を取るのは小山田信有ただ一人であった。論争はそう長くはつづかなかつた。武將たちのほとんどは、横田備中守高松の意見に賛成した。横田備中守高松は佐久、小県地方の民情、地理にくわしかつたからである。軍議は決したかに見えた。一同は、晴信の顔を仰いだ。裁決を求めたのである。

「砥石城一つをおそれて、攻撃もせず、村上の領地を野伏のように荒し廻つて帰つたとなつたら、東信、北信の民心は、武田をあなどり、村上とその背後にあるものに頼る気持になるだろう――

晴信はその背後のものと云つたとき非常にきびしい顔をした。武將たちは、その背後のものが長尾景虎であることはよく知つていたが、長尾景虎と砥石城とは直接に結びつかかなかつた。

「余は源家以来の武田家の重宝御旗楯無みはたてなしに誓つて砥石城を攻略する。攻撃開始は明朝卯うの刻――諸將は晴信のことばを聞くといっせいにひれ伏した。真夏だというのに、真冬のようにつめたいものが諸將の頭上を流れていた。多くの武將たちは、晴信の決意を聞いたとき自ら敗北の姿を眼のあたりに見たのである。

「明朝の先陣はこの横田備中守高松に賜りとうございます」

横田備中守高松が進みでていった。勝てる戦なら、こういった場合、進んで先陣を申し出るのであるが、今度の戦いはいつもと違つていた。諸將は、むしろ横田備中守高松が先陣を申し出てくれたことで内心ほつとした。

高白斎には横田備中守高松が死ぬ覚悟で先陣を引き受けようとしているのがよく分っていた。惜しい男を……高白斎はそう思った。それにしても晴信がなぜ頑強に砥石城攻撃をしようとするのか高白斎にはよく分らなかった。

（お館様は慢心せられているのではなからうか）

高白斎は背筋につめたいものを感じた。

翌朝、砥石城総攻撃が始まる卯の刻に横田備中守高松は単騎晴信の本陣へやって来ていった。

「お館様、お別れに臨んで一言申し述べたいことがあって参りました」

横田備中守高松は馬上のまま大音声で怒鳴ると、晴信が発言の許可を与えるのも待たず

「そむく佐久を殺せば、佐久は限りなくそむくでしょう。佐久の人ことごとく叛いて死に絶えても、草木が武田に叛くでしょう」

晴信はその言葉を聞いて顔色を変えた。

「待て横田備中……」

晴信がそう叫んだときは、横田備中守高松は馬にまたがって前線に駆け向っていた。

天文十九年九月九日午前六時、横田備中守高松の率いるおよそ五百の軍勢は、砥石城を眼ざして、崖を這い登っていった。朝露で全身びしょ濡れになった。崖を八分通りよじ登ると、そこからはもう木がなかった。身をかくすところがない上に傾斜が急であるから動きが鈍くなった。

そこまで来ると攻撃軍はひといきついた。城兵の姿は見えなかった。横田備中守高松は、敵に計略があるなと思った。彼にはその計略がほぼ見えたが、どうすることもできなかった。彼は兵を

森の中で充分休養させて、一気に頂上眼がけておし登る作戦を立てた。

横田備中守高松の軍勢が遮蔽物のない斜面の半ばまで来ると、砥石城内の敵はいっせいにおど
り出て来て、上から石を落し、矢を射かけて来た。応戦はできなかった。砥石城兵から見ると一
方的な殺戮だった。崖の中途にひっかかったものを狙い打ちするように容易であった。横田軍
はばたばた倒れた。

「進め、しりぞくでないぞ」

横田備中守高松は刀を振りかざしながら崖を登っていた。大きな石が、彼を目がけて襲った。
三つ四つ、五つ目の石は横田備中守の兜に当たった。横田備中守高松は、おびただし、流血の中
で死んだ。敵と一戦も交えずに石に打たれて死んだのである。辰の刻（午前八時）までには勝負
は決った。戦死およそ百六十名、負傷者二百名。敵に与えた損害は皆無であった。

頭を石にくだかれた横田備中守の死に顔は無残であった。横田備中守戦死と聞いてかけつけた
晴信に向って、横田備中の飛び出した眼はなにかいたげであった。

駒井高白斎は、晴信が去ったあとも、横田備中守高松の遺体の傍に立っていた。

（これではまるで憤死ではないか）

高白斎はそう思った。晴信の佐久に対する苛酷なやり方を横田備中守高松は何度か諫言したが、
晴信は反省しなかった。叛けば殺すという方策を徹底的に貫き、佐久は、その方策に徹底的に反
抗して、叛き、殺され、捕えられて金山に送られ、女子供は奴婢にされた。横田備中守高松が
舅にあたる尾台城主尾台又六の首を刎ねたのは、つい去年のことであった。

（おそらく横田備中守高松は、舅の尾台又六の首を斬ったとき、今日のことを覚悟していたのかも知れない。いうなれば横田備中守高松の死は諫死である）

高白斎は晴信に諫言して、砥石城攻撃を思い止まらせようと思った。だが、高白斎が、本陣に戻ると、晴信は小山田信有を招いて次の作戦計画を練っていた。

砥石くずれ

砥石城の二回目の攻撃は横田備中守高松が戦死した翌々日に行われた。

晴信はこの作戦に鉄砲隊を登場させて、小山田信有隊の援護射撃をやらせることにした。

その日、天文十九年（一五五〇）九月十一日は雲一つない晴れた日であった。小山田隊は、梯子や縄を用意して砥石城に寄せていった。横田備中守高松が攻め登ったところと同じ、南西の崖であった。

傾斜地の森の上限まで来たところで、小山田信有は、兵を休めた。そこまでは、横田備中のやり方と同じであった。

「鉄砲隊はここに集まれ」

小山田信有は本蔭に鉄砲隊を集めた。

「本隊は、しばらく休んでから、あの山の上の一本松を眼ざして攻撃を開始する。おそらく敵は昨日と同じように、石を落し、矢を射かけて来るであろう。鉄砲隊は、敵の姿が見え次第、ここから狙い撃ちするのだ。鉄砲の玉と石では勝負にならないから、敵はひっこむだろう。そこを味方はおし登るのだ」

鉄砲隊長安原貫道は

「鉄砲のことは拙者におまかせ下され」

彼は塩尻峠の戦いで手柄を立てて以来、鉄砲隊の隊長であることをたいへん誇りに思っていた。この新兵器の隊長であることが、他の槍や刀をふり廻す隊長よりもはるかに勝れているかのような錯覚さえ抱いていた。鉄砲は、塩尻峠の戦いときより増えて、三十挺になっていた。

安原貫道は鉄砲隊を適当に分散して、いつでも撃てるように準備した。

「天気さえあれば、まず鉄砲に勝る武器はございませんまい」

安原貫道はそんな冗談をいう余裕さえあった。小山田信有の下知が下った。法螺の合図とともに、兵はいっせいに崖をよじ登っていった。

待機していた城兵が、石を落し矢を射かけて来た

「射て！」

安原貫道の裂帛れつぱくの聲が静寂を破ると同時に三十挺の鉄砲は一度に鳴り轟き、崖の上で石をころがし落し、弓を引いている城兵十名がころがり落ちて来た。

「それ今だ、今のうちにおし登れ」

小山田信有の下知によって、兵たちは頂上眼ざして突進した。

敵は鉄砲の威力の前に色を失って逃げ去ったらしく、石を落したり、矢を射かけて来る者は少なかった。時々顔を出すと、安原貫道の鉄砲隊に狙い射ちにされた。

小山田隊の真先を登っていくのは、小柄で、木登りの上手な男たちだった。崖をよじ登ると、崖の上の木の根に縄の端を結びつけ、縄梯子をゆわえつけた。小山田隊は、それらを伝わって、続々と登っていった。敵は恐れをなしたとみえて、戦わずして城内へ引いた。

小山田信有が縄梯子をよじ登って城の見えるところまで来たときには、小山田隊の先手の数十人は、城門近くまで迫っていた。

小山田信有は甲軍きつての勇将であり、それに従う兵は郡内出身の強者揃いであった。負けたことがなかった。上田原の一戦では、数十騎を以て、村上義清の本陣に斬りこんで、武田の危機を救った。彼等のことごとくは甲軍中の最強の部隊だと自負していた。

小山田信有は敵城を観望した。広い台地の上に建てられた砥石城は、見るからに堅固であった。五百の兵が籠っているとはとても思えないような小城だったが、石垣と楼は高かった。

城は無気味に静まり返っていた。

「深追いするな」

小山田信有は伝令を走らせて、先頭隊をいまして置いて、台地にいる兵の数をざっと数えた。約二百五十人いた。敵兵は五百だから、攻めるには少なくとも、五百以上がこの台地に来ないと戦争にならない。それは戦争の常識であった。兵力が充実するまでは、この登攀路を確保して置

かないと危険である。

「鉄砲隊はどこにいる」

小山田信有は、さっきまで、梯子の下にいた鉄砲隊の姿が見えないので、そばにいる副将格の小沢式部に聞いた。

「鉄砲隊は、渡辺雲州殿うんしゅうの隊と一緒に……」

あれそこにと小沢式部は前方を指さした。陽炎かげろうの燃える草地を、安原貫道を先頭とする鉄砲隊が城に向って進んでいた。

「鉄砲隊はすぐに引き返して、ここを守るように云え」

その小山田信有の伝令が走り出したのと、城門をおし開いて、敵兵が出て来たのと同時だった。「しまった……」

小山田信有は叫んだ。城の楼やぐらで太鼓が乱打された。城兵は堰せきを切った水のように押し出して来ると、一気に、縄梯子地点を眼ざして寄せて来た。小山田信有は部隊を扇形に展開して敵の来襲に備えた。敵を防ぎ止めている間に、より多くの味方が梯子を登って来るのを待った。

うおうっ、うおっと吠えるような喊声かんせいが起きた。佐久の衆三百が押し出して来たのである。「甲斐の奴等はひとりも残すな、みな殺しにしろ」

佐久衆は口々にそう叫んでいた。長い間、甲軍にいじめつけられ、領地を奪い取られ、殺され、捕虜にされ、金山に送られ、女は遊び女めに売られていった人達の縁につながる者たちだった。生命は惜しくなかった。人でも多く武田につながる敵を殺せば、それだけ親や兄弟や妻女の恨み

が晴れるのだと考えている者ばかりだった。

佐久衆の顔は鬼の顔だった。遺恨に狂った顔が血刀ちがたなを持つと夜叉やしやになった。小山田隊はじりじりと押されていった

「鉄砲隊をはやく收容しろ」

小山田信有は叫んだ。肉薄戦になったら、鉄砲は役に立たなかった。へたをすると鉄砲隊が敵に襲われて、鉄砲を奪われることも考えられた。鉄砲は貴重品であった。莫大な金貨がその購入に使われていた

鉄砲隊を收容しようとする甲軍の中に、城兵が斬りこんで来た。城兵も鉄砲という価値ある武器を狙っていた。城のある台地は混乱した。数において圧倒的に優勢な城兵に対して、小山田隊の損害は増すばかりであった。

「ここは拙者まがに任まかしてお引きなされ」

小沢式部が小山田信有にいった。

「引いてなるものか、防ぐのだ、防いでいる間に味方の数は増える」

小山田信有がそういったとき、城の楼から小山田信有めがけて、いっせいに銃砲を撃ちかけて来た。敵中に鉄砲ありと知らせて来た林武市の報告は当たっていたのである。

小沢式部が胸を射ぬかれて倒れた。楼からの鉄砲の一斉射撃が終るのを待つて城兵は小山田信有眼がけて押しよせて来た

「佐久の大井政平まさひろ」

「志賀城で討死した神津賢良の子賢祐」

と名乗って、二人の若武者が同時に小山田信有に槍をつけて来た。

小山田信有はその槍が防ぎ切れなかった。じりじりと崖の際まで追いつめられ、あっと思う間に崖の下へころげ落ちていった。

縄梯子は、城兵によって切って落された。城の台地に取り残された攻撃軍は孤立した。

日が高く上ったころ勝負はついた。

小山田隊は小沢式部、渡辺雲州の両将のほか二百八名が戦死した。城兵の戦死は五十三名であった。

安原貫道ほか二十三名の鉄砲隊は斬られ、鉄砲三十挺はことごとく奪われた。

崖の下にころげ落ちた小山田信有は気絶したままで山を運びおろされた。腰を強く打って、立つことはできなかった。

晴信は敗戦の模様を聞きながら黙っていた。小山田信有の攻め方がまずかったとも、鉄砲三十挺を分捕られたのがくやしいとも云わなかった。

彼はそのとき、横田備中守高松の諫死を思い出していた。

(叛く佐久を殺せば、佐久は限りなく叛くでしょう。佐久の人ことごとく叛いて死にたえても、草木は武田に叛くでしょう)

城内から甲軍に向って矢文が送られた。甲軍の死体を崖下に投げ落すから收容しろと書いてあった。翌朝になって、甲軍がその場所に行くと見ると、武器を剥ぎ取られて、ほとんど裸同様と

なった味方の死体がころがっていた。死体は腐臭を放っていた。兵の中には、その酸鼻^{さんび}をきわめた死体収容を嫌って逃げる者さえあった。二度にわたる敗戦で甲軍は意気銷沈した。さすがの晴信も、第三回目の攻撃をかけようとは云わなかった。

晴信は砥石城を囲んだまま、村上義清の動きを待った。砥石城は落ちないが、真田幸隆の工作によって、北信の諸城主が内応して来るのを待ったのである。だが、晴信の大軍が砥石城を持てあましているという情報は北信の諸城に追々に知れていった。

九月二十三日になると、武田方に内応の約束をしていた高梨政範が、日ごろ仲の悪かった村上義清と和睦^{わぼく}して、武田方に心を寄せている寺尾重頼の城を攻めにかかった。

九月二十九日の真夜中、真田幸隆は十数騎を率いて晴信の本陣に到着した。

晴信は武將ことごとくを集めて、深夜の軍議を開いた。

「村上義清の軍は約二千、意気すこぶる軒昂^{けんこう}、おそらく明日の午後はこの地へ到着いたすでしょう」

真田幸隆はそう前置きしてから、北信の情況が武田方に不利になって来た模様を逐一^{うちいち}説明した。北信は戦況に敏感だった。小さな土豪たちは、強い方について、その領地と家を持ちこたえようとした。どっちが勝ってもいい、勝つ方に従いた方が将来が安堵^{あんど}される。彼等は日和見^{ひよりみ}的に行動した。大きな流れには逆らおうとせず、どっちにも従くような顔をしながら、最終的な日が来るまでは現状維持でいようとした。戦局の微妙な動きが効いた。甲軍が勝鬨^{かちどき}で林城をおとしたと聞

いて、甲軍に順応の書を送った土豪が、甲軍が砥石城で痛い目に合わせられていると聞くと、同じ手で書いた祝辞を村上義清に送った。

軍議は村上義清を迎え討つかどうかにかかっていた。迎え討つにしては、現在の地勢は有利ではなかった。どこかに陣がえをしなければならなかった。持って来た兵糧が底をついていた。将兵は疲労していた。あらゆる条件を考慮して甲軍がそこに踏み止まって村上義清の軍と一戦を交えるのは不利であった。

諸将が口を揃えて、退却を主張する中で晴信は、驚おどろのような眼をして考えこんでいた。このまま引き返すのがいかにも残念そうだった。

「お館様、軍議が引き揚げに一致しております故、なにとぞ引き揚げのお指図さしずを」
駒井高白斎が諸将を代表していった。

「止むを得ないこと。だが、引き揚げは、堂々とすべきである。逃げて帰ったとなると外聞が悪い」

晴信は、上田原の戦いのことを思い浮べていた。あの戦いで、板垣信方と甘利虎泰の二柱石を失った。だが戦いは五分五分の引き分けとなって、甲軍は堂々と隊伍をととのえて引き揚げた。晴信は今度もそのとおりにしたいと思った。

明けて十月朔日ついたち、甲軍は一カ月に渡る陣を払って引き揚げにかかった。甲軍が引き揚げと見ると砥石城の兵たちは城を出て追いつける様子を見せた。その前ぶれとして、百名ほどの小部隊が山を降りて来て、原加賀守の軍隊にちょっかいを出した。追えば逃げ、引けば従いて来る

という厄介な敵に原隊はなやまされた。原加賀守が、まとまった軍勢で神川^{かんがわ}に沿っていくと、逃げた百人ほどの敵が百五十人ほどに増えて反撃して来た。村上義清の先陣が到着したのである。

砥石城^{とぎ}に鬨^{とぎ}の声が上がった。城兵は本隊来着と見て、いっせいに城を出た。

甲軍の退却ははじまったが、甲軍の退却速度よりも、村上軍の追尾は急であった。殿^{しんが}りを引き受けた原加賀守の兵は押し寄せて来る村上軍を防ぎ切れずに本陣の方向に逃げこんで来た。後方に混乱が起きると軍全体が動揺した。隊から離れるものは村上の軍に殺された。負傷兵が討たれ、足の弱いものが討たれた。そのたびに後方で喊声が上がった。

甲軍に反抗の意志なしと見た村上義清の軍はかきにかかって甲軍を攻めた。甲軍としても、一度敵にうしろを見せた以上、にわかに陣を立て直して戦うわけにはいかなかった。

長窪城^{ながくぼ}までの道は、甲軍に取って、敗北の道だった。兵たちは、身を軽くするために武器を脱ぎ捨てた。中には、槍や刀まで捨てて空身になって逃げる者もあった、旗差物は道路に散乱した。晴信はその混乱した甲軍の敗走を馬上から眺めていた。

（これが武勇を誇っていた甲軍であるのだろうか）

どう考えても分らなかった。部将が号令をかけても、逃げる者は斬ると叫んでも、だめだった。そんなことを云っている者こそ、追尾して来る敵に首をかかれた。

晴信は背後に敵の叫び声を聞いた。矢が頭上を越えていった。晴信を取り巻く、およそ五十人の旗本だけが、今は甲軍に残された唯一の兵団のように見えた。

「晴信殿、武田晴信殿はどこにおられるか」

そういつて怒鳴る声さえ聞えた。

「お館様、兜をお貸し下され、拙者が身がわりとなります故に、一刻も早くこの場を——」

小尾豊信が云った。小尾豊信は晴信と顔が似ているので、晴信が志磨の湯にいたころ、晴信の身がわり役を務めたことがあった。それ以来いざという場合のために晴信の傍に控えていた。小尾豊信は、馬を寄せて晴信の兜を求めた。

「お館様またという日のために兜をお取りなされませ—」

高白斎も口添えをした。晴信は兜を小尾豊信に渡した。首を取られたように情ない気持だった。晴信と晴信の側近が遠のいてからも、小尾豊信は、馬に鞭を当てて走った。できることなら死にたくはなかった。だが、小尾豊信の馬はそれほどよくなかった。小尾豊信の兜を見て敵兵たちが、矢を射かけて来た。その矢が馬に当たった。小尾豊信は馬を捨てた。すると彼と並んで馬を馳せていた、中沢兵庫がすぐさま彼の乗馬を小尾豊信に譲った。その様子は、いかにも主君のために家来が馬を譲ったように見えた。

「晴信殿はあれにおるぞ—」

村上軍はいっせいに小尾豊信を眼がけて押しよせた。小尾豊信、中沢兵庫のほか、十人の甲軍武士は、そこに踏み止まって、村上義清の兵と戦った。そう長い時間ではなかった。小尾豊信、中沢兵庫ほか十名はことごとく討死した。

「屋代殿の郎党仁礼若狹、武田晴信殿を討ち取ったり—」
その声が村上軍の隅々にまで聞えていった。

敗走を続けた甲軍は長窪城まで来てやつと味方の援軍に助けられた。命からがらそこまで逃げて来た兵たちは痴呆に似た顔をしていた。ただ吾を忘れて逃げた顔であった。敗戦という群集心理のままに動かされてそこまで来て、はっと気がついて見たら、手には刀を持っていなかったという惨状であった。

村上義清は長窪城が見えるところまで来ると兵をとどめた。そこからは武田の支配下にあった。深追いすると、危険だと考えたのである。敵将晴信の首を取ったという安心感もあった。村上義清は千載一遇の機会を失ったのである。

村上勢は勝鬨を上げて砥石城へ引き揚げていった。

村上義清は砥石城に着くとまず城主の山田国政と、二人の武将、吾妻清綱と矢沢総重の功績をたたえ、その労をねぎらって祝盃を上げた。

「これで信濃には昔どおりの平和がやって来たというものだ」

村上義清は上機嫌だった。

酒宴の肴は手柄話であった。

「さようさよう、見ごたえのある戦利品がございました」

城主の山田国政は、甲軍から分捕った三十挺の鉄砲を持って来て村上義清に見せた。

「これはたいしたものだ」

村上義清は眼を細めて喜んだ。村上義清が機嫌がいいところを見て山田国政は早々と恩賞の要求をした。

「お館様、この鉄砲三十挺をおさげ渡し願いたいのですが」

山田国政は当然なことのよう云った。

「三十挺のうち、二十挺はこの城の手柄として与えよう。しかるべく分けるがいい」

村上義清は吾妻清綱と、矢沢総重の両方に眼を配りながら云った。

しかるべく分けるがいいと恩賞の分配を一任された山田国政は、その場で、二十挺のうち十挺は自分を取り、あとの五挺ずつを吾妻清綱と矢沢総重に分け与えた。吾妻清綱は厚く礼を云ったが、矢沢総重は不平面へいめんをしていた。小山田隊をおびき寄せて討ち取る計画は矢沢総重が立てたものであり、佐久衆三百人を指揮したのも彼であり、鉄砲隊を襲って、鉄砲三十挺ごとくを取ったのも矢沢総重の手下の者であった。彼は少なくとも分捕品の半分の十五挺は自分が貰う権利があると思っていた。そのうち十挺は佐久衆の主だった者にやらねばならない。そうしなければ佐久衆が黙ってはいないと思っていた。

山田国政は年長であるから城主となっているまでのことで、実戦の采配を振ったのは矢沢総重だった。山田国政と吾妻清綱、矢沢総重の三名は同じく村上家の家臣であった。家柄からいっても矢沢総重の方が山田国政よりよかった。

「不服なのか」

山田国政が矢沢総重にいった。

「不服でございます」

すると山田国政は、彼の十挺のうちから一挺の、銃身に刀疵を受けた鉄砲を取って、矢沢に与

えた。

矢沢総重の眼がきらりと光った。そのとき矢沢総重の心の中に叛意が芽生えていた。

諏訪に帰りついた晴信は、みじめな敗北の原因を考えていた。砥石城の備えをよく研究しないで大軍を動かしたこと、砥石城の攻撃方法が下手だったこと、退去の時期が遅すぎたこと、それらの個々の作戦の誤りの責任はすべて晴信が負うべきものであり、そのような結果になったのは、林城を関の声で落したという、あのうぬぼれが根にあったのではないだろうか。

晴信は湯館の一室に籠こもっていた。愛妾湖衣姫も近づけずにひとりで考えごとをしていた。日に一度駒井高白斎に会って、半刻あまり話をするだけであつた。

駒井高白斎は砥石の敗戦については触れなかつた。晴信が敗戦の原因がどこにあるのかを反省している以上追いつちをかける必要はなかつた。

高白斎は晴信の側近としての彼自身の責任を深く考えていた。塩尻峠で、晴信が、真田幸隆の使者、角間七郎兵衛に、砥石攻撃を告げたとき、しばらく御待ち下されと口を出すべきであつた腹を切るつもりで諫言すべきであつた。それをしなかつたのが、大敗北の原因のように思われてならなかつた。

晴信は諏訪について三日目の朝、駒井高白斎を呼んでいった。

そちは、いますぐ古府中へ馬を走らせて、つぎの戦争準備に取りかかるように、おそろく十日も経たないうちに村上義清は大軍を擁ようして中信へ進攻するであらう。名目は小笠原長時を助けて

旧地を取り返すためだ。ここで中信が敵の手に落ちたら今までの努力が水の泡となる。敵が兵を集めて動き出してから、こちらが兵を集めたのでは遅い。敵が動く前にこちらが兵を深志城の後詰めに送らないと危いことになる。尚、今度の戦いに参加した兵は休養させて置いて、すべて新手の兵を集めるように」

当然、敵の反抗は考えられることだった。それを見越して出兵の準備を命じた晴信の卓見たくけんに駒井高白斎は感心した。

三十歳の武田晴信は生まれながらの戦の神様いくさだと思った。

「余はあと二日ほど諏訪にいて、十月六日には古府中に帰る。それまでに、出兵の準備を完了して置くように、それから今度の戦いで戦死した者の家族には充分な手当を尽すように」

そのとき晴信の顔には、敗戦の憂鬱ゆううつは消えていた。彼は新しい戦いに対する闘志に漲みなぎった顔で、深志城の馬場信房に警戒を嚴重にするように書状を送り、小県、佐久の諸将にも走り馬を送って、村上義清の動きを警戒するように指示した。

その夜、晴信は諏訪に着いてから四日ぶりで湖衣姫と衾かきまを共にした。

「お帰りになったばかりのときは怖い顔をなされていましたからどうなることかと思いました。でも、いまはもう——」

湖衣姫がいった。

「いまはもうどうなったのだ」

「いまは、いつものとおりのお館様のにくらしい顔になりました」

「もっと、にくらしい顔になって、おことを攻めてやろうか」

「私はそのにくらしい顔を間近に見ると眼がくらみます。だから私は……」

湖衣は侍女を呼んで灯を消させた。侍女の衣きぬずれの音が遠のいていくのを待ち切れぬように晴信は湖衣姫を抱いた。

翌朝、晴信は数騎を従えて占府中の躑躅つづみが崎に帰館した。砥石の敗戦は館の内部に知れわたっていて、彼を迎える人々の顔つきはなんとなく暗く控え目であった。

「なによりも御無事で結構でございました」

三条氏はしかつめらしい顔で迎えたが、里美は、もし他人がそこにいなかったならば、晴信の首玉に抱きつきそうないきおいで走り寄ると、それでも武家の作法にこだわったのか、彼の膝元に両手をつかえて一礼をして

「真直ぐに躑躅が崎へ御帰館なされると思っていましたのに、諏訪に何日もお泊りになって、……この前は私も諏訪の湯館にお誘い下さったのに……このごろは湖衣姫さまのところばかりいきたがって……私のことなどお忘れになったように……」

そんなふうな断片的な言葉を云いながら膝を詰めよせて来る里美を見ると晴信は思わず笑い出した。

「やはり里美は女だな」

はい、私は女でございます、という里美に

「塩尻峠の戦いでは馬上で全軍を叱咤しったした里美が、いまは、ただの女としてのくりごを申す」

「くりごを申してはなりませぬか」

「かまわぬ。だがそれをいうにはまだ日が高過ぎる」

「いえ、私は日が高くともいっこうかまいません。暗いところよりも、明るいところの方が気が延び延びといたします」

からむようにして来る里美の視線に晴信はあやうく誘われそうになった。

「用意はしてございます」

里美は、そっちの方へ行きそうな気配さえ示した。だが晴信は、里美の眼を払いのけて

「わるい女だ」

と、ひとことという大声で笑いながら回廊を書院の方へ歩いていった。

砥石城攻撃で大敗北を喫したあとであったから、身をつつしむという気持もあったし、里美が敗戦のことを気にしている晴信をやわらげるために、わざとあんなふうな誘い方をしてくれたのだと、その裏を考えると、もともと、昼の情事が好きであった晴信も気がとがめたのである。

十月二十日になると、村上義清のその後の動きがはっきりした。討ち取った首が影武者小尾豊信のものであることを知った村上義清は小笠原長時の求めに応じて中信に兵を動かす決意をした。中信の動きもまた微妙だった。旧領主の小笠原長時が、村上義清の軍に支えられて引きかえすと聞いて動揺する土豪が多かった。

「全然たよりにならない土豪ばかりでございます。こちらが誘えば、お味方を申すといい、小笠原長時の使者を迎えると二心はないという者ばかりでございます」

深志城の馬場民部はそう云ってよこした。深志城の修築は成って、一カ月や二カ月は支えられるという見とおしはついた。

村上義清軍が中信へ向って動き出した。小笠原の残党を合わせて塔の原城に陣を置いて、深志城攻撃の気配を示した。

村上義清の動きに呼応するように、晴信は三千の兵を率いて、古府中を出発した。十月二十三日のことである。

行く先はどことも云ってなかったが、兵たちの間には甲軍は村上義清の留守を狙って、村上義清の本城葛尾城かすらおを攻撃するのだという噂が流れた。敵をあざむくためにまず味方をあざむいた流言である。

倉科くらしなの党の騎馬隊が数十騎ずつに分かれて佐久、小県方面へ走っていった。佐久、小県の甲軍の陣営を強化するためだった。

真田幸隆の動きが活発になった。小県から埴科はしなの土豪たちの間に、晴信が、五千の大軍を以て村上義清の本城を攻撃するという風説が流れた。

「今までの晴信は作戦型の武将であった。必要以上の兵は使わなかったが、砥石城で痛い目に会ってからは考え方が違って、大兵力を以て村上方をおしつぶすつもりらしい。」

その噂が、村上義清の耳に入らぬはずがなかった。

「晴信が大軍を率いて葛尾に寄せてくるらしい。」

村上義清は心配そうな顔で小笠原長時にいった。

「例によって武田流の埋言まいげん、風説のたぐいだろう。気にすることはあるまい。はっきりと晴信の軍の動きが分ってから引き返しても遅くはない。その前にまず、深志城を攻め取る手筈を取るがよい」

その小笠原長時のいい分が村上義清の癪かんに触った。攻める手筈を取るがよいということは、村上義清に対して、一段高いところから命令していることばとしか受け取れない。

（なんだ、晴信の勝鬨におどかされて、一戦も交えず本城をあけて逃げ出したくせに、偉そうな口を利く奴だ。おそらく小笠原長時の頭の中には、今もって信濃の守護職であるという官位意識があるのだろう。今ごろ官位で人が使えると思っているとすれば、よほどのほか者だ）

村上義清は小笠原長時を捨てた。こんな考えだから、人は去っていくのだ。今となっては小笠原勢力はほとんど実在しない。その小笠原長時の尻馬に乗っているうちに、甲軍の本隊が、葛尾城を襲って来たかどうかということになるのだ。

その夜、葛尾城から、このごろ、本城周辺に、武田の間者とおぼしき者がしきりに出沒するという知らせがあった。

村上義清は夜が明けると、小笠原長時には、なんの挨拶もせず引き揚げていった。「約束が違うではないか、なぜ深志城を攻めないのか」

小笠原長時の使者が村上義清の後を追って来てそういった。

「村上義清をたよりにされるより信濃の守護職小笠原長時と書いた旗を立てて進んだら、敵はその威光におそれて、戦わずして降伏するだろうと長時殿に伝えるがいい」

村上義清は居城に帰って武備をかためた。村上義清の軍が引き揚げたとなると、小笠原長時に従^つこうとしていた土豪たちはなんとかかんとか理由をつけて自領に帰ってしまった。貧弱な小笠原勢だけでは深志城を攻めることはできなかった。

晴信は諏訪の国境まで進めた軍を古府中に引き揚げさせた。中信濃の危機は去った。村上勢が引き揚げたあと、馬場民部は、近隣の城を着々と取っていった。小笠原長時は滅亡を待つばかりになっていった。

天文十九年九月から十月にかけての武田晴信の砥石攻撃と敗戦は世に砥石くずれといっている。晴信が信玄と名が変わってからも、こんな負け方をしたことはなかった。武田信玄一世一代の敗北であった。

『妙法寺年録』に

……といひの要害を御のけ候とて、横田備中守を始として随分の衆千人許^{ばか}りは打死被^{うちじになされ}成候……とある。

買った城

砥石城の山田国政、吾妻清綱、矢沢総重の三将の仲がうまくいっていないことが村上義清の耳に入った。義清は、更科郡村上城（村上氏発祥の地）を守る大須賀久兵衛を呼んでその事実を調べて来るよう命じた。大須賀久兵衛は重臣中の重臣であり、砥石城の内部の事情にも明るかった。

大須賀は数騎を率いて砥石城に乗りこむと、砥石城の戦いの模様をつぶさに聞いて今後の参考にしろと、主君の村上義清に云われて来たのだといった。三将は喜んで大須賀を迎えた。大須賀は、まず山田国政に会い、次に吾妻清綱に会い、最後に矢沢総重に会った。

山田国政と吾妻清綱はそれぞれの手柄を語った。自分ひとりで、晴信の大軍を追い払ったようなことをいった。矢沢総重は、手柄を語らずに不満を語った。

矢沢総重の輩下の佐久衆三百名が奮戦して分捕った鉄砲三十挺の分配方法が不公平であるといった。こんなことをされたのでは、このつぎ甲軍が攻めて来ても佐久衆は働かないだろうと云った。

（分捕の鉄砲三十挺のうち村上義清が十挺、山田国政が九挺、矢沢総重が六挺、吾妻清綱が五

挺)

大須賀は頭の中で勘定した。数の上からではそれぞれおかしくなかったが、矢沢の話を聞いて見ると確かにその配分は不公平であった。戦いを勝利に導いたのは、佐久衆三百人の死にもの狂いの戦いであった。砥石城の兵力の半数以上をしめていた佐久衆の功績にむくいるには、鉄砲六挺は過少であった。

「しかも、六挺のうち一挺は、刀疵やまのついた鉄砲です」

矢沢総重は、山田国政が、しぶしぶと、さし出した六挺目の鉄砲が疵物だったことを口をきわめて罵倒ばとうした。

よく分った。本城に帰ってお館様にそのことを申し上げよう。しかし、一度決ったことだから、よほど上手にやらないと、山田、吾妻の両将の面目を失することになる」

矢沢総重の怒りをおさめるには、村上義清がまき上げた十挺のうち五挺を、なんとか名義をつけて矢沢にやらねばならぬだろうと思った。

「佐久衆の主だった者は何人いるかな」

「恩賞として鉄砲をやろうと思っている者が十名はおります」

「すると、あと五挺の鉄砲をなんとかすれば佐久衆はおさえられるということになるのだな」

矢沢総重はそういう大須賀久兵衛の腹のうちを読むような眼つきをして

「もし、それに引き合うだけの恩賞がなければ、佐久衆はこの城を棄てるでしょう。佐久衆は武田に対してはげしい敵愾てきがい心を持っています。しかし、その敵愾心を利用してただ働きをさせるわ

けにはいきません」

大須賀久兵衛は葛尾城に帰って、このことを村上義清に話した。

「このさいは眼をつぶって、鉄砲五挺を、佐久衆にお下げわたしたきたいと存じます。佐久衆の精銳三百の兵力は貴重です」

大須賀が口をきわめてその理を説いたが、村上義清は首を縦にはふらなかった。

「鉄砲一挺や二挺のことで城を出るといふなら、出してやるがよい。もともと佐久衆などあまり当てにしているはない」

鉄砲の一挺や二挺のことと口で云いながら、偶然のように手に入った十挺の鉄砲を一挺も失いたくない気持を露骨に出している村上義清を見ながら大須賀久兵衛は渋い顔をした。

（北信の村上が立つか立たないかの岐路にいるのになんということを——村上義清という人がこれほどけちな人間だとは思わなかった）

そのとき大須賀久兵衛の頭の中に、新興勢力の武田晴信と村上義清との比較がなされていた。浮かぬ顔で村上城に帰着した大須賀久兵衛は家臣の大野三左衛門に愚痴をこぼした。

「お館様のなされ方はなさけないと存じますが、やはり村上全体を考えてのことでしょう。私は以前から矢沢総重殿を知っておりますので、これから砥石城へ行つてなんとかなだめて参りましょう」

大野三左衛門は、三十過ぎたばかりだった。若いから頭の廻転がはやかった。天下の情勢もある程度掴んでいた。どっちみち、村上勢力は武田勢力に屈伏するだろうという見当もつけていた。

大野三左衛門は、武田側についた清野入道清寿軒の遠い親戚だったので、清野を通じて、真田幸隆とひそかに通じていた。

大野三左衛門は砥石城内部の状況を清野入道に書面で知らせながら、砥石城へ行つて矢沢総重に鉄砲のことはとても無理だからあきらめるがいい、お館様は貴殿のことをあまりよく思っていないようだから行動も慎しまれたがよいと、かえつて矢沢の不満を煽った。真田幸隆は清野入道から砥石城内部の情報を受け取ると

「いよいよ砥石城の最後も近づいたな」

幸隆はその足で古府中へ行つて晴信と会った。

「少々まとまった金が必要になりました」

幸隆は晴信に会うとすぐそういった。

「なんに入用だ」

「砥石城を買うために」

幸隆はそういつて、晴信の顔を見つめた。幸隆の細い眼と晴信の大きな眼とが、真直ぐぶつかった。どちらも動かず、それぞれの眼の中に相手を吸収しようとしていた。言葉はないが、眼で充分語り合っていた。

「金で城が買えるなら、それほど安いことはない、すぐ買うがよいぞ」

晴信は、そばにひかえている駒井高白斎に、必要な金をやるようにいった。

「もうひとつお願いがあります。鉄砲を五挺ほどお下げ渡し願ひとう存じます」

「なんに使うのだ」

「砥石城を買い入れるについての引出物とするつもりでございます」

晴信と幸隆はそこでまた禪問答のように視線をからませていたが、晴信の方から口を開いた。

「やろう」

晴信の眼は一瞬光ったように見えた。晴信は真田幸隆を信用していた。幸隆は信濃の部将であるが、武田家譜代の武將と同様に考えていた。北信攻略は幸隆なくしてはできないことをよく知っていたからであった。

「いそぐことはないぞ」

「いえ、いそぎます。五月までに砥石城を買い入れてごらんに入れます」

真田幸隆はその日のうちに、木枯の吹く佐久往還を小県に向って帰って行って、砥石城にこもっている佐久衆の懷柔策を始めた。もともと、幸隆はその土地の人だから、縁をたどれば、つながりはいくらでもあった。ただ働きをさせる村上についているのはやめて、城を出て真田につくがいい、いま真田側につけば、旧領を安堵して貰うよう、幸隆が努力するが、この機を失すれば叛逆者として捕えられて殺される、いまが思案のしどころだと説いた。

晴信はこういう場合を見こして真田の軍と佐久の諸将とはなるべく戦わせないようにしていた。佐久衆も、相手が武田直系の武將でない真田となると、幾分気を許していた。

矢沢総重の母は、武田に降った佐久の望月城の城主望月左衛門の伯母に当たっていた。策謀の武將幸隆がそれを見おとす筈がなかった。

天文二十年（一五五一）も二月に入って間もないころ、矢沢総重は、彼の輩下の者を率いて、兎追いに出了。網をしかけておいて、そこへ兎を追いかむ、たわいもないことであつたが、雪の中で氣晴しにはもってこいの遊びだった。

天氣はよかつたが兎はあまり獲れなかつた。兎追いに参加している三十余名が兎汁をして食べるには二羽の兎では足りなかつた。矢沢総重と顔見知りの中原郷の名主源右衛門が、拙宅へどうぞと、矢沢等三十余人を誘つて、雉^{きじ}数羽と酒を出してもてなした。源右衛門の家へ三十人全部は入れないから近所の家を借りた。

矢沢総重が久しぶりで望月左衛門と会つたのはここであつた。

「久しぶりだな」

望月左衛門の方から声をかけた。敵味方に分れてはいても親戚同士だから、話ははずんでいった。氣がつくと、その座はふたりだけになつていた。

「つかぬことを伺つて悪いが、村上義清殿は、貴殿に疑いの眼をかけていられるそうですね」

望月左衛門がいった。

「なに疑いの眼を？」

「さよう、昨年の戦いのあとの恩賞に不満を持つていて、機会あらば武田に従^つこうとしているという噂さもある。そういう噂が立つようになったら考えねばならないな。ところで、その話とは、全然別な話だが、武田晴信様が、砥石城における貴殿の働きぶりをことのほか賞め^ほられていた。

鉄砲三十挺奪われたが、奪われても惜しくない戦いぶりだったと申されていた。晴信様は、その

後の恩賞沙汰の話を聞いて、村上義清殿は武勇には勝れているが、人を見る眼がないと申された。そして、不足分の鉄砲五挺は武田から矢沢総重殿に進ぜようと申されるのだ。どうかな。貰ってくれないか。実は、その鉄砲をこっちへ持参して来ているのだ」

「武田に内応しろと申されるのか」

矢沢総重は眼をむいていった。

「いや、けっしてさようには云っておられぬ。ただ、さし上げたいといっておられるだけのことだ」

「おことわり申す、敵に内応するほど心は腐ってはおらぬ」

矢沢総重はそう云って、横を向いた。話はそのままになって、望月左衛門は帰っていった。矢沢総重も、輩下の者を集めて、引揚げにかかった。名主源右衛門が、城内ではなにかと御不自由でしようといつて、野菜類の俵を上産としてそこへ並べた。

「長芋が入っていますから、少々恰好は悪いけれど、このままかつがせてお帰り下さい」

米俵より、やや細くした野菜俵の両端に長芋が頭を覗かせていた。矢沢総重は源右衛門に厚く礼を云って帰城した。

帰城して間もなく、家来の小林兵頭が長芋俵の中に鉄砲が五挺かくされていたことを彼に知らせた。

「それを見たものは誰と誰だ」

「私のほか、佐久衆三名でございます。鉄砲はその者三名に手伝わせて、早速かくして置きました」

た。三名の者にも嚴重に口止めして置きました」

矢沢総重はその心利いた小林兵頭を讃めたが、このことがこのまま他人に知られずには済まないと思った。彼はこのことを城主の山田国政に話そうかと思つたが、山田の顔を思い出しただけで、その気はなくなった。年が上だという理由で、城主となつてゐるが、なんの才もなくただ欲の深いだけのあんな男にこの重大事が話せるかと思つた。吾妻清綱に話したところで、いい智恵の出る男ではなかった。矢沢は一晩考えた。いい考えは浮ばなかった。葛尾城の村上義清に直接話そうとも思つたが、大野三左衛門が云つていたように、村上義清が疑いの眼で見ているところへ出掛けていったら益々疑われることになる。今更、その鉄砲を城外へ持出すこともできなかった。そうかと云つて望月左衛門を介して、武田に通ずるつもりは毛頭なかった。

三日、四日と経つと、いよいよこの問題を表面に出せなくなった。

三月の半ばになつたころ小林兵頭が浮かぬ顔で矢沢総重のところに来て来た。

「佐久衆の間にあの鉄砲のことが知れ渡りました。あの鉄砲のことを知つてゐる者は私のほか三名しかいないと思いましたが、名主源右衛門が、長芋の中へ鉄砲をかくしこむところを見ていた者があり、どうやら、そのへんから洩れたようです」

矢沢はうなずいた。心配してゐたとおりになつたと思つた。

「そちはどうしたらいいと思うな」

矢沢は小林兵頭の智恵を借りようとした。小林は思い切つたように眼を見張つて云つた。

「佐久衆三百を捨てるかどうかの御決心かと存じます。もし佐久衆を輩下にとどめ置くおつもり

ならば、前の六挺の鉄砲に今度の五挺を加えて一挺ずつ主だった者にやらねばならないかと存じます。彼等は、去年の九月以来、未だに恩賞のないことを不満に思っています。このままほって置くと、佐久衆は、なにをしでかすか分りません」

佐久衆は、鉄砲の合計数十一挺が、それぞれ主だった者に配られることを期待していた。主だった者はその鉄砲を売って、金を部下に与えるか、もしくは、それぞれの集団（組）の共通財産とするか、とにかく、そこに武士の集団がある以上、何等かの給与がなければやっていけなかった。この城にいる佐久衆は領地を武田に奪われた、云わば浪人集団であった。戦争をして、その褒賞を貰えぬなら、そこを去って、どこでも、もっと分のよいところへ行けばいいと考えていた。^{ほうしょう}褒賞を貰えぬなら、そこを去って、どこでも、もっと分のよいところへ行けばいいと考えていた。武田以外ならどこでもよかった。北条でも今川でも、上杉でも、三十人四十人とまとまった武装集団なら喜んで召しかかえてくれた。戦国時代だから、傭兵はどこへ行っても通用した。それに佐久衆はこの城を出るにしてもだまって出ていかないでしょー

小林兵頭のその言葉で矢沢総重は顔を上げた

「佐久衆の力によって、武田に勝った以上、恩賞は与えねばなるまい」

矢沢はその日のうちに、主だった者十人を呼んでそれぞれ一挺ずつの銃を渡した。銃を貰ったことは極秘にして置けといった。

だが、彼等はその新兵器を買ったことが、嬉しくてたまらなかった。お前だけに見せてやるなと云っては次々と見せて廻った。鉄砲を買った者同士で比較し合ったりした。ちよつと持たせるだけ持たしてくれという者があると、十文よこせなどと冗談を云う者もあった。鉄砲は高価で

あり、なかなか手に入らぬ物であつたし、鉄砲をその集団に保有することだけで、集団の力は過信された。

佐久衆の主だった者が鉄砲を貰った。その数はおよそ十挺だということが、山田国政の耳に入った。山田国政は城内の噂を綜合して、葛尾城の村上義清に報告した。

四月になって、葛尾城から矢沢総重に呼出しがあつた。村上義清は不機嫌な顔をしていた。新しく五挺の鉄砲が矢沢総重のところへ運びこまれ、その鉄砲と前の鉄砲あわせて十挺を佐久衆に与えたという噂についてその真実を質した。

「さような事實はございません。もしお疑いなさるなら、ここで腹を切ります」

矢沢総重はほんとうに腹を切るつもりでそういった。そのとき、矢沢総重は、もはやどうにもならないところまで来ていることを知った。

真田幸隆の誘いの手は、砥石城内にいる佐久衆につぎつぎと延びていった。口だけの誘いではなく、多くの金が流れていった。これは武田から出た金ではない、真田幸隆のふところから出たお見舞い金だといちいちことわりがついていた。

砥石城の矢沢総重謀叛むほんの説があちこちにばらまかれはじめた。城内は兵までが二派に別れた。

佐久衆と、山田国政の兵とが喧嘩をしたときなど、もう少して城内が二つに分れての大騒動になるところだった。

「矢沢総重をなんとかしなければならぬ」

村上義清はそう云った。だが、実力者の矢沢総重を葬ることは、佐久衆三百人の謀叛を誘うよ

うなものであった。落目になった村上としては、三百の佐久衆の力は欲しかった。それでは、思い切って、その懷柔策に出ればいいのに、そうもせず、村上義清は、葛尾城内に人質として取つてある矢沢総重の長男重丸の監視を嚴重にすることによって、矢沢総重を牽制しようとした。

五月に入つて間もなく、葛尾城から砥石城へ城内改めあらたの人数がさし向けられることになった。鉄砲の噂の真相を確かめるためだった。その情報は、大野三左衛門によっていち早く矢沢総重に知らされた。手紙の末尾に

「御覚悟のほど召され候べきときと存じ候」

と書いてあった。腹を切る覚悟とも謀叛の覚悟とも取れるような書き方だった。大野三左衛門からその手紙が来ると同時に、城主の山田国政から、矢沢の居室を城主の隣りに移すようにという命令があった。

矢沢はその要求をはねのけて、佐久衆三百人が、ごろごろしている武者溜りの奥にわざと位置を移した。葛尾城からお城改めに来るなら来て見ろ、実力で拒絶してやろう、矢沢総重はそう思っていた。武田に従くのはいやだが、部下を信用しない村上義清とは飽くまで対抗してやろうと思つた。

砥石城に城主が二人出来た。矢沢総重はその日から、彼の命令によって、兵を動かした。門を守る兵も、山田派と矢沢派に分れた。城の中で戦が始まりそんな状態になった。

村上義清はそこでまた逡巡しゆんじゆんした。葛尾城から砥石城に兵を向けたと聞けば、砥石城内部に内乱が起きて、勢力の強い矢沢総重が実権を握るだろうと思うと、うかつに兵は動かさなかった。村

上は次々と人を砥石城にやって矢沢総重をおどかしたりなだめたりした。

「貴殿がもし不心得のことを起したとすれば重丸様のお命を縮めることになる」

使者はそう云って帰っていった。

矢沢総重は齒ぎしりをして、口惜しがった。

重丸が人質になつてゐる葛尾城は千曲川の河畔にそそり立っている三角形の山のいただきにあった。攻め登るには安易ではない山城であつた。山は森林におおわれていて、その城から抜け出してもぐりこめば、つかまえるようないほど深い森がその背後につづいていた。

真田幸隆の息のかかつた者がその城内にもいた。

その夜は月夜であつた。重丸は眠つてゐるところを城内の厠口かわやから運び出された。重丸が眼を覺したときは黒衣の男の背に負われていた。重丸にずっとついてゐた乳母も知らない間のことだつた。

重丸の姿が消えたという報告を聞くと同時に、村上義清は砥石城に伝騎はつしを馳らせた。城主山田国政に矢沢総重を殺せという命令であつた。

月光の中を砥石城へ走る伝騎のあとを、真田幸隆の家来角間七郎兵衛が追跡してゐた。二騎の間隔ははじめ二丁ほどあつたが、だんだんせばまっていつて神川かみがわまで来ると、あと数間のところにせまつたが、それ以上間隔をつめることはできなかった。伝騎は背後にせまるものを意識してゐた。追いつかれると、多分殺されるだろうと思つた。伝騎は懸命に駆けた。月の光を受けて神川の水がきらきらと輝いてゐた。小高い台地の上に聳そびえ立つ砥石城が夢の城のように浮き出して

いた。

伝騎の武士はちらつと砥石城に眼をやった。もう少しだ、もう少し走れば救われると思った。背後にせまっている馬の蹄ひづめも次第に遠のいていくようにさえ思われた。

角間七郎兵衛は、神川に沿って、やや坂道になったとたんに、彼の乗馬の速度が落ちたのを知った。馬が疲労したのである。角間七郎兵衛が、左手に手綱をよせて持つと、右手をふところに入れた。ふところに手が入ったのと出たのとほとんど同時だった。きらつと、なにか光るものが角間七郎兵衛と伝騎との間を縫ってとんだ。次の瞬間、前を行く伝騎の武士が馬上でぐらついた。背に手裏剣を受けたのである。しかし彼はそれに耐えた。崩れる姿勢を持ち直そうとしたとき、第二の手裏剣がその背に飛んだ。彼は馬上に倒れ伏し、そのまま、馬の背から滑すべり落ちた。角間七郎兵衛は、馬からとびおりと刀を抜いて用心深く近づいていった。路上に倒れていた武士が近よって来た角間七郎兵衛の足を狙って抜き討ちに斬りつけた。それも最後のあがきであった。角間七郎兵衛は、伝騎の武士を一刀でしとめると、その懷中に抱いている書状を奪って、城内へ向って馬を走らせていった。

「矢沢様に御注進」

角間七郎兵衛は馬上で叫んだ。城門を守っている兵がどやどや出て来た。

「葛尾城のお館様のお使いで参りました。じきじき矢沢様に御眼通り願いたい」

角間七郎兵衛がいった。矢沢総重は城内で角間七郎兵衛に会った。矢沢総重の家来の者十名ばかりが傍にいた。

「今宵、重丸様は無事葛尾城を脱出いたしました。おそらく、明日中には真田様の御陣中に到着すること存じます」

「重丸が逃げたか」

矢沢総重は感慨深そうに云った。角間七郎兵衛は、伝騎のふところから奪った山田国政あての村上義清直筆の書状を矢沢に渡した。書状に血がにじんでいた。矢沢総重はその手紙を読むと家来の小林兵頭に黙って渡した。

小林兵頭は一読して云った。

「御決心なされるときかと存じます」

矢沢総重は大きくうなずいて、そこに居並ぶ者たちにいった。

「敵は山田国政、吾妻清綱のふたり、手向う者があれば斬れ」

矢沢総重の指揮で佐久衆三百はいっせいに山田国政と吾妻清綱に向っていった。

葛尾城から矢沢あてに火急の使者が来たと聞くと、山田、吾妻両派はなにかあるなと思って、その準備をしていた。

両軍は城内で戦い、外に出て月光の下で刃を交えた。数においては山田、吾妻の連合軍の方が多かったが、勇猛さにおいては佐久衆の方がすぐれていた。勝負はなかなか決しかねていた。

城内で内乱が始まると同時に、楼のあたりから狼煙のろしが高々と打ち上げられた。赤い火の粉が西に傾きかけた月にふりかかるように見えた。城中にひそむ真田の間者が上げた狼煙だった。

「真田軍が来たぞ」

と叫ぶ声に気がついたときには、守備兵のいない城門から真田幸隆の軍が続々と入って来ていた。

「矢沢殿に助け戦申す」

「真田の軍でござる。矢沢殿の後詰めに参上つかまつた」

と叫ぶ声が聞えた。山田国政と吾妻清綱の兵たちは一度に浮き足立った。山田国政と吾妻清綱の二人は討ち取られ、砥石城は真田幸隆の手中に落ちた。

白々と明け放たれた砥石城を見上げる矢沢総重の眼に涙が光っていた。真田幸隆が矢沢総重に云った。

「貴殿の働きは実に見事であつた。晴信様もさぞお喜びになつて、貴殿を重く用いられるだろう。それまで、ひとまず、拙者の松尾城までお引き取り願いたい。今日、明日中には重丸殿も到着なされるでしょうから」

戦いは済んだが、そのあとの混乱が続いていた。戦いが矢沢側の勝ちと決まると、矢沢側の雑兵たちは、まるで飢えた狼おおかみのように、逃げ落ちていく山田、吾妻側の女どもに襲おそいかかつていった。人が見ていようがいまいが、そんなことはおかまいなしに、女たちは押し倒され、ねじ伏せられて、欲情の犠牲にされていた。泣き叫ぶ女の悲鳴が、ずっと遠くの森の中から聞えていた。その日まで、味方として同じ城で顔を合わせていながら、一度敵味方と分れると、そのようなことになるのも、戦国という世の中の哀れさであつた。狼藉を働く兵をたしなめる者もいなかった。そういうことは形式的には認められていなかったが、実際は見て見ぬふりをしていた。兵たちの

中には、敵城攻略に命をかけるその恩賞として、当然、その時だけの狼藉を許されてよいものと考えている者もいた。

「いかがなされるおつもりか」

真田幸隆は矢沢総重に云った。

「拙者はしばらくひとりでいたい。戦いとはかわりなしに諸国を歩いて見たい」

矢沢総重はそう云った。

「ついては真田殿、拙者の家族をあずかっていただけだろうか」

矢沢総重は割り切れない気持ちでいた。忠誠を誓っていた村上義清に結局は叛いたことになり、砥石城を敵の手に委ねることになった責任は彼にあった。知らず、知らずの間にそうなっていたのだ。そのもとを正せば佐久衆を使って武田に勝った時から今日の禍根は芽生えていた。

矢沢総重は気骨ある信濃武士としての面目をいまだに抱いていた。ここで武田に従けば、完全に主家を裏切ったことになるのだと思った。

主家を裏切ったのではない。主君の理不尽なやり方に反抗したに過ぎないのだと理窟をつけて見たところで、もはやどうしようもないことであつた。

「ではそうなされるがいい。貴殿が帰って来られるまで御家族はこの幸隆が確かにあずかる。心配のないように」

幸隆は矢沢総重の態度が決まると、石の上に立って大きな声で佐久衆に呼びかけた。

「矢沢総重殿は、家族を拙者にあずけてひとりで諸国漫遊に出掛けられることになった。従つて

ここにゐる者は主人を失つたことになる。この真田幸隆に従^{したが}きたい者はこのままこの城にとどまるがよいし、この城にいたくない者は、どこへ行こうが咎^{とが}め立てはしない。この城を出たい者には今回の手柄金として、一人当り五百文ずつやるから中出るがよい。直ぐには答えられないだらうから、あと、半刻の余裕を与える」

佐久衆たちはそれぞれの集団（組）に分れて、このまま真田につくか、どこかへ出ていくかの議論が始まった。真田へつく者が半数、あと半数は、真田へつくことは武田へつくことになるから嫌^{いや}だという考えの者であつた。

幸隆は、佐久衆の中心人物のひとりと見られる、神津賢祐を呼んで真田につくことをすすめた。「義があつて矢沢殿に尽したが、その義は今日を以てすべて済み申した。今さら武田に従くなどとは思ひもよらぬことです。拙者は飽くまでも、武田の敵側に立つて戦うでしょう。何故ならば武田こそ佐久を亡ぼした宿敵だからです」

神津賢祐は三十人の部下をまとめると、隊伍をととのえて砥石城を去つていった。北条へつくか、上杉へつくか、それとも今川へ走るか——神津賢祐は三十人の隊伍の先頭を歩いた。そのすぐうしろの足輕が鉄砲をかついでいた。鉄砲の筒に朝日が当って光っていた。

去るものは去り、残るものは残ると決つてから、城内から矢沢一門の婦女子が出て来た。昨夕から今朝にかけての混乱のために蒼白な顔をしていた。真田幸隆は屈強な家来を家族たちにつけて、松尾城に送らせた。

真田幸隆はほとんど一兵も損ぜず砥石城を奪い取つた。砥石城陥落は村上勢に決定的な打撃を

与えた。本城葛尾城を保持していけるのは、名城砥石城があったからである。砥石城があるかぎり、尚数年は村上の勢力を北信から追い出すことはできないだろうというのが、当時の戦略家の見方であった。

砥石城落城と聞いたとき、村上義清は眩暈めまいを起した。そしてすぐ立上ると、馬を引けと叫んだ。すぐ砥石城奪還の兵を起すつもりだった。家臣たちが寄ってたかって、おし止めた。村上義清はそこに坐りこんで、それから半日は口をきかなかった。

村上城主、大須賀久兵衛は砥石城落城の報告を受けると、もうそこまで武田の大軍が襲おしよせて来たような狼狽ろうばいぶりを示した。家臣の大野三左衛門が、その大須賀の横顔に嘗なめるような視線を送っていた。

晴信は野駈けの途中で砥石城落城を知った。

「そうか」

とひとこというと、急に馬をかえして、躑躅つづみが崎の館に帰ると重臣たちを集めて云った。

「砥石城は都合三十五挺の鉄砲で買い取ったようなものである。砥石が落ちたら、いよいよ北信の核心に兵を進めねばならない。次に戦う相手は、村上でも小笠原でもない。越後の長尾景虎だ。越後の春日山城にいる景虎と躑躅が崎にいる晴信とが同時に馬頭を立てて北信濃に向ったら、どっちが先に現場につくと思うか」

晴信は武将たちの顔を見廻してから更につけ加えた。

「北信濃までの距離を縮めることはできないがそこへ到着するまでの時間ならいくらでも縮める

ことはできる。古府中から、北信濃へかけて、鉄砲玉のように真直ぐ走れる軍用道路を作るのだ」

晴信の顔には自信がきらめいていた。

安曇部の後裔の最期

晴信は今川義元の老臣岡部美濃守みののかみの顔を見たとき、来たなと思った。

予期していたとおりの男が、予期した頃にやって来たのだから予期したとおりのことをいうのだろうと思っていた。

「しばらくの間に見違えるほど御立派になられて恐悦至極に存じます」

そう云って頭を下げて、さてと云い出したときが警戒しなければならぬときだと思った。が、岡部美濃守はなかなか用件に触れなかった。この前、古府中に来たときは夏の盛りでひどく暑かったが、今度は涼しくていいなどといったり、自分の白い鬢びんの毛をさして、年ばかり取ってろくな御奉公ごほうこうはできないなどといった。年が出たからそのつき当りにはあの話がでるなと思っていると

「さよう、さよう、年と申しますと、太郎義信様はたしか去年元服でしたな」

岡部美濃守はふつと思いついたような聞き方をした。

（百も承知している癖にこの狸め）

だが晴信はそれを顔には出さず、

「さあ、義信は幾つになったのかな、義信を呼ぼうか」

ととぼけると、岡部美濃守は、いやいや、それには及びません。といつてから、膝を前に乗り出すようにして

「これは老人のたわごとと思つてお聞き捨て願いたいと存じますが、武田家と今川家は信虎様の時代より深い縁につながっておりましたが、昨年、あのような御不幸があつて以来、なにかと、ものたりなく感じられるようになりまして、このごろ、この老人めもなにごとにつけても、物のあわれを覚えるようになりまして……」

岡部美濃守のいう昨年（天文二十年）のあのような不幸というのは今川義元に嫁した晴信の姉が六月二日に三十二歳の若さで死んだことであつた。

「あれこれ、世の行末など考えていますと、ふと、死ぬことは生きることだということに気がついたのでございます」

晴信はうん、うんとうなずいていた。前置きは長いが、もうすぐ、彼の用件を出すだろうと我慢して聞いていた。

「お亡くなりになられた北の方様の胸中を察しますと、武田家と今川家とがこのまま縁がとだえるのは、なんとも耐えがたきことと存じます。幸い太郎様も元服を済まされましたことでも

あり、今川家の息女、於津瀬様と縁組が整いますればと——これはつまり老人のひとりごとであり希望でございます」

とうとう本音を吐いたなど晴信は思った。ずいぶん廻りくどいものの云い方だが、要するに今川義元の娘を太郎の嫁に貰ってくれという要求であつた。

（相変らず今川義元という男は頭が高い）

晴信はあまり愉快ではなかつた。

（だいたい嫁を貰うのはこつちだ。こつちが今川家に、太郎の嫁に息女を欲しいというなら筋が通っているのに、向うから貰えといつて来るのは今川家の方が武田家の上に立っているという気があるからだ）

晴信はそう思ったが黙っていた。

今川義元は三河攻略にやっきになっていた。三河から、尾張、伊勢と勢力を延ばしていつて、やがては京に上つて天下に号令しようという意志は明らかであつた。そのためには、背後をかためておく必要があつた。武田と北条が、おとなしくしていてくれさえしたら、義元の野望はかなえられるのだ。おとなしくして貰いたいために、政略結婚をしようと希望する義元と、信濃平定が間近にせまっている晴信の気持とは別だつた。

晴信も心の底には既に西上の希望が燃え始めていた。海の見えるところに出て、それから京を目ざして兵を進め、天下に号令をするためには、何時かは今川と戦わねばならないと思つていた。そうなつたとき、今川との婚姻関係はかえつて邪魔になるのではなからうか。

「いかがなものでしょうな」

岡部美濃守が、それまでになく鋭い眼を晴信に向けた。快諾を期待した態度であつた。今川家を高^{かさ}にきて押し売りをしようとする気持がはつきり表われていた。

「さよう、結構な話だとは思いますが、太郎義信はまだ元服したばかりですから」

「いや、けつして早いことはござらぬ。晴信様は、たしかもつと早かつたと思いますが」

「早すぎた。早すぎたから、いろいろよくないこともあつた」

晴信は十三歳で上杉朝興の息女於満津と結婚させられたことを思い出していた。於満津はひとつ年上の十四歳だった。なにも知らないふたりは侍女たちのいうままに衾^{ふすま}に無理矢理追ひこまれるようにして寝た。それでもふたりはなにをすべきかはつきりつかめなかつた。晴信に閨^{ねや}の作法を教えたのは於満津について来た女中であつた。

「晴信様、今宵^{こよひ}こそ、このようになさいませ。そうしなければなりませぬ」

その女中は、そうしなければならぬことをこまかい身振りを混えて囁^{ささ}んで含めるように晴信に教えた。そして、於満津は妊娠し、その子供が生めずに母子共死んだのである。

「このことは、内々、信虎様より、三条様へもお知らせしてある筈でございます」

岡部美濃守は、晴信に迫り討ちをかけた。この場で、いやおうなしにこの縁談を承知させようとする腹のようであつた。ひとたび話を切り出すと性急にその結論を求ようとするあたり、岡部美濃守はなかなかのしたたか者であつた。

「なに父上から……」

晴信はその言葉に驚いたが、すぐありそうなことだと思つた。晴信は父信虎を今川義元にあずけてある。その弱身につけこんで、縁談の押し売りの後押しに父信虎を使った今川義元のやり方が氣に食わなかつた。三条氏は太郎義信の母であり、もともと三条氏を晴信の正室におしつけたのは今川家であつた。いわば三条氏は今川系の女である。三条氏の方に手を廻すのも当然考えられることであつた。

「なかなか行きとどいたことをなさいますな……しかし、縁談はやはり、本人の意志によって最終的には決定されるものだから、一応は太郎にも話して見ることにしよう」

晴信の詭弁きべんだつた。百姓町人ならいざ知らず、太守たる者の結婚に、いちいち本人同士の意志を聞くなどということは未だかつて聞いたことがない。領主、武将間の結婚は略奪結婚か政略結婚か、その何れかである。晴信がそんなことを考えていると、岡部美濃守が、ごくかすかながら笑いを浮べた。にやりというほどの笑いではなかつたが、たしかに笑いが見えた。

「太郎様はすでに御承知なされました」

岡部美濃守ははっきりと笑いを浮べていった。

「なに太郎が」

晴信はむっとした。父信虎、三条氏、太郎がぐるになつて今川氏と政略結婚の相談をした上、事後承諾に來られたようで腹が立つた。

「これからもなにごとにつけ、父上に御相談申し上げお教えを乞いたいと思つております」
 去年元服が済んだあとの挨拶のときに太郎義信はそんな生意氣な口を利いたき。その太郎が、彼

の最高重大事である結婚についてひと口も相談しなかったということは許せないことだった。

晴信は三年ほど前、義信に剣の使い方を教えたことがあった。晴信は義信に木刀を持たせてごく初歩的な型を示してから

「よし、斬りこんで来い」

というとき、義信は、それまでの型とは全く違う、盲滅法めくらめつほうの棒振り姿勢で掛かつて来た。はじめは適当にあしらっていたが、あまりしつこく打ち掛けて来るので、義信の木刀をはね上げた。そこで義信は参ったといえよかった。そういうだろうと思っていると、義信は、晴信の足元にころがっている木刀を拾い上げると、晴信の向う臍へそをかつぱらった。

義信は三条氏によく似ていた。ひらべったい大きな顔で、人を横目で見る癖までそっくりだった。

「義信が承知したかどうかは義信に聞けば分ることである。もしそうなら、もはやなにもいうことはない」

晴信は心の中の不満を外に出さないようにしていた。それでも、岡部美濃守は、晴信が面白くなく思っていることを察して

「まあ、なにはともあれ、今川家、武田家……」

といいかけて、あわてて

「武田家、今川家にとってお目出たいことでございます」

岡部美濃守はひとりでお目出たがりながらその場のつめたい空気をかわそうとした。

晴信は、その縁談の将来に對して決して明るい期待は持っていなかった。なぜか、そこには、晴信と嫡子義信との間に一線を劃すものがあるような気がしてならなかった。だが、今さらことわるべき理由はなかった。そこまで進んでいてことわったら、今川家と不仲になる。それは信濃経綸けいりんが完成していない今日においては、明らかに、不利であつた。

晴信はこれほどの重大事をかげで決めようとした三条氏と、三条氏にいい含められたにしろ、ひとことも父晴信に相談しに來なかつた義信がどうしても許せなかつた。

「いずれ正式に当方より今川殿へ、御息女ごしよ興入れの儀をお願いに行くこととなるであらう」
正式というところに晴信は力をこめていった。

岡部美濃守が歸つたあとで重臣を集めて意見を聞くと、大半はその縁談に賛成した。反對する理由がないから賛意を表明したといったふうな消極的なものであつたが、飯富兵部いへふへいぶひとりとは積極的にその縁談成立を喜んだ。

武田の武將たちはやはり晴信と同じように、將來のことを考えていた。武田が信濃を平定して、鉾先ほこさきを東海道へ向けたとき、今川と武田との縁のつながりがかえつて障害になりはせぬかと考えていた。だがしかし、それは先のことであつて現在その縁談をことわる理由はなに一つなかったのである。

天文二十一年の春になると、晴信は甲斐から諏訪へ通ずる棒道ぼうみちの勧進かんじんに着手した。勧進というのは往古僧侶が社寺造営のための資金を募集したのとは違つて、その道路造営のための夫役及び

資金の調達であつた。棒道の造営には諏訪の農民が狩り出されていった。

諏訪^{つたさ}葛木から大門峠にかけては上中下三本の軍用道路が作られた。すべて直線道路にして、軍荷駄の通行の抵抗を排除したのであつた。

道と同時に橋も掛けられた。農繁期であるなしにかかわらず、附近の百姓は強制夫役に出なければならなかつた。

捕虜もその労役に使われた。逃亡をくわだてた者は衆人環視の前で虐殺^{ぎやくさつ}された。

「道は秋までに作るのだ。秋になればこの道を武田の大軍が攻め上っていつて、村上の息の根を止めるだろう」

工事頭はするように豪語していた。

中信の小笠原は既に消え去つたも同然であつたが、砥石城を失つた村上義清はまだ生きていた。村上義清は、武田が大軍団を送るべき軍用道路に力を入れてしていると聞くと生きた氣持がしなかつた。村上義清は、越後の長尾景虎にしきりに援軍を乞うた。

その年上州の上杉憲政^{のりまさ}は北条氏康^{うじやす}に追われて越後の長尾景虎のところへ逃げこんでいた。

「武田晴信という人間はひとことというどんな男でしょうか」

或る日長尾景虎は上杉憲政に聞いた。

「さよう、ひとことという……」

上杉憲政はしばらく考えてから「ひとくちにいうと武将らしくない武将ですな」

「武将らしくない武将といえますと、政略的武将という意味でしょうか」

弱冠二十三歳の長尾景虎は面長な、どちらかといえば神經質な青白い顔をした男だった。武將らしくない武將ということばが、もし、外貌がいはうについて評された言葉としたら、むしろ晴信より長尾景虎にぴったりのことばだった。

「晴信が武將らしくない武將だというのは、ものの考え方にあるのです。晴信は戦を起す前に敗北した場合を考えてからかかる男です。きわめて計算高く、用心深く、先から先を考えて、次々と手を打っていく武將です。表面はごく単純な男のように見えて、恐ろしく底が深い武將です」

上杉憲政が晴信をあまり讃めるので、長尾景虎はいやな顔をした。心をすぐ顔に現わすところは長尾景虎の特徴でもあり、それだけ頭の廻転ははやかった。

「晴信は現在、棒道と称する軍用道路を作っています。晴信という男は道を作ってから戦を始める——そういった武將ですから油断はなりません」

憲政は晴信を讃めちぎって置いてひと息ついた。

「戦のやり方はどうです」

「上手ですね、馬の使い方がたくみです。兎に角、甲州というところは、昔から牧が多く良馬に恵まれていましたから、馬にかけては、わが国第一でしょうな。それに兵士たちは強いですよ、ものすごく強い。米を食わずに戦争ができるのだから強い」

米を食わずに戦争ができるということが、長尾景虎にはまた分らなかった。彼はへんな顔をした。

甲斐の国は米がたいして取れません。彼がいまやつきになって信濃を取ろうとしているのもひ

とつには信濃の米をおさえたのです。米の飯を腹いっぱい食べたいのです」

しかし、と長尾景虎は解^げせない顔で「それでは武田の軍兵はいったいなにを食べて戦っているのです」

「雑穀です。蕎^{そば}麦粉、黍^{きび}粉などが彼等の携行食糧です。粗食に甘んじ、よく軍の規律を守る強い兵士が揃っています。戦いとなると、なかなか敵に背を見せません」

「敵に背を見せないのは越後の兵も同じですが、越後の兵は蕎麦粉や黍粉では思う存分働けないでしょう——」

長尾景虎はそういいながら、まだ見ぬ敵のことをいろいろと頭に浮べているようだった。

「武田の軍の弱点は」

長尾景虎はこれが最後の質問だぞという顔で上杉憲政を睨んだ。

「武田の軍は風林火山という軍旗を好んで用いています。これはつまり風林火山のようにありた
いという意味であって、別な面から見ると、風林火山的ではないということになります。武田の
軍に、はやきこと風のごときという文句は当てはまりません。砥石くずれを見てもよく分ります。
大体において甲軍の動作は敏捷^{びんしょう}ではありません。そのかわりめったに退却はいたしません。おそ
るべき執念を持った軍隊です。右手を打ち落されると左手に刀を持ちかえても刃向って来る軍隊
です」

長尾景虎は上杉憲政の言を頭の中でよく咀嚼^{そしやく}した。晴信という武将の顔が少しずつ分るような
気がした。晴信が作りつつある棒道という道の棒が景虎に向って真直ぐに延びて来るような気が

した。延びて来たら斬るまでだ。景虎はそう思った。

棒道は着々と進行していた。晴信は六月になって工事の様子を見に諏訪へ出かけて行って、しばらく湖衣姫のところに滞在した。なにか湖衣姫がこの前会ったときより痩せたように思われた。氣にしていけないと思ったから口には出さなかったけれど、午後になると、ぼっと、桜色に顔が染まるのは熱のせいではなからうか。晴信ははっとした。もしかすると、湖衣姫は労咳になったのではなからうか、愛妾おこが晴信にうつしたあの労咳が湖衣姫にうつっていったのではなからうか。それに晴信にもうひとつ氣になることがあった。湖衣姫の欲情が常識を逸したほど激しくなっていたからである。晴信に久しぶりで会ったこともあったが、いつもとは違っていた。彼女は夜それを求め、朝、また求めた。求めつづけて晴信を放そうとはしなかった。彼女は汗のなかに、あがき、うめき、もだえて泣いた。そして、彼女の体内に燃えている火が消えると、もうこれ以上は生きてはいられないようにぐったりとなって伏してしまうのである。その寝顔は満ち足りた健康な顔ではなく、労咳という病がなにかを刺戟してやまない、あの不健康な愛欲に死んでいこうとする顔であった。晴信は彼の体験によってそう判断した。至急医者^{いしやく}の立木仙元を呼ばねばなるまいと思った。

勝頼は六歳になっていた。可愛い盛りだった。もうなんでも話した。字にも興味を持っていて、武田勝頼、武田晴信、湖衣などという字はすでに書けた。

湖衣姫に似て美しい面立ち^{おもた}をしていた。すきとおったような白い肌、なによりも、その澄んだ眼と広い額は、凡庸^{はんよう}でない子であることを示していた。

「父上は、なんの御用事で来られましたか」

「棒道の監督に来たのだ」

「棒道が出来たら、真先にその道を馬に乗って走りたい。そうだ白い馬がいいな」

そのなんでもないような父子の会話の中にも、晴信は勝頼のかしこさを認め、その将来に楽しみをかけた。勝頼と話していながら、その勝頼と太郎義信と比較して見ることもあった。そうしてはいけないと思いつながら晴信は、義信より勝頼を愛している自分に気がついて、ひどくあわてることがあった。

棒道がまだ完成しないうちに晴信は戦の準備にかかった。走り馬が八方にとび、荷駄が通過駅の要所要所に集められていった。

晴信は棒道完成を待たずに村上義清の本城葛尾城を襲うだろうという噂が北信の豪士、部将たちをおびやかした。

村上義清は防備を嚴重にして籠城のかまえを見せた。

晴信はやがて北信で対決しなければならぬ仮想敵、長尾景虎との一戦を頭に描いていた。たとえば、合戦の場を、犀川と千曲川の合流点の川中島あたりとするならば、古府中川中島の距離は、長尾景虎のいる越後の春日山城と川中島間の距離の二倍に当たっている。その距離の差を短縮するには軍の移動速度を速くするしか勝つ道はなかったのである。

晴信は軍の移動演習を企画した。七月二十七日の未明躑躅が崎の館の望楼で法螺が鳴った。長

く尾を引くように三度続けて法螺の音は鳴らされ、しばらく休んでまた三度鳴った。その合図で、館につめていた部将はとび起きて、法螺の音の止むころには彼等の持場に走っていった。

望楼には昼夜をわかつた見張りがいた。その朝未明、にらみ詰崎ののろし台から上った合図の狼煙を見て法螺を鳴らしたのである。狼煙は白、青、赤の三色の配合であった。望楼にいた見張り頭はその色の配合を参謀の駒井高白斎に注進した。三色の配合のうち、最初の色は事件の起った場所を示していた。白色は深志城方面に異変あり、という意味であった。その次の色は敵軍の数であり、青は敵軍二千という暗号であり、最後の色はその事件の内容を示していた。赤は味方危うしという意味であった。暗号はしばしば変えられた。

「敵二千、深志城に來襲、目下激戦中なれども味方危うし」

駒井高白斎は各部将に狼煙の合図をこのように告げた。各地の部将に走り馬をやってこのことを知らせた。

「演習だとは思ふな、実戦と思って行動しろ」

駒井高白斎はこの趣旨を全軍に徹底させた。狼煙が上ってから一刻たつと甲軍の先遣隊は古府中を進發していた。

晴信は北信との距離を縮めるために、このような軍移動の大演習と同時に狼煙を使った通報訓練を実施したのである。古府中を七月二十七日に出發した二千の軍隊は八月一日には深志城に集結した。二千の全軍が深志城に到着したことは狼煙によって古府中に知らされた。深志城と古府中との間に配置された、十カ所余りの狼煙台の兵たちは一睡もせず空を見上げていた。夜間には

赤、青、白の三色の狼煙が使用され、昼間は赤、青、黄、白の他に黒煙が用いられた。五色の色の配合によってかなりこまかい暗号内容が通報された。

上杉憲政は晴信の軍行動を、風林火山的ではないと評したが、上杉憲政以上に晴信は自軍の欠点を知っていた。長尾景虎に勝つには風のごとく速くなければならぬことを知っていた。そしてその実行にかかったのである。上杉憲政の晴信評はやや甘きに失していた。

深志城に集結した二千の軍勢は一日の休養を与えられたのち、新しい命令が下った。

演習はこれで終った。これから実戦に移る。そして全軍に示された攻撃目標は小岩嶽城攻撃である。

「相手は死にもの狂いで反抗して来る、安曇武士だ。しっかりやるように」

晴信は諸将をあつめて、そのようにいましめる一方、多くの間者を北信地方に出して、村上の動きを見張った。

小岩嶽城は安曇郡、穂高有明にある小城であった。岩山を背にした山城で城の周囲には幾重にも堀をめぐらしていた。鬱蒼とした森におおわれた城というよりも砦であった。

城主小岩嶽図書が五百の部下とともに立てこもっていた。

それまで小岩嶽図書は安曇部の直系として、せまいながらもその領土を安堵されて来ていた。

小笠原長時も名族安曇部の後裔には一目置いて庇護していた。しかしその小笠原長時は去年の十月以来行方不明になっていた。小笠原の拠点は中信にはもはや一城もなく、小笠原に心を寄せている者すらいない今となって武田に反抗することは無益なことであった。

武田方に降^{くだ}った中信の諸将はつぎつぎと小岩嶽城を訪れては降伏をすすめた。だが小岩嶽図書は頑として応じなかった。

「武田は兇賊である。神氏の諏訪氏を亡ぼし、信濃の守護職小笠原氏の土地を奪った賊である。わが小岩嶽氏の先祖は棉積豊玉彦命^{わたつみとよたまひこのみこと}の御子穗高見命^{ほたかみのみこと}である。古来、安曇氏は諏訪氏と同様、朝廷より安曇一国を与えられていた。代々朝廷に仕え、安曇部として造営司、内膳司をつとめていた。孝徳天皇に仕えた安曇部百鳥^{ももどり}こそ、この小岩嶽城にはじめて居をかまえた人である。朝廷より安曇一国を与えられ、その特権はいかなる世においても変らぬものと認められて来たものである。小笠原氏、諏訪氏はもとより、鎌倉幕府もわが特権は認めて来ている。小なりといえども、ここは独立を保証された一国である。武田晴信が頭を下げて、対等な交際を求めて来るなら別として、降伏の条件として人質を出せとはもっての他のことだ。甲軍が実力で攻め取って見るがいい。わが小岩嶽図書には山々の山霊の庇護がある。小城なれども甲軍の大軍を引き受けて戦っていると聞けば、村上義清殿も必ず援軍をさし向けるであろうし、小笠原に心を寄せる土豪たちも必ず起^たつに違いない」

小岩嶽図書は、豊富な山林資源を持っていたから、財力もあつた。そして、勇猛な部下の多くを持っていた。武田を兇賊と罵倒^{ばとう}するだけの気魄がある男だからいったん味方になれば役に立つ男だった。晴信はなんとかして、名族安曇部の子孫を手なづけようとしたが、武田と対等に交際すること、人質は出さないなどという要求を受け入れるわけにはいかなかった。武田には武田の面目があつた。

最後の交渉には新しく平瀬城主になった原美濃守虎胤とらたねが自ら乗り込んでいったが、小岩嶽図書は「原美濃守などという名前は聞いたことがない。武田を代表して来るならば駒井高白斎とか馬場民部ぐらいの名のある部将をなぜよこさないのか」

そういつて原美濃守とは会わなかった。「惜しい男だが止むを得ない」

晴信はその話を聞いて小岩嶽城攻撃の決断を下した。

小岩嶽は小城であつたが、大軍をもつて一気に攻め落せるという城ではなかった。城を攻めるには、まず、堀を埋め、森を切つてかからねばならなかった。

晴信は地勢を見て引き返すと、人を八方に走らせて、なた、のこぎりを集めさせた。翌日から兵は手になった、のこぎりを持って城に向つて八方から道を切り開いていった。昼も夜ものこぎりの音が絶えなかった。

小岩嶽図書は、城門に続く道だけをかためていた。唯一の突撃路に向つて甲軍勢は繰り返しおしよせて来るものとばかり思っていた。が、そっちの方へさっぱり兵を向けず、甲軍の兵二千が全部樵きこりになったことは意外であり、また薄気味の悪いものであった。時折城から討つて出ても甲軍の方ではいい加減にあしらっているだけであつた。三日たつても、五日たつても、鋸の音は続いていた。

「どうやら敵はこの城山を坊主にしてから攻め寄せて来るつもりらしい」

「いや、ああやつて城の食糧が尽きるのを待っているのだ」

城内の兵はするように噂していた。城兵は、鋸の無気味な音で睡眠不足になった。

城を囲んでから八日たった。

晴信の本陣に原美濃守虎胤が獅師風の若い男をつれて来た。

「やっと思し出しました。通称岩猿の弥兵衛と申し、岩茸^{いわたけ}取りの名人でございます。この男が登れない岩はないということです。この男なら、きっとこのたびの大事をやったのけることと存じます」

晴信はうなずいた。

「この者ひとりではたいへんだろう。ほかに応援の者数十名をつけてやるがよい。恩賞は充分取らしてやれ」

晴信は原美濃守を帰した。

八月十日の夜半になって、異常なできごとが起った。小岩嶽城の屋根の方へ天から火が降って来たのである。火のついた藁束^{わらなば}が、小岩嶽城の背後の岩壁上からつぎつぎと投げ落されていった。城砦へ落ちてから黄色い焰^{ほのお}を上げて燃え出す火薬の類もあった。

城兵はあわてふためいて、消火に当ったが、消すよりも、天から降って来る火の方が多かった。間もなく城の一角に火の手が上った。

それを合図に、寄せ手の軍勢が、鋸で切り開いた道を攻め登っていった。

城兵はことごとく城を出て戦った。戦いは、二日間に渡ってつづけられ、時間の経過とともに城兵の数は減っていった。

逃げる城兵はひとりもいなかった。傷ついた兵の持っている槍を取って立ち向って来る女もい

た。子供は武田の兵に向つて石を投げた。晴信にとってそれほど激しい抵抗を見たことはかつてないことだった。それは、まさに自殺行為であつた。小岩嶽図書という一人の頑固者^{がんこ}のために死ぬとする凄絶な殉死^{じゆんし}の修羅場^{しゆら}であつた。

降伏しない者は殺すのが戦いの掟^{おきて}ではあつたが、数において圧倒的な甲軍から見ると、一方的な虐殺^{ぎやくさつ}を実行するに過ぎなかつた。

天文二十一年八月十二日、小岩嶽図書は自刃して果て、ここに中信濃の最後の抵抗は終つた。

甲軍の勝鬨^{かちどき}の声を聞いて、林城を放棄して逃げた信濃守護職小笠原一族のあまりにもだらしない終末と比較して、五百人の将兵一人残らず死んでいったわだつみ族（海洋を渡来して来た種族が定着化したものといわれている）の直系安曇族の終焉^{しゆうえん}はあまりにも悲劇的であつた。

小岩たけと申し候要害を攻め落しめされ候。打取る頸^{くび}五百余人、足弱^{あしよわ}取ること、数を知らず候
 （妙法寺記）

足弱とは女子供のことである。

（風の巻おわり）

あとがき

新田 次郎

私は長野県諏訪の生れである。先祖は代々諏訪家に仕えていた郷土である。諏訪家はこの小説にもあるとおり、武田信玄によって亡ぼされ、徳川家康が天下を取るに及んで、ようやく再興がなつた小藩である。諏訪に生れたというだけで隣りの甲州とはなにか深い因縁があるような気がして、以前から信玄のことを書いたものは、つとめて読むことにしていた。信玄と云えば、その影に添うごとく軍師の山本勘助が出て来る。ところが、この山本勘助なる人物は、山県昌景の組下にいた身分の軽い武士で川中島の戦いときには物見をやつたていどのことしか分つていない。山本勘助の子が、妙心寺派の僧となつたが、この男が学があつて、武田信玄の事蹟を集めて、これを読物風にまとめたものに、小幡景憲が加筆し高坂弾正が書き遺したと称して江戸初期に出版したものが「甲陽軍鑑」だと云われている。原本を山本勘助の子が書いたとすれば、父親を軍師に仕立てるのは当然であろう。軍師山本勘助という人物は、他の信用置ける資料には全く出て来ないから、山本勘助は実在の人であつたとしても軍師でなかつたことは確実と見てよいだろう。だが、なんと云つても、武田信玄のことになると、この「甲陽軍鑑」の影響力が大きく、軍師山本勘助が出ないとおさまりがつかない。そのために、武田信玄の側近の一人であつた、駒井高白

斎のような人物が蔭にかくれてしまったのであろう。

私は武田信玄を書くに当って、なるべく史料に忠実であることを願った。それが、歴史小説の使命しめいのように思えてならない。人物の設定にもいろいろと気を配った。山本勘助が御使者衆になったり、問者になったり、敵地に入って工作活動をする細作さいさくになったりしたのは、やはり山本勘助という名を無視しては武田信玄が書きにくかったからである。山本勘助の子が妙心寺派の僧になって、父のことを書き残した、その心情に打たれたというよりも、武田信玄があれだけの大事を為すに当っては、必ず、情報機関を持っており、その中には優れた人間が数多くいたことは間違いないから、そのかくれた人たちを代表して山本勘助を登場させたのである。

武田信玄を書くに当って、甲州、信州には何回も行った。東京から近いし、私の故郷でもあるので気軽に行けた。武田信玄に亡ぼされた山城の跡を、藪をくぐって、調べ廻るのはたいへん楽しかった。信濃は武田信玄に制圧されるところとなったが、それは蹂躪じゅうりくするということふうなものではなく、戦の後の政治がよかったこともあって、東信のごく一部を除いては、信玄に対して遺恨いこんを持っている者はなかったようである。そういう例証を見つけ出すことは困難であった。

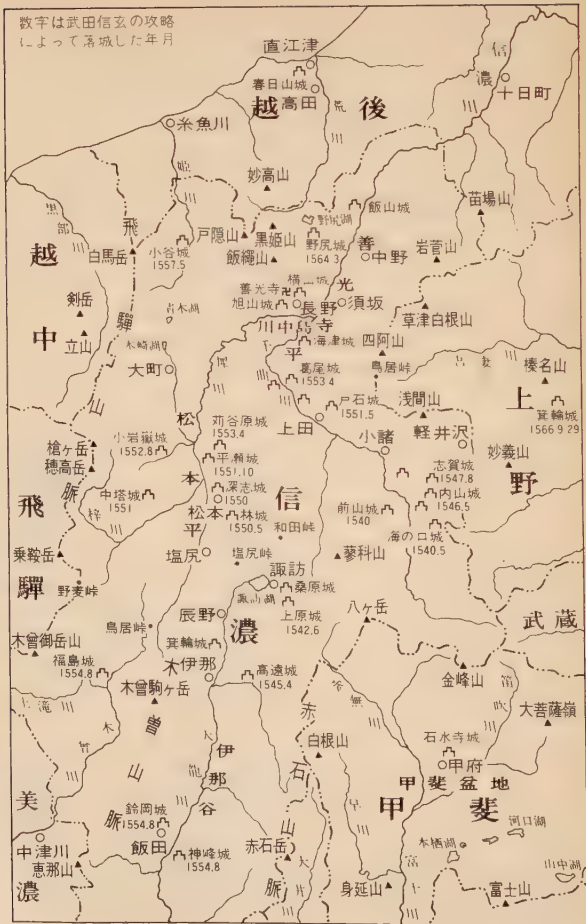
この武田信玄を「歴史読本」誌上に書き出したのは、五年前である。そのころは武田信玄はそれほど大衆的人気のある武将ではなかったが、最近、テレビの影響で、武田信玄は上杉謙信と並んで世人の注目するところとなった。謙信びん最良さいりやうの人と信玄最良さいりやうの人との対話などもちよいちよい見掛ける。

私はどちらかというと信玄の方が好きである。好きだからこそ、小説武田信玄というライフワ

1
クに乗り出したのである。

昭和四十四年六月

数字は武田信玄の攻略
によって落城した年月





文春文庫

112—2

武田信玄 風の巻

定価はカバーに
表示してあります

1974年10月25日 第1刷

1988年2月5日 第34刷

著者 新田次郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-711202-7

✱

平岩弓枝	平岩弓枝	平岩弓枝	平岩弓枝	平岩弓枝	平岩弓枝	平岩弓枝	平岩弓枝	平岩弓枝	平岩弓枝
他人の花は赤い	午後の恋人上下	女たちの海峡	花の影	色のない地図上下	あした天氣に上下	へんこつ上下	湖水祭上下	野望の報酬	野望の構図
深田祐介	日本悪妻に乾杯	炎熱商人上下	暗殺の年輪	喜多川歌麿女絵草紙	雲奔る小説・雲井龍雄	長門守の陰謀	隠し剣孤影抄	藤沢周平	藤沢周平

藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編
藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	藤沢周平	文藝春秋編

松本清張 象の白い脚
松本清張 強き蟻
松本清張 波の塔上・下
松本清張 球形の荒野上・下
松本清張 彩霧
松本清張 事故別冊黒い画集1
松本清張 陸行本別冊黒い画集2
松本清張 花実のない森
松本清張 火と汐
松本清張 証明
松本清張 不安な演奏
松本清張 浮遊昆虫
松本清張 風の視線上・下
松本清張 高校殺人事件
松本清張 弱気の虫
松本清張 遠い接近
松本清張 ベイルート情報
松本清張 私説・日本合戦譚
松本清張 表象詩人
松本清張 告訴せず

松本清張 風の息全三冊
松本清張 火の路全二冊
松本清張 高台の家
松本清張 黒の回廊
松本清張 虚線の下絵
松本清張 梅雨と西洋風呂
松本清張 危険な斜面
松本清張 屈折回路
松本清張 火神被殺
松本清張 西海道談綺全八冊
松本清張 馬を売る女
松本清張 白と黒の革命
松本清張 象徴の設計
松本清張 空の城
松本清張 絢爛たる流離
松本清張 雑草群落上・下
松本清張 十万分の偶然
松本清張 疑惑
松本清張 彩り河上・下
丸谷才一 年の残り

丸山健二 シェパードの九月
丸山健二 ときめきに死す
三浦朱門 旅は道づれ
三浦哲郎 海の道
三浦哲郎 まぼろしの橋
三浦哲郎 春の舞踏上・下
三浦哲郎 野
三浦哲郎 驢馬の鈴
三浦哲郎 少年讃歌
水上勉 雁の寺(全決定版)
水上勉 女の森で上・下
水上勉 おきん
水上勉 古河力作の生涯
水上勉 木綿恋い記上・下
水上勉 焚火
皆川博子 水底の祭り
宮尾登美子 鬼龍院花子の生涯

* *

* *

* *

宮本輝	星々の悲しみ	森村誠一	誘鬼燈	山村美紗	花の棺
宮本輝	青が散る	森村誠一	カリスマの宴	山村美紗	殺意のまつり
三好徹	聖少女	森村誠一	死紋様	山村美紗	幻の指定席
三好徹	三億円事件の謎	森村誠一	致死家庭	結城昌治	振られた刑事
三好徹	悪人への貢物	森村誠一	暗渠の連鎖	吉村昭	深海の使者
三好徹	閃光の遺産	山口瞳	人殺し上下	吉村昭	逃亡
三好徹	狙撃者たちの夏 <small>サミット・リファイデンスル と奴隷溝 小説・松岡洋右</small>	山口瞳	小説・吉野秀雄先生	吉村昭	亭主の家出
三好徹	夕陽	山口瞳	血族	吉村昭	総員起シ
三好京三	子育てごっこ	山口瞳	家族	吉村昭	海軍乙事件
三好京三	分校日記	山口洋子	老つばめ	吉村昭	虹の翼
三好京三	娘はばたけ	山田風太郎	姦の忍法帖	吉村昭	神々の沈黙
三好京三	俺は先生上下	山田風太郎	警視庁草紙上下	吉村昭	磔(はりつけ)
三好京三	キャンパスの雨	山田風太郎	明治断頭台	李恢成	砧をうつ女
向田邦子	あ・うん	山田風太郎	エドの舞踏会	麗羅	桜子は帰ってきたか
向田邦子	隣りの女	山田正紀	火神を盗め	連城三紀彦	運命の八分休符
村上元三	次郎長三国志上下	山田正紀	ふぎの国の犯罪者たち	和久峻三	悪を駆け抜ける男
村松友視	七人のトローゴ	山田正紀	少女と武者人形		
森 敦	月山・鳥海山	山田正紀	裏切りの果実		
森 瑤子	ホロスコープ物語	山村美紗	黒の環状線		
森村誠一	東京空港殺人事件	山村美紗	死体はクローラーが好き		

文春文庫 最新刊

風の果て上・下

藤沢周平

首席家老・又左衛門のもとに、かつての同じ軽輩の部屋住み仲間から果し状が届く。（解説 香川博之）

野ざらし百鬼行

赤江 瀑

摩訶不思議な事象が人間を蠱惑の世界に誘い夢幻の虜にする。赤江瀑の悪魔的世界。（解説 和気忠彦）

ラスプーチンが来た

山田風太郎

怪僧の来日で驚天動地の大事件が勃発！多彩な人物の登場で展開する明治意外史。（解説 樋田一男）

剣客物語

子母澤寛

落日の幕府と運命をともし、徳川家に殉じた名剣士たちに寄せる鎮魂の作品集。（解説 磯貝勝太郎）

綾の鼓

中里恒子

あらゆる絆を断ち切り人妻をスペインに伴った外交官の愛の献身。香り高い長篇。（解説 高橋英夫）

女の中年かるた

田辺聖子

新作いろはかるたの極めつきを披露するユーモアとパロディ満載の好評エッセイ。（解説 青木剛彦）

わたしの乳房再建

千葉敦子

乳ガンで失った乳房をどのように再建したか。生きることの意味を問う感動の闘病記。（解説 藤原作彦）

食の地平線

玉村豊男

京都のニラミダイ、パリジャンの日常食、エジプトの鳩料理……etc、ユニークな食エッセイ

長らえしとき

早瀬圭一

全国の自治体が注目する「武蔵野市有料福祉公社」を舞台に新しい老後を模索する。（解説 三國一朗）

賑々しき死者たち

森本忠夫

遠き異国の貿易戦線に全てを捧げて戦ったわが朋友よ。本格的国際ビジネス小説。（解説 深田祐介）

痩せゆく男

R・バックマン 真野明裕訳
実はS・キング

誰も書かなかった「痩せてゆく恐怖」。縊殺されたジプシーの呪いが事故関係者達を襲う

驚異の世界史
古代地中海 血ぬられた神話

森本哲郎編

噴火に埋もれた町ポンペイ、半獣身の怪物が潜むクレタの迷宮etc、伝説に歴史の真実を探る

文春文庫 新田次郎作品リスト

富士山頂

武田信玄(全四卷)

芙蓉の人

永遠のためいき

三つの嶺

岩の顔

槍ヶ岳開山

昭和新年

霧の子孫たち

富士に死す

冬の掟

ある町の高い煙突

雪のチングルマ

雪の炎

怒る富士(上)(下)

武田三代

劔岳(点の記)

小笠原始末記

陽炎(かげろう)

河童火事

ラインの古城

山が見ていた

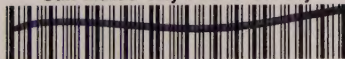


狂乱の日々を送り、民に恨みの声をあげさせていた父・武田信虎を追放して甲斐の国の主となった信玄は、信濃の国に怒濤の進撃をはじめた。諏訪頼重を甲斐に幽閉し小笠原長時を塩尻峠に破り、さらに村上義清を砥石城に攻略する。信玄は天下統一を夢みて、京都に上ろうと志す。雄大な構想で描く大河小説の第一巻。



文春文庫

San Mateo City Public Library



M 3 9047 09126752 2

ISBN4-16-711202-7 C0193 ¥500E 定価500円